

討 論

# 70年をどうする

—反日共系革命諸派の思想と戦略—

い だ も も  
さ ら ぎ 徳 二  
鈴 木 迪 夫  
本 多 延 嘉 他

田 園 書 房

討 論

# 70年をどうする

—反日共系革命諸派の思想と戦略—

い だ も も  
さ ら ぎ 徳 二  
鈴 木 迪 夫  
本 多 延 嘉 他

田 園 書 房

討 論

# 70年をどうする

—反日共系革命諸派の思想と戦略—

田 園 書 房

## はじめに

世界的な「崩壊の季節」は深まりつつある。この大現象の、未定型なしかし最も先端的な突出部分の一翼に、わが国の「新左翼」各派がいる。これを真正面から見据え、その意味の核心に迫ることは、われわれ編集部の両三年来の課題であった。

今ここに、その計画の一端を実現出来たことを喜ぶ。

近頃の出版界は、いわゆる「学生運動」もの、「学園闘争」ものの百花斉放である。玉石混交と云いたい、石の方が大部分を占める。歴史のおこぼれを漁り歩く「コパンザメ・ジャーナリズム」は、相も変らぬ栄華の夢を見ているようだ。このような方法はわれわれの取るところではない。

勿論、現在のわが国の新左翼運動の中で、学生の集団が最も尖鋭で主要な戦闘部隊であることはまちがいない。現に、この討論に参加している各派をみても、「革共同中核派」は「マル学同中核派」を、「共産同(ブンド)」は「社会学」を、「ML同盟」は「学生解放戦線(旧・社会学同ML派)」を、「共労党」は「プロレタリア学生同盟(旧民学同)」を、それぞれの主要な突出部隊として持ち、その上部指導団体として機能している。しかし、学園紛争一つを取ってみても、その拡がりや深さは問題をいわゆる「学園」の領域に閉じこめることを許さない。これを全歴史、

全世界の総体的幅員で把えることに成功しなければ、学園紛争に固有な諸問題すら見失われてしまふであらう。

われわれが、眼の前に迫った「七〇年」という歴史の一結節点をモチーフとして、しかも評論家流、傍観者流のあげつらいではなしに、各派のトップ・リーダーと無党派の優れた活動家による、徹底的討論を試みようと思ひ立ったのは、このような理由からである。

いふまでもなく、歴史は膨大な大衆の不断の決断と実践の総体的な軌跡であり、それはいつでも、最も優れた前衛、ないしは前衛たらんとする少数者の思考と実践を乗り超えつつ進む。かつまた、現在の新左翼各派間の亀裂と断絶は、あまりにも深く鋭い。なにしろ、各派のトップ・リーダーが一堂に会して、このように広汎で徹底的な討論をおこなうことすらが、今まではほとんどなかったというありさまである。

だから読者は、この討論記録の随所に、さまざまな焦立ちやもどかしさ、あるいは不満を覚えることだろう。しかし思うに、それすらがまさに現在の新左翼各派の、ひるがえっては私たちの置かれてる、そして突破しつつある現状況の雄弁で直截な証言なのであり、それ故にまさにそれは私たちに對する切実な問いかけでもあるのではないか。

一九六九年三月二日、東京新橋。国労の三分割反対闘争が挫折し、国立大学第一期入試阻止闘争が刻々にテレビで伝えられる中での、延々一六時間余にわたる討論であった。遅い朝が白々と明けそめる頃、討論参加者たちは再会を約してそれぞれの持場へと散った。健闘を祈る。

なお、この会合には「革共同革マル派」「社青同解放派」の代表をも招待していたが、主とし

て、それぞれの党派の内部事情から、出席を得られなかったことを付記する。

一九六九年五月

田園書房編集部

## 討論参加者のプロフィール (五〇音順)



いいた・もも 共産主義労働者党書記長  
学園闘争、反戦青年委運動で積極的な指導性を発揮しつつある共産党の書記長としてよりも、作家、評論家としてのいいた氏を知る人の方が多いであろう。

一九二六年(大正一五年)東京生れ。四三歳。東大法学部卒。  
戦後まもなく日共に入党、産別会議本部書記、茨城県農民運動オルグ等として活躍するかたわら、作家、評論家としての活動を続ける。六四年、七一七スト後日共を除名さる。以後ベトナム反戦派として新しい共産主義運動の推進に力を尽し、六七年、共産主義労働者党を創設、書記長となる。

『七〇年への革命的試論』(三一書房)『時代を挑発する』(仮面社)『転形期の思想』(河出書房)『核を創る思想』(講談社)等著書多数。



さらぎ徳二(さらぎ・とくじ) 共産主義者同盟議長  
一九二九年(昭和四年)台湾・高雄市生れ。三九歳。高雄中学在学中、終戦を迎え、日本へ引き揚げる。  
四七年、二・一スト挫折の後、日本共産党に入党。以後一貫して職業革命家の道を進む。

五五年、「六全協」以前、日共に見切りをつけて脱党、共産主義者として独自の道の探究を始める。六〇年安保闘争を闘い、六一年、「第一次ブンド」(共産主義者同盟)崩壊の後ブンド再建に活躍し、「第二次ブンド」創設の中心となる。(共産同は一般に「ブンド」または「フント」と呼ばれる)  
著書「帝国主義崩壊の原理」「世界暴力革命論」「資本論点前」等。



鈴木迪夫(すずき・みちお) 日本マルクス・レーニン主義者同盟書記長  
一九四二年(昭和一七年)中国・上海市生れ。二六歳。早稲田大学中退。  
高校時代から革命運動に飛び込み、六〇年安保闘争の時は、「第一次ブンド」に所属し、「安保改定阻止高校生会議」議長を勤める。第一次ブンド崩壊後、第二次ブンド創設に参加、政治局員となり、以後、「共産主義者同盟ML派」に属して活動。

なお、ブンド・ML派は、昨年一〇月ブンドと分裂し、「日本マルクス・レーニン主義者同盟」として発足した。

本多延嘉(ほんだ・のぶよし) 革命的共産主義者同盟中核派(全国委員会)書記長

一九三四年(昭和九年)東京生れ。三五歳。  
五一年(昭和二六年)高校二年で日共に入党したが、五八年(昭和三十三年)早稲田大学文学部在学中に、黒田寛一氏等とともに「革命的共産主義者同盟」



を創設。文字通り新左翼指導者の草分けと云える。  
 五九年より革共同書記長となり、六二年、革共同が「中核派（全国委員会）」と「革マル派」に分裂した後は、一貫して中核派の書記長の地位に在り同派の最高指導者として活躍。  
 政治指導者であるとともに優れた理論家でもあり、武井健人のペン・ネームでの論文、著書も多い。  
 著書Ⅱ武井健人編・著『安保闘争史』（現代思潮社）他。



小長井良浩（こながい・よしひろ） 弁護士  
 一九三四年（昭和九年）静岡市生れ。三四歳。東大法学部卒。  
 六二年（昭和三七年）より弁護士を開業、特に労働問題や、新左翼各派の事件の弁護にあたっている。  
 国鉄田町電車区事件、全電通長岡・三条事件、飯田橋事件、成田デモ事件等、重要事件を数多く手がけるかたわら、一〇・八羽田事件で死亡した、山崎博昭君の遺族の代理人にもなっている。現在、国労本部常任弁護士、全電通本部弁護団幹事、政労協顧問、三里塚・芝山反対同盟顧問弁護団長等。

清水多吉（しみず・たきち） 立正大学文学部哲学科講師  
 一九三三年（昭和八年）福島県会津若松市生れ。三五歳。東大大学院（哲学）卒。  
 学生時代から現代マルクス主義の諸問題に取り組み続ける。三七年より立正大学文学部哲学科講師。  
 学究としての研究活動のみならず、運動の実践面でも多角的な活動を展開し、現在はいわば「新左翼」運

動の講師団のメンバーといったところ。最近ではドイツの「フランクフルト・グループ」の研究に力を入れ、雑誌「情況」の定期的執筆者の一人にもなっている。

訳書Ⅱマルクゼ「ユートピアの終焉」（合同出版社）クラウゼヴィッツ「戦争論」（現代思潮社）他。



連絡センター」を組織して活動中。

水戸 巖（みと・いわお） 原子核研究所助教  
 一九三三年（昭和八年）横浜市生れ。三五歳。東大理学部卒。  
 宇宙線研究者として嘱望されている若手物理学者。政治活動にも鋭角的に取り組み、今年三月には、素粒子研究所の建設問題をきっかけに、埼玉大助教授呷曉夫氏らとともに「核物理学者共闘会議（核共闘）」を創設した。他方、一〇・八羽田事件の犠牲者救済のため、羽仁五郎氏らとともに「二〇・八羽田救援会」を組織し、その後の新左翼運動の救援活動を盛り上げる端緒をつくる。現在、これらの救援活動を一本化し、より強化するべく、「救援

# 目次

はじめに  
討論参加者のプロフィール(写真七葉入り)

## 第一部 われわれは何者か……………一

### 第一章 われわれは何故にあるのか……………三

- 一 革共同の誕生……………三
- 二 第一次ブンドから第二次ブンドへ……………一〇
- 三 ブンドからMLへ……………二五
- 四 新参の共労党——「現代プロレタリア革命派」……………四三

## 第二章 世界共産主義革命のために……………六〇

- 一 「反帝・反スタ」世界戦略とは？……………六三
- 二 毛沢東あるいは「毛沢東主義」 裁断……………六四
- 三 日共はどうなる……………二六



第二部 七〇年をどうする……………一三三

第一章 最近の諸闘争から―序論的総括……………一三三

一 戦術はこうして組まれる……………一三三

二 オデンと只乗り―革命的規律の問題……………一四三

三 各派の懐ろ具合……………一五〇

第二章 学園闘争……………一五五

一 学園闘争の目標―帝大解体とは？……………一五五

二 学園闘争をどう発展させるか……………一六五

三 戦略的地平の拡大―階級形成の問題……………一八三

四 学園闘争を七〇年闘争へ……………二〇四

第三章 七〇年への戦略配備……………二二三

一 労働者戦線への切り込み……………二二三

二 労働組合「運用法」……………二四四

第四章 七〇年・七〇年代闘争のイメージ……………二六六

一 「ゲバ棒の思想」とプロレタリア蜂起……………二六六

二 大企業労働者の位相……………二六七

三 武器の論理―ゲバ棒と自衛隊……………二八二

第五章 統一行動・統一戦線の展望……………二九一

一 反戦青年委、社会党、総評は……………二九一

二 新左翼内多党化現象と「内ゲバ」……………三〇〇

三 党派系列とノン・セクト・ラジカル……………三一五

結び 闘いの構図……………三一九

附録1 新左翼五派による統一行動宣言……………三四七

2 プロレタリア学生同盟結成宣言……………三五四

註

あとがき 清水多吉

第一部 われわれは何者か

日 野 寸 命 ( ) 戸  
日 野 寸 命 ( ) 戸  
日 野 寸 命 ( ) 戸

日 野 寸 命 ( ) 戸  
日 野 寸 命 ( ) 戸  
日 野 寸 命 ( ) 戸

## 第一章 われわれは何故にあるのか

——各派の原点と沿革——

### 一 革共同の誕生

小長井 今日お集まりいただきましたのは、反日共系革命諸派と呼ばれています、いわば反日共系という一つの実体評価ないしは概念、範疇を以って総括されている諸党派の代表の方々ですが、しかしその内部を見ますと、まさに諸党派、諸潮流であるわけで、その政治状況自体が、今日のトータルな政治状況の中で一つの大きな役割を果たしつつあるし、また七〇年に向けて主導的な役割を果たされる諸党派でもあると思うんです。

しかしながら、これをはたから見えておきます場合、あるいはそのセクトの一つに立てこもった場合、ないしは、相対的に独自の位置を保ちながらこれら諸党派の運動と係わりあっている場合——いずれの場合も、これら諸党派の主張なり行動なりの眼目が、いったいどこにあるのか、といういわば原点すらも、なかなか把握し難いというのが本当のところではないかと思えます。

そこで、これら諸党派が現在の状況の中で担っている一定の役割からしても、そういった諸党派の思想上戦略上の原点とか、それら相互の相違点なり、共通点なりというものが、いったいど

こにあるのか、あるいはあり得るのかということをはっきりさせることに今日的な意義があるのではないか、ということからこの討論を企画しました。

この問題について、各党派の代表的な指導者である皆さんから、しかも個人としての見解も混えて意見を明らかにして頂くというわけですが、今日の革命的な諸運動を担う諸党派が、反日共系革命諸派と特に云われる所以のものは、やはり何と云っても、日本の革命運動の今日までの展開の中で、日本共産党からの訣別とその否定というところから運動が創成されて来ている歴史的事実によるものでしょう。

では何故これら反日共系と云われる諸党派が生れて来たのかということについて私なりに考えてみますと、これはこれからの討論の中で出て来るでしょうが、日本共産党の革命に対する前衛性の問題、つまり日本共産党が革命的な前衛であるのかどうか、そしてまた、日本共産党のおこなうという革命が社会に実現した場合に、それを革命と呼べるのかどうか、という問題が、日本共産党に亀裂の起るもつとも決定的な軸ではなかったかと考えているわけです。

この点が、五〇年分裂\*それから五全協、六全協\*を経て、砂川闘争、ハンガリー問題が起る辺りから、明確に新しい運動の潮流となり、特に「革命的共産主義者同盟(革共同)」の創立という形によって、実体的な運動として登場したわけです。

さらにこれに続いて、一九五八年六月一日の、代々木党本部と全学連大会代議員グループとの対立事件を経て、同年の一二月には「共産主義者同盟(第一次プリントまたはプリント)」が生れ、ここに公然たる革命部隊の登場が見られることになります。

その辺のところ、つまりこのような新しい運動が突き出て来た経緯から入って行きたいと思うのですが、反日共系の諸派の先駆となった「革共同」の創立に参加し、安保闘争を闘われた本多さんから一つ、われわれは何故こういう党派を創りこれに拠るのか、ということをお聞かせ下さいませんか。

本多(革命的共産主義者同盟中核派) 反代々木系とか反日共系とかいう運動が存在していることについては、今日ではもう常識化していると思うんですね。で、こういう、共産党を中心とする革命運動と呼ばれているものに対して、別個な行き方をする者がいるんだという形で問題は現象的に突き出されていると思います。

こういう状態の中で、若い学生の人なんかですと、有史以来反代々木というか、反スターリン主義というか、そういうものがあつたと見ている人がいるわけですね、有史以来こういう運動があつたんじゃないかというふうな。

甚だしきに至っては、「どうして共産党は存在するんですか」などと質問する人もいます。これは後で触れますけど、考えて見りゃもつともな面もあるわけで、本当はその疑問自体が本質的な疑問でもあるんじゃないかと、僕は考えているんです。

もう一つの傾向としては、やはりこういうふうな大衆運動が分裂して来るのは、非常にまずいんじゃないかという考え方もあると思うんですね。共産党と僕らの運動との関係の問題もそうだし、それからいわゆる戦闘的左翼といわれている人達の間にも四分五裂的な状態がある、五流一三派の状態があるということで、こういうのはまずいんじゃないかという考え方もある

ようですけど……。

結論から先に云わせて貰えば、僕らはこういう五流一三派的分裂状況というのは積極的に評価しなればいけないという考え方です。

一応日本共産党との関係の問題から話をするのが筋だと思ふんですけど、僕らがいわゆる共産主義運動に接近した時代は、党といえば共産党を指した細胞といえれば日本共産党細胞を指していた時代なんで、大衆運動は、学生運動を例にとって見ても、共産党の単一的な影響下に置かれていて、ほとんど誰もそれを不思議に思わない。それから労働組合というと、戦後の産別時代は共産党が主流で社民系（社会民主主義政党、具体的には主として日本社会党を指す）が反主流、少数派、それから総評時代は社民系が主流で共産党がそれに対する少数派、こういう構図が常識化していたのですが、しかし戦後の運動の主軸をなしていたのはやはり共産党の運動であると思ふ。

僕自身のことを云えば、ちょうど五一年（昭和二六年）の二月に共産党に入って、最初の会議で出て来たのが例の悪名高き四全協の決議で——最近何かリーフレットになって配られているようですけど、日本ではゲリラが出来るか出来ないかなどという類の文書が出て来た時で——いわば共産党に入ることが革命家になる決意を示すものだと考えられていたし、自分もそのところをきっかけにして党に入った。大きく云ってマルクス—エンゲルス—レーニン—スターリン—毛沢東と云う系譜で自分を位置づけて共産党に入る、共産党に入ることを通して自分は革命を一生やるんだという自己の決意を確認する、という形で共産党に入ったわけです。

それから数年というか、四、五年の間は僕は非常に模範的な共産党の下部党員だったわけで、——まあ自分で模範的と云うのは何ですが（笑）——他の人は違うと思っていたかも知れないけれども、自分は模範的たらねばならないと思って活動した党員の一人だったんです。

しかし、大きなこういふ共産党、あるいはスターリンに代表される国際共産主義運動に自己を投入することが革命につながって行くんだと云う考え方に一応の疑問を持ち始めたのは、五五年の六全協ですね。この六全協というのも人によって随分位置づけ方が違うと思いますが、僕自身にとつての六全協というのは、日本共産党に代表される戦後一〇年間の革命運動を否定的に総括して行くきっかけになったと云う意味で、大きいものだったと思ひます。

それは二つの面に向って開かれて行くわけで、一つは戦後の日本の革命に於ける日本共産党の役割ということで、それは実際には肯定的な関係ではなしに、むしろ日本共産党の運動によってないしは党の存在によって、戦後の日本革命が絶えず危機に追い込まれて来たという問題、それからもう一つは日本共産党の綱領的な展開——基本的には戦前の三二年テーゼ\*、それから戦後の五一年綱領\*、この両者の間を基本的に流れている思想は二段階戦略あるいは民主革命論だと思ふんですが、これに関する疑問です。

さらに属性的なことを云えば、われわれが尊敬していた党の幹部たちが、革命運動家としても大きな問題を持っているだけではなしに、道徳的にも大変問題を持っている人たちだということを知って、日本共産党は度し難いという印象を深めたわけですが、しかしこれらだけでは僕らはまだ日本共産党から出て行かなかったらと思う。むしろその次元では党をどのように改革す

るかということに主たる関心があったと云っていいと思うんです。

こういう日本共産党に対する絶望と、しかしにもかかわらずそれを改革して行かなければならないという決意が、さらに日本共産党との訣別という形をとって現われたのは、やはり五六年のソ連共産党二〇回党大会でのスターリン神話の崩壊と、さらに同年一〇月から一月にかけて起きたポーランドとハンガリアの動揺——後に僕たちはそれを革命と規定するようになるのですが——です。その動揺を通して、日本共産党に現われている前衛性・革命性喪失の問題は実は日本共産党だけの問題ではなくて、一般に国際共産主義運動と云われているスターリン以来の運動の日本的な現われに過ぎないということが解って来ました。

つまり逆に云えば、僕らがマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン・毛沢東という系譜で把えて来た運動史、国際共産主義運動史の中で、レーニンとスターリン・毛沢東のあいだに運動を導いて行く思想上、運動上の決定的な変化が起っていることに着眼せざるを得なかつた。ここでわれわれは、マルクス・エンゲルス・レーニンとして引き継がれて来た運動史に対して、スターリン・フルシチョフ・毛沢東と云う形で現象している現実の国際共産主義運動の持っている違いをはっきり把え、その違いを、マルクス・エンゲルス・レーニンの運動を今日的に引き継いで行く方向で打ち破らなければいけない、と云う課題に直面したわけです。

さらにそのことから、大きく云えばスターリンの哲学を巡って起きていたそれ以前からの討論——例えば戦後の主体性論争\*であるとか技術論争\*であるとかいう形をとってひとまず現われていた哲学的次元での討論の中で突き出されて来た問題と、自分たちが革命運動の内部で実践的に

突き当たっていた問題が、実は理論的につながりを持っている、それからさらに、二段階戦略という形でわれわれに突きつけられている問題が、日本資本主義の分析の方法やあるいは今日の帝国主義をどのように把えるのかという経済学上の問題とも、つながりを持っているということがはっきりして来たということです。

そういう問題を背後の学問的な論理としながら、僕らは共産党から出なければいけないという決心をしたんです。

こういうことが、実践的に云えば五六年から五七年、五八年、五九年、六〇年の約四年間の前史の過程として展開されて行ったというふうに僕らは考えています。そして日本共産党に代表される運動を否定して、新しい運動の潮流を作り出して行くという努力の真只中、その過渡期の真只中でわれわれは六〇年の安保闘争を迎えたんです。

ですから非常に単純化して云えば、いわゆる五八年の転換\*と云われていたような事柄について、かなり内部的に討論が煮つまり問題もはっきりして来て準備も充分出来る、という状態で六〇年の安保を迎えるというわけには行かなかつたのです。事実上は、日本共産党から離れて行く真只中で六〇年を闘い抜かなければならなかつた——そういう矛盾が集中的に現われたのが六〇年の安保ブンドだと僕なんかは考えているんです。ですから革共同とブンドの歴史に関して云えば、この間の分裂を非常に固定的に理解しようとする傾向も僕らの内外に存在するのですけれど、僕が理解している限りでは、確かに思想的な系譜という意味で云えば、五六年、五七年の段階が突きつけていた問題をいわば先行的思想的に提起したのは革共同だと云っていいと思うんです。

ども、それを具体的な一人一人の主体の問題としてみれば、ブントと革共同の間にそれほど決定的な違いが当初から存在していたというわけでもないんで、元はといえば日本共産党細胞という意味で皆同じ釜の飯食っていた仲間なんです。

ですから、六〇年の安保の総括として共産主義者同盟のかなりの部分が僕らに参加して来るというのを、当時の若い社会学の学生なんかはこれを大変モラリッシュに把えて、一種の転向あるいは自分の党派へのロイヤリティの喪失という形で受け止めた向きもなくなはいんじゃないかと思う。それがその後の討論を非常に混乱させている面もあると思うんですけど、実際上はそれほどほどの問題はなくて、五八年を転機にして大きく起った歴史の歩みの中で起った事柄だと僕らとしては考えているんです。

水戸 本多さんは革共同と安保ブントを非常に近いものとして把えておられるようですが、その両者は、成立過程で相反撥するものをもっていったと思いますし、一方そのブント——共産主義者同盟自体は、六〇年安保の第一次ブントと訣別する形で現在の第二次ブントが生まれているわけです。この両者の違いはどうか、第一次ブント崩壊の後を受けて現在のブントが創られた根拠といえますか、理由は何かということですね。

さらざさん、第一次ブントと第二次ブントはかなり違うものを持っていると思うんですが……

## 二 第一次ブントから第二次ブントへ

さらざ(共産主義者同盟) 第一次ブントが出来ます基本的な背景としては、国際的な条件と国

内的な条件の二つがあったと思うんですね。

国際的な条件と致しましては、こういうことです。

戦後アメリカの一元支配の下に戦後帝国主義の体制といえますか、統一市場が確立された。この確立は、さかのぼれば第二次帝国主義戦争(第二次世界大戦)時代に於けるスターリンの路線——帝国主義を良い帝国主義と悪い帝国主義に分けて、良い帝国主義と国家間協定を結んで反ファシズム統一戦線を行くという国際的な路線——が、そのまま戦後処理に引き継がれてしまったことに負っています。だから戦後処理の過程の帝国主義権力の動揺をそのまま世界革命に転化するのではなくて、東西の分割という形で——ヤルタ協定のことを云っているんですが——世界の分割体制を布いてきた。それに支えられて戦後帝国主義の復興がおこなわれたのですが、その中で世界革命を志向しようとした部分が全部弾圧されて行く。その系譜の中に戦後の日本の革命運動の敗北もあったと思うんです。この戦後の革命運動の敗北を踏み台にして生れたのが、戦後世界のアメリカの一元支配体制ですね。

この状況が、その後の不均等発展によってですね、だいたい五八年を契機にして崩れ、フランスのドゴールの登場とEECの創立という形でヨーロッパがアメリカに対抗して出て来る。日本も遅れてようやくこの間に勃興し始めてやっと自立を開始したのですが、この経済的自立の中でアメリカに対して、まあ相対的ではあるけれども軍事・外交上の自立的な立場を要求して行った。この日本帝国主義に対する闘いを、どのようにして展開して行くかというところで、つまり国際的に規定された大きな条件の中で、国内の革命をどのような戦略で闘うのかということ巡って

一切の争点が生れたのだと思うんです。  
この争点の中から、日本共産党の路線で闘えるのかどうかという点が、具体的な問題として提起されて来たというわけです。

で、日本共産党の当時の路線というのは、文字通り従属論に基づいていたんで、アメリカ帝国主義の一元の支配の下に於ける日本帝国主義の従属ということが固定化されることによって、レーニンの不均等発展の法則が否定されていたんです。これに対して僕らは、レーニンの帝国主義論の原則に基づいて、不均等発展によって日本帝国主義が自立化しやがては侵略を開始して行くんだという視点から、自国の帝国主義を打倒して行く、そのことを通して世界革命を遂行するんだという立場をとったわけです。

ところが日本共産党の従属論というのは、全く一国的な闘いを予定しており、同時に現代的な二段革命論です。戦前に於ける、つまり二七年テーゼと三二年テーゼに於ける二段革命論というのは、明治維新の不徹底ということを理由にして、これは民主革命ではなくて天皇専制支配の絶対王制である。ブルジョアジーがまだ権力を取っていないという意味から、まずこの専制天皇制を倒して民主革命をやり抜いた後に、初めて独占を倒すところの社会主義革命が起るんだという形で二段革命が提起されていたのが、戦後になりますと、アメリカ帝国主義をまず日本から追い出してその次に日本に於ける革命をやるんだという形で、現代的に二段革命が設定されて行く。そういう路線に対して、国際的な帝国主義の対立が五八年を契機として起り、その中で日本帝国主義も遅れてはいたけれど自立を要求して来る。これに対して二段革命戦略では闘えないん

だということ全体として把握、これについて鋭い問題の提起を第一次ブンドはおこなったのです。

これが戦略をめぐってスターリン主義に対して闘う一番基本的な問題だったわけです。だから第一次ブンドは、国際的なスターリン主義に対するといふよりもむしろ、国内の日本共産党内部に於ける運動上のあるいは戦略上の闘いを基本として生れて来たという一つの系譜を持っているわけです。

この辺に革共同さんとのですね、若干の違いが、出生の秘密とでもいいますか、そこら辺の違いがあるんじゃないかと思うんです。

しかし、先程本多さんが云われたように、日本共産党の欠陥というものは、単に徳田球一や野坂の個人的人格に代表された戦略や理論の誤りではなくて、世界全体を掩っているところの公認世界共産党の普遍的な誤りであり、それを僕らはスターリン主義であると規定したわけです。

で、スターリン主義に対する反スターリン主義の系譜をどこで押えて行くのかという問題になるのですが、これに関しては、革共同の諸君たちは僕らより早くから哲学的な姿勢、思想的な系譜というものによって問題接近を始めていたのですけれども、僕らは六〇年安保をめざして闘って行く中で、砂川闘争を契機として権力に対決する大衆闘争から問題を擱み、そこから全体への普遍化を探し求めて行くということになったわけです。

この普遍化については、原則としてのレーニン主義の復活、レーニン主義の復権という点に焦点を合わせて全路線を出して行かなければならないというように問題を提起してきました。



ではどのようにしてレーニン主義を復活するかという内容について云いますと——  
 第一点としては、「一國革命」に対する「世界革命」の提起です。  
 それから、第二点は、「一國共産主義」——コミンフォルムの崩壊後それぞれの共産主義あるいは共産党にその国の革命は任せるといふ一國主義——に対して、僕らは世界革命の観点から「プロレタリア国際主義」を全面的に原則として掲げることです。

第三点は、レーニン主義の暴力革命の形態の復権です。

六〇年に至る以前に、特に五五年以後の世界的な資本主義の発展期に照応して、「平和共存」路線が全面的に謳歌されて、ここら辺りから構造改革派の理論も出て来ることになりました。この時代にスターリンの国家独占資本主義論\*——従属か癒着かという問題が出て来て、ツイシヤンク等々も出て来るし、このドイツのツイシヤンク等々の理論的系譜として日本では今井則義・井汲卓一・佐藤昇なんかも出て来るという状況があったと思うんです。

これに対して僕らは、平和革命に対する「暴力革命」というのを原則的に打ち出した、というのが第三点です。

平和革命と直接結びつく問題として、では権力形態を議会で取るのかどうなのかというのが第四点です。

議会による権力奪取に対して僕らは明確に、ソヴェトによる「プロレタリア独裁」——党独裁ではなくてソヴェトによるプロレタリア独裁というものをレーニン主義の原則とする。その意味では議会主義にも反対し党独裁にも反対するということで、労働者のソヴェトによる「プロレタ

リア独裁」ということを原則として考えているのです。

以上四点が、僕らがスターリン主義を否定してレーニン主義の復権を掲げるに当たっての原則だったと思います。ではこの四つの原則をどのようにして実現して行くのか、共産党内で闘って出来るのかどうかという場合に、スターリン主義的な党組織論に対する認識の問題に到達しなければならなかったわけです。

で、ここで、スターリンのソヴェトを否定した一党独裁、一党官僚体制独裁という党組織論に対して、僕らは、プロレタリアが政権を握る場合、一党では必ずしも出来ない場合が多いことを重視します。現在の日本の状況を見ましても、ちよつと余談になりますが、反日共系と総称されているけれども、その実体は三派という形でその中でもブンド、中核が中心を担っている。社青同解放派もある一定の時期には役割を果たしたけれども、これは一〇・八羽田闘争以降段々脱落して、現在の三派の中ではMLが延びて来ているというように、中心部分がキチンとあると思うんです。しかしこれだけでは戦闘的大衆全部を包摂出来ないから第二戦線、第三戦線としていろんな諸党派があるし、なおそのうえ代々木や社民(社会党)も労働者を擱んでいるという形になります。だから一党で労働者階級全体を掌握する形で権力に至るといふことは、どこの革命を見てもあまりない。

だからソヴェトの中には革命戦略を異にする諸党派が内在することは必然である。にも拘らずこのソヴェトが労働者の権力として権力を取って行く。この権力を取った段階——つまり社会主義社会に近づく過程を、僕らは革命的な過渡期と呼んでいるわけですが、この過渡期には、プロ

レタリア独裁が諸党派を含みながら存続します。このことはレーニンも『国家と革命』の中で云っているし、マルクスも『ゴータ綱領批判』の中で述べているんですが、社会的な資本主義の母斑はまだ残っておりましてそれがどうしてもソヴェト内に反映する。したがってその中に於いては党の存在が必要であるし、また党自身が資本主義の母斑を残しているのだから、非常に自由な党内論争、いわゆる正規の党内論争というものを必要とする。それを公認の一枚岩の党ということで閉鎖してしまつては、生き生きとした党は生れない。

こういう観点を僕は持っていますので、このような党組織論を否定するところのスターリンの一枚岩の党組織論に対して、僕は党内部で闘つてみたんです。しかしどうしてもこれは闘えない、そこで、やっぱり一つの戦略上の見切りと同時に、全世界各国の党に體質化したところのスターリン主義党と訣別して別個な党を日本で創つて世界に拡げて行こうということになったわけです。別個な党によつて各国の革命運動をプロレタリア国際主義に昂め、プロレタリアを階級形成して行く、それによつてさらに国際的党形成をして行くということです。そのためには独自の党がなければならぬ。明確に日本共産党とは敵対する分離した党を創つて、そのことによつて初めて、自分たちが掲げたレーニン主義の原則を階級闘争の現実に生かすことが出来るのだというところから、僕らの党組織論、「独自の党」ということが提起されたんだと思います。

以上がだいたい、六〇年安保ブンドの持っていた画期的な意義——その掲げた原則と内容ということでしょう。現在でもこの立脚点は依然として一貫していると思います。

しかし安保ブンドは、そういう原則を掲げながらもなお限界を持っていたということなんです

が……これについては後に述べるとして、ともかく現在のブンドは、この弱点を克服し、世界革命戦略と日本革命のプログラムを、権力形態とそれへの接近過程をも含めて提起し、国際主義を物質化するために、去年の八月に国際反戦会議を提起したわけです。これには諸外国の世界革命IIプロ独（プロレタリア独裁）派を結集することに成功しました。こういう具合に、第五インターの展望の物質化を実践しているのはブンドだけです。スターリン主義に観念的な反スタを掲げただけでは、レーニン主義の復活にならんですよ。

そこで——

第一次ブンドの限界性というのはですね。戦略上の限界性と党組織論の限界性という、二つの限界性があったと思うんですね。

まず、戦略上の限界性としては、現在どの党派でもまだ確立されていない問題だと思ふんですけど、結局一国革命に対して世界革命を僕らが唱える時にですね、どのような物質的条件が現代世界にあるのかということ。つまり僕らが革命の対象とするところの世界の資本主義、あるいは帝国主義に包囲された労働者国家を含んだ状態での帝国主義、この革命対象の中にどのようにして世界同時革命の物質的条件があるのかということ。第二は、革命を目指す主体の側に、党と戦略がどのように確定されるのかという問題が、今なお突きつけられてあると思ふんです。

この問題に対して、六〇年安保ブントは明確に問題を提起し得なかつたわけです。先に述べた原則は掲げながら、もう一つ、党組織としては独自の党ということを掲げながら、その内容を具体的に提起出来なかつたというところにやはり問題があつたんじゃないかと思ふんです。

この第一の問題についていいますと、世界同時革命という戦略は、歴史的にはマルクスが『共産党宣言』と『ドイツ・イデオロギー』で云っているんですね。イギリスを中心とした産業資本主義時代の周期的世界的過剰生産恐慌の同時性に根拠を求めたんですね。世界的同時に、周期的に全世界（マルクスの対象はヨーロッパだが）を把えるところの過剰生産恐慌が、市民社会秩序の基礎をなしている資本制商品経済秩序を崩壊させ、市民社会の秩序を崩壊させて行く。それが一つの世界的な同時的な政治危機を生み出して、権力の暴力を剥き出しにさせる。この世界恐慌の外的インパクトを媒介にして、資本制商品生産秩序、労働力商品化秩序の混乱を客観的条件にして、各国の党が世界同時革命をおこなうことを原則として追求する。このような物質的条件の上に革命主体的な同時革命というものをマルクスは提起したと思うんですね。

こういう世界同時革命の条件が、その後のレーニン時代の帝国主義、レーニンが『帝国主義論』の対象としたところの第一次帝国主義戦争（第一次世界大戦）以前、それからその直後に渉るあの帝国主義の時代にですね、はたしてあったのかどうかということが問題になると思うんですね。

この時代になるとマルクスの世界同時革命というのが——周期的世界的過剰生産恐慌を媒介にして同時革命を把えたことが、若干適用出来なくなってきた。そこで修正主義論争、あるいは帝国主義論争が生れて、ドイツ社会民主党が三つに分裂したのは皆さんご存知の通りだと思うんですね。——右派カウツキーの『超帝国主義論』と中央派ヒルファディングの『金融資本論』、それから急進派ローザの『資本蓄積論』と。これらはいずれも帝国主義を止揚出来ない。帝国主

義を止揚する『帝国主義論』をレーニンが書けたのは、一九一六年でもう一四年の帝国主義戦争が始まってしまった後なんですかね。

そこでレーニンは帝国主義の分析を通して、マルクスの産業資本主義を対象とした同時革命戦略が適用出来なくなった対象——帝国主義の物質的基礎の中に、世界革命を実現させ得る矛盾の環がどこにあるのかを、『帝国主義論』で提出したと思うんです。しかしその世界政治過程に於ける論理の構築というのは、僕はトロツキーの一九〇五年の革命の総括、一九〇六年に書かれた『結果と展望』の中に示されているのではないかと思うんですね。このパーマネント・レボリュション——革命論理は二つの意味で永続性——連続性を持っていたと思います。

ロシアの革命というのは二段階戦略的な意味を持っていたと思うんですけど、ツァーリズムの政治的専制支配下でロシアの独占資本が経済的な産業支配を保持している。これに対して革命は当然ツァー専制に対する民主革命から始まる。しかしプロレタリアの力を借りずしてはブルジョアジー、形成の未熟な独占ブルジョアジーは政治権力を取ることが出来ない、民主革命を完成することは出来ない。そのみか、プロレタリアがある程度権力に近付いて来ると、ブルジョアジーはツァーと妥協してプロレタリアを弾圧するようになる。したがって、民主革命から社会主義革命に一気に突き進んでプロレタリア独裁を勝ち取らなければ、民主革命も社会主義革命もどちらも勝利しないという、この時間的国家的な連続性と、それから、遅れた後進帝国主義国に於いて革命が起るんだということなんですね、トロツキーの云っているのは。後進帝国主義国から革命は起る、しかし後進帝国主義ロシアには社会主義に全面的に進める生産力の基礎がないし、

また一国では社会主義は成り立たないので、これを突き破るためにロシアで起った革命を主体的にヨーロッパに波及させる。特にドイツの革命の成功を再びロシアに持ち込むということで、一国からヨーロッパへ、ヨーロッパからロシアというこの相互反復の過程によって、一国革命から世界革命が連続して達成されるという形なんですね。この連続世界革命戦略の系譜は、マルクスの掲げた世界同時革命の系譜とは、明らかに違う構図を持つてるんじゃないかということなんですね。

そういう問題に全面的には答えられなかったのが第一次ブンドの限界です。われわれが今提起しているのは、世界革命戦略としてのマルクスの世界同時革命論、レーニン、トロツキーに代表される世界革命論、これらをどのように総括して現代的な論理的体系として整えて行くかということ、もう一つは、現在の帝国主義世界の中に於いて現実の同時革命がどのようにして実現されるのかということですね。僕らは国際階級闘争を三プロックの闘いと云っておりますけど、先進国、後進国、そして帝国主義に包囲された労働者国家内部の矛盾が同時に進行し、この三プロックの国際階級闘争が、国際階級危機を同時革命へと転化するということを云ってるわけです。帝国主義戦争を敗けた国内乱へ転化するのではなく、戦争以前から階級戦争を挑み、世界革命戦争を通して同時革命を実現するのです。

これが第二次ブンドの一番の特徴ですね。

本多(中核派) それじゃ、あれじゃない？ ブハーリン・プラス、「四トロ(第四インター)」の大將、太田の親分(太田竜)。

さらぎ(共産同) その物質的基礎をどこに求めるかということなんですね。

太田さんたちは後進国から突き破るわけでしょう？ 先進国ではプロレタリア、現代プロレタリアというのは神話であるというふうに考えるわけですけど。

そういう問題——つまりどこで突き破って行くかということをね、ただ主観的に突き破るんではなくて、物質的な条件がどのようにあるのかということ、産業資本主義時代と、第一次帝国主義戦争前後の帝国主義と、それから現在の帝国主義の物質的な矛盾の基礎というものを把握することによって、客観的に位置づけることが出来るんじゃないか。このことを明らかにして行くことが世界革命戦略の中心点だと思っんですね。

その意味から、それを主体的に切り拓くものとして僕らは、一〇・八羽田闘争を闘ったんですね。革共さんとともに一〇・八を闘い、一一・一二を闘ったわけですけど、これはやはり中核ブンドがやったんです。これはまあ、どちらがよくやったかとか、一〇・八はどっちだったか、一一・一二はどっちだったかということはあるけれど、ま、そういう話は別にして、僕らの位置づけとしてこれは、第一次ブンドが原則を掲げながら果し得なかったことを、運動実態として実現すると同時に戦略としてそれを確定する闘いの一つだということです。戦略としてはさっき申したように、世界同時革命の現代的物質的な基礎を明らかにし、主体的には、思想的組織論的なプロレタリア国際主義ですね。その思想性と戦略による理論武装によって闘う形態を一〇・八から切り拓いたということで、これが僕らの云う「プロレタリア国際主義」と「組織された暴力」の意味です。

その意味で、被抑圧人民に同情してベトナムの後進国人民と何か抽象的に連帯するんじゃないかと、自国帝国主義打倒を通して日米プロレタリアートの日米帝国主義打倒を目指した闘いを組み、実体的同時に連帯する。そのプロレタリア国際主義として連帯し得る物質的基礎が現代世界に存在するんだという戦略を明確に押えて行く。ここが第二次ブンドの特徴で、この特徴はやはり一〇・八からアリアリと国際的に現われて来たんじゃないかと思うんですね。

で、世界同時革命戦略が、プロレタリア国際主義に貫かれて、実際の革命形態としてどのように遂行されるのかということですが、具体的な日本のプロレタリア革命と世界のプロレタリア革命とをつなぐ環は何かということが問題で、それが僕らの場合「世界一國」になるわけですね。

「世界一國」の同時になりますけれど、実践的にはその一國に於ける具体的な革命形態を示さなければいけない。藤本進治は、毛沢東の一番良いところは、一国的ではあるけれども革命の具体的な形態を示したことだ、と云っているんですね。

その意味で僕らは、非常に先取りして先ばっかりを云うと云われるんですけども、(笑い)先進国革命の普遍的パターンとして、中央権力闘争——権力奪取に至らない段階でなお中央権力闘争を、中央政治権力の奪取を展望する方向で闘うということ——と、それからもう一つマッセン・ストライキという言葉で表現してはるんですが、生産・流通全体の機構を打倒する闘争、この二つを提起しているわけです。

この問題については、なぜそういうことを——中央権力闘争とマッセン・ストライキの総合的結合を、現代的に同時に進めるのかというのと、これは現代の帝国主義に於ける完成されたブル

ジョアジの国家支配機構に規制されているわけですけども……。

本多(中核派) ちょっとね、問題の拡がりからすると、僕は一言云わなければならない問題が出て来るんですけど——後半の具体的な革命の戦略・戦術にかかわる点については後で触れるとして——ここでは一応第一次ブンドについての問題だけ一言云わせて貰いたいと思うんです。

で、今の話を聞いていて、実はやはり第一次ブンドの持っていたまづい側面というかね、そういうものが非常にはっきりしたような気がするんですけどねえ。

一つの問題は、例えば一國革命に対して世界革命、民族主義に対して国際主義、平和革命に対して暴力革命、党独裁に対してソヴェト、というふうに対置したわけですけど、その上で僕はやはり二段階戦略の問題をきちんと取り上げなければならぬと思っっているんです。それからさらに平和共存の問題ね、そういう問題を取って見た場合に、やはり現在の世界的な特徴についての問題が、変革すべき客体的条件としても、それからそれを変革して行く主体的条件の問題としても、統一的にどこで提起されて来るのかという点が抜け落ちていないかと思う。

むしろ、こういう問題の一つ一つについて云えば、五七年の段階でもだいたい問題ははっきりしていたわけです。その点では、そんなに問題はなかったんだと僕は思うんですね。

革命的共産主義者同盟が出来、その一定の影響下に学生戦線の左傾化が進行して、そしてそれが一まず学生の反対派フラクからブンドへという形をとって事態が進行して行ったということの中には、もちろん共産党による除名という外的条件も無視することは出来ないわけだけど、同時にわれわれが運動上に於いて否定すべき原理が、いわゆる「スターリン主義」という統一性を

持つてわれわれの前に存在しているということ、具体的に云えば、帝国主義から社会主義に向つての世界史的な過渡期、云い換えるならば世界革命への過渡期として本質的に存在している現代を、一国社会主義の理論と平和共存政策というものを基礎にして、帝国主義とスターリン主義の平和共存形態へと押し曲げてしまっているという、この国際共産主義運動の内部に生じている問題を、プロレタリア革命を永続的に遂行して行く方向で統一的に打ち破るということが必要なわけですが、そのことがある程度この段階（五六、五七年頃の段階）になって統一的にはっきりしたということがあって、党を飛び出すことが可能になったと思うんですね。

ですから第一次ブンドについての問題として云えば、客観的にあれこれ評註を加えることよりも、何をバネにして党を出て行ったかということをもむしろもっと積極的に考えなければいけないと思う。

別な面から云えば、今日の革命という問題を考える場合に、客観条件という問題とその客観条件を革命に転化して行く主体的条件という二つが相互に規定された問題として出て来ると思うんですが、その問題をいわば切り離れたところではなしに、むしろ今日の世界認識の中に統一したものとしてわれわれは見なければいけないと思う。

そのところを曖昧にした点からは、運動の本当の創造というのは出て来ないんじゃないか、と一まず指摘をして置きたいと思うんです。

ですから第一次ブンドの問題は、やはりそういう一つの条件の中で自らが生み出されながら、そのスターリン主義から革命的共産主義へと自己を分岐させたその分岐点が、必ずしも内側に於

いてはっきり主体的に再確認されていなかったというような問題を根底に秘めていたんじゃないか。そのことが六〇年安保闘争に於ける戦術論・組織論上の弱点として、後に総括されて行かなければならない問題を生み出して来る一番深い原因をなしているんじゃないか、というように僕は考えているんです。

小長井 その点は後の主題にもなりますから、さらぎさんの方からもいろいろご意見はあると思いますが一まず預りということにして、さらぎさんと本多さんのご意見の中で出て来た問題を把え返して、鈴木さんの方から自分の原点、立脚点を話して頂きましょう。

### 三 ブンドからMLへ

鈴木（日本マルクス・レーニン主義者同盟＝ML） 僕らも六〇年安保闘争を闘った第一次ブントから派生して来た一つの分派です。六〇年ブントの必然性については、本多さんが触れた点ではなくて、さらぎさんが触れた点が本質的な問題であつたし、これについては繰り返しません。スターリン主義の思想的批判、あるいは哲学的批判ということでは、革共同がブントよりほぼ数カ月あるいは一年前に成立して開始していたのですが、それはしかし極めてネガティブな、日共官僚体制がいかに、この点については日共がこれこれいかにという形でね、すべてネガティブなアンチ何々、アンチ何々という形で、いわば批評的批評を日共あるいはスターリン主義世界体制なるものに対しておこなうということでもって自派の存立を支えていたのに比べて、極めてアクティヴに積極的に、何を今どう闘ったらいいかという問題提起をしつつ登場したのがブント

なんです。

その点で、さっき本多さんがおっしゃったブント、革共同の問題意識は混然一体となったまま安保闘争に突入して行ったという言い方には、これはすでにごまかしがあると僕は感じざるを得なかったんです。

本多(中核派) (笑いながら) 僕はブントに対して非常に同情的に表現したんだけどね。(笑い)

鈴木(ML) 当時ですね、自分のことを云えば、ブントに近づいた理由ってのは、安保闘争で——むづかしく云えば平和革命か暴力革命かと云われたらしいんだけど——実力闘争をやるのか、あるいはお焼香デモをやるのかというように例えば表現された、そうしたブントの実際の闘いの中から自分としてはブントに近づいて行ったんです。

もちろん当時、ブント、革共同というのは並立しておって、デモに行けばブントの隊列の後の方に革共同の諸君がおったですから、革共同の諸君とも接触を持ちオルグられもしたわけだけど、非常に感覚的に云うといつも批判的批判だけが革共同から聞かれるという感じがしてたんですね。

そうして、さらざさんが展開したような形で第一次ブントが喪失され、その限界というものが正にあの安保闘争後の四分五裂の状況となって現出したのですが、はっきり云えばその四分五裂の状況の中で革共同はコソ泥的に立ち廻ってね、その後全学連の乗っ取りをして一時期の主流派かと思われた現象もあったわけです。しかし少なくとも当時安保ブントが提出したところの、一

国革命か世界革命か、あるいは平和革命なのか暴力革命なのか、あるいは日本帝国主义は自立しているのか、アメリカ帝国主义にさらに隷属を深めているのかというような問題は、すべて当時から今にかけて正しいし、その意義を持っていたと思うんです。ただ、それをどのように自分たちの戦略化して世界革命に向っての理論的な組織的な確立に資するのかという問題が、六〇年ブントの総括として出さなければならなかった。

しかし実際には当時云われたことは、ブントや安保全学連の「先駆性論」批判であるとか、あるいは同盟軍規定<sup>\*</sup>の誤りであるとかいう具合にですね、もうその低いところをネガティブな形で革共同から提出されて、これに対して、当時のブント指導部が自ら方針を見失って、革共同に坊主ぎんげに雪崩れて行くという状況になったんですね。まじめな、六〇年安保闘争を闘い抜いたところから新しい戦略戦術を引き出して来るという方向での総括論争というのは、革共同の諸君、あるいはそれに坊主ぎんげに雪崩れていった当時のブント指導部の諸君によってねじ曲げられていってしまう。こういう状況が六〇年以降あって、それがその後の沈滞の過程の一つの要因となっていた。そういった見地から云うと、六〇年ブントを最も六〇年ブント的に、その良い面を受け継ぐ形で総括を展開したものに革通派<sup>\*</sup>というのがあったんです。革通派の基本的な視点というのは、ブントの安保闘争論の誤りとその崩壊の基本的な原因として、ブントの帝国主義論の観点がまちがっていたのであるというように問題を提起して行ったことに見られます。そしてその結果、ブントの戦術がまちがっていたという。

つまり具体的に云えば、当時ブントの理論的な支柱であったところの姫岡玲治という人がいる

けれども、彼の展開した国家独占資本主義論の「六〇年安保闘争は前哨戦であった」という規定すなわち六〇年ブントの安保規定がまちがっていたのであるところから、実は六〇年安保は階級決戦ではなかったのか、組織の温存とかあるいは戦術を一定のレベルに押えて置く配慮であるとかいうことではなしに、これはプロレタリアートとブルジョアジーの生死を賭けた階級決戦として六〇年安保闘争は闘われなければならないかつたんじゃないか、という形で革通派の基本的な総括というのがなされる。そしてこれをめぐってですね、その後のいわばまじめな、六〇年安保から何を引き出して次に引き継いで行くのかということを実際に模索するところの総括、その苦悩というのが、基本的にはあったと思うんです。

そうした革通派の提起した問題に対していくつかの混乱があったわけなんだけれども、これは革通派の方法というか、問題の立て方にも大きく起因しているんだと思います。要するに革通派の提起したものは帝国主義の現代的な分析ということなんです、これは先程少しさざざさんが述べておったんであんまり繰り返したくないけれども、基本的に云うならば――

第二次大戦後復興して来た独・日・伊のいわゆる復興帝国主義が、六〇年安保あるいは当時のヨーロッパに於ける対米抗争の過程に現われるように、アメ帝の一元支配に対して挑戦をして来る。そういう、いわば帝国主義内部の不均等発展とその抗争というものが世界の危機を創っているものであり、その基本的な危機が各国にそれぞれの現われ方をして来る。したがって、そこから革命戦略の問題も立てられるし、新しい革命理論も創られるんじゃないか、その分析を通じて新しい理論を創って行くんだ、というように提起したのが革通派だったと思うんです。

ところがその結果出て来た理論というのは、帝国主義を徹底的に分析して帝国主義国相互の力関係の変化、諸々の状況の中での力関係の変化ですね、これを専ら追究して行って創られて来たものなんです。それがレーニン帝国主義論を原理にするところの現代帝国主義論という形で提出されて、六〇年安保に於ける現代日本帝国主義の復活、確立という局面に対応することを要請していったわけです。

しかしですね、そういった帝国主義の分析だけからわれわれの革命理論を創って行くという方法は、一方に於けるプロレタリアートあるいは被抑圧人民の階級的な成長と、それをそれぞれに表現しているところの諸党派の存立とその共同闘争、統一戦線という問題についての理論的な欠落を一時生み出してしまったわけです。そして極めて客観主義的に、世界では今帝国主義がこのように争っている、日本について云うならば、日本は帝国主義的に復活して新たな海外膨脹、植民地を求めてアジアに向って海外侵略を始めている、そのいい例は日韓基本条約の締結ではないか、あれはもう植民地条約である、という形で問題が提起される。

そういった中で出て来たものの一つに、当時のいわゆる反日共系に於ける論争の出発点となった「日韓階級決戦論」というのがあったわけです。

これは――

日本が帝国主義として自立してアジアに出て行くならば、ある側面では対米抗争を必然化するわけだけれども、ではもし仮に日本が海外膨脹を果さないとするならば、日本帝国主義にとって、帝国主義としての日本にとって、それは直接的に死を意味するんじゃないかという問題意識があ



って、したがって日韓基本条約の締結というのは、日本帝国主義の海外膨脹がなるかならないかの生命線である。この日韓基本条約締結を阻止することは日本帝国主義の死につながる。とすればこれは、日本帝国主義打倒をめぐるプロレタリアートとブルジョアジーの階級的な一つの決戦ではないかという戦略論を持ち出した、いわば引きずり出したとでもいいますか……。

水戸 それはあれですか、ブントのML派という形をとったのちの、ML派の主張だったんですか？ それとも、それ以前の？

鈴木(ML) それ以前です。具体的に云えばですね、第一次ブントがさっき云ったような形で分解して来ると、第二次ブントの建設というものが、第一次ブント以降理論的模索をし組織的模索をしていたわれわれにとつて、最も主要な問題であったわけです。

このことは、例えば当時のブントの一部の指導者たちが、しかも相当上部であった指導者たちが、革共同に坊主ざんげして流れて行くという状況があったんですが——僕はそれ自身を良いとも悪いとも云わないけれども——その結果形成された革共同というのが、新しい、当時のブント・革共同の矛盾を「止揚する」形で登場してわれわれの指導部として存在すれば、僕ら自身の第二次ブント創設の仕事ってのは、いわばなくて済んだわけですね。われわれも革共同に続いて行けばよかったです。

本多(中核派) しかしそうは行かないだろう。……一つのことだけちよつと聞きたいんだけどね。

例えばそれが毛沢東主義とはどういうふうにつながるの？

小長井 それは後にしてくれませんか？

本多(中核派) 僕は今分裂している状態は極めて必然的であると思う、例えば僕らが君らと別の党派でいるのは。

君らがもちろん毛沢東主義を超えて、われわれと同じイデオロギーに立っていれば一しよになるのは必然ですよ。しかし毛沢東主義に殉ずるといふイデオロギーを確認している以上ね、これは六一年の総括の問題を幾ら出したって意味がないと思うんだよね。そこから毛沢東主義になぜ行くのかということ僕を説明して貰わなきゃね。

鈴木(ML) 先を聞いて頂きたいんです。

水戸 聞きますがね。第二次ブントの「階級決戦論」の話が出たんですが、これが現在のマルクス・レーニン主義者同盟(ML)へ行く過程でかなり基本的な問題だと聞きましたので、それがどういう時期に当るのかということちよつと聞きたかったです。

鈴木(ML) それだけ簡単に云っちゃいますと、さろぎさんたちとともにですね、第二次ブントの創設がなされたわけです。その第二次ブントの創設というのは実は、「階級決戦論」を主要な戦略戦術にするところのレーニン帝国主義論の復活という目標でなされたものなんです。で、六四年日韓闘争というのは第二次ブントによって推進されたもので、当時僕とさろぎさんとは同じ組織で闘っていたわけなんです。

その後、先程もちよつと述べたように、帝国主義がどう動いているかということの客観的分析の結果が、直ちに革命理論として完成されるということはないんじゃないかということがですね、

これはもう簡単なことなだけども、しかしそれが日韓闘争の敗北とともに、あるいは日韓闘争の不発とともに、顕在化してきたわけです。で、第二次ブント内部に於ける理論闘争——相当激しい論争が展開されて行ったわけです。その中でわれわれが到達した問題というのが先程云った主体の側の分析が足りなかったということと、それから国際的な見地の不足ですね。それはどういうことかといえますと——

日韓闘争という、今と比べてみればかなり不発だったけれども大きな問題を提起した闘いの中で、日帝打倒の見地というのを強硬に押し出して、自国帝国主義打倒路線という形で問題を立てておいたわけだけでも、少なくとも当時の世界あるいは現代世界というのは、確かに帝国主義は不均等発展せざるを得ないしそのようになってるし、したがって帝国主義相互間には市場をめぐる分裂葛藤は常にあるし今もある。これはもう、EECとアメリカ帝国主義のいわゆるチキン戦争と云われた問題とか、あるいは最近の総称して関税戦争と云われているもの等々の問題として提出されているし、それ自身一つの客観的な条件として帝国主義の分裂の問題というものもあるだろうけれども、しかし一方、現代は先進国、後進国を問わずに国際的に階級闘争が激化しており、総体として帝国主義が新しい革命闘争の波によって追いつめられている状況にある。

これを追いつめている条件というのは、一つは帝国主義内部の矛盾、例えば日本で云うならばわれわれ、われわれの運動ですか。それから一方中国共産党やベトナム革命を中心とするところの後進国の対帝国主義の闘い。これは非常に昂揚しておる。それから三番目には、さらぎさんによって労働者国家と総称された社会主義圏、とりわけ中国、キューバ等を軸にする対帝国主義の

全面的な闘い。こういう三つの要素によってですね、現代世界に於いては帝国主義がぎりぎりまで追いつめられている状況にある。

こういう状況にあっては、帝国主義は帝国主義相互間の市場をめぐる争いだけに忙殺されるわけには行かない、という状況がはっきりしたわけです。

そういった三つの敵を腹背に受けて、帝国主義は一定の帝国主義間の同盟関係というものを現実結びつつある。日本とアメリカの間をとってみれば、一方に於いてアジア市場をめぐる、あるいはそれぞれの軍事ブロックに於けるところの、あるいは専ら経済的な要因によるところの葛藤というものはあるし、相互の政治委員会の間でも——例えば佐藤内閣とニクソンの間にも、大きな矛盾があってこれは消えることはないと思われなければならないけれども、他方では、対中国封じこめ政策、あるいはベトナム人民の革命闘争を圧殺する問題、そしてアジア階級闘争圧殺のたくらみ等々というところに於いては日米帝国主義ははっきり同盟関係を結んでいて相互に補い合う。こういう形で現状は進行している。

このような現状に対しては、これはやはりわれわれの側が、国際的な連帯を以て帝国主義を追いつめて行かなくてはならない。具体的に云うならば、今あげた三つの要素、帝国主義を追いつめている三つの要素、これを連帯させて行かなくてはならない。

で、この三つの要素を連帯させる問題については、とりわけ三番目に云った要素について反日共系諸派の間で混乱があるんです。

さらぎさんは国際的連帯といわれ、例えば日本帝国主義打倒のわれわれの闘いとベトナムの革

命闘争は——本多さんには革命闘争と云うと悪いかも知れないけれども——連帯しなくちゃならんと云っているわけだけれども、これだけでは不足である。中国、キューバを先頭にするとこのいわば革命先進国が、これまたわれわれとともに連帯して帝国主義を追いつめて行かなくてはならない。

これを連帯させる具体的な理論的根拠、あるいはその中軸は何であるのかという問題から、われわれの毛沢東に対する接近が始まって行ったということが一つ。

それから一方で、そうしたわれわれの日韓闘争敗北後の理論的な模索のまさにその時、中国に於いて偉大なプロレタリア文化大革命が発生したわけです。このプロレタリア文化大革命こそ、過渡期社会に於いて——社会主義を目指す一つの長い過程に於いてですね——革命権力、プロ独権力樹立以降、どういう形で社会主義あるいは共産主義建設に向って行くのか、あるいはどういう形でその間自分たちを包囲している帝国主義と闘って行くのか、という問題を、まさに真正面から把えて全く新しい発展を理論的にも組織的にも与えた運動であると思います。

そうした現代の国際的帝国主義打倒の三つの闘いを、最も頂点に立って現在闘っている例えばベトナムの革命闘争——あれは革命闘争なんです——これを領導しているところの中国共産党の革命路線と、その基礎である毛沢東の指導理論を無視して現在の国際階級闘争を語ることは出来ないし、少なくとも、一時革共同の諸君が云っておった——現在も云ってるかどうかは知らんけれども——例えばベトナム革命、ベトナムに於けるあの闘いは、スターリン主義と帝国主義の代理戦争である、というような形で把えることは出来ない。

本多(中核派) 今でもその見解は変えていないよ。

鈴木(M.L) はっきりした革命闘争として、われわれと連帯すべき、本質的に連帯すべき闘いとしてあるということをも最も大胆に突きつめて行くならば、われわれが中国共産党、毛沢東主義と高い結節点を持つに至るいわば動機というか、そういうものが解明されるはずであると思うんです。

本多(中核派) 現代世界の基本規定ということについては、先程から云っているように僕は全部はずして来たんですけれどね。まあ大きな考え方として、条件と主体の関係としては触れななきゃいけないことだけ触れたということなだけけれど。つまり、僕ら大きく云えば、帝国主義から社会主義に向っての過渡期が、帝国主義とスターリン主義の平和共存形態に歪曲したものだというふうにまず現代の世界を基本的に把握することから出発しないと、現代世界の規定も戦略も出て来んだろうという考え方を持っているということですよ。

その問題は一まず措いたとしてね、僕は今の鈴木さんの話を聞いていて感ずる点は、こう波のまにまにという感じなんだよね。つまり、革命運動を主体的に切り拓いて行く中核的な理論なり組織なり運動なりをどうやって創り上げて行くかという点で、心棒一本入っていないと思うんだよ！

鈴木(M.L) そういうものを本質的に欠いているのが革共同派なんだよ！

本多(中核派) まあそれはいいよ。

率直に云って、僕は第一次ブンドは反毛沢東主義だと思うんだよ。その点は僕ははっきりして

いると思うんだね。

鈴木(M.L) 反スターリン主義だったんだよ。

本多(中核派) うん、なるほど……。反スターリン主義でもあるし、反毛沢東主義でもあるわけだ。

勿論鈴木さんが今日そのブンドを否定するのは思想的に自由だと思うんだよ。ただね、やはりその過去のブンドを今立っている立場から、批判するなら批判する点をはっきりさせて行くというふうにしないと、意味がないと思う。

鈴木(M.L) それは歪曲なんだよ、それは！「否定する者は生産する」なんてふうに考えるから、その考え方が可怪しいんですよ、それは。

本多(中核派) それはだけれど、反省即構成とヘーゲルも云ってるように、極めて明々白々ですよ。(鈴木笑う)

われわれは資本主義の批判をしてるんだもの。そのことが社会主義の建設になるわけだから。(鈴木「そうだよ」) そのくらいの関係が解らないとね、毛沢東の云っていることすら理解出来ないよ、自分で。つまり彼が今中国に於いて破壊していることだって、彼は建設しようと思ってるわけだからね。

だからそれはね、肯定面とか否定面とか、ポジティブとかネガティブとか云っていても始まらないことだね。むしろこの際はっきり云いたい点は、今日君らが立っている立場、それがどういう主体的なモメントから出て来るのかということをも自己規定せよということだ。

それをブンドということに関して云えば、たまたま自分がブンドにいたということから、それを丸抱え的に包摂する思想じゃなしに、やっぱり、ブンドをどうやって乗り越えるものとして現在の立場が打ち出されて来ているのかということがないと、僕は率直に云ってその毛沢東思想との結びつきも、非常に外在的で客観主義的な結び目としてしか理解出来ないという感じを持っていくわけだ。

もとより僕は、毛沢東思想の占めている位置を無視して今日に於ける革命運動があり得ないという点については、一〇〇パーセント賛成です。ただそこから出て来るものとして、毛沢東の理論をも国際共産主義運動の歪みとしてわれわれは乗り越えなければいけないという結論を持っているということですよ。

だからその点はね、無視してるか無視してないかということではなしに、どう評価するかという問題の次元で討論すべきことです。

さらぎ(共産同) そうですね。討論のレベルを上げて下さい。

本多(中核派) 今総括の問題に関して云えば、例えば六〇年安保をどう総括するかという問題は、率直に云って、当時の日本共産党に代表される運動との激突を通して、六〇年闘争はおこなわれたという点を踏まえてはならない。

鈴木(M.L) 誰がやったんですか？ ブントなのか、革共同なのか……

本多(中核派) 当然そのことから、日本共産党をみちびいていた理論、あるいは思想を背後から支えていた中国共産党の問題ね、この問題を具体的な問題として総括すること抜きに中国の問

題を論ずるのは、非実践的だと考えているということですよ。それからまあ一言だけ云っておくけどね、誰がやったかとかということ、ここではあまり重要なことではないんだね。

鈴木(M.L) 重要なことなんだよ！

革共同が、安保闘争をどのような理論とどのような闘いでもって推進してきたのか。その革共同が、現在どうやって安保ブントを総括し得ているのか、はっきり云えばだよ……

本多(中核派) だから君の立場がね——はっきり云うけど、君の立場が問題なんだ！ その際限りでは君の好きな言葉を使うと、ネガティブにしか問題を出されてないんだよ。革共同はどうであったのかというにすぎない。

鈴木(M.L) しかし、そういった主体的総括なしには、現在の主流派を担っていけなくなっている現在の中核派の状況ってのは、克服出来んということだよ。

本多(中核派) いや逆に僕らの立場から云えばね、六〇年安保に於ける僕らの闘いは充分だと思っていないですよ。むしろそれを令、一〇・八羽田以後の闘いの中で、より積極的に切り拓こうとしているわけで、主流派として担えなくなったというように云われると、少し面映ゆいわけで、むしろ率直に云えば、主流への道を歩もうとしているということだからね。

まあそれで結論は、はっきりしていると思うんだけど……。

鈴木(M.L) いや、そう清算されちゃあ困るんだよ！ つまりね、安保闘争をどういうふうに総括して現在の革共同の路線があるのかということね。つまり革共同の中核派と革マル派の分裂、あれがそもそも六〇年ブントの総括の中から出て来ているわけだよ。

その問題に対する総括を以て現在の、例えばこのテーマである「七〇年をどうするのか」という問題に対して、発言しなければ、あれこれ他人の批判をしても始まりんということだと思んだよ。

本多(中核派) いや、僕はね、先程は、五八年の転換というふうに云われるところまで話したところで話しの腰を折られているわけ、結論から云えば。六〇年について触れたという意味では触れてるけども、それはあくまで五八年が日本の共産党に代表される運動、あるいは、日本共産党を包摂する世界的な国際共産主義運動のスターリン主義的な歪みを克服してゆく闘いだっただ、そういう状況の中で六〇年安保闘争もおこったのだ。そういうふうに見ればブントと革共同の対立あるいは安保総括をめぐる再編成の過程を、スターリン主義から革命的共産主義運動を生み出してゆく過渡期として把え得るのだ、ということをやったにすぎないわけです。

さらぎ(共産同) 革共同とM.Lの諸君の今の論争はナンセンスだよ。結局あれこれと小さな問題があるでしょうけれど、問題はやっぱり日本共産党に対してどう闘っていくかというところから始まったんだ。で、その内容が反スターリン主義であるという点については一致出来ると思う。

ではその反スターリン主義を何を根拠に位置づけているのかという点で、大きくブントと革共同の違いがある、二つの位置づけ方があった、こういうふうの問題を整理すべきだと思うんですね。

本多(中核派) そうですね。

さらぎ(共産同) そうですね！

その位置づけという事で僕はさっき四点の問題を出したわけですが。

MLさんの場合はですね。六〇年ブンドとして一緒にやりながら、また僕と鈴木さんは第二次ブンドの創設でもに在りともに苦労しながら、ブンドから離れてMLという一つの新しい立脚点を、毛沢東主義に求めざるを得なかったのはなぜか、ここに問題があるわけですね。「毛沢東思想」を一切の価値判断の基準とし、マオイズムのリトマス試験紙で全世界を検証するところまで行ったのかどうか。

MLの諸君は、第二次ブンドの戦略論争の総括から、世界革命の問題を帝国主義だけで見て行けるのかどうかという問題に辿り着き、毛沢東主義に救いを求めたのでしよう。つまり、ベトナムを軸にしなければ現代世界は把握出来ない、ベトナムを指導したのは毛沢東である、したがって毛沢東が一番頑張るとる、だから良いということだろうと思う。世界革命論争の総括から、マオイズムに横に流れて行ったんじゃないか。

僕らブンドは、帝国主義論争の総括から、毛沢東はやはり周辺革命論だと規定して、先進国革命を機軸にしながら世界同時革命論に到達したんだよ——後進国階級闘争と、「労働者国家」階級闘争を両翼とする、三プロックの階級闘争という形だね。

だから初めの、日本共産党と闘ってブンドを結成した立脚点、原点、この原点とそれ以後の再編過程で確立(?)された新たな価値観——マオイズム——との関係をはっきりさせなければいけないということだよ。

本多(中核派) それはそうですね。

さらぎ(共産同) その問題に対して鈴木さんは、まず毛沢東主義イコール・ベトナム闘争と直

観して、この感性的到達点から帝国主義論を把え返し、世界をもう一度見直して行くんだという形で問題を出したと思うんですね。

その点に関して今度は逆に革共同が答える番ですよ。黒田寛一教祖から分家して新しく——新しくもない、反スタを継承しているんでしょうけれども——初め生れた立脚点「反帝・反スタ」と、現在それをどう扱っているのかという点で、黒田革共同から中核派革共同への思想的な系譜なり戦略論の発見なりを答えてもいいんじゃないか。到達過程の自己展開を主体的に総括すべきですよ。

小長井 それともう一つ、やはり本多さんから鈴木さんの方に出されている、今の毛沢東主義まで到達したという辺りの展開ですね。自己展開がどういうことだったのかという点ですね。二つそれぞれ、中核派の皆さんとMLの皆さんとのそれぞれの原点からの到達過程の展開を説明して欲しいですね。

本多(中核派) ブントからの脱却過程としてそれを位置づけなけりゃ、非論理的だし非実践的だし非主体的じゃないかということですよ。

鈴木(ML) ですから、とりあえずいいださんの方から自派のレーゾン・デートルみたいなものを出して頂いてですね。そこからずーっと討論に入って行ったら……。

#### 四 新参の共労党

——「現代プロレタリア革命派」——

いいだ(共産主義労働者党) ハイ。

まあ原点とかレーゾン・デートルとかいう大げさなことではなくて、(笑い)ほんの話の皮切りなんですけれどね。

労働者党というのはいわゆる反日共系革命諸派の中では、一番の新参者だと思うんですよ。今世界のいたるところで噴出し始めている新しい戦闘的左翼の多くがそうであるように、革命運動の新参者なわけだ。既成の共産党でないことは勿論だけど、既成のトロツキー党でも毛沢東党でもない。

一昨年一九六七年の初めに党が創られて、すぐ二月の砂川闘争に実践的に嚙むことから始めて、羽田・佐世保闘争を通じて今日の新宿・東大・京大闘争に至るといふ過程を辿って来た。組織論的に云えば社・共の左という方向性を最初から打ち出して、そして、いわゆる「ベトナム反戦派」と云われて——大衆形成だか前衛形成だか解らないムード的な呼び方ですけれども——「ベトナム反戦派」「労働者反戦派」として進行中ということですよ。

で、われわれの自己規定は全体的には、「現代世界革命派」「現代プロレタリア革命派」——そういうものだと思う。つまり、資本主義から社会主義、共産主義への全世界的移行期である現代世界に即した、世界革命派・プロレタリア革命派ですね。もっと直接的には、ベトナム危機とド

ル危機の相乗化から到来しつつある第四の世界危機に、いわば呼び出されて党形成をおこなったわけですね。

戦後型歴史ブロックの崩壊過程としての今日の世界史的転換は、ベトナム革命戦争が旋回軸になってもたらされたわけだから、われわれが「ベトナム反戦派」であったのは、偶然のことではない。後進国危機の先進国危機への波及の中で、東アジアに於ける唯一の帝国主義国日本が次の危機の焦点になるうとして、そのためにまずもって、ベトナム、沖縄という革命的異物がこの現代資本主義＝国家独占資本主義的統合に投ぜられて、そこから「平和と民主主義」体制内化されているプロレタリアートの階級形成が再生され始めなければならなかった。ですからわれわれは、「現代プロレタリア革命派」として、「労働者反戦派」なわけです。

それで、そういう新参者でやって来る中で、つまり「遅れて来た青年」というかな、あるいは「遅れて来た老年」であるかも知れないけれども、(笑い)七〇年闘争に滑り込みセーフだからタッチ・アウトだか、(笑い)ちょっと判定微妙で解りにくいところ、今この会に出ているという、そういうところだと思ふんですよ。ただその反面、いわゆる「遅れて登場してきた批評家の特権」てやつを持つて有利な面もあるね。くたびれてないしね。内ゲバ的消耗もないしね。(笑い)

で、日本共産党からどうして別れたんだ? というご質問ですけど、それは、歌を忘れたカナリヤは後ろの山に捨てなければならぬのと同じことで、革命を忘れた共産党はオバステ山にでも捨てるほかないんですよ。(笑い)

ほんとう云いますと私は、新しい戦闘的左翼が「反日共系諸派」と規定されているうちは、ま

だ駄目だと思ふんです。過去によって未来が規定されてしまっているようなものでね。私など、『赤旗』によれば「反党分子」なわけだけれど、労働者党の方から見れば彼らの方が「反党分子」なわけさ。やがてそういう逆規定を世の中の常識にしなければならぬ。

そこで、戦後に於ける日共の中の長い内部闘争で、私自身については四つばかり節があったと思うんですね。

一つは、常東<sup>\*</sup>の流れを汲む農民運動、二つは国労の新潟闘争<sup>\*</sup>、三つは六〇年安保闘争、四つは四・一七スト<sup>\*</sup>破り、四・八党幹部会声明によるスト倒しの問題ですね。私個人に即して云えば、この四つの問題が、労働者党のいわば前史になるわけです。

第一の問題は、私は農村地方の党組織のオルグであって——具体的に云えば茨城県ですが、農民運動を中心にやってるオルグとして、一〇年ちょっとやっておったわけですが、その茨城県の農民運動というのはご承知の通り山口武秀氏(元日共代議士)の率いた常東農民組合の流れを汲んでいる農民運動です。そこでは、戦後のいわゆる農地改革によって、プロレタリアートと農民の戦後革命を担う階級同盟というものが分割され解体される中で、小作農による土地闘争という農民組合運動の主要目的が消滅した後に於いて、農民運動をいかに反独占農民運動として再建してプロレタリアートのヘゲモニーの下に労働同盟を再形成するか、というのが共通の問題意識だったわけです。そういう問題意識で、山口氏の常東には、安東仁兵衛氏をはじめ「国際派」の被除名学生黨員なども結集したんですね。

ところが、党の主流派はいわゆる反封建土地闘争の継続を主張していたわけで、常東の反独占農民運動に対して非常に敵対的に出ておったんです。

結局のところは、戦後の高成長・安定局面の中で、農民組合運動は持ちこたえがきかないで農政運動に吸収されて行ってしまうわけですが、私ら農村オルグは、昔ながらに百姓の家を泊り歩きながら頑張っていたわけですよ。そこでことごとくに、党主流の封建派農民運動と衝突せざるを得ないわけだ。

特に五一年綱領が出てからは、農村の半封建的土地所有がアメリカ占領制度の土台だ、という珍奇な二段革命論ですからね。黨員が農村調査に入ってありもしない地主を部落中探して歩くという始末です。

そこで、反米帝民族独立革命と反封建土地革命との結合を謳っていた、五一年綱領の原点そのものに反対する空気というものが、党内にも、大衆的基盤としてもあった。それが第一に私自身の個人経験としてまずあるわけです。今日では、その五一年綱領はスターリンの御神託であり、山村工作隊は毛沢東の御託宣によるものだということをはっきりして来ていますがね。

だから、地方のオルグだから全くの田舎侍ではあるけれども、党中央の理論が常にデタラメなわけであるから、地方農村におりながらプロレタリア・ヘゲモニーの問題を考えていると逆にです。地方のコミュニニストというのは、目的意識性とか理論的先見性というか、それをどこに求めるかということが非常に重大関心事になって来るわけです。

第二点の国労の新潟闘争ですが、それを私はもうすでに茨城県の党組織の指導部に入っていた時に経験したわけですが——あの、いいですか、こういう私小説的な云い方で？



小長井 ええ、新潟闘争は安保ブントとの関係でも重要ですから。

いいだ(共労党) ええ、ではお言葉に甘えまして。(笑い)国労の水戸地本という組織がありましてね、その大会があって、私は党代表で挨拶したわけですが、そこで大闘争の火蓋を切った国労の新潟地本の若い活動家が連帯挨拶に来てですね、その国労新潟地本の多分コミニストであろう青年労働者と地元のコミュニスト代表の私が、国労新潟闘争を拡大せよというアピールをしたわけですね。そうすると地方民同の代議員を含めて、ムード的な共感というのは圧倒的に闘争をやり抜けという方にあるんですね。雌伏何年かの後に新潟で戦闘が開始されたという共感が、一般代議員に非常にあるわけですよ。ところが、その時に国労の中央から派遣されて来ている社会党民同系の幹部というのが、それを鎮圧したわけですね。その鎮圧の時に何を使ったかという点ですね、要するに「共産党の野坂議長が昨日国労本部にお見えになりました。それで新潟闘争は農民の野菜が腐り始まっているから、(二回「ヘッ」)大衆から孤立している、一日も早く收拾すべきである、(失笑)そういうことを云われた」ということですね。つまり共産党の權威を借りることによって、左に移行しようとし始めた民同派の大衆的な「新潟闘争に続け」という傾向をですね、遮断して行く、圧殺して行くわけですねえ。

それは私にはショックでした。プロレタリア・ヘゲモニーについての考え方が、党中央と正反対らしいんですね。農民のことなら野坂議長よりは幾らかは知ってる、少なくとも苦労はしてる、という多少の自負心があったからよけいショックだった。野坂式だと、プロレタリアートの階級的突出が、自民党的農政運動のヘゲモニーの下に逆包摂されることになってしまう。

第三点、六〇年安保闘争——六〇年安保闘争の時には、私らの茨城県党の指導部ではヤング・パワーがヘゲモニーを取ってですね、いわゆる六・一五闘争の評価をめぐって、要するに「樺美智子に続け」という大衆ビラを作って全真的にアピールを出しました。それによって地方内部でも党内闘争があり、最終的には中央から鎮圧されるということがあったんですね。その頃というと、共産党の中にもある程度のチャンスが地方的にあったと思うんですが、池田峰雄日共元代議士などが、当時は「樺美智子同志の死を悼む」という大衆的な自作詩のポスターを自分の名前で駅に貼りめぐらしたりした、というような空気が、現実に地方の党组织にもあったんですね。それでは、そういう具合に六〇年安保闘争を経過して反対活動を強めて行く前後過程で、茨城県の私たちは中央に於けるブントの諸君の結党と、八回大会の春日離党\*というものを迎えるわけですね。なんしる地方のことなんで、中央は勝手にどんどん進行しちゃうから、いつも孤児みたいに置き去りですよ。(笑い)

私らのその時点での割り切り方は、党を革命的なものとして改革しなければならぬという志向性を持ちながら、いわゆる内部革新者、内部反対派として闘い抜いて行こうという選択でした。ある意味ではそれだけ徹底した闘いを共産党内部でやらなきゃいかんということがあったわけだけど、結果としては、それが逆に問題を鮮明にすることを内部的に隠蔽して妨げて、不徹底な革新過程に終わった。このことの政治的な結果責任は取らなきゃいかんと思うんですが、その志としては内部で徹底的にやり抜くんだということであってわけですね。

それからもう一つは六〇年安保後ずっと、党内政治としては逆流が非常に強まって行くわけで

すが、その過程の中では、地方的なレベルでの活動というのは、地方の枠内でいかにしたら最も戦闘的良心的にやれるかという以上になかなか出られないんですね。中央や全国の方は多分もっと偉い人がいてやっててくれてるんだらうと(笑い)思っているわけですよ、地方のオルグはこれ、百姓の家を廻りながらやってるんですからねえ。(笑い)ところが、六〇年安保が終って逆流が強まってみるとですね、そういうことではあかんということに、地方グループとしてはだんだん気が付いて来るのですねえ。自分で世界革命のことまで責任もって考えなければならなくなる、片田舎でね。(笑い)

さらぎ(共産同) 結局そういうところはわれわれと同じですよ、それぞれの行き方は違うけれども……。

いいだ(共労党) はい、はい。だからよけい辛いんですね、ある意味じゃ。

かいつまんで党内闘争のメルクマールから云うと——六全協で以てある程度流動化が始まって、そこにスターリン批判がだぶって来る。われわれとしては、スターリン批判は六全協でご利用済みであるという党中央の姿勢に対して、全面的に反対をしたんですね。つまり六全協の持っていた問題点を、戦略的にも組織論的にももっと拡大して深めて行かなければならぬという方向でやっていって、それが国際的なスターリン批判、マルクス・レーニン主義の再生と結びついてゆく。そこで、これはある程度いけそうだと思うから、内部革新者として頑張っておった時期が続くわけけれども、第八回大会の綱領確定に向けてどんどん逆流が強まってゆく中ですね、なかなか地方グループだけでは把え切れない問題というのが出て来る。私自身は最後まで二段階革命の

現官本綱領に反対して、職業革命家としての地位を解任されてしまうわけです。こいつは全く生活問題なんだ。(笑い)しかしその中でもなおかつ内部で頑張り抜こうということをやっていたんですが、最終的に私が除名をされたのは、四・一七ストライキを党幹部会が四・八声明で倒した時ですね。もうすでに細胞に降されていた時ですが、私らがまた細胞で多数派になって、それに対する激烈な党内闘争を繰り返して行く中で、志賀義雄、鈴木市蔵、神山茂夫、中野重治氏らの「日本のこえ」と連絡をとって除名になる、というような経過を辿っているんですね。

私自身のそういう個人的経過というものは、多少歴史の文脈とどこかで触れ合っているんだろうと思うのですが、だから我が労働者党の結党の過程の中には、八回大会に於いて内部革新の道が閉ざされたと考えて別党を創りたいいわゆる「社会主義革命派」と、それから、四・一七スト破りに対して抗議した共産主義者たちが、いわゆる「日本のこえ」が結成される時にそこに流れこんでいって、民青で八回大会以後も残っていた「反独占民青派」といわれる部隊なども、全部その時にそこへ合流する、その二つの流れが結党の母胎になっていった。結党時に於ける志賀派の脱落との闘争の中で、「ソ連派」「総路線派」としての体質を急速に変化させながらですが。

で、その間それが持っていた母斑みたいなものがあるわけですね。その母斑が結党以来の実践過程で、今どのように変化をし煮つまって来ているかという点に、ありのまま触れたいんですが——

「日本のこえ」が最近労働者党の運動方針を批判しましてね、労働者党の運動方針というのは「お尻を鍛えておけ」という方針だと云うんですね。何でも坐り込めと云うんで、(笑い)「お尻

を鍛えておけ」という方針だっからかわれているんですがね。そのお尻の問題です。われわれの蒙古アザがどこにあるかってこと。実際お尻の方は鍛えておこうと思っっているんですよ。(笑い)

で、そのお尻のアザから云うと、七回、八回大会で民族主義的・民主主義的な二段階革命論の宮本綱領に反対した社会主義革命派というものが、あるいは、党の北京追隨に反対し、四・八スト破りに反対した共産主義グループというものが、二つばかり母斑を持っている。

一つはいわゆる国際共産主義運動の総路線と云われている「宣言・声明」の持っている総路線派としての母斑ですね。これはある意味ではソ連派ということでもあり、それから平和共存を戦略化しているという意味での、平和共存路線派としての母斑だろうと思っんです。

それから第二点はいわゆる構造改革派というふうに云われている問題であって、つまりイタリヤ派でありトリアッチ主義者であるという問題です。

この二つを蒙古アザとして、われわれは部分的にせよ結党以来ずっと抱え込んで来ておる。

だからその蒙古アザのゆえに、国際政治の上では社会主義革命派でありゼネスト決行派でありながら、その政治部隊は六〇年安保の時の登場も含めて右翼的に登場して来たとも云える。そして右翼的に登場して来る中で、その一番右翼の部分は、江田派的構改派と一体どこで鳥の雌雄を論ずるのか、というところまで行ってしまった面が現にあると思っんです。そのところから、「社・共の左」として全面的に左転換するということがわれわれの結党の意味であり、結党後の実践過程だと思っんですが。

一つは、戦後の米・ソ両極共存構造が崩壊する中でベトナム戦争が出て来た。ベトナム戦争というものは——後でこれは論議になると思っんで簡単に云いますけれど——私らは古典帝国主義論による植民地戦争というふうには見ていないから、世界的に見て革命に対する帝国主義者の反革命防衛戦争であるというふうに把えますから、そういうベトナム戦争の把え方をしますと、ここではいわゆる現状維持的な平和共存政策であるとか、ましてや総路線、戦略としての平和共存戦略というものは、実践的にも理論的にも完全に崩壊せざるを得ないという確認の上にわれわれは立っておるというのが第一点です。

それから第二点は、戦後世界資本主義の資本主義的高成長期は、帝国主義宗主国に関する限りは相対的安定期であつたけれども、それが明らかに、アルジェリア革命、キューバ革命の一九五八年以来、アメリカからの金流出が始まるような動揺期に入っ来ておって、そのことは現在、ドル・ポンド体制の危機という形で顕在化して来ているというふうに考えるわけですね。

構造改革路線が部分的に妥当する歴史的条件というものは、戦後型歴史ブロックに於ける新資本主義Ⅱ国家独占資本主義の相対的安定期にはかならない。そういうふうな踏まえるならば、構造改革路線が世界革命戦略として第三世界闘争を包括出来るかといえ、包括出来ないことは私たちにとって明瞭である。とすると構造改革路線というものは、国家独占資本主義に於ける経済的下部構造に対する一種の切り込みの問題として政策的に厳密に限定して位置づければ、それはそれで実践的意味があるけれども、それが新しい世界革命戦略であるというふうな位置づけることは、もともと出来ない相談であるわけです。その上さらに、先進国に於いても次第に高成長・

安定期からの根本的転換が開始されて来るという中で、歴史的部分的な妥当性すらも喪失せざるを得ない、そういう世界状況が生れていると思うんです。

後で詳しく展開したいと思いますが、このような新しい世界危機の接近の中で、私たちがお尻にある二つの母斑から脱皮して、現代世界革命戦略をいかに位置づけるべきかという所で、自分たちを自己止揚しつつあると私たちは考えているわけです。

そういう私たちの問題意識から四つの点をごく簡単にだけ云いたいんですが――

第一はですね、先程さらぎさんが云われたことについてですが――

マルクス、レーニンからスターリン、毛沢東と来る間にある種の決定的な欠落があるということとを、私たちが積極的に承認するので、そこからレーニン主義の復活・復権は避け難い私たち自身の理論的戦略的な課題では確かにある。一九一七年以来の現代世界が、スターリン主義的歪曲によるその欠落に、すっぱりと落ち込んでしまう。その欠落の部分で、例えばトロツキー主義の復権も起きて来ておるし、ある意味では毛沢東思想の抬頭というものも起きて来ているんだらうと思うんです。

しかし、私が今云いたいのは、現代世界が転換に当ってトータルに提出している問題が、そのような単純な古典的復権・復活で解けるかということなんです。現代世界ならびに現代帝国主義の提起している革命的問題を解くのに、レーニンの帝国主義論だけ（あるいはトロツキーの古典的復活）で原理的に――原理的にですよ――充分なのかということが問われておる。それは私は充分ではないと結論的に云えば考えるんです。帝国主義の不均等発展が、唯一不可避的に帝国

主義世界戦争に帰結するレーニンの古典的帝国主義段階では、現代世界はあり得ないわけです。ドル危機一つとってもそうでしょう。

第二点はやはりさらぎさんの提起に関連してですけれども、マルクスの時代の過剰生産世界恐慌をモメントにする世界革命の提起というものと、自分らの唱えている一国世界同時革命というものとは違った質を持っているんだというふうにおっしゃったんだけど、一八四八年のドイツ・ブルジョア革命の停滞敗北に直面してのマルクスの「連続革命」の提起は、さらぎさんの理解されているカテゴリーで云えば、ある意味で一国世界同時革命としてすでに提起されておる……

さらぎ(共産同) 「世界一国」ですね。いいですね、政治の本をもう少し読んで下さい。(笑い)まずエンゲルスの『共産主義の原理』、そして『党宣言』。ここで同時世界(ヨーロッパ)革命が提起されている。

いいだ(共労党) ああ、そうですね。(笑い)正直のところどこが違うのか私には解らないんですが、さらぎさんのカテゴリー通り使わせて頂きますと、「世界一国同時革命」ですよ、マルクスは。

つまり、ドイツ革命が発端になり、フランス革命がそれを受け継ぎ、最後は世界資本主義そのものであるイギリス資本主義に対して世界革命戦争を挑む――そういう形の世界一国革命の提起、その意味での連続革命の提起になっておるので……

さらぎ(共産同) いや連続じゃなくて、闘争が同時に連続し得るといふ同時的物質的条件が

恐慌の同時性にあるという……

いいだ(共労党) 自由主義段階のマルクスの世界革命だって、一面から云えば直接的同時性はないのであり、他面から云えば連続革命なんですよ。さらぎさんの新発明と、そのところがどう違うかという具体的な提起がないとですね、現代世界革命を解く問題としてはさっぱり解らんというのが私の率直な感じです。それからもう一つは、マルクスの時代の世界革命というのは旧大陸世界の時代ですから、それはつまりヨーロッパ革命ですね。当然の歴史的限界として、アメリカもロシアも含んでいなかったわけですからね。『党宣言』を読み直してみても下さい。(笑い)それがインドや中国なんかまでが世界的視野に入って来ることで、マルクスの後の世界史像も変化して来るわけです。だから私たちは、ヨーロッパ革命イコール世界革命ということでは解き得ない現代革命の問題に、一九一七年以降直面し続けているわけだ。植民地を包括することによって擬似的な世界化をやらざるを得ない帝国主義段階、さらにそれがロシア革命によって部分的に突破された世界史的な過渡期としての現代の世界革命戦略というものは、マルクスそのままの「世界一國同時革命」というモデルで、簡単に解くことは出来ないだろうと思うんです。

第三点はですね。さらぎさんは第一次ブント結成の経緯に触れて、日帝の自立の問題、それを世界的に規定しておる資本主義の不均等の発展の問題について、レーニンの古典的命題を復活されてそのまま使われたわけですけども、一九四五年以降の戦後帝国主義、あるいは一九五八年の転換以来の転換戦後帝国主義というものをリアルに考えてみると、いわゆる自立か従属かという低水準の論議にいつまでも低迷してるわけにはゆかないんじゃないか。民族的従属ではないと

いうことは勿論はっきりしているけれども、その帝国主義的自立というものが、帝国主義者の延命と自己維持のための世界的同盟というものと、いったいどういう関係にあるのかということが積極的にはっきりされなければいけない。

さらぎ(共産同) 六〇年ブント時代に原則的規定をおこなったということです。構造改革派の思考は現象変化に敏感で、すぐ本質や原則を見失ってぐらぐらする。天女の羽衣のように、ヒラヒラ路線がブレ変っているようではない。

いいだ(共労党) はいはいはいはい、それは結構ですね、はい。(笑い)六〇年ブントをどう乗り越えるという課題がどこにあるかというのを私が設定するような形になって恐縮だけど……さらぎ(共産同) 闘わない人へ乗る超える権利も力もない。乗り超えた現在われわれは、世界同時革命の物質的な基礎を、帝国主義に包囲された労働者国家を含んだところの帝国主義の諸矛盾として把握、ここに三ブロックの同時的な矛盾を誘発する基本的物質的な基礎があるというふうに分析しているわけですね。帝国主義諸列強は反革命連合を結んでいます。しかし反革命連合が永久不変のものだと思ったら大間違いで、諸列強は反革命同盟内のヘゲモニー争いを通して、自己の利害を貫徹しており対立を強めておる……

いいだ(共労党) 正直云って最近でも、日米の帝国主義的矛盾の激化からアスパック、アスパックとおっしゃってたような印象を、私としては持っていますけどね。それはまあいいとして、第一次ブントの問題点だけに限って続けますけれども、例えばその不均等発展が、戦後帝国主義あるいは戦後世界の歴史的条件下では、何故に世界帝国主義戦争をもたらさないのかというこ

ともですね、不均等発展ということを経レーニン帝国主義論的に云うだけでは解明出来ないだろうと思うんですね。三〇年代と七〇年代と、世界戦争ではなく世界通貨体制の崩壊として、危機が孕まされて来ているわけですからね。

そういうところと関連して、例えば日共の二段階革命論というものも、単にですね、戦前の反絶対主義の二段階革命論の克服、戦後に於ける反米帝占領制度の二段階革命論の克服ということだけで、果して現在の日共の二段階革命論、あるいは全体的にスターリン主義の二段階革命論を克服出来るかという点、私はそれでは不十分であると思う。

やはりそれは「反帝・反独占」と云われている二段階革命論であって、つまり反独占の民主主義的な諸要求と諸闘争というものを、民主主義革命段階という形で革命段階化することによって、日共の綱領は成り立っておる。それはある意味ではだから、反絶対主義あるいは反米帝ということに局限されない、現在の国家独占資本主義というものに対する現代革命的なアプローチというものを、「反帝・反独占」的な二段階革命論として歪曲している、という点にまさに問題があるわけだ。それに対して、現代世界論、現代資本主義論を欠落させたアプローチをしたって、克服出来るわけがない。

さらぎ(共産同) 日本の国家権力を誰が握っているかという本質規定ですよ。明治維新との対比というのはその一つの例証であってね。いいださんは一番よく知っているでしょう。基本的に二段階戦略だから、現象変化にズルズル引きずられて、日共綱領が修正されるのですよ。そこを見なくちゃ。

いいだ(共労党) 私が云いたいのは、アクチュアルな問題に照らし見ると、レーニン主義の復活、あるいはトロツキー主義の復権ということだけでですね、現代帝国主義と現代世界革命の根本問題を解けるかどうかということについて疑問があつて——もっと積極的に云えば解けないであろうということなんです。

ですから私たち労働者党の固有の戦略的原点というのは、少なくとも一九一七年以降の世界史的過渡期、さらにもっと引き寄せて云えば一九五八年の世界史的転換以後のこの現局面に於いて、ベトナム戦争、ベトナム革命の発展というものを媒介にしながら、次第に先進国にまで革命的危機が波及しつつある、その中で、現代に於けるマルクス・レーニン主義というものはトータルにいかなるものであるかということ、世界革命戦略として解かなければならぬということです。スターリン主義の神話の崩壊は明らかだが、ある意味では、トロツキー主義、毛沢東思想というもの、スターリン主義——国社会主義によって欠落させられたその全体化というものを、擬似的にやり得ているに過ぎないかと思うんです。

第四点として感じた問題は、鈴木さんから出された階級的主体の問題なんです。私たちは現在のベトナム革命というものがいかなる国際的主体を突き出しているか、ベトナム革命が世界的な波及性というものを何故に持ち得るのか、その波及性の中で先進国の内部で現在黒人と学生が決起をしておる、フランス五月のプロレタリアートの決起が見られた、それは世界革命の主体的な配置から云うとどのように位置づけることが出来るのか——全体的にそういう新しいプロレタリア国際主義による階級形成の問題に直面してらるだろうと思うんですね。世界史的な普遍的階級

としてのプロレタリアートの形成が、この国家独占資本主義的統合から脱却して、どのようにして可能になるか、ということですね。

日本の最近に於ける実践過程の中でも、すでに反戦青年委員会とか全共闘とかベ平連というような、自立をした戦闘部隊が突きつけている階級の主体の問題がありますね。それは単に客観的に戦後世界の転換の開始ということの規定するだけでは足りないのであって、それがまさに行動としてあるいは主体形成として、戦後型歴史ブロックを総体的に超える新しい主体的質を突き出しつつある。それをもっと目的意識的に主体形成論・組織論としてわれわれが集約するならば、世界的・日本的にどうなるのかという問題を解かなきゃならんだろう。それを解く時に、現在の波及の境界からいうと、プロレタリアートが例えばフランスの五月で示したようなある種の再覚醒のプロセスという問題があると思うんですね。つまりそこでは現代資本主義というものが、プロレタリアートを体制内化するようなまさに現代的なブルジョア・ヘゲモニーと新しい支配・管理メカニズムを持っておって、そのプロレタリアートを包摂する形式がまさに大衆民主主義であり国民民主主義であるということが示されている。そういった形式による包摂がまずあって、それを、戦後型歴史ブロックの崩壊過程の中で、ベトナムに触発されながら突き破る新しい質のプロレタリアートの階級主体の再形成という問題が現に提出されている。私が今そのことを云っているのは、階級主体の再形成の問題というのは、ベトナム・黒人・学生そしてプロレタリアートという脈絡で考えて行くと、現代資本主義を相手取る現代プロレタリア革命というものの質とですね、根本的な係わり合いがあるんだと思うからです。

私の意見では実はそこも単にレーニンの組織論の復活・復権という形だけでは恐らくは解けないであろうと考えるわけです。つまり全面的に、マルクス・レーニン主義の現代的発展が必要なわけですね。

「現代世界革命派」としてのプロログを、以上で終わります。

## 第二章 世界共産主義革命のために

小長井 先程の討論の中で反日共系——もっと正確に云えば反スターリン主義と云わなければならぬ党派もあるいはあるかと思いますが——そういう運動が従来の日共の運動の中から亀裂していった。その日共からの訣別の中で新しい運動なり党創成の闘いといったものが起されて来ているということですが、そこで各党派の原点から現在の到達点に向けての展開の様相を出して頂いた中で、各党派の個性とその違いがかなり明確に出されて来たんじゃないか。

つまり、さらざさんから、第一次ブントが積極的に突き出したいわゆる戦略・戦術の問題を依然として積極的に継承して、この現代社会の中に革命の問題を突き出してゆくということが展開されたと思うんです。

それから鈴木さんの方からは単に帝国主義の分析から革命の理論を創り出してゆくのではなしに、その中で革命の担い手としての日本のプロレタリアートというものをどう把み創ってゆくかということが出ておったわけです。

で、これに対して本多さんは、それらの他党派の場合には、スターリン主義の問題が欠落しているんだという指摘がなされたわけです。しかし、それについては本多氏の方から、一体スターリン主義の問題が欠落しておるといふことはどういうことを意味しているのか、それが革命的な

党派としての根本的な性格であるというように問うとすれば、どの点を問うのか、ということがやはり明確に出されなければならぬんじゃないかと思うんです。

それから、そういう意味で本多批判というものをさらざさんの方で受けとめるとすれば、スターリン主義の問題というものが、単に革命戦略をめぐる問題にとどまるのか、あるいは一枚岩の党組織論というそういった把え方でもってスターリン主義の問題を把えることで充分なのかどうか、という問に対してやはり明確に答えられるべきではないかと思うのです。

それから鈴木さんは、毛沢東主義ということ云われるわけですけど、日共の運動の中で四全協なりあるいは五全協なりで、権力を獲得してゆく段階での毛沢東の戦略戦術が日本に無媒介に持ち込まれた。そのために日本共産党の運動に非常な混乱と歪曲とそれから弊害というものを出していく。だから私もはそれについて、まあ清算という言葉を使うと語弊があると思いますけれど、すでに批判済みのものをまた新しく持ち込むんじゃないかという疑問と、それからここで云われているところの毛沢東主義なるものは、たとえば毛沢東の『持久戦論』とかあるいは『自由主義に反対する』とかというような、権力獲得過程での戦略戦術の問題として出された、そういう意味での毛沢東の思想を云っておられるのか、それとも先程も出たような文化大革命という現代の中国の状況に対する問題として出されておられるのか、一体そこに云われている毛沢東主義というものは何なのか、という問題が出て来る。

一方、いいだ・もも氏の場合には、反スターリン主義ということが先程の展開の中では全く語られない。しかも最後に出された問題をこちらで受けとめるならば、党内反対派として全党の状



況の中で閉塞してしまつた。その中から自然に押し出されて追ん出たというような形でしか日共を把えられなかったのか、そういった問題が出ている。このようにして、反スターリン主義の問題は、それぞれの党派に一定の問題を突き出したんじゃないかと思うんです。やはり日共と違う原点の問題であるし、そこから現在到達している地点への展開の問題であるし、これからの向うべき展望の問題としても、やはり反スターリン主義の問題を主体的にどう受止めるかという問題を、それぞれがここではつきり語るべきではないか。

やはり本多さんから話して頂かなければなりませんね。

一 「反帝・反スタ」世界戦略とは？

本多(中核派) 先程われわれが日本共産党からなぜ出たのか、それから日本共産党から独立した革命運動を進めてゆくということがなぜ可能になったのかという問題は、戦後日本革命に於ける日本共産党の誤謬がひとり日共的な問題ではなしに、一国社会主義理論と、それに基づく平和共存政策、あるいは二段階戦略といった公認の国際共産主義運動のスターリン主義的な歪みに基づいている、その日本的な現われであるということを経極的に把握するところから開始された、ということを示し上げたわけですが、その上に立ってさらに、現在の世界についてわれわれがどういう考え方をもっているのかということについて少し意見を述べたいと思います。

大まかに云うと今日の国際情勢の特徴的な点は、一つは帝国主義の戦後世界体制が根底的に動揺しつつあるということだと思ひます。

それから二番目の問題としては、このような帝国主義の戦後世界体制の動揺は、直接的には当然これに対立しているはずの体制の側の進撃を意味するはずであるわけですが、にもかかわらず帝国主義に体制的に対立していると自称しているところの陣営、われわれの規定によればスターリニスト陣営の内部では、この帝国主義の危機に対して、革命運動の前進という形をもつて対応しているのではなしに、逆に、それに対する一国社会主義的な対応をめぐって、破産と分裂が進行している。そして資本主義国の内部に於いてはかつてない停滞と無力化という現象が起っている。それから第三の特徴としては、そういう状況の中で国際階級闘争の新しい胎動が起っている。特に特徴的な点は日本、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、あるいは、北ヨーロッパという、いわゆる先進資本主義国の内部に於ける階級闘争の激化という形をとつて現われてきているということではないかと思うんです。しかもここで特徴的な点は、社会民主主義とかスターリン主義とかという、従来の労働者運動の公的指導部とは違った次元でのヘゲモニーの胎動、という形をとつて事態が進行していることでしょう。

で、この三つの事柄をわれわれとしてはやはり統一的に把えてゆく必要があるんじゃないかと考えているわけです。

この三つの事柄が統一してわれわれに突きつけているのは何かというと、一九四四年から四九年にかけて世界的に形成されたところの戦後世界体制と云われるものが、基本的に動揺し始めているということを示すのではないか。したがってわれわれとしては、今動揺しつつある世界体制

が本質的にいかなる性格を持ったものなのか、世界史的にいかなる性質を持ったものなのかという問題を逆規定することが必要で、そのことが同時に今日に於ける危機の現われ方、その分析の方法を示すことになると思うんです。そうしてみますと、一九一七年のロシア革命によって始まった時代、より具体的に云えばこの一七年のロシア革命を突破口として開始されたところの帝国主義から社会主義に向っての世界史的な過渡期の時代が、現代である。こういうふうな見方は基本的に見ている。

しかしながらこの帝国主義から社会主義に向っての世界史的な過渡期が、現在戦後世界体制Ⅱ「帝国主義とスターリン主義の平和共存形態」という歪曲した形態をとって現象しているのですが、それはさらに具体的には、一方では過渡期の社会たるソ連圏、あるいはその変容された拡大たる東欧や中国という形で、社会主義に向っての過渡期を官僚制的に歪曲するという形をとって現われるし、もう一方では先進帝国主義諸国内部に於ける労働者階級の運動を、二段階戦略であるとか人民戦線戦術であるとかそういういたものをバネにして歪めてしまふ、という形をとって現われてくる。そのことが同時に帝国主義の歴史にとって一定の意味を持ったということをおわれわれとしては押えなければいけないんじゃないか。

つまり、第一次世界大戦のあと一まず危機を脱却した国際帝国主義は、二四年のドイツ革命の敗北とドイツの復興によって収拾された後、いわゆる相対的安定期というものを迎えるわけですが、にもかかわらずその持っている世界編成上の矛盾からそれが二九年恐慌として爆発する。この二九年恐慌とそれに基づく世界経済のブロック化ということを前提条件化にして、各国に

於ける階級闘争の激化、したがって革命か反革命かということが、三十年代に於いてドイツ、フランス、スペインその他ヨーロッパ諸国に於いては激発するのですが、先程云った国際共産運動の内部の問題に規定されて、帝国主義の反革命の勝利という形をとってこの事態は一まず収拾した。

しかし、帝国主義は革命を鎮圧して反革命の勝利という形をとって延命したにもかかわらず、その矛盾を帝国主義戦争として爆発させる。この帝国主義戦争の中にソ連圏も暴力的に包摂してゆくという形をとって第二次世界大戦は展開されるといふことになるわけです。そして第二次世界大戦のヤルタ協定の戦後処理の問題をめぐって、今日の世界体制の基本的な構造というのが位置づけられたのではないか。具体的に云えば第二次世界大戦の規定ということが問題になります。スターリン主義者の公的な理論では、第二次世界大戦は民主主義陣営とファシスト陣営の戦争であったというふうな規定されているわけです。その規定が基礎にあって初めてヤルタ協定というもの、あるいは戦後体制というものが可能になってくるわけですが、我々の見るところではそうではなしに、二九年恐慌に基づく帝国主義の危機が世界戦争として爆発して、これに対して平和共存政策をもってその危機から脱却せんとした、ソ連スターリン主義をも暴力的に包摂する過程として、第二次世界大戦というものは展開された、というふうに見なければならぬ。

したがって、第二次世界大戦の終結を迎え撃つ国際プロレタリアートの基本的立場は、当然「帝国主義戦争を内乱へ」——世界戦後革命という形をとって本質的に提起されなければならない

かったわけです。事実、戦争の終結の問題をめぐって、ヨーロッパに於いてもアメリカに於いても日本に於いても、激しい階級的な動揺というものを歴史は経験したわけですが、これもかわらずこれが戦後革命の激発という形をとって生じなかった。これは一体どこに問題があったのかと云えば、基本的には、アメリカ帝国主義とイギリス帝国主義とソ連の三者の間で、ヤルタ協定という形をとって戦後世界の形成についての基本的な青写真が形成されて、ほぼそれに基づいて戦後世界が形成されたということに基づいている。具体的に云えば、ドイツの半分と東ヨーロッパ諸国をソ連圏のもとに包摂する、あるいはソ連の緩衝地帯にするということを代償にして、欧米、日本などに於ける戦後革命の激発を、国際共産主義の名に於いて押えつけてしまった——ヤルタ協定の本質を僕らこう考えているわけです。つまり、第二次世界大戦の戦後の特殊性に規定されたところの帝国主義的戦後処理に対して、スターリン主義者が東欧の分割を代償にして承認を与えたものだ、というふうなヤルタ協定というのは見るべきではないか。その上に成立しているのが今日のアメリカ帝国主義を中心とする体制、すなわち、ドル・ポンド国際通貨体制と、いわゆる集団安全保障体制を両軸とする帝国主義の戦後世界体制である、と規定することが出来るんじゃないか。

したがって、帝国主義は帝国主義としての歴史的特質に踏まえて規定されるわけですが、その延命の条件、あるいは延命の具体的な形態は、同時にこの帝国主義を打倒してゆくべき運動の内部に発生している問題と、切り離して考えることは出来ない。つまり、戦後世界の成立というものをわれわれは客観主義的に把握することは出来ないわけで、むしろ革命を通して止揚されるべき

対象が、スターリン主義の協力をも得てこういう形をとって生き延びているんだ。しかもヤルタ以後の世界史の過程の中で、平和共存政策であるとか、あるいは人民戦線戦術の戦後の現われであるとか、二段階戦術とか、さまざまな形態をとって、この帝国主義を打倒してゆくべきプロレタリアートの運動を、いわばスターリン主義が内部からチェックすると、まあそういう形で行しているんじゃないか。つまり変革対象たる帝国主義の延命の具体的な問題は、同時に変革の主体たるプロレタリアートの内部に於けるスターリン主義の革命的な克服という問題と、切り離して考えることは出来ないんじゃないかならうか、と僕は考えているわけです。そう考えてみると、二九年恐慌以後の帝国主義、その戦後的な形態と云われるものの特徴的な点は、帝国主義が世界編成あるいは世界体制の編成という問題をめぐって、絶えず動揺と崩壊の条件をつくり出して来ていること、であって、世界編成という形をとって危機を乗り切り、世界編成の動揺という形をとってその危機を明らかにしてくるという現われ方をしてる。ですから、いいだ・ももさんの指摘の答になるかならないか、まあそこは検討して欲しいと思いますが、やはり今日の段階ではアメリカ帝国主義を中心とする帝国主義世界編成——それは具体的にはドル・ポンド国際通貨体制と、いわゆる集団安全保障体制というこの両軸を中心にして形成されているわけですが、これも——これがそのドル危機を一方の軸にし、その基礎の上に立って集団安全保障体制の動揺と再編成を続けている状態というのは、今日的なタイプをとった帝国主義の危機の現われ方を示すものではないか。

だから、将来する問題として、二九年恐慌型の動揺が再度戦後世界編成の上に発生するのか、

しないのかという問題については、僕らも少し慎重に検討した後で結論を下したいと思つていますが、しかし本質的に云つて今日の帝国主義は、二九年恐慌によって世界的に刻印づけられた世界経済のブロック的解体を、いわゆるドル・ポンド体制という形をとつて一まず擬制的にその危機を回避して来たものに過ぎない。したがつてドル・ポンド国際通貨体制の動揺という問題は、同時に三十年に歴史的に規定づけられている帝国主義の危機の問題を、大きく我々の前に登場せしめる、直面せしめることになるんじゃないか。ですから、われわれ帝国主義を打倒してゆくべき側の問題としていうと、世界編成の動揺という形をとつて帝国主義の危機は迫つて来ているし、同時にこれを変革すべき運動の側では、永きに涉つて国際共産主義の名を潜称して来たスターリン主義の動揺という形をとつて、その対極的な擁護物も動揺しつつあるという状態の中では、明白にこの帝国主義を倒してゆくということと、この帝国主義を倒してゆく運動の内部に於いて発生した、この内側からの変質という問題を打倒してゆくという闘いが、いわば「一個二重の闘い」として展開されなければならない、ということに鋭くわれわれに突きつけることになつてゐるんじゃないか——大まかに云えばこのように考へてゐるということですよ。

清水 今お聞きしましたスターリン主義の性格ですが、若干の外的必要条件を並べられたようなふうに聞いたんです。と申しますのは、例えば平和共存、二段階革命という戦後スターリニストたちの出した問題、それから帝国主義の危機に対してスターリン主義者たちは一国社会主義という形でしか対応出来ずにそれ自身が又動揺している。それから三番目が先進資本主義国の労働者階級の激動期に対して何ら対応が出来ない。まあ、おっしゃることはたしかにそうなんですけれど、

スターリン主義というのは何であるか、そしてなぜそれに対して攻撃を加えるのかという点については、まだ若干お聞きしなければならぬことがあると思ふんです。と申しますのは、一七年の革命後、つまり帝国主義から社会主義に至る過渡期の中にわれわれ自身が生きてゐる、その状態の中でいわゆるスターリニストたちが革命の諸要素を腐敗させていったんだ、と云われたわけなんです。肝腎の内的な問題については、「腐敗」という言葉でボンとそこんところを云われただけなんです。外的な要件はたしかにおっしゃる通りだと思ふんですが。

本多(中核派) 内的というと？

さらぎ(共産同) 腐敗の根源ね。思想的なものとか、理念的なものとか。

清水 例えはこういふ話が聞けるのかと思つていたんですよ。スターリン主義者でないスターリンそのものが、いわゆる二〇年代後半から三〇年代にかけて何をやったかという、ソヴェトを粉砕したんだとかね……

本多(中核派) そういう具体例を一つ一つ挙げると云えばまあ……

清水 ソヴェトを粉砕したんだということですよ、つまりソヴェトを強固な国家に仕立ててしまふわけでしょう。本来は上意下達の機関ではないのかかわらず、という話しに展開して行くのかと思つて聞いていたんですよ。

本多(中核派) いや、あのね、僕はこう考へてゐるんですよ。社会主義を一国に実現出来るという考へ、あるいはそのイデオロギーに規定された運動の歪曲に、やはり国際共産主義運動の歪みの根源はあると思ふんです。もともとレーニンの理解するところに従えば、ロシア革命は、

一國に於いて権力を樹立することは出来るが、社会主義を完成するということは一國的には出来ない。それは、ドイツ革命を先駆とするヨーロッパ革命の勝利のうち、ロシア自らの抱えている困難を解決する条件を世界的に獲得して行くわけです。スターリンも含めて、革命当初のロシアのポリシェヴィキはすべてこう考えていたし、僕の理解するところでは、その考え方が共産主義者として当然の原則的立場である。問題は、それにもかかわらずヨーロッパ革命が敗北し遅れているという条件のもとで、しかも、ロシアがそういう中で帝国主義に包囲され、経済的にも極めて遅れた条件の中で闘っていかねばならないという状況の中では、ネップ政策を採用しなければならなかったのですが、レーニンが云っているように、我々は世界革命の勝利なしに社会主義を樹立することは出来ない、しかしながら、ヨーロッパに於ける来るべきプロレタリアートの勝利の日まで、我々は這いつくばっても、泥まみれになっても、したがって、社会主義に向って一歩前進したとは云えないような状況の中にあっても、なほかつこのプロレタリアートの国家を維持しなければいけない、という決意として、新経済政策というのは採用されていると思ふです。

そういう状況の中でロシアの困難が存在していたわけですけれど、それをスターリンは、そういうソ連の抱えている世界的な規定性を剥ぎ取ってしまつて、帝国主義によって包囲されている条件を、いわばロシアに於ける社会主義の勝利のために克服すべき対象とみなすではなしに、それが前提化されてしまう——対象が前提化されてしまうというところを通して社会主義の建設が提起される。したがって出来ないものは出来ないわけだから、社会主義でないものが社会主義の名によって合理化されるわけです。

小長井 しかし、やはりそういったように、ソ連という一つの国家が、スターリン主義官僚によって歪曲され変質されていくということであつてみれば、それはそのロシアのポリシェヴィキがですね、一体どうしてそういうふうになったのかという主体的な、変革対象の問題というよりはむしろ変革主体の問題として根源的に把握すべきではないかというように……

本多(中核派) ロシア・ポリシェヴィキが抱えていた歴史的に困難な条件は、いくらでも僕らはあげることが出来る。しかし、にもかかわらず、そこで一国社会主義という理論をポリシェヴィキが共産主義の多数派の意見として採用してしまう。そのことに基ついて政策が展開されるといふ主体の側の変容が、非常に大きな歴史の変容を創り出してくるということになるんじゃないか。だから別の面で云うとね、僕はこう考えているんですよ。つまり、国際共産主義運動の内部に生じた一国社会主義の理論というものによって、これだけ歴史が歪んでしまうということは、逆に云えば我々が歴史を意識的に創れる時代に入ったんだ、ということの別な表現でもある。二〇世紀はそういう意味では、僕らにとってただ単に在る世界ではなしに、僕らがそこに参加し、そこにいることによって具体的に歴史が変っていく時代であるわけです。だから、スターリン主義に代表される国際共産主義運動の歪みを打ち破るということは、当然この社会主義に向つての新しい世界史の形成ということを同時に意味する、と僕らは考えているんです。

小長井 すると、本多さんの云われる反スターリン主義の問題というのは、そういう、当時のロシアのポリシェヴィキが直面しておつた歴史的社会的条件の問題に、すべてを還元するという

水戸 いや違うんじゃないですか？ 一国社会主義理論を持ったということになったと……小長井 だから、なぜ一国社会主義理論を持ったのかという、主体的な根源というところまで、反スターリン主義の問題は行くのではないかと思うのですが。その点はどうでしょう？

本多(中核派) その点はもっと大きく云うと、条件と変革のプログラムとの関係、云い換えれば、理論と政策の関連だと思ふんです。例えば国際的な条件があるでせう。例えばね、二四年なり二五年に僕がロシアにいたとして、一国社会主義反対と云ったところで国際条件は何にも変らないと思ふんです。何にもということはないかもしれないけれど、まあほとんど変らないというふうに云っていいと思ふんだよね。しかしその変らないところの状態を、変らなければならぬという立場から見続けるのか、この条件を前提的に固定化し、そのもとで「社会主義建設」をやっていくんだと考えるのか、ということはかなり大きな違いが出て来ると思ふ。

いいだ(共労党) 小長井さんから最初に、いいだは先程プロログの中で、反スターリン主義についてはほとんど語らなかつたじゃないかと云われたわけですね。スターリン批判以後の共産主義運動の革新の流れの中で、私たちは党を創り、今過程的に運動している中で、私なりに反スターリン主義を語っているわけなんだけれど、いわゆる「反帝・反スタ」と略称される反帝國主義・反スターリン主義の世界戦略という意味では、確かに私は反スターリン主義を語らなかつたわけね。今の本多さんの発言を聞いておつても、相変らず解らないですね、世界戦略的反スターリン主義が。さらには、もっと積極的に云えばそれに反対であるということがあるわけで、その

ことをちょっと語りたと思ふですよ。……三点ばかり述べたいんですが——

本多さんの云われている中で、私たちが基本的に同意出来るポイントは勿論たくさんあるわけで、一九一七年のロシア革命以来の、資本主義から社会主義への世界的過渡期を現代あるいは現代世界として規定すること、これは全く賛成なんです、むしろ私たちの持論なんだな。それから一国社会主義理論というものはまちがっておつて、一国社会主義建設は出来ないしあり得ないこと、これも賛成だ。それから平和共存、二段階革命といったものは世界戦略たり得ない。これも賛成である。だからと云って「反帝・反スタ」世界戦略ってことになるか、というと全然そうはなりませんな、これが。(笑)でさらに……

本多(中核派) 全く簡単だけど注釈的質問だけ一つさせて貰つて……。一言で答えて下さい。その二番目の結論はいいださん何時からお持ちなんですか？

いいだ(共労党) 二番目ってのは？

本多(中核派) 一国で社会主義は実現出来ないという……

いいだ(共労党) それは私個人としては戦争中からそう疑つてましたよ。

本多(中核派) へえー!?

いいだ(共労党) 私個人としてはですよ。戦争中に『裏切られた革命』を読んで以来ですよ。

さらぎ(共産同) 党として確立された路線はどうかということですよ、結局はね。

いいだ(共労党) はい。そうですよ。

帝國主義段階でも、いわゆる現代世界というふうの規定されているこの局面では、帝國主義の

問題は世界編成の問題として語らなければならないし、われわれは当面国際通貨体制の崩壊的な危機という事に向いつつあるかもしれない、ということにも賛成なんです。で、以上のことに賛成しながら基本的に「反スタ」戦略は解らない。本多さんたちが、私らも同意見なそういう自明とも云える諸命題を、一体どのように総括しているか解らないんですね、結局は。解らない理由を三つばかりと、これについてのこちらの積極的な見解を述べたいと思います。

一つはですね。現代世界というものが当然スターリン主義的に歪曲をされておる。であるから「反帝・反スタ」であるということに、本多さんの場合短絡的になるんだけれど、例えばですねロシア革命後の西ヨーロッパ革命の敗北と遅延ということ自体をもう一度取り返した仮設を立てればまた話は別ですけれど、その敗北と遅延を歴史的条件とする状況のもとにあっては、スターリン主義的な歪曲をかりに取り去ってみてもですね、いわゆる過渡期プロレタリア国家が帝國主義的包囲の中で生き伸びなければならぬ、という問題は依然として生じていたわけですね。そうであるならば、単にレーニンの帝國主義段階論の古典的諸名題の無媒介的適用だけでは解けない問題が、すでにそこに出ている。ましてや、私はスターリンの一国社会主義路線はまちがっていたと確信するが、それじゃ当時のトロツキーの西ヨーロッパ革命に対する主観的展望だけで充分であったかどうか、という問題も実はすでに生じていたわけで、私がさっき云った、純粹レーニン主義への復帰とトロツキー主義の復権ということだけで、その現代世界的問題が解けたかどうかということ、スターリン主義に対する断罪と並んで現在やっぱりトータルに把え返さなければならぬ。つまり、スターリン主義的に歪曲をされてる共産主義運動、あるいは歪曲され

疎外された労働者国家をいかに回復するか、という問題意識には私は賛成であるけれども、その歪曲を取去ってもですね、現代世界をそう規定する限りでは、古典的な帝國主義段階論ではない歴史的過渡期に全体的には入っているわけですね。労働者国家を、国家官僚制資本主義なり赤色帝國主義なりに変質したとみなさない限りに於いて、ですね。

「労働者国家の擁護」を唱えたトロツキーにだって、この現代世界的問題はつきまどったんですよ。現代世界は、過渡期プロレタリア国家がスターリン主義的に歪曲され疎外されているから複雑にはなっているが、いずれにせよ、帝國主義がプロレタリア国家と過渡的に共存しており、それ故にまた自己維持・延命の形態としての、新資本主義Ⅱ国家独占資本主義体制をとっているわけですからね。

本多(中核派) 二四年はいいとして、戦後はどういうことに?……  
いいだ(共労党) ずっとやります。はい、それが第一の問題です。

それから第二の問題は三〇年代のことです。本多さんも云われているように、いわゆる戦後資本主義の中間的安定期があって、それが二九年恐慌によって爆発をして動揺期に入って、革命的なチャンスというものがもう一度ドイツ中心に生れて来た。それはその通りだと思っんですが、それをめぐる本多さんの問題提起の中にですね、私は、理論的にかなり不確定であって戦略・戦術的にはやっぱり誤りに導くような傾向があると思うんですね。というのはどういうことかと云うと、その革命的危機なるものは明らかに帝國主義戦争のもたらした戦後危機ではなくて、本多さん自身が二九年恐慌を契機にするといっているように、ポンド・ドル体制の危機といえますか、

再建金本位体制の崩壊といえますか、そういう世界的モメントからもたらされた革命的な危機だろうと思うんですね。本多さんは単純に二九年恐慌というようにおっしゃっているけれども、二九年恐慌そのものは、云うまでもなくアメリカの大暴落を契機にしているのであるから、第一次世界大戦に帰結をしいった、いわばヨーロッパ内部に於けるイギリス、ドイツの両極的な対抗というものを軸にする旧世界的な危機が、帝国主義世界戦争に、東方問題IIセルビア問題を中心に爆発してゆくという構造とはすてにはっきり違ってきている。世界危機と世界革命のパターナがすてに根本的に違うんですね。

つまり簡単に云えば、帝国主義世界戦争ならびにそれがもたらす戦後危機ではないし、それから……

本多(中核派) むしろ、じゃないということに積極性があるわけですよ、三〇年代の危機は。いいだ(共労党) その通り、その通り。(笑い)それから旧世界内部に於ける、いわば資本主義・帝国主義内部の経済的危機から直接に生ずるものでもないし、さらに云えば世界的な貨幣恐慌から直接に生ずるものでもない。そういうものだと思うんですね。

さらぎ(共産同) 貨幣恐慌は帰結なんですね。

いいだ(共労党) だから、そのあとの問題で本多さんは、第二次世界大戦後は、ある意味では「帝国主義戦争を内乱へ」という古典レーニン主義の世界戦略が、擬似的な妥当性を持つから——私に云わせればですよ——戦後はどうだ、ということを出されるんだらうけれど、三〇年代で仮りに、ドイツ革命の敗北を(歴史は仮定を許さないけれど、理論的には仮定が可能ですから)

導かないようなコミンテルンの指導がどうあるべきであった、という問題を出せば、そこには、単に世界戦争に帰結するような帝国主義の経済的諸矛盾の爆発、ということに立脚する世界戦略の歴史的類推では、すてに解けない問題が三〇年代には生じておる。それに対する反ファシヨ人民戦線という対応が戦略的には正しくなかったという問題はその通りだとしてもですね……

本多(中核派) その通りですか、違うんですね、どっちなんですか？

いいだ(共労党) 私はその通りだと思います。

本多(中核派) つまり人民戦線戦術はまちがっているという考え方ですね？

いいだ(共労党) 基本的にはですね。三〇年代の世界危機に全面的に対応する世界戦略としては、という意味ですよ。

本多(中核派) 三三年に於けるドイツのプロレタリアートのファシストに対する敗北は何に起因していると考えますか？

いいだ(共労党) アメリカの二九年大恐慌を契機にして三一年のポンド危機に至った、再建金本位体制の崩壊ということから革命的危機が来るんだ、ということの戦略的な予見、そこからなされる革命配置を、スターリンも出来なかったし、ある意味ではトロツキーも確定し得ない。そこから、コミンテルンの指導というものが、ドイツ革命の敗北をもたらさざるを得ないような世界革命戦略としての欠陥を持っていたと私は思う。

本多(中核派) やっぱりドイツ共産党と、それを指導したコミンテルンの社会ファシズム論に代表される戦術問題として考えなければいけませんよ？



いいだ(共労党) それは無論含まれていますよ。今私が云っているのは世界革命戦略としてここに……という世界党の世界的戦略指導の問題ですよ。ですから論争はこれからどうぞして頂きたいが、派生的な細かいことを突っついてはしょうがない。

それから第三点で云えばですね、これは現在私たちが当面する問題です。現在つまりベトナム危機とドル危機の複合的發展の中で、私たちは迫り来る新しい世界危機に対応する戦略的配置というものに向って、活動を開始していると思うんですが、その中の例えばベトナム危機の問題一つとってみても、これを帝国主義の植民地侵略戦争とか植民地獲得戦争という形で捉えられないということは勿論だと思ふんだな。アメリカ帝国主義の側から云えば侵略戦争であるけど、世界的配置からみれば明らかに、革命戦争に対する反革命的な防衛戦争としての意味をもっているだろうと思ふんですね。そうすると、そのベトナム危機が私たちに孕ましている問題、つまり日本帝国主義の内部ではベトナム反戦闘争という形で実践的に突き出されている問題というものはですね、いわゆる帝国主義戦争に帰結した段階での、あるいは局面での、レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」のモジリで、いわば革命的敗北主義とか云ってみても、それは革命的激語にはなり得ても、(笑)戦略的には何も語っていないわけで、内容貧弱な歴史的類推以上のものにはならないであろう——そういうように私は考えるわけです。大きく云って一九一七年以降を、現代世界として、世界史的過渡期として捉えるならば、そこでは例えば帝国主義の不均等發展の法則というのは作用しているわけであるけれども、その不均等發展の絶対的法則の作用自体が、帝国主義世界戦争に帰結し得ないというような戦略的問題をすでに孕んでおる。

それから、ドル危機がそれに複合的に發展をしておって——そのドル危機自体も、もちろんベトナム危機によって加速化されてるわけけれども、根本的にはその内的な固有な原因、つまり戦後世界に於ける資本主義の世界編成から来ているんだと思いますが——そういうドル危機自体もですね、本多さんがその点では正しく云われたように、いわば管理国際通貨体制の危機として現われて来ているわけですね。そうすると、「帝国主義戦争を内乱へ」というふうに世界戦略を立てる場合は、世界戦争に唯一帰結する帝国主義体制の経済的矛盾の爆發(植民地分割闘争としての)ということが大前提となっておるんで、そうでない現在、現代帝国主義の危機が直接に戦争に帰結しないドル・ポンド体制の危機という形で出て来るような、こういう危機の世界的波及に對して、私たちが世界戦略配置をどうやるのかということを考えなきゃいかんと思うんですね。だから私はその点で、三〇年代のドイツ革命はなぜ敗北せざるをえなかったのか、という問題との歴史的類比において、今日の七〇年代の問題を語ったわけです。

それで最終的にまた「反帝・反スタ」世界戦略に戻るわけですが、そこで「一個二重の闘い」というふうに文学的に云われても、どうしてもチンプンカンプンでよく解らないのは、その「反スタ」というのがですね、仮りに過渡期国家が官僚制国家資本主義なり赤色帝国主義になっちゃったんだというところまで押えてしまえば、これはある意味では問題はフラットになってしまっ

て……  
本多(中核派) 赤色帝国主義論の立場に立てば、「反帝・反スタ」なんて必要ないわけですね。いいだ(共労党) ええ、そうでしょ。(笑)つまり一個二重というよりも一個一重みたいな形

で、それなりにあまり論理矛盾なくフラットに解決出来るわけだと思っただけで、ところが一個二重と云う場合、帝國主義というのははっきりと打倒対象としての世界実体を持つてあるわけだけど、「反スタ」のそのスタと云うのは、ソヴェト・ロシアなり人民中国なりの政治権力の問題とか社会体制の問題、そこに於ける経済機構の問題、そこに於ける党の問題、さらには国際共産主義運動の問題、そういうもの全体にそれこそ多層多重に係わるんだらうと(笑い)推察するんですが、そうであるとするときまず解らなくなる。ソヴェト・ロシアや人民中国は勿論、革命キューバも北ベトナムも打倒しようというわけでしょう。キューバ共産党もベトナム労働党も、とにかく総体として反革命、裏切り者の党というわけでしょう。話を小出しにしないでごまかさなければ、そうならざるを得ないのでしょ。そこで、通俗にも現在の反戦闘争の中でよく云われる問題では、例えばベトナム闘争というものを、「反帝・反スタ」の戦略的立場からはどう把握するんだということです。ベトナムに攻め入っているのはアメリカ帝國主義だから「反帝」である、ベトナム革命をさし当り指導しているのは、その規定ではスターリン主義者であるからそれは「反スタ」でなければならぬ。そうすると、いったいベトナム闘争をやるのかやらないのかという、理論的にはヂレンマに陥る。これは漫画的に……

本多(中核派) 正に漫画的ですよ！

いいだ(共労党) いや、「反帝・反スタ」の世界戦略そのものが、現実の闘争の中では漫画的なんだ。キューバ危機の時だってそうでしょ。ケネディも倒さなければならぬし、カストロも倒さなければならぬ。だから実際には、ハムレットの漫画みたいに(笑い)ならざるを得ない。

そう云っちゃ失礼だけど、中核派は実践では先進的にベトナム反戦闘争を展開しているんで、敬意も表するし、統一行動をやっているわけであるから、私流に云えば「現実の運動の一步一步は一ダースの綱領よりも重要だ」というマルクスの言葉を私は信じておるんで、戦闘的左派としては大いに認めるんですが、(笑い)党としての基本をなす世界戦略の方は頂けない。ベトナム闘争なりキューバ闘争なりの実践的一步一步ごとが、やがては世界戦略としての反スターリン主義を、綱領的原点としての自己矛盾から崩壊させるんじゃないか、と考えているわけですね。

本多(中核派) 全く逆ですけどね。(笑い)

いいだ(共労党) その点はだから、これから先のお楽しみで。(笑い)アメリカ帝國主義に反対しながら、一方ベトナム民主共和国の労働党路線なり、あるいは南ベトナム民族解放戦線内部の人民前衛党路線なりを、それ自体をも打倒セン滅対象としながらベトナム闘争に嚙んで行くんだという在り方は、私は実践政治の問題としてもヂレンマを孕んでいるだろうと思うわけです。それだけです。

本多(中核派) それからね、肝腎な問題が一つだけ落っこっちゃっているんだけど。戦後体制の形成過程の問題をどうお考えですか？

さらぎ(共産同) それから、いいださんは三〇年代と同じようにドル・ポンドに危機が来るといわれましたが、それならば前段階決戦になるのか、帝國主義戦争決戦になるのか、体制間戦争になるのかという、その辺の展望がどうなのか。また、共労党が革命をやる気があるのか、主体的に革命条件をどう創ろうとしているのか、ということを積極的に云わないと積極的

な党派の論理にはならない。

(数人一斉に発言)

本多(中核派) 戦後体制……はつきり云うとヤルタの問題について述べられないとね、これは肝腎要めの問題が一つ逃げられてしまっているんじゃないかと……

いいだ(共労党) あのね、戦後の世界編成の問題はこういうことですね……

本多(中核派) しかも戦争中から一国社会主義論に反対する立場にいたという人が……

いいだ(共労党) 疑いですよ。反対なんてそんな立派な徹底した立場なんか全然持っていませんでしたよ、戦争中は。

本多(中核派) そういう考えを持っておられたとすれば、なおさらその問題が出て来ると思うんだがな。

水戸 その漫画的なやつについて、やはりちょっと。これはかなり俗論としても云われているしね。『赤旗』でも叩く格好の材料にしているし……

いいだ(共労党) 私らそれを「反トロ・キャンペーン」ふうに運用したことはないけれども、方々で聞かれるわけですね。

水戸 そうそう、ベトナム戦争の中でベトナムも叩くのかというふうには……

さらぎ(共産同) 代理戦争論ね。革マルが云っている……

水戸 うん、で革マルはある程度——正確には僕云えないけれどもある程度主張している。

本多(中核派) それは後でやりましょう。

僕はいいださんの今の意見はね、肝腎要めのところはほとんど何も述べられていないと思う。

という印象を受けるのは、つまりヤルタの問題を抜かして論ずることが出来るというように考えている、いいださんの論理構造・反論構造の中にすでに答へはあると思う。

いいだ(共労党) それは過渡期国家論で後でやりませんか？ 過渡期国家論は私としても全般的にまだ意見を述べたいことがあるわけですから。

本多(中核派) 過渡期国家ではなくて、戦後の帝国主義——例えばドル・ポンド体制の形成という問題なんだが……

いいださんは、何度も何度もレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」という形の世界戦略では問題は解決しない、解決しないと、何十回も出て来るんですよ。

でも僕は基本的な理念としては、第二次世界大戦後にその論理が貫徹されなければならなかったと思う。第二次世界大戦後の過程に於いてそれが貫徹していないというところに問題を見出し、スターリンが打ち出した「エルベの誓い」のような思想ね……

水戸 戦後とおっしゃるのは戦争直後のことですか？

さらぎ(共産同) 終戦直後、終戦処理だけですね。

本多(中核派) 戦後処理のヤルタ協定の時点のことです。

いいだ(共労党) それでは二点だけ補足しますとね。

一点は——第二次帝国主義戦争直後の問題として、そこでは戦後革命の条件というのは当然あ

ったわけで、帝国主義内部では「帝国主義戦争を内乱へ」という戦略が近似的に妥当するような戦後革命のパターンというものが一つあったと思う。つまり世界戦争そのものがもたらした革命的危機としてある。しかしそれは飽くまでも「近似的」にであって、レーニンの世界戦略の無媒介的適用じゃ解けないんですよ。

今本多さんがお聞きになっているのは、そこに於ける戦後処理みたいなものは、ヤルタに於ける東西分裂がなければ当然成立しないんじゃないかということなんです、当然関連がなければ成立しないんだけど、逆に私が何度も申し上げているのは、そこに於いてスターリン主義的な歪曲を取り去ってもですね、過渡期国家と過渡期国家群というものは現実にあるんだという、そここのところの……

本多(中核派) 客観主義だなあ！

いいだ(共労党) いや、そういう世界構造が客観化されておるんで、現代世界革命の戦略問題というのはそこからしか解けないんじゃないかというのが一つ。

それからもう一つはですね——第二点は、変革主体の問題から云えば、西ヨーロッパ革命ならびに先進国革命の遅滞と遅滞ということが、スターリンの一国社会主義路線、現実的にはソヴェトの一国利益的な外交政策に西ヨーロッパ革命や世界革命を従属させたことの結果であるわけだが、同時にそれがまた、過渡期国家に於けるスターリン主義的歪曲形態に対する正当な解決突破口をなくさせているのだ、というように逆に把え返す必要もあるんじゃないかということなんです。一方では先進国革命の遅延が、久しくソ連を国際的に孤立させて来たのですから。

本多(中核派) では、例えば戦後に於いてフランス共産党やイタリア共産党がとった政策について、どういう批判なり意見なりを持っておられるのか。

先程も構改派を乗り越えなければいけないと云われたけれども、僕は構改派の思想の背後に明らかに、第二次世界大戦の戦後処理に関して、トレーズ\*の云う「フランスのブルジョアの復興」の問題ですよ。こういうた形を共産党の名に於いて宣言しているという問題に……

いいだ(共労党) 戦後に於ける「国民的再建方針」というのはまちがっていますよ、明らかに。それははっきりしているんだ。

本多(中核派) はっきりしていると云うんじゃないくて、そこを積極的に考えなければいけないんじゃないんですか？

いいだ(共労党) 「国民的再建方針」はまちがっているんだけど……

どうも噛み合わないんだけど、私が疑問を持ちかつお聞きしているのは、あるいは私自身も積極的にある程度展開しているつもりなんだけれども、そういう過渡期国家に於ける歪曲形態が、スターリン主義のためであるということだけをおっしゃる。だからそうした場合には、スターリン主義はいわば、トロツキーとは逆の意味で歴史の「いけにえの羊」みたいにされているんで、「裏切られ史観」だけで行くと、西ヨーロッパ革命の革命的方向というものを打ち出し得ないでいるこちら側の変革主体の問題が、かえって問題から欠落するのではないかというのが私の質問なんです。客観的政治責任から云えば、戦後革命のチャンスを生かせなかったのは、第四インターだって同罪ですよ。

本多(中核派) しかしそれはちょっとすり換えじゃないかなあ。だって、フランス共産党がブルジョアの復興、国民的合意による復興と云うのには反対だといふふうにあなたは云われたけれど……

いいだ(共労党) だから私が云ったように、その点ははっきりと断罪されなければいかんわけです。

本多(中核派) しかし……

いいだ(共労党) 西ヨーロッパ革命を遅延させたものは何なのかということ。私の反スターリン主義というのはそういう意味なんですよ。

本多さんの話を聞いているとね、一九一七年以来裏切り続けている歴史の造物主としてのスターリン主義というものが鎮座しておいて、それはつまりソヴェト・ロシアの一国社会主義の中に巣喰ってあって、その裏切りによってすべての世界史がマイナスの歴史として決定されて来るということになっている。その時点では自分らは何もなし得なかつたけれども、今七〇年前夜のここでは、そのところについて自分らは変革し得るような力を持ち始めたから、今われわれは初めて歴史を生き始めたんだ、という云い方があったので非常にひっかかるわけなんです。私たちが自身が歴史の主人公として生きなけりゃならんのは勿論のことで、大いに結構なんですが、本多さんの現代史観では、この間の半世紀というものは完全に退却に退却を重ねる悪の歴史であってね、いわば暗黒期の方にどんどん入って行って、しかも、その責任は全部、スターリン主義というものを「いけにえの羊」として歴史の祭壇に捧げればそれで済むような問題なのか、という

ことを私は云っているわけ。

本多(中核派) 「いけにえの羊」というのは道徳的表現だね。だってあなたはフランス共産党のそういう政策は問題だと云うのだから……

いいだ(共労党) 問題というよりまちがっている。だからと云って、抵抗がまちがってたということにもならないし、第二次大戦でも「帝国主義戦争を内乱へ」が全面的に正しかったはずだということにもならない。

本多(中核派) したがってヨーロッパ革命の問題について云えば、フランス共産党、イタリア共産党に示されているそういう政策がいったどこから出て来るのかということについて考えなきゃいけないんです。

逆に云えばそのまちがいを、普遍的な論理として、あの時点に於いてもわれわれは打ち破って行く立場に立たなければいけないし、それが打ち破れないということの中に、僕は逆に云えばこれまでの第四インターに代表される国際的左翼反対派の問題が、同時にあると考えているのですけれど。

いいだ(共労党) 本多さん！ 何度も私なりに答えているつもりなんだけれども、戦術の問題ではなくて世界戦略の問題ですよ。帝国主義戦争にしか唯一帰結し得ないような帝国主義段階に於ける不可避的世界危機の方向ですね、そこから出て来る戦略パターンでは、三〇年代以降の世界革命戦略についての配置というのをコミンテルンも出来なかつたということが根本なんで、その誤りというのは……

(数人一斉に発言。騒然となる)

清水 私ね、訊ねます！ これは状況をさらに鮮明ならしめるために。

本多さんが今、ヤルタ協定以後もう一度あった革命へのチャンスということ云われましたよね。それをもう一回具体的に述べて頂けませんか？ フランスに於ける北部マキ団とか、ずうつと北イタリアを通過してバルカンに至るパルチザン軍というのは武装してましたからね。まあドイツには全然なかったですが。で、それを具体的に述べて頂いて、さらにそれならばいいださんにお訊ねしたいんですけれども——あの時北部マキ団は武器を渡すべきでなかったのか、渡した方が良かったのかまで聞こうと思うんですが。

本多(中核派) 非常に簡単に云わせて貰えば、今の清水さんの聞かれたことをそのまま状況として設定すれば、いいださんは一つの結論を出すことが出来るんじゃないかと思うんですが。

つまりいいださんがさっきから逃げる論理はこうなんですよ。「帝国主義戦争を内乱へ」というパターンだけでは解けない、と繰り返し繰り返し繰り返しているわけです。僕ははっきり云って、現在の世界の危機を把えて行く場合は、ベトナム戦争という形を通過して特殊なタイプの戦後革命という問題がわれわれに提起されているという面があると思う。

いいだ(共労党) いやそれに私は反対なんです。そんなものは反戦Ⅱ革命主義ですよ。それに戦略論として反対だから申し上げたんです。七〇年にもそのことは係わって来るんだ。

本多(中核派) それからもう一つは、帝国主義世界編成の動揺・崩壊という形をとって危機が進行するという問題。先程僕はこちらを主軸にして述べたわけですが——主軸は前者という考え

方は変らないわけですが——敢えて云えば、その中に後者の問題を包摂して現在のアメリカの危機は進行しているということなんです。だから僕はそういう二つの軸から見ているんで、「帝国主義戦争を内乱へ」というパターンだけで三〇年以後の問題が解決出来ると云っているんじゃない、ということはおのずから明らかだと思うんです。これは公平に考えて貰えば解ると思う。

その上に立っての話だけれど、第二次大戦直後はやはり、「帝国主義戦争を内乱へ」という問題が実践的に提起されていたのではないかと思う。むしろ、いいださんのようなことを云う人がたくさんいてね(笑い)——いいださんのような、つまりスターリンとかトレーズとかトリアッチですよ——こういう輩がたくさんいることによってプロレタリアートの武装が解除されてしまったところに問題があるんじゃないか。

もっと率直に云えば、マキやなんかドイツ帝国主義を打倒して行く過程の中では、権力がプロレタリアート人民の側に事実上握られていたわけです。その中で今いいださんが批判されているところの、フランス共産党の「フランスのブルジョアの復興」という綱領が持ち込まれて、武器を全部返したり捨てたり、そういう形をとってドゴールを迎え入れたわけでしょう。こういうやり方を僕らは革命運動のスターリン主義的な歪みとして指摘しているんですよ。

だからスターリン主義的という言葉がどうしても気に喰わなければね、僕らは別に言霊主義者じゃないからスターリン主義的ということとは捨ててもいいんです。

いいだ(共労党) いやそれはいいよ。スターリン主義的歪みでいいの、今のところは。それはちっとも構わん。

本多(中核派) うん、だからそここの問題は、つまりフランスのブルジョアの復興に反対するということと、トレーズによって持ち込まれて来た「国民的再建」という問題を粉碎してしまふことは、実際上は一個二重の問題ではないかと僕は云っているのですよ。

つまりトレーズが東大の代々木であるわけだから、その時に於いては、ただ残念なことには、全学共闘会議がなかったわけですね。

(本多、いいだ同時に云い合う)

いいだ(共労党) ……戦術の問題を私は問うているんじゃないなくて、「反帝・反スタ」という本多さんたちの世界戦略の問題を問うているわけですからね。

だから他のことはいろいろあるんですよ。たくさんあるけれど、その世界戦略のところでもうなんだと聞いているわけですよ、私はこう思うがどうなんだと。

本多(中核派) いいださんはもっとアクチュアルに問題を出さなきゃいけないと思うんだ。第一次世界大戦がロシア革命として終わって行くというわれわれの実践的見地から云えば、第二次世界大戦はそういう方向がより一層進むものとしてその規定性が現われて来るわけで、中国の革命なんかはむしろもっと押し進めなければならなかったんで、つまり第二次世界大戦はプロレタリアートの革命的勝利の方向に向かって進むものとして受け止めなければならなかった。勿論その結果革命が敗北するのはいいですよ。革命の方向を目指して負けるのは……。しかしそういう方向に進んではいけないというふうに、戦術も戦術も提起されていたわけです。

いいださんはさっきから賛成だと云うんだけれども、敗戦革命のスターリン主義的制圧を総括

する方向に向って、アクチュアルに問題を提起するかたちでは、僕に対して批判を加えてはいないんです。

いいだ(共労党) 決してそうじゃないんだなあ。

清水 聞いておりましたね、いいださんは現実的な諸問題を出されるわけですよ。そこでそれの違いが出て来ると思うんですよ。

本多さんは綱領の問題としてストレートに出して行くわけですね。いいださんはそれは戦術の問題としては賛成だけれども、しかし現実の問題が幾らでもあったらう——それを拒むというか別なモメントを持ったものが。

本多(中核派) 僕が論理的構造としてどうしても納得いかないのはね、まちがいだというわけですよ？ フランス共産党のトレーズに代表されるような行き方は。

水戸 だから要するに、そのまちがいの累積の裏側に何かがあるよ……

本多(中核派) 僕はその限りではその直接性だけがいいと思う。

水戸 それでもういいと云うんですね？ その直接性だけで反スターリン主義という綱領が出て来ていいと云うんですね？

本多(中核派) 勿論背後にあるものがあるけれども、そのまちがいの直接性を規定するという事になったら、あとは、少なくとも反スターリン主義という点でいいださんと僕の間的一致がなかったとしても、戦後あのような帝国主義のドゴールの延命が生じたのは、フランス共産党の問題としてとりあえず総括されなければいけないわけだから、それをそちらの方向に向って進め

ないで……

いいだ(共労党) いや、また賛成なんだよ、これ！(笑い)

賛成だ賛成だと云いながらというふうには本多さんは私に反論するけれども、僕は今のようなおこには何の保留もなしに賛成なんですね。

ただ私の本多さんにさっきから聞いているのは、そのことがあったからといって、なぜ「反帝・反スターリン主義」の世界戦略ということになるんだ、とさっきから何度も聞いているわけ。小長井 それが最初に私の方からも出したことなんで、あれこれの規定や方針のまちがい——たまたまそれはソ連の共産党が大祖国防衛戦争ということをやったとか、フランスの共産党がブルジョア的なフランスの再建ということをやったとかいう、あれこれの方針のまちがいとして出されているのか。そうじゃないと思うんですよ。

もっと思想的な根源から出ているんじゃないか？……

本多(中核派) はっきり云って五八年に於ける全学連の全体としての左傾化というのは、実はこここのところをバネにして動いているんですよ。

いいだ(共労党) それは解つてますよ。だからそのところを出して欲しい。

本多さん、何度も云うけれど、私はさしあたり世界戦略の根本問題だけ問うているんでね、時間がないからね。戦術の問題やなんかだったらそれはいろいろあるんですよ。

世界戦略としてなぜ出しているかということがさっぱり解つて貰えんらしいから、私自身の意見を出しながら聞いているわけよ。

本多(中核派) これは明確に戦略問題として把えるべきですよ。

(以下しばらく、並行したやりとりが続く)

清水 本多さんにさらに明確にして頂きたいのは、先程いいださんも少し触れられたようですが、中国革命その他ですね。中国革命などは、まさに本多さんの云われたスターリン主義的枠組を内的にも外的にも突破しつつ、かつ突破することによって出て来たものだと思うし、中・ソ対立の根源もその辺のところにあるんだろうと思うんですが、そのところはどうか評価されるのか——

小長井 それと、加えて云えば、日本共産党も今自主独立路線という形で、スターリン主義の被害に対して一定の対応をしているわけでしょう。それに対して、反スターリン主義というのはどういう志向性を持っているのか？

清水 さらに加えて、さっき水戸さんが俗論という形で出されたベトナム戦争の問題もありません。

だから、今成立している社会主義国家群を、一括してスターリン主義と規定してしまうのか？ 革マルなどはそういう立場をとっているんじゃないかと思うんですけども。

本多(中核派) 僕らもそうですよ。

清水 だとしたらさらに、同じ革共同の中で革マル派と中核派がはっきり分れて来なければな



らなかつた所以まで——

本多(中核派) 僕はそういうふうに進めても構わないですよ。

ただ、僕の中国革命についての考え方はいろいろなところで書いてあるしね。だから今特にそのことについて答えられないから逃げるというのではない、と自負が出来るから、(笑) 敢えて云うわけだけれど、またその話を僕がやって行くことになったら、今までの話がどこかへ行ってしまふことになりませんか。一まず別の人たちに意見を出して貰って、それに関連して僕の中国革命の位置づけの仕方も述べるといふことにしましょう。

## 二 毛沢東あるいは「毛沢東主義」裁断

清水 では、中国革命が登場したところで、鈴木さんの方から——

鈴木(ML) 基本的な一つの立場として、「反帝・反スターリン主義」を一個二重の問題として並列する——世界革命戦略の問題として「反帝・反スタ」と立てられる、そういった方法に反対している立場に僕らはあるわけです。

「一国社会主義」とか「平和共存」がまちがっていることは、これはもうはっきりしているんです。そうしたスターリン主義の害毒というのは一貫してあるわけだけれども。

しかし、さっきから問題になっている第二次大戦前後の情勢の中でその問題を考えてみると、一方に於いて今次大戦というのは、帝国主義の植民地分割をめぐるいわゆる帝国主義戦争としてあり、それから帝国主義の側からする反ソ干渉戦争という側面もあり、もう一つ、他方では国際

的プロレタリアートの帝国主義に対する革命戦争としての性格をも同時に内包しておる、ないしはそれを実現しておったといういわば三つの性格を持った戦争だったろうと思うわけです。

で、その三番目について触れておられないので述べたいのですが、その現実的結果というのがまさに中国革命の勝利として結果しているし、この中国革命の勝利というものが切り拓いたその後の戦後過程ですね。革命的な一つの発祥点として後進国革命がずうっと蔓延して行く、極めて良い条件というのが出来たわけで、このことを抜け落した形では語れないと思うわけです。

スターリン——毛沢東というふうには僕らが一致して考えない所以を含めながら述べると、中国革命がずうっと長い国内革命戦争を戦って来た過程で、スターリンのおこなった指導と毛沢東がジグザグはあってもおこなって来た基本的な指導との間には、根本的な相違がある。

少なくともその理念上の相違は何であつたかと云えば、スターリンはやはり基本的には世界の平和共存体制ないしは米ソ体制、ないしは帝国主義陣営とソ連陣営との間の平和的固定的共存ということを前提にして、中国革命は元より、一切の革命をその体制を破壊するものとして圧殺して行くという路線を布いておつたんですね、その当時。本多さんによれば、国境防衛隊みたいな形で各国の革命運動を歪曲して行くんだけど、中国革命にあつては、二段階戦略なるものを公然たる理由にしつつ、蒋介石政権に対する物凄い挺子入れをして来るという対応の仕方をソ連はスターリンは一貫してしておつたし、そうしてその蒋介石に対するソ連の援助というものの基本的な理由というのは、ロシア・プロ独権力が世界に革命運動を波及させて行って、次々に革命が成功するというのではなくて、ソ連の防衛にはそこに中間地帯を作ればよい——帝国主義

との間にね——という飛んでもない考え方でなされたものなんです。中国について云えば、例えば蔣介石を立てて共産党を国民党と連合せしめて、こうして帝国主義との緩衝地帯にしてしまおうという基本的な政策があった。これとの毛沢東の党派闘争というのは、ご承知のように相当熾烈なものがあつたわけです。

その長い党派闘争の過程を経ながら毛沢東はスターリンを克服して行ったわけです。毛沢東が基本的に持っているところの革命理論の根幹は何かと云えば、プロレタリアート独裁の思想とそれから暴力革命の思想なんです。このプロレタリアート独裁の思想と暴力革命の思想というものが、スターリン主義の広汎な世界的な波及の中で實際上規定されて行ったんで、わが国の革命運動の中にあつても、日本共産党の歴史の中にあつても、この二つの御旗を振り捨てるということから、さまざまな戦略戦術上の誤りというのは出て来ると思われるのだけれども、そういったプロレタリアート独裁と暴力革命の二つの思想を、いわばスターリンを否定的に媒介しながら守り抜くことによって、毛沢東はレーニン主義の原則に忠実であり続けたと考えています。

勿論、ソ連を中心にした国際的なコミンテルンというものが確立しておいて、鉄の一枚岩を誇っていたんですから、その枠内でのことですし、党派闘争の限界だって幾らでもあつたけれども、基本的にはそうである。したがってスターリン・イコール毛沢東、あるいは毛沢東イコール・スターリンという考え方には事実の誤認があるだろうということです。

そのようにして毛沢東は、一方に於いてスターリン主義的なレーニン主義の歪曲に対して徹底的な党派闘争を闘い、他方では中国革命そのものを実践的に成功に導いて行った、しかも第二次

大戦以降の世界の革命を領導しているところの理論と党を創った、ということでも評価されなくてはならんだろうと思う。

したがって、彼らが現在「反帝・反修」というスローガンをプロレタリア文化大革命の中で提出して来ているということの必然性も、中国共産党自身がプロレタリアート独裁政権樹立以降、基本的に国際階級闘争の根拠地として機能することを目指している、かつ機能していることから出て来ているもので、彼らは現在では帝国主義が米帝を先頭とするということのために反米帝と云っているわけだけれども、米帝を頭とする帝国主義に対する闘いというのを中国共産党の第一の党是とし、そしてその中ですね、飽くまでもその中で、その反帝国主義闘争に妨害を与え歪曲を加えているところの修正主義に対して闘うということです。

つまり、「反帝・反修」というスローガンは、反帝国主義の闘いの中に於ける修正主義の役割をはっきりさせた上での「反帝・反修」という意味であつて、いわゆる一個二重的なスローガンの羅列ではないわけです。革命戦略としては、飽くまでも反帝闘争という見地の中に反修闘争が含まれるという構造になっているんだけれども、そういった形で中国共産党はあるいは毛沢東主義は、実践的に、全党的にそして中国の全人民的な規模で修正主義を克服する途に具体的に現在就いている。そのことの顕在化というのが、これがプロレタリア文化大革命である。

プロレタリア文化大革命があつた形——紅衛兵の登場という形で顕在化した——このこととは一方では中国共産党自身の否定を含む重要な問題提起であつたんで、あつた形で毛沢東がプロレタリア文化大革命をおこなわなければならなかつたのは、この中にも反スターリン主義

の問題が実践的に提起されていることを物語るんです。

プロレタリア文化大革命の歴史として考えられる中・ソ論争というのがありますが、その中・ソ論争の過程で中国がソ連——フルシチョフに対して投げかけた基本的な問題というのは、一つは「平和共存」というのはいいんだけど何なのかということ、いわば階級と階級との間に平和共存があるのかないのか、ないじゃないかということです。レーニンが提起した「平和共存」というのは、社会主義が帝国主義に押し詰められたような状況の中で、国と国とが事実として共存しているということ、いわば国境を越えて熱い戦争があるということではなくして、そうではない形でもってそれぞれの革命闘争を進展させる問題として「平和共存」というのはあった。これは革命の輸出をしないのかという問題とも絡みあって出て来たもので、革命というのはそもそもその国での革命主体の形成がなければ、文字通りの輸出というのは出来ない、ということ、これを前提にして、しかしプロレタリアートとブルジョアジーの矛盾は暴力的に解決しなければならぬという建て前は崩さないということです。これがつまり中国の云っている「平和共存」政策でもあるんで、これはスターリン主義者フルシチョフが一生懸命提起していたところの、「平和共存」を大前提にして各国の階級闘争を圧殺して行く、一切の革命運動の激発というのを核戦争の恐怖を云い立てて圧殺して行ってしまうというやつとは基本的に違う。

こういう形でソ連との間に中・ソ論争が起ったのですが、それからもう一つはトリアッチを公然たる敵として展開された論争だけれども、暴力革命を否定するのかどうなのか、構造的に改良して行く、あるいは資本主義を修正して行くという考え方の中には、マルクス・レーニン主義の

三〇四 革命(二)F  
E国 言論(十)全

七四  
E本

息吹きというのはあるのかないのかという問題として、中国は国際共産主義運動の内部で問題を提起していった。

このような経過の中からプロレタリア文化大革命が実践的にしかも革命の問題として、あちこちで第二の政治革命とかあるいは補足革命とか云われる形で、かってトロツキーが提起していたような問題をも部分として含みつつ、全人民的な階級闘争として提起されたわけです。

このプロレタリア文化大革命については、必要があれば後で詳しく述べたいんですが、この中で毛沢東は、ソ連にあってスターリン主義官僚が党を官僚群として固定し、例えば党員であるのが出世の早道であるというようなやり方で国家全体を変質させて行き——ソヴェトなんていうのはもうとっくにないわけだからね——あらゆる政治、経済、文化一切の分野に於いて、プロレタリアートの独裁というものを、基本的に資本主義の方へ押し戻そうとしていること、あれが資本主義だとは云いませぬけれども、このロシア革命以後、一七年以来の国際的な共産主義運動に於ける悲劇というものを総括している。そしてこの悲劇を二度と繰り返してはならないということでもって、自国に於けるもの凄く新しい問題提起をやったわけです。その点では、ソ連の政權交代が宮廷革命的にやられて行くという行き方とは全く異質に、古い部分、資本主義社会の残滓や母斑というものを一つ一つ総点検的に克服して行く過程として、永い永い革命の過程として文化大革命を出して来ている。

このように見て来ればここに、スターリン主義が陥った国際共産主義運動の総路線に於ける誤りを、毛沢東中国が現在一つ一つ克服して行っているいわば鳥瞰図みたいなものが画けるだろう

と思う。

ここでちょっと小長井さんの質問に係わるかと思うんですが、つまり中国をプロ文革以降にいつてのみ評価するのかわかるといふことだと思ふんですけどね、今云ったようなプロレタリアート独裁、暴力革命という二つの大きな基本戦略軸を復活した具体的な展開過程というのが中国にあるわけで、これがつまり長い国内戦争の間に、「人民戦争理論」という形で緻密に立てられたものと、他方に於ける「統一戦線理論」なんです。

これらはわれわれが現代的に応用可能な現代的な理論だと思ふんですが。

水戸 プロレタリア独裁ということの意味ですね。毛沢東の割合はつきりした考え方として、農村から都市へというのがあつた。もう少し国際的に云うと後進国から先進国へという考え方ですね。その基軸は非常に端的に云えば、プロレタリア独裁の思想とむしろ違ふんじゃないかという感じが僕なんかはするわけですけど、それをどういうふうにするか……そのプロレタリアート独裁ということの意味ですけどね。

鈴木(M.L.) 国際的に見て農村から都市へというのはですね、これは林彪が『人民戦争万才』で明らかにしたことですが、そういう形勢にあるということなんです。第二次大戦以降、ベトナムを先頭にするところの彼の云う比喩的な意味での世界の農村が、世界の都市を包囲している形勢にあるという情勢の認識を云ったということなんです。そのことと、中国革命が農村から都市を包囲して行つたということとは、戦略の問題としては別にリンクしていないわけなんです。

と云つて、毛沢東は積極的に先進国革命から後進国へとも云つていないわけであつて、毛沢東

自身はその辺は当然にも固定的に考へてはいないんです。現在最初に云つた三つの革命が帝国主義を追いつめていゝ——つまり先進国に於ける革命と後進国に於ける革命と、中国等々のプロレタリアート独裁国家ですね——という状況にあることはまちがいないことで、だから後進国から先進国へであるのか、あるいは先進国革命を後進国へ波及させるのであるかという問題を理論的に論争するという発想は、僕はまちがいだと思ふ。

つまり、同時に現在進行していますしね。プロレタリア独裁権力の樹立、あるいは現在のブルジョアジーの暴力独裁機構を破壊するという時点が、どちらが早くあるべきであるかというやうなことは理論として打ち固めるべき問題ではないだろう。具体的な革命のプログラムの問題であらうと思ふんです。ですからそういったふうには問題を立てないんですけども。

清水 今のお話ですと、中核さんの云つている「反スタ」というようなことについては、プロ独・暴力革命という毛思想がすでにもう反スタになつてしまつてゐるんだ、ということでは、プロ独・暴力革命ですか？

鈴木(M.L.) ですからね、一番最初に云つたことをもう一度繰り返したいんですけども、反スターリン主義の問題というのは、帝国主義に対する闘いを国際的なプロレタリアートが闘い抜いて行く中に位置づけられるべき問題である、「反帝・反スタ」「世界戦略など」というものはあり得ないということなんです。

清水 ではその辺のところ、鈴木さんに近い同志であつたささぎさんの方から伺ひましょうか。さらぎ(共産同) 僕の考へとしては「反帝・反スタ」を同義一元的なものとして世界の戦略に

するということには反対なんです。

それは、反スタの根拠というものと反帝の根拠というものは全然次元が違うもので、明確に反帝という、現在の帝国主義に対してどのような革命的原則をもって闘うかという、そこに一切の基準があるわけです。で、その反帝という次元で問題を取り上げてみると、言葉では構改派の諸君も社会党も反独占とか反帝とか云っている。しかし反帝の内容が問題なんで、いかなる世界革命戦略で闘うのか、世界暴力革命、世界プロレタリア独裁のための闘いとして、「労働者国家」のスタ官打倒、ソヴェト復活、社会革命を包摂して闘うのか否かです。これが一切の基準であって、その基準から社会党の反帝議会主義も批判するし、歪曲された共産党の批判もする。そして歪曲された「労働者国家」であるソ連・東欧共産党の中心的な癌をなしているスターリン主義を、戦略的思想的に打倒すると同時に、その政権をも打倒する。毛沢東路線は止揚の対象で、打倒の対象ではない。カストロ路線に対しては、国際統一行動の対象として、相互批判を通じて統一戦線を組んで行きたいと考えている。

僕らは反スターリン主義の立場をとりながらも、明確に反帝すなわち、世界帝国主義列強同時打倒・スタ官同時打倒・世界プロ独を基準に国際的党派闘争と国内党派闘争を展開して行く。これがブンドの基準で、この点を一発押えなくてはいけないんじゃないかということです。

中核派は、黒寛(黒田寛一氏)の「反帝・反スタ」戦略遺産を抱えて苦労してるんじゃないか。ソ連はスタ官(スターリン官僚主義)軟派、中共は硬派というカテゴリー的解釈では、中国文革の一国的社会革命の意味と限界、それからその限界性から発生した毛沢東個人崇拜と民族排外主義

による国民結集——反帝・反修の内的批判が展開出来ないだろう。

MLは、中共のスターリン主義的戦略を批判し切れていない。世界革命路線に於けるマルクスとレーニン・トロツキーの系譜を、毛・林人民戦争論といかなる関連で把えるのかを、明確にしなければいけないと思うんです。

要するに中核派も、「反帝・反スタ」と言葉を並べるだけで、世界戦略を提起し得ていない。そこに最大のネック——アンチ主義というか、スターリン主義との対抗関係だけで自己の存在を位置づける限界があるのでしょう。

それから、いいださんのさっきの反スタ批判だけど、反スターリン主義がいいのか悪いのか結論がない。反スターリン主義という立場がいけないんだったら、ではいいださんの云う「反帝」の内容が何なのか。一国社会主義は駄目だと云うが、駄目だと云ったってしょうがない。どう主体的に闘うのか極めて不明確です。結局いいださんには路線がないんでしょう。

僕がさっき本多さんの意見を聞いた限りでは、本多さんは「反帝・反スタ」が同義一元的なものといながらも、実際に批判しているのはスターリニストの帝国主義に対する諸政策、諸闘争——つまり戦略批判だ。だとするとやっぱり、従来の革マル派II黒田寛一氏の「反帝・反スタ」の同義一元的な戦略とは、若干ニュアンスを最近中核派さんは変えて来ているんじゃないのか——好意的に理解して。(笑い)どうなんかなあ?

鈴木(ML) それがすっきりしてないということですよ。

さらぎ(共産同) 転換という意味では歓迎すべき傾向じゃないですか?(笑い)フランスに於け

る戦後の状況だとか、それによって起つて来たところの問題については、ブンドに近づいたんじゃないか？（爆笑）

とまあ、以上を前提にしてスターリン主義の物質的基礎を明らかにすると——一つのイデオロギーには、必ずそれが発生する物質的な根拠があるわけです。そこで、スターリン主義の発生する物質的根拠はどこにあるのかという点を基本的に押えたい。

その前提として、一国でプロレタリアが権力を取った国では、どのような形態で、マルクスが『ゴータ綱領批判』で云った、共産主義の低い段階としての社会主義段階に、資本主義の母斑を粉碎して近づくのかが問題ですね。まず帝国主義に包囲された一国ないしは二、三カ国で——複数国で権力をとった国が、古い国境を持ちながら存在していく国が、どういう条件に置かれるのかという点を明確におおなくちゃいけないということなんですね。世界的に同時革命が起つてそこに於ける社会主義をめざすところの過渡期であれば、明確にストレートに社会主義に進進していける一つの物質的な機関をもっている。ところが一国に於いてプロレタリアが政権をとった場合、その国の一国的な経済というのは、世界的な経済の中の一国であるから、一国では自立した社会主義は完成出来ない。出来ないにもかかわらず、どこまで近づけるのかということの基準をはっきりしなければいけない。じゃその基準というのは何かというと、やはりプロレタリア独裁、過渡期に於ける明確なプロレタリア独裁、一党独裁ではないプロレタリア独裁と、それからコンミュニオン型国家——全人民の政治への参加と全人民の武装というものを基底にしたコンミュニオン型国家、でなければいかん。そして分配については、早急に生産手段そのものは国有化さ

れなければいけないけど、生産手段が国有化されただけではなく、労働の量に於ける分配というものにどれだけ接近するか。最大限の接近を計らなければいけない。この労働の量に於ける分配ということとは、社会主義のメルクマールとして『ゴータ綱領批判』でマルクスは云ってますけれどね。これに一国に於いても出来るだけ接近を計っていくことをめざさなければ、労働に於ける質による分配を肯定するような形では、生産手段がいくら国有化されても、共有化されても、その中に於ける労働の質による分配が起つた場合に、これは賃金ではないけれど搾取が起るということを明確にして置かなければいけない。そのことについて労働者国家の帝国主義の包囲下にある指導部がどれだけ人民に教育し、そのことと主体的に闘うか否かということがスターリン主義を克服する基本的な問題である。次に、そのことだけをいくら繰り返しても、次々と帝国主義の包囲からくるところの限界があるわけで、このことから、やはりどうしても、自らの位置を世界革命の根拠地国家として、世界革命を物質的に指導し、理論的に指導する。資本主義の搾取がないから勉強も出来るわけですから、物質的にも援助が出来るわけです。外に対して、明確に根拠地国家としての指導態勢をとって行く、理論的にあるいは物質的に。という態勢をとることがスターリン主義の現在の克服であり、カッコのつかない労働者国家の、現在の世界史的な過渡期の中での位置ではないか、というように問題を立てて行くわけです。それが基本原則ですね。

したがって僕らが云うのは、ソ連が悪いからといってソ連に対して外から批判するとか何とかじゃなくて、現在の社会の矛盾は大きく云って、労働者国家群と帝国主義と帝国主義に包摂され

たところの後進国とが有機的な一体をなしていることですね。下部構造的には、いわゆるまちがったカッコ付きの労働者国家群というのは存在するけれども、この労働者国家群というものは、基本的には帝国主義に対する根拠地としての闘争と、自ら社会革命という、社会主義には直接行けないけれど、それにより接近するところの、コンミュン国家に近づくとところの社会革命の方向を旨ざすということが、同次元の問題としてあるんじゃないか。外に向う問題と、中の改革という問題がね。この問題が同時に進行するという解決の方向を持たなければ、いわゆるカッコ付きの社会主義の中に独自の矛盾が出て来て、これと相闘わなければならない問題が提出されてくるんじゃないか。これが、現在の僕らが、三プロックの階級闘争を同時に進行させようという、いわゆる労働者国家群の中に於ける物質的な基礎であるわけですね。

それからもう一つ、鈴木さんのいうところの毛沢東主義とどうなのか。僕は、「反帝・反修」というのは非常に「反帝・反スタ」に似てるけど、これは問題が違うんじゃないかと思うわけですね。まあ良い面と悪い面があるんですが、鈴木さんが良い面を云ったから僕、悪い面を云いましょう。

鈴木(M.L.) いいよ。良い面を確認してから云った方がいいんじゃないか。(笑い)

さらぎ(共産同) 「反帝・反修」というけど、実際は反米・反中間地帯・反ソであるわけですね。反米・反修で修正主義全体に対して闘っているわけだけど、世界の修正主義に対して、原則的な世界革命の綱領なり何なりでもって闘っているかどうかといえば、やっぱり徹底的に闘い得てないということね。反米に於いては闘うわけです。だから中国の政権をとらない段階の毛沢

東主義は何であるかと云うと、これはやっぱり、スターリン主義の中に包摂されたところの一国革命的プラグマチズムである、というふうに僕ら理解しているわけです。その点では非常に革命的であり、極めて現実に入った闘争形態をとって来ている。毛沢東は紅軍と云うか赤軍の規律と運動の中に、プロレタリア性というものをたそうとしたわけでしょう。しかし社会実体的なものがないのはやはり駄目だというのがトロツキーの中国革命論だと思わんですが、まあある程度毛沢東の場合、国内ではやり遂げたんだと思うんですね。しかしそのプロレタリア性というのは、極めて中国的倫理観に於ける、毛沢東の概念に於けるプロレタリアであって、世界革命を普遍化するプロレタリアとは違うんで、そういうところにスターリン主義と明確に区別が出来ない、いわゆる毛沢東のプロレタリア概念があるんじゃないかとみているわけです。

鈴木(M.L.) いいところまで近づいているんだけどなあ……(笑い)

さらぎ(共産同) しかして毛沢東は一国社会主義路線ですよ、やはり。一国社会主義路線の中に於いて帝国主義と闘う。どこと闘うかという、アメリカ帝国主義と闘うわけですね。

ソ連の場合は、一番主要な帝国主義、最強の帝国主義であるところのアメリカと和平共存をやっている。そして世界全体とも和平共存をやっている。中国の場合は、アメリカと闘うということと他の帝国主義とは中間地帯で結びついていく、という曖昧な路線があるわけです。こと自国の民族的利害についてはソ連に、反修と云ってるけど、反ソという形で対決し、ソ連が闘わないといいながら反ソをやっているけど、自分が他国に対する態度はどうであるかと云うと、やはり大国主義が残っているんじゃないかということですね。

鈴木(M.L.) 念のために云って置きますが、「反帝・反修」というのは我々が云っているのではなくて中国共産党が云っているんで、これをちょっと念の為に云っておきます。(笑い)

水戸 ヘルメットに「反帝・反修」と書いてあるけどあれは違うの?(笑い)

鈴木(M.L.) あれはわれわれじゃあないです。(笑い)

それで、さらざさん、非常に幾つか共鳴をおぼえる展開をなさった中で、やはり気になるのは「労働者国家群」ということ。あるいは別の云い方をすれば、スターリニスト圏という形でいわば中・ソあるいはキューバ・ベトナム——まあ北ですけれど——等々を一括してものを云っておられる。この点では本多さんと同じと思うんですが、僕はいわば中・ソ論争というものが、一つはスターリン主義に対する中国あるいは毛沢東思想の反乱としてあったと述べたと思えますけど、その辺で相変らずスターリニスト圏あるいは労働者国家群というように云ってしまつて問題が片付くと思っておられるのか、おられるとすれば一言云いたいんですけれど、そこを質問してみたいんですがね。

本多(中核派) 僕はスターリニスト圏というふうには規定するけれど、労働者国家群とは断じて規定しないね。

水戸 その意味は何ですか? 労働者国家という……

いいだ(共労党) それじゃ鈴木さんの質問していることがますます重大化するわけですよ。逆に云うとね。

水戸 その違いはどういうことですか?

水戸 ということは、文化大革命をあまり評価しない?

いいだ(共労党) ということですね。つまりあんまり、鈴木さんほどには、ということだと思えますが。

水戸 どの程度は評価するんですか?(笑い)

いいだ(共労党) 「文化大革命」が、過渡期国家の持つ一種の階級的矛盾を、社会主義建設期に於いても連続革命的に解決しなければならないということを、改めて提起したことは確かですね。その点は評価するわけです。

評価出来ないのは、社会主義建設が進めば進むほどブルジョアジーとプロレタリアートの階級敵対が激化する、というスターリンの肅清論理の復活ですね。それと、大国主義に屈しないのはいいが、「自力更正」の持つ一國社会主義建設的傾向ですね。

ただ、今の点に限って二つ質問なんですけど、鈴木さんが本多さんに向けている質問と逆の質問になると思うんですが、そういうふうには評価されてる現在の人民中国なり中国共産党が打ち出している世界戦略ってのは、新島淳良(早大教授)さんの、「一段階世界革命」「都市コミューン革命」だという新解釈はあるけれども、公式文献に徴する限り、やはり「反米国際統一戦線」だと思えますよ。それは中間地帯論を不可欠の構成部分として含んでおるから、私たちに即して云えば、第二中間地帯に日帝は入る。するとつまりそれは、米帝以外の、現在の非常に主要な危機の焦点になろうとしている、革命の環を握ろうとしている、自国帝国主義に対する革命的闘争を麻痺させるのではないか、というのが私たちの根本的批判なんですがね、戦略だけについて云



え。現に、民族主義的「愛国正義の闘争」に解釈された宮本綱領の一番熱心な支持者だったわけですよ、先年までの中国共産党は。それが第一点ですね。第三世界の革命的気分を代表している面はあるし、現実の敵に対して闘っている限りは、私たちは敬意を失いませんがね。

第二点は本多さんとさらぎさんに対する質問なんです。一國社会主義戦略なり平和共存戦略なりが誤っていることはまちがいないし、私たち自身、現在の過渡期国家、労働者国家はスターリン主義的に歪曲され疎外されていると云ってまずけれど、さらぎさんの云われたそれらの歪曲が原則的に取払われて、世界革命の基地として闘う方向に向った場合でも、例えば先程申しましたけれど、西ヨーロッパ革命の遅延という条件を外的に歴史的な前提条件にすれば、その中ではカギをつけたっていいですが「労働者国家」というものは、何れにしろある一定期間の過渡局面を生存していかなければならないし、何れにしろ自己防衛していかなければならない。世界革命の根拠地国家と自己規定しても、そういう過渡期の中に於ける過渡局面の任務というものはやらざるを得ない。その中では、いわば労働者国家群と帝国主義世界体制とが、地球の上で対峙して共存しておる。それは外的対立であるから世界階級戦争で解決するんだというふうな戦略配置をとれば別だけれど、私はそれをとらないから、世界戦争そのものを未然に防止し回避しながら、その世界革命過程を全体的に促進する、そういう自己止揚過程の問題が出てくる。

その過程に於ける種々の過渡局面というのはあるわけだ。現代世界というのは本来そういうもので、それを認めなければ、なんやかんや云っても、結局一九一七年以降の世界は歪んだ悪の世界、あるいは仮象の世界、本質還元すれば古典的帝国主義段階だということにならざるを得ない。

その間は、国家としてはブルジョア外交をやらなければならぬだけでなく、経済的にいっても資本主義世界市場との貿易関連をしなければいけない。そこは少くも商品経済的な関連をもたなければならぬから、国内に於ける農業集団化その他がいろいろな形で進行したとしても、そこからくる過渡期に於ける二重の任務ですね、そういう問題は絶対的に避け難く提起されると思ふんですよ。本来同時一挙革命になるはずだったのがスターリンの裏切りでゴシャゴシャしているだけなんだ、という説ならそういう過渡期国家の課題は考える必要さえないんでしようがね。過渡期国家は国内的にも国際的にも矛盾を持っているんだ。そいつを全部スターリンの誤りに帰してしまふわけには行かない。この二つです。

さらぎ(共産同) いいださんの世界革命というのはどういう世界革命なんですか？ 鈴木さんだったら人民戦争で解決するわけでしょう。僕らは世界革命戦争で解決するわけでしょう。

いいだ(共労党) 世界革命戦争ってのは、根拠地国家がいわば撃って出るんですか？ 私の史観では、ロシア革命直後の赤軍のワルシャワ進撃は歴史のエピソードに過ぎない。東欧の戦後のロシアのタンクに乗って来た「革命」が、逆にどれだけスターリン主義的歪曲を今に至るまで残していることか。そこで、世界政治革命が何故に世界赤軍階級戦争になるのか、ということ逆についてるんですよ。

さらぎ(共産同) それは資本主義の階級対立ね、これが階級戦争になるわけですね。

帝国主義陣営内に於ける植民地を含んだ全面的な階級戦争と、労働者国家内に於ける階級闘争が結合する形を、総体として僕は世界革命戦争と……

いいだ(共労党) で、グローバルな世界戦争になるといふことね。  
 さらぎ(共産同) そう、世界革命戦争。

そこで一気にやってしまわないと、次に問題が出るのは各国でプロ独(プロレタリアート独裁)をポチポチポチ全部創って、それを国連みたいに集めてやりましょうと云っても、スターリン主義国家がもの凄いい生産力と軍事力を持つてる段階では、それはあれですよ、僕ら政権をとつても中共からガーガー云われて、何だかんだとカッカ、カッカ云われたら……

鈴木(M.L) 変なところで中共が出てくるなあ……  
 (爆笑)

さらぎ(共産同) ……今のチェコとハンガリアの状況が出てくるわけです。そうでしょう？  
 一国的にプロ独を創ってそれを国連に集めましょうと云っても、そんなに現実の政治というのは甘いもんではないわけでしょう？ それを一挙的にどう解決するかということに、マルクス主義として本当に現在答えることこそが、綱領の問題として、世界革命の問題として展望されなければいけないんで、なんか現実論のようだけれど、さあポチポチやりましょうという形では絶対にスターリン主義は打倒出来ないし、スタ官も打倒出来ないし、社会主義の実現なんというのも夢で語っている場合はいいけど、本当に実現しようと思つたら、かなり一挙的な問題として解決していかねりゃあいけない。

鈴木(M.L) いいださんの質問に対してですが——プロ独権力を樹立したいわば革命に於ける先進国が、一切の世界の革命闘争を指導しなければならぬということとは別にないわけですね。

それをしなければならぬのはいわば国際的共産党の連合体、コミンテルンです。で現在いかなる意味でもコミンテルンはないし、国際的なこれを指導する組織も事務局も機能もない。だから中国、あるいはキューバ、あるいは北ベトナム等、はっきりした路線の違いを持ちながらも、世界革命に対して何らかの意味で益しているところの革命に於ける先進国と、それから各国革命闘争を推進しているところの部隊が一場に集まって、世界的な国際共産党の建設に向うということがなされなければ、いわば反米帝世界戦略の誤謬を批判しても、批判それ自身物質化しないんです。そういった意味では、中国に現在第五インターを、たとえば全世界インターを召集する力量も理論もないぢやあないかということとははっきり云えると思えますけれども、それはしかしそれにすぎない。

中国共産党が現在まで、文化大革命に至る過程の中でとって来たところの誤った国際階級闘争に対する指導、これはもうわれわれの国の革命運動も、はっきり云って中国共産党によって多くの被害を受けていることを僕は認めますけれども、そういうものを今一生懸命自己否定的に総括している。そういう方向がプロレタリア文化大革命の中で出て来ているわけなんで、それがプロレタリア国際主義の異常な強調という形でたとえば出て来ているし、これからプロレタリア国際革命の根拠地として、世界革命の根拠地としての機能を文化大革命の中で全人民的に討論し、そういう機能を中国自身が持てるような方向性というのが、はっきりと追求されているということに僕は前進をみたいわけです。

まあ中国はそれ以上ではない。

で、その点では嘗てゲバラが云ってますね。すでに樹立されたプロ独権力は、世界革命に対して、援助を今戦っている革命の戦士から要請されたら、その援助というのは無制限に無条件に、無償で幾らでもやるんだ、それ以外に先に樹立されたプロ独権力の意味はないんだ、ということをかなり痛烈に云っている。あの痛烈な言葉はですね、ゲバラ自身はソ連、中国を含めた一切の革命の先進国に向って発しているわけですよ。ソ連は勿論中国にもそういうことを云われる充分な理由があると思う。ソ連との間には量の違いはあってもですね。しかしそういう問題すら、プロレタリア文化大革命の過程で実践的に克服されてきているこの過程というものを評価しなければ、これは中・ソ論争も無駄に終わってしまうし、あるいは中国全体がベトナムの革命闘争に対して大きく貢献している実体というのは、何ら説明され得ないことになってしまいます。こういうようなことに対して何か、労働者国家群というふう一言で切ってしまったら、あるいはスターリニスト圏と云ってしまうのはこれはそれ自身としてはあまり意味がない、ないしは否定的に過ぎるんじゃないかと思う。

いいだ(共労党) 今鈴木さんの云われた自己克服の課題として絶対にあるんだという点はよく解るし、賛成なんです。それから実際政治の問題としてこう、こう、こういう役割があるという点は半ばくらい解るところがあるんですよ。ただ、今は世界革命戦略の問題で論じているんですね。たとえば東大、日大闘争に中国が連帯をするということは非常にすばらしいことであるし歓迎することだと思ふんです。しかしそれを例えば「愛国的学生の闘争」というふうの評価をする。そこにやはり戦略的誤りが関係して来る。世界戦略として持つべきプロレタリア国際主義と、一

種のやはり中華民族主義的なものとの混淆みたいなものがあるんじゃないか。ですから、米帝支配というものを、帝国主義体制の問題として把握しているんだというふうにおっしゃるけれど、どうもやはり、戦後帝国主義世界体制である米帝を頭目にする、戦後のアメリカ世界体制に資本主義世界体制の問題を、民族主義的な形で、自分の民族革命戦争の体験にむしり引きつけた形で理解しておる。そこで、プロレタリア国際主義ならびに現代世界革命との自己矛盾が生じて来るんじゃないか、と私としては考えざるを得ないわけだ。

鈴木(MI) ちょっと一言。それはつまり民族主義との自己矛盾ではなくて、中国共産党自身の世界革命戦略に於ける理論的な限界ですよ。それはプロレタリアート国際主義との矛盾ではない。

本多(中核派) 限界というのはどこから出てくる？……

鈴木(MI) つまりわれわれの闘いに対して愛国学生というふう云うのは、それは日本帝国主義に対する理解がまちがっているわけですよ、はっきり云えば。

そのことはプロレタリアート国際主義との関連ではない。先程から云われているような意味で中国共産党がわれわれの闘いをそのように云って疎外しているとか、あるいはそう云って敢えて歪曲しているとかいう問題ではなくて……

いいだ(共労党) いや、今ね、政治の問題を論じているわけですよ。

政治戦略を論じているから主観的動機がどうあろうとですね、結果としては、それは世界革命戦略にならないという点で政治的な誤りになるわけですよ。プロレタリア国際主義者として頑張

っているけれども、理論水準が低いからこう、こうなったんだというのは、内的な説明として解るけれども、それはしかし論争としては成りたない、ということなんですよ。

鈴木(M L) だから僕らは、例えばこういう場で、一つの対案なりあるいは克服した新しい世界革命戦略を提出しようとしている。そのことを僕らは日常革命運動の過程で、実践、実験しているわけですよ。われわれの連合した中から新しい党的再編も出てくるだろうし、そういった問題を、つまりわれわれ自身に問いかけようではないですかと僕は云ってるわけですよ。

中国に全部を求めるといふのは……

本多(中核派) 結論的に云えば、日本の学生の闘いを愛国的学生というふうに規定するところに毛沢東主義がある。だからこれは一応毛沢東主義の不充分さとか、毛沢東主義内部の矛盾とかいうふうに規定すべきではなしに、日本の学生の闘争を愛国的学生という形で規定することを通してしか評価出来ない、というところの中に、毛沢東の思想的な問題があるんじゃないか……。

鈴木(M L) 思想的な問題？

本多(中核派) ええ。ないしは世界戦略の問題があるんじゃないか。

鈴木(M L) いいですか？ 僕はごく簡単に結論だけ云いますけれどね。

本多さんの云われた、中国革命のプロレタリア独裁権力下に於ける社会主義に向っての果しない道、そこに対する不満というものは——解る……

本多(中核派) 不満はいいとしてだよ、四九年にいかなる実体をとってプロレタリア独裁が与

えられたかということであってだね。四九年という歴史を与えてみれば、この年にプロレタリア独裁の組織的な機関を中国に於いて毛沢東が決意してつくれないか？

鈴木(M L) それは毛沢東自体の問題じゃあなくて、当時の国際的な共産主義運動全体の問題……

本多(中核派) 詭弁だよ。

鈴木(M L) 詭弁じゃなくてそうでしょう、まさに。国際的な共産主義運動全体の問題として、これはさっきから云っているスターリン主義の問題として考へられてなけりゃいけないし、当時その中に重要な構成部分として毛沢東の中国があったということは、別に誰も否定しないわけですよ。もっと云えば、例えば中国共産党が日本革命に対して一体何をやったのかという問題を考えてみると、人民戦争論というものを非常に経験主義的にかつ、硬直化した形でもって日本共産党を通じて日本革命に打ち込んだ、ということはある。で、そのことが日本革命に及ぼした損失というものは計り知れないものがあつたし、これはむしろいい皆さんの世代の人が経験されていることだと思ふんですよ。

日本のみならず、周辺のいわば勃興して来た戦後の革命闘争に対して、中国共産党が例えば平和五原則という形でもって——これはやはりスターリン型平和共存政策、つまり一国社会主義防衛論として、中間地帯を作るところに理論的根拠があるわけなんだが——そうした形で与えて来たところの害毒というものは認めなければならんし、われわれとしてはそのことの自己批判的な総括抜きに、毛沢東中国とストレートに結びつこうなどは夢にも思つたことはないわけ

です。そういうふうには僕らは云っていない。

小長井 しかし、五六年の時に、ハンガリアのああいう問題が起るような大きな動揺をした際にですね、周恩来がソ連のいわば使者としてずっと東欧を廻って宣撫しているわけです。

その周恩来が今文化大革命の中でなり上って来る中国というのはいったい何だ、という問題が現にそこにあるんじゃないですか？

鈴木(M.L.) そうですね、スッパリ云ってね、ある！

で僕はすっきりとあれでいいんだとは考えていない。僕は人的にどういった傾向を林彪が現わして何を周恩来が、ということは云わないけれども、これはまだ現在……

本多(中核派) 周恩来はテクノクラートだからね、あんなのは批判の対象にすべきじゃないと思う。むしろ毛沢東と林彪が問題じゃないかと思うんだね。

さらぎ(共産同) 毛沢東思想をあれこれあげつらってゆくと、いろいろいいところも悪いところもあるんでね。まあ個人的には大いに頑張っているところもあるけれどね。(笑い)

しかし、世界政治革命の中で客観的にどういう役割を果しているか、それが果して体系的な誤りであるのか、部分的な戦術的な誤りであるのかということと、やはり押えて行かなければいかんと思うんですね。

鈴木(M.L.) だからその体系的な誤りが現在克服されつつあるということだよ。

さらぎ(共産同) 現在克服されつつあるということだけれど、現在克服されつつある方向として、まだ世界革命戦略は出ていないわけですね。

鈴木(M.L.) 出ていないです。

さらぎ(共産同) 現在世界革命戦略として公式に出されているのは——まあ中国派の人にとつては、いつまでもそれをいわれちゃ困ると云うかも知らんけれど——一応国際共産主義運動に於ける総路線でしょう。その中に於ける現代社会の基本矛盾は何かということで、四つの矛盾がある——

第一の矛盾が体制間矛盾である。

第二の矛盾が帝国主義と植民地の矛盾である、と、このように云っているわけね。

その次の矛盾が帝国主義間の矛盾ですか。

その次の第四の矛盾として資本家と労働者の矛盾というように規定しているんですね。

ここに体系化された論理というのはやはり文革が克服すべき世界路線であって、これを対象化してどれだけ克服したかということの世界に明示しなければ、あれこれいつら時によってはいくともあるし悪いこともあるんでね——パキスタンとどうしたかとか、インドネシアとどうしたかという問題が出ると思うんです。

これが理論的体系として一番はっつきり出たのは、やはりハンガリア動乱だと思っただけですね。ハンガリア動乱の場合毛沢東はどういう態度をとったかというところ——まあ周恩来がやったというだけでなく、これはやっぱり毛沢東の矛盾論理から出ているわけでしょう。結局主要な矛盾と主要でない副次的な矛盾と分けて、さっきの国際共産主義運動の中の体制間矛盾に主要な問題があるんだと。この主要な矛盾、敵との体制間矛盾に対して闘うためには社会主義圏内、僕の言葉で云

えばカッコ付きの労働者国家群間の矛盾というのは副次的な矛盾であるから、したがってここはまず矛を納めて体制間矛盾と闘わなくてはいけないことを云ったわけです。

僕らの同時革命戦略から云うと、これは同時的な矛盾として規定する。そして同じく帝国主義的矛盾として闘う。しかし、帝国主義に対して闘おうとしないからこういう問題が出たんだというところで、そこで同時にソ連を批判して行く。だから、主要な矛盾を帝国主義に対する闘いとして見ながらも、体制間の矛盾としてではなく、帝国主義に対して自分がどう闘うか、帝国主義の反革命侵略に対してどう闘うかというところの中で、スターリン主義がどういう役割を果たしたかというところで、問題を提出しなければいかんと思う。

国際共産主義運動の総路線の第一の矛盾として体制間矛盾があるという、この体系が自己否定されて行く過程で変らなければ、どうも一発足りない。個々の問題では前進性は認めるし、その革命性も僕ら大いに共感性を持つところがあるんだけど、世界革命を一しょにやって行くという点では一致点がないということで、批判の基準はやはりそこに筋があるんじゃないかと考えるんです。

鈴木(M.L.) その点で云えば、人民内部の矛盾を対敵の矛盾との関係でどう処理して行くのか、という基本的な考え方で毛沢東は正しい問題を提起していると思う。

ハンガリー問題、最近で云えばチェコ問題、これに対する態度は明確に違っているわけです。その違っている中に僕らは意味を持たせたいと思っっているんですけれどね。

問題はですね——これは同じことを何回繰り返してもしょうがないんで——例えば本多さんの

ようにこなごなに粉砕すべき打倒対象として、「反帝・反スタ」の対象として中・ソを同じように見るということに、とりわけ僕は積極的に反対しているんです。

さらぎさんの云う、いい面もあるじゃないか、だけれどこの点が基本的にこうだということが、同じようにもし「反帝・反スタ」的な、悪い云い方をすればかなり硬直した反スタ路線の中から云われているんだとすれば、最近の、流動している具体的な国際共産主義運動の現実を、積極的に見ないということになってしまふんで、幾つかの限界、幾つかの誤りというものから中国を打倒対象にしてしまうのか、あるいは、日本でいえば、反革命の同盟を結んでいるアメリカ帝国主義と日本帝国主義に対する闘いをわれわれが組んで行く場合に、中国と僕らとの間にある意見の相違を人民内部の矛盾として考えていくのか、敵対矛盾として考えていくのかというように問題を立てれば、僕らは前者であるということをやっているんですよ。

本多(中核派) 僕はね、中国革命と云うのは四九年で完結した過程だとは見ないんですよ。むしろ第一次中国革命から始まった革命の、依然として永続的な過程の中にあるというのが大局的な中国革命の見方で、現在の文革については、中国に於けるスターリンニズムの崩壊過程と僕は見ているんです。

しかし、今日の文革の指導理念である毛沢東の方向によってそれは止揚されて行くのではなしに、この間中国の指導理論となって来た毛沢東思想の動揺と分解と崩壊の過程として、中国の今日に於ける事態が進行していると、大局的には僕は考えています。

文革について一っだけ非常にいい点を云えば、ともかく総理大臣にでも三角帽を被せていいん

だ、革命というのは非常に乱暴なものだということを全世界の前に明らかにしたという点ですね。鈴木(ML) そのことをね、僕はエピソードとしてではなく思想性として評価して行きたいと思う。

小長井 その点は毛沢東は明確に、革命というものは雅びやかなものじゃなくて、大衆の激越な行動なんだと、『湖南省農民運動の視察報告』の中で云っているわけですね。

本多(中核派) しかしその問題をね、さらに主席に対しても向けていいもんだと思うんです。

鈴木(ML) やっちゃいかんというふうには云っていないよ。

本多(中核派) やっちゃいかんというふうには毛沢東が云ってるか云っていないかは、僕らにとって全く関心がないことであって、やらなければいけないと僕は云っているんだ。

まあもつと突っ込んで云えば、僕は毛沢東の革命論の中には、資本主義についての根本的な理解、あるいは帝国主義についての根本的理解を基礎にして、革命を通してそれを社会主義的に止揚するという理論が全くないと思うんだよ。

鈴木(ML) あなたの理解が不備・不充分なんだよ。

本多(中核派) だから反帝性というのはあるんだけどね。帝国主義を軍事的政治的に追っ払ってしまおうという点では非常な能力を発揮したにもかかわらず、帝国主義が世界的に作り出した矛盾を、革命を通じて世界的にどう解決して行くのかというところでは、すっぱり穴があいていると思う。

いいだ(共労党) 異議なし！ その点。

本多(中核派) そこでやはり、ソ連との関係なんかでも、自力更生論みたいなものに曲って行ってしまうことになるんじゃないかと思うんだね。

だから結論から云えば、鈴木さんは毛沢東に幻想を付与していると思うんだな、ないしは期待を付与していると思うんだ。

しかし僕らはそういうあるべき毛沢東主義を頭の中にでっち上げるより、現にやっていること、やって来たことをありのまま見て、それについて肯定否定の判断を下したらいいと思う。

鈴木(ML) 同じ云い方をすればね、あるべき、書物の中にあるべき革命党なり路線であるものを(笑い)頭に描いて、それでともかく現実に対しては皆駄目というふうに云って、勿論主体的な自己だけはどこか神格的なところに置いといて(笑い)——みたいな方式で味噌も糞も一しょにしてしまうという方法ではね、これは……

本多(中核派) ここは重要なんだよ。つまり、革命をやる場合に、どこかに守るべきものが何かあるというように考える必要はないですよ。

鈴木(ML) それじゃあ本多さんは自分を見てないんだよ。自分を肯定しているわけじゃないか。

本多(中核派) それは僕はプロレタリアートの革命性を肯定しているもの、自分じゃなくて(笑い)

世界革命の根本的な理念としてはね、何かこちら側に守るべきものがあってそれをこう拡げて

行くというような考え方——陣取り競争の思想では僕は駄目だと思うんだね。「平和と民主主義」の路線の問題もそこにありますね。

### 三 日共はどうなる

水戸 反スターリン主義のしめくくりとして日本共産党との問題ですね。すでに部分的に衝突が起きているわけだけでも、それが恐らく反革命武力的衝突にまで行くのかどうかということについては？……日本革命の段階で、反革命として日本共産党が現われて、そしてそれが武力衝突まで行くのか？

本多(中核派) 彼らが日和らなければそうなるんじゃないですか。

水戸 恐らく本多さんはそういう答えでしようけれど、他の、例えばいいいださんなどどうでしょうか？

いいだ(共労党) そうですね、傾向としては反革命部隊として七〇年ならびに七〇年を超えた革命的過程に登場する傾向性が極めて濃厚であり、しかもそれは部分的逸脱というより、彼らの民族主義的・議会主義的な綱領的傾向そのものの実践的展開だと思えますけれども、全体としては私はまだ不確定だと思えますね。つまり先験的・先歴史的ではなく、実践や志向と突き合わせて行きます。今日の大学闘争や沖繩闘争では、日共は、論議の余地なく犯罪的ですね。

さらぎ(共産同) 人民戦線路線をとっていますね今、彼らは。

人民戦線というのは、ブルジョア資本主義生産体制に指一本触れずに初め政権をとって、それからなし崩し的に改良して行こうという路線が一面で、これが表ですね、日なたですね。その日なたの政策のためには、小ブルを選挙に注入しなければいけない。それをやらなければファシズムが登場するというのが根拠ですね。

それを妨害する革命的左翼に対しては、彼らの裏面の刃として暴力を振うというのが国際的経緯としてあるわけですね。これはスペインに於いても現在に於いても。現在はドイツ、スペインに於けるファシズムか人民戦線かという形ではないですけども、国際的な秩序派の中の自主路線と云っておりますけれども、基本的には国際的秩序派の一環として反革命補助部隊の役割を果たしているわけですね。この路線はある程度続くんじゃないかと思うんです。

一面では、彼らがいつか暴力革命路線に転換するんじゃないかというような権力側の見方もありますけれども、これをやる時には、綱領の変更から、現在培っている北九州市の選挙の勝利云々というやつまで、全面的に投げ捨てるという覚悟を代々木がしないと、転換出来ないんじゃないかということです。

いいだ(共労党) 改めてもう一度補足すると、私がまだ歴史的には不確定だろうと日共について云うのはですね、反スターリン主義ということから諸国共産党を全部一括して打倒セン滅対象として、それは不可避免的に必ず市民的秩序を守るための、その意味での反動的・反革命的暴力集団として決戦場に立ち現われるであろう、という一般的予見だけに基づいていると、現在の例えばキューバ共産党とかベトナム労働党とかもそうなのかということが出て来ますね。そういうこととの全体的な関連の中で、日共自体も現在いわゆる自主独立路線なる民族主義路線をとっている



けれども、それはまだまだ、歴史の前途のダイナミズムを含めて考えれば全体的には不確定である、と私は考えるんです。

つまり、スターリニスト党と本多さんたちから呼ばれているものそのものが、キューバやベトナムの事態を考えて見れば解るように、全体としてはやはり不確定なんじゃないかと私は思います。

鈴木(ML) 僕はさっきから云うようにそういう一括した見方をしていない見地なんだけれども、例えばキューバ共産党と北ベトナム労働党とは僕はだまかに云って一つの範疇に入るだろうと思います。これと日本共産党あるいは帝国主義宗主国の各国共産党とを一しょにして見るのはいけないという見解なんですが……

いいだ(共労党) あ、それにある意味では私も賛成です。中共⇨善玉、ソ連⇨悪玉という区分けはしませんけどね。

鈴木(ML) だから日共が明日以降必ず反革命として立ち現われるだろうと云ってしまうのも云い過ぎじゃないか、という見方にもしたがって反対なんです。

彼らが今までやって来た行動と、今まで出して来た路線から云えば、彼らはすでに反革命として登場しているし、今後何人がかごぼれて来たりすることはあっても、日本共産党そのものがゴナゴナに打倒されなければ、あるいは自己崩壊しなければ、反革命としての色彩をますます強めて行く以外に、彼らの存立基盤も存立理由もないと思うわけです。

いいだ(共労党) その場合に鈴木さんの立論根拠というのは、つまり、中・ソ対立ならびにそ

こに於ける「反帝・反修」コースというものに規定をされて、ソヴェト・ロシアならびにそれに系列化されておるような各国共産党、それからその周辺末端である自主独立日本共産党のごときは、こなごなに打ち砕かれなきゃいけないけれど、中国共産党を先頭にするキューバ、ベトナムというところの共産党はそうではないという、そういう区分の仕方でしょう？

鈴木(ML) うーん、同じことを云われたのかも知れないけれど、一寸違う気がするんですよ。国際的に云って自主独立と云っても所詮はソ連の影みたくいなものである、ということを持ち出さなければ日共を否定出来ないということではないんです。

いいだ(共労党) 簡単に私の立論根拠を云えばですね。つまりスターリニストと一括することから演繹して日共断罪とか、それから中・ソ対立の片っ方の系列化をすることによってそこから演繹して日共断罪ということでは駄目なんです、現実にはわれわれ東大闘争その他で日共のスト破りの登場にぶつかっているわけだから、その現実の政治傾向というものがどのような綱領的な方向に規定をされ、それが大衆的な立脚場面ではどの程度まで制限チェックあるいは変更が可能かという絡み合いの中で、アクチュアルにそれを見て行かなければならない。

それで私は予見能力が恐らく不足しているんだろうけれど、現傾向としては大変悪いけれど、その先のトコトンのところを考えて行くときまだ不確定と云う他ないということですよ。

鈴木(ML) 僕と同じ方法からそのような違った結論が出ているということですよ。(笑い)  
いいだ(共労党) わかったよ。(笑い)

11  
E  
言語七〇五

11  
E

11  
E

第二部 七〇年をどうする

第一章 最近の諸闘争から  
——序論的総括——

戦術はこうして組まれる

小長井 今各革命諸派が最も焦点的な課題として取り組んでいる闘争なり問題なりというものは、いったいどこにあるのか、どこにあるべきなのかということですが……。

鈴木(M.L.) いやそれはね、誰が云っても同じことで、安保、沖繩、佐藤内閣というように一致しております。その点はどこも異議はない。

だから何を云ったんでは駄目なんで、今僕らは安保・沖繩共闘というのを提起しているんですが、そう表現されるように僕らは安保・沖繩というのを並列して、七〇年と七〇年代を一貫して打ち続く日本階級闘争の環であると考えているわけなんです。七〇年安保を指す六九年、それから七〇年という問題の中では、大学解体闘争、高校も含めて総称して学園闘争ですね、これが安保・沖繩とともに重要な課題になるわけなんです。

小長井 その辺は今鈴木さんの方から各党派とも全部一致というように云われたんですが、それでいいですか？

さらぎ(共産同) 表現は違いますけれど、例えばブンドですと日帝打倒ですね。中核さんだと

優先は安保？ 安保打倒、日帝打倒ですね。皆違うけれども。僕らも大衆に出す時は安保打倒、日帝打倒と云っておりますしね。その中心的課題というのは、ここに今日出席している三派はだいたい一致しているんじゃないかと思えます。

そこから現在の学園闘争を、その立場からどのように位置づけて戦術的に焦点として組んでいるのかということですよ。

だから京大闘争なら京大闘争を今一番中心にやっているんだから、その個別闘争を一生懸命にやっているんじゃないかと云われるけれど、個別闘争を個別闘争として一つの党派がここは俺の拠点だからやるというように——例えばブンドだったら中大だ、中大はブンドだから何かやるという形ではないんです。戦略からいう位置づけも違うし、現在の権力と僕ら新左翼全体との階級関係に於ける政治関係が大きく変って来ていますからね。その中で各々の個別闘争を位置づけてそこでの一つの焦点、焦点ということになって来ていますね。だからどうしても抽象論議になるようですけど、そういう形で見て頂かないと、個別の学園闘争も理解出来ないのではな

いかと……

本多(中核派) まあまあ、一応狙いとして沖繩奪還、安保粉碎、日帝打倒ということを目指して、日本の帝国主義的秩序の留め金を外しちゃおうというのが当面の戦略目標ですよ、僕らの。

そしてこれは大なる建設に向っての破壊ということ、その観点から今度は大学闘争やなんかを把えて行くという位置づけで、帝国主義との関係を打ち抜いていこうと考えているんです。

多少ニュアンスの違いはあるけれど、また個々の問題については位置づけも違うところがある

と思いますが……。

清水 六七年の一〇・八以降現在に至るまで、各派もろもろの闘争をされて、ここにおいでの方々に共同に取り組まれたものもあるし、お互いに罵倒の投げ合いをしたこともありますわね。

その中で、社会の留め金を外してしまうということには必ずしも関係ねえじゃねえか、という闘争が一つ二つあるだろうと思うんです。

例えば、大きく云ってしまえば大学闘争だってつながらねえだろうという論が一つありますね。それから今度はブンドさんに答えて貰いたいわけですけれども、新宿、神田カルチュ・ラタンが何で結びつくんだという俗論もあるだろうと思う。

さらぎ(共産同) 僕らが日本帝国主義打倒、安保・NATO打倒という場合、NATO打倒が付いているわけですね。党派的な違いを云うこと。

なぜNATO粉碎のスローガンが付加されるかという点、これは世界の同時革命をおこなう統一戦線を創るために、世界の統一行動として闘うスローガンであるわけです。個別の各国の闘争がありますね、不均等な。その運動を安保・NATOとして闘って、そして自国帝国主義をそれぞれに打倒するという形で僕ら出しているわけです。その一環として、日本なら日本の自国帝国主義を打倒するという国際的任務と僕らの国内的任務を結合するものとして、安保・NATO打倒というものがある。その基本的な立場というのが、最初に云いました国際プロレタリア主義云々ということです。

では安保・NATO打倒を闘うというけれど、それをどういう革命形態というか、闘争形態で

闘って行くかという位置づけがあるわけなんです。その位置づけからカルチエ・ラタンだとか、僕らの云う中央権力闘争だとか、学園の占拠とかが出て来るわけです。

水戸 京大などの百万遍を封鎖するというような場合はあれですか、プントのそういう方針から出ているわけですか？ 例えば本多さんのところの人たちなんかも街頭に出たというのは、やはりプントの影響があると見ていいわけですか？

本多(中核派) そんなことはないよね。まああんまりそういうふうに話をしていると、妙ちきりんな具合のところ(笑)出て来るですね。

さらぎ(共産同) そうですね。

小長井 さらぎさんのところに敢えて申し上げれば、去年のエンタープライズの時、現地闘争主義という批判を持っておられたのかどうかよく知りませんが、現地には行かれなかったわけですよ。そして有楽町や外務省でおやりになったというのは、やはりあれこれの戦術上の誤りなのか、それとも思想的な必然的な結果としてそのようになったのか、その辺はどうなんですか？

さらぎ(共産同) あれはね、関西の部隊を佐世保に出して、東京の関東の部隊は東京の中央闘争を闘うという理論的な位置づけですね。現地に行かなかったというのは、政治的発言です。

現地と中央の二つと云うことは、あのころから云っていたわけなんですけれどね。中央権力闘争というのは、常に中央の権力に向けて攻め込んで行く。これは先進国の一つの革命の型であって、後進国の場合ですと、平面的な空間に、生産から流通から政治行政権力が、ワン・セットづ

つ分散して存在するわけですね。だから毛沢東のように、空間を取って一つの権力支配地区を確保して行くということが出来るわけですけども、先進国の場合はそうは行かない。権力支配構造が非常に立体的時間的で、一点にあるわけですね、国家権力の中枢が。その一点を取ることで、奪った政治権力を軸に全社会を変革することが出来るわけです。

ロシアの場合特にこの政治権力が大衆の生活から浮いていたのですけれども、近代の完成された国家の場合はそれだけでは不十分なんです。だから直接独占が権力を握っている生産の支配の場、労働力の再生産の場——学園ですね、それから行政官僚機構が全体を握っているところの交通・通信中枢ですね——新宿とか神田とか御堂筋だとか——そういうところ全体を占拠して全体を麻痺させて行って、闘う者にそれらが自分たちのものだと思わせる。政治革命は社会革命を内包していますからね。そういうものとして位置づけるといって構造です。

その立場から現地と中央という形に二分化したわけですけども、中核さんの場合は一点に集中されて僕らより非常に効果を挙げたと思います。

水戸 その占拠がね、本当に革命の時点でもかなり永続的におこなわれるというのであれば、革命の中の闘争の形として非常によく解るけれども、今の場合にはデモンストレーションですね、やっぱり。デモンストレーションとしてしかおこなわれていない。で数時間経って機動隊に追っ払われれば引き揚げると。そういうことを敢えてやるというのは……

さらぎ(共産同) そうですね。それはこういうことなわけです。

ロシアなんかの場合ですと、プロレタリア独裁を創る以前の段階で、自然発生的にソヴェトが

出来ているわけですよ。第一次大戦・敗戦という外的インパクトによってツァー権力が崩壊しますが、ブルジョアジーも政治権力を把握出来ない。プロレタリアは自主統轄して行く組合も、政治的民主主義もない状態に置かれていたから、澎湃として自然発生的に決起したのです。そこで二重権力状況が出来たと思うんです。

ドイツの一九九年の場合ですと、ウィルヘルム二世ですか、立憲君主制になっておりましたけれど、この時は社民もすでに議会に代表を送っておりまして、独占は国家権力を実質的に握っていましたね。そういう状況でウィルヘルム二世が倒れる中で、ソヴェト——レーテが自然発生的に出来ますけれども、社民は結局レーテをつぶし、スパルタクスを弾圧し、ローザを殺して、議会でブルジョアジーに支配されて行ったわけです。

現在の帝国主義国家の場合ですと、ソヴェトが自然発生的に出来るというように甘くみてはいかんと思うわけです。それがドイツ三〇年代の教訓なんですよ。

さつきいいだ・ももさんが、レーニンの復権と僕が云った時に、何でもかんでもレーニンの丸写しじゃないかと云われたんですけども、僕らはレーニンの原則を主張するわけで、その原則を現代的に適用するという意味でソヴェト権力を創らなければいけない。それを現代的に云えばどこどこから創って行くかということなんです。そのソヴェトを創る質を日常不断に現在の一つ一つの運動の中から構築しようということ、ブンドの党派的な言葉でいえばソヴェト運動ということですけれども、ブンドはソヴェトが出来るか出来ないか解らんのにいつも三年先のことを云うと云われるかも知れないけれど、今からコンミュニンの団結の質を創ろうというわけです。

ソヴェト運動という場合は、中央権力の直接の奪取と、資本の生産支配に対する奪取、それと地域全体に対する奪取というこの三つが結合しなければならぬと思うんですけれども、その運動を現代的にどこから創り出して行くかということなんです。

で、現在の状況では政権奪取というような条件は、まだ僕らの主体的な力から云ってもないわけですね。ないにもかかわらず、先進的活動家と云いますか、レーニンの言葉で云いますと党と党によって訓練された部隊ですね——社学同だとか——それから先進的大衆という、姿形は社学同と同じようにヘルメットと棍棒を持っているけれども、戦略的な位置づけはないというような日大のノン・ポリの諸君のような層、それから普通の大衆、こういうふう意識状況は階層的に分れると思うんですけれど、その先端の部分に権力奪取の意向が少しでも芽ばえた時には、これを全体的に普遍化する方向性を与えるという意味で、中央権力奪取ではなくて中央権力を目指して突出するという形で、中央権力闘争というのを僕らは設定するわけです。そういう意味で防衛庁にも突入するし攻撃もするが、そこを永久に占拠してそこで権力が取れるというようにクーデタ的には絶対考えていないわけです。

そのことによって国家権力の威信を傷つけ、国家幻想のペールを剥ぎ、大衆のマツセン・スト状況とか学園闘争と結合して、権力の問題を直接暴露して行くということ、そういう質を持ったバリケード戦を学園の中で進めて行くということです。

学園闘争というのは、個別学園の中でしたら、個別学園の利害から闘争が起りますね。しかし全共闘は個々の改良要求を超えて、入試阻止のような帝国主義秩序の社会的再編に反対する闘争

に発展させる。その闘争一つやれば、参加する学生は市民社会に於ける自分の将来の地位もなく  
なる、卒業も振るといふ状況の中でも、どんどん高校生にまで闘いの波は拡がる。こういう自然  
発生的な波を、戦略的に高める闘いが中央権力闘争であるといふことですね。僕らが権力奪取が  
出来ないのにもかわらず中央権力闘争をやるといふのと同じ次元に、学園に於ける占拠闘争は  
あるわけです。

さらに、その闘争によって培われた社会革命の質を、もつと流通機構である街頭にも拡げて行  
くという意味で神田カルチェ・ラタンに打って出たといふわけですね。その次元でいいか悪い  
かということが直接問われて、そのこと自体が全市民社会を揺るがして行く状況になるであらう  
と。

そういう意味で学園闘争、中央権力闘争——街頭闘争・街頭のバリケード戦というのが三者統  
一的に考えられているということなんです。

清水 さらぎさんに意地悪い質問をしますけれども、同時革命というスタイルの街頭バリケ  
ード戦術というのは、ヨーロッパの場合だと去年はある意味でその意味があったと思うんですよ。

と申しますのはご存知のフランス五月革命ですが、これは単なる政治危機ではなくて体制の危  
機だった。三月二二日グループを先頭とするバリケード戦術、それからドイツならば五月に於け  
る——丁度同じ五月ですけれど——非常事態法宣言、これもまた、もしそれがひっくり返され  
たら、これは政治危機に止まらず体制危機になるようなものであったんで、ドイツSD・Sを中心  
としてフランクフルト、ボン、それからベルリンでわあーっとバリケード戦術をやったわけです

ね。

それと同じように、日本も体制危機にあるという判断でやられるわけですか？ それとも政治  
危機の状況ではあるけれども、社会革命をその中に内包するものであるからというくらいの意味  
でやられているわけですか？

ヨーロッパの場合は、昨年は負けたけれども土壇場の体制危機にあったんで、全部がバリケ  
ード戦術に出て行ったわけですよ。その辺はどうでしょう？

要するに政治危機という次元でバリケード戦術に出て行くということは、俗論に云わせるとあ  
る程度マイナスの要素も出て来るだろうと。例えば、単に政権の交代に留まってしまうようなら  
ば、逆転現象が生じて来る可能性がある。どうせ政治危機ならば選挙でもってごまかされてしま  
うんで。

体制危機の状況に追い込まんがために、ドイツSDS、フランスJCRあたりは街頭に出て行  
ったわけでしょう。

そういう状況に日本はあると思っっているわけですか？

さらぎ(共産同)?.....

小長井 どうなのかなあ。まああらねばならんのだろうけれども。

清水 つまりこういう質問になるんです。

六七年の一〇・八からの基地闘争、エン・プラ闘争、これでしたらある程度ずーっとつながっ  
て行きますよね。

しかし、新宿、神田、防衛庁——防衛庁はちょっとつながるな——は俗論から云わせるとちょっと違うんじゃないかねえかという向きがあるわけですよ。違うんじゃない、ということの必然性としては、ドイツの例、フランスの例を出されれば、これはもう見事に体制危機にあったんだから。さらぎ(共産同) 日本の現在の佐藤政権の性格や日本に於ける階級関係と、ドイツ、フランスと違うんじゃないかということですか？

清水 そうなんです。

さらぎ(共産同) お宅が体制危機という言葉は僕らでは政治危機という言葉を使っているんだと思うんですね。でお宅が政治危機という言葉を使っているのは政府危機と云っています。

僕らは、政府危機を政策阻止闘争で作ることによって革命情勢が到来するというようには考えていないですね。

かつての姫岡君の理論からいったらそういう論理がありましたですね。

本多(中核派) 僕とブンドの方と多少ニュアンスの違いはあるかも知れないけれど、僕は七〇年問題として提起されている安保問題は、非常に大きなものだと思う。

いわば、日本の帝国主義の基本的世界政策の成否をめぐって展開されるものなんです。さらに、帝国主義の世界編成という面から云うと、先程も話しましたように、一つはドル・ポンド国際通貨体制を軸として、もう一方ではその上の帝国主義的な意味での集団安全保障体制と云われるものを軸にして、帝国主義の世界編成が形成されていますが、アジアに於いては日米、米韓、米台、それからSEATOという多角的な集団安全保障体制という形をとって、帝国主義的な支配

体制が維持されている。

結論的に申しますと、これがベトナムの問題をめぐって大きく揺さぶられている。ここで日本がどうするかという意味では、非常に大きな問題になります。日本の帝国主義の歴史的運命にとって、かなり大きな歴史的選択の過程に入っていると思うんですね。僕らはその観点から、今度は逆に一〇月二二日の戦術(新宿の米軍タンク車阻止闘争)などを規定しているわけですね。勿論あれは、都心を侵略の武器としての米タンクが走っている、という意味で、東京都に住んでいる人間にとって切実な問題ですからね、そういう問題をも引き出しながら、同時に、われわれは七〇年に向ってのプロセスとして位置づけて闘っているということですね。

## 二 オデンと只乗り

——革命的規律の問題——

水戸 成田闘争の過程で、六八年二月二四日の集会参加者がオデンを只食いしたとか、電車の只乗りをしたとかいうことで、これに対する非難というのが相当集まったですね。こういう問題、つまり革命家の規律とか品性とかの問題ねえ。

鈴木(M.L.) あの事実関係から云えば、オデンの只食いはここにいない党派がやったわけだけれども、僕らはね、一般的に泥棒が悪いというふうには云わない。

それから電車の只乗りとオデンの只食いとは区別したい。

つまり、市民あるいはわれわれの云う被抑圧人民に直接被害が及ぶような形で盗賊を働くとい



うのは、これは絶対いけない。これは三大規律・八項注意を引くまでもなく、そういった規律はキチツとしていなければいけないわけだけれど、そのことと例えば国鉄を只で乗車するのはいかんということとは直接つながらない。

これはこれからも僕らやるだろうし、それはやっぱり国家権力を批判することの一つの表現であると云っちゃっていい。

本多(中核派) 僕らはこの問題については少し違った位置づけを持っていきますけれどね。

さらぎ(共産同) 僕らはですね、倫理観なんてのは一般的にないんで、革命的利害、階級的利害で一切を考える。泥棒がいいとか悪いとか云ってもね、貧乏人が金持ちから盗るのが一つの必然の場合もあるし。そんなことを肯定したり奨励したりはしないですけれどね。

で、国鉄の電車は革命部隊を運ぶために、当然人民電車化して行く。バスも取って行くというようなことも起るだろうということですね。

一切ブルジョアの倫理に縛られず、自由な解放された、カラツとした明るい立場ですわ、ノビノビと……

(数人一斉に発言)

いいだ(共労党) オデンの只食いというようなことを事実として仮定しての話だけれど、私は端的にそんなことは悪いしまずい、ということに尽きますね。

それはブルジョア的な「法と秩序」の立場から云ってまずいと云うんじゃないで、まさに革命的自己規律の観点から云ってまずい。決りきったことだ。共産主義運動が必ず持つ道德的ヘゲモ

ニーの上からも、革命運動の発展利害から云っても、そんな逸脱はもうまずいことだ。(鈴木「賛成です」) 弁護なんかする必要は革命党にはさらさらない。

さらぎ(共産同) 小市民の屋台のオデンの食い逃げはミミツちいね。カラツと大らかでなけりや。

鈴木(ML) オデンは絶対まずい。

本多(中核派) いや、だけれどね、僕は泥棒というのは私有財産的行為の一つだと思っているんですよ。私有財産に関する運動の一形態だから、泥棒を肯定するような思想はないですし、そういうことをしたこともありません。

勿論、ブルジョア的な倫理意識なんかを全く気にしないで必要に応じて行動して行くということについては、僕は一般的に反対じゃない。

ただ電車に無礼で乗るなんていう問題はね、敵との闘争の関係からも得じゃない時がいっぱいあるわけですよ。

水戸 政治的な観点からですか？

本多(中核派) 政治的にも、それから弾圧の面でもね。だからその点は僕らとしては、切符を買って入る一つの組織的な準備やなんかを、どうシステムティックにやって行くかというような問題として、われわれの中で積極化して行けばいいんじゃないかと……

水戸 ただそれは政治的な配慮だけじゃなくて——電車は別としましてね——革命的な倫理という観点から肯定されないという行為も勿論あるわけですよ。

鈴木(M.L)、さらぎ(共産同) たくさんある、たくさんあります。オデンのみならずね。さらぎ(共産同) しかし革命をやる人間が、ブルジョア倫理に解ったような態度をとるのは良い主義だよ。闘いの中で、コンミュニンの団結の中で、革命の規律は生れるんだ。

鈴木(M.L) ただね。似たような問題でね、例えば羽田周辺の民家で、土足でパバーンと上がったということ。あれはね、ご存知のように機動隊も踏み荒したんだが、後で謝りにも行っていますけれどね、一つの闘いの中でああいうことが起きることもある。ああいうのをいいなんて云わないけれども……

さらぎ(共産同) 鈴木さんよ！ 中共の毛沢東は東洋的倫理一般とか何とかを説教しているけれどもね。一方ではいわゆる『行き過ぎについて』という論文などでは、敵に対しては無茶苦茶やっつけていって云ってるしね。現実の革命闘争の中では、山の中ばかりでやるわけにはいかんしね、畑も踏み荒さんならんしね、家も焼けるよ。現実の階級闘争の過程では世の中が混乱し、ブルジョアの倫理観、秩序意識等、市民社会の価値観の破壊状況が起る、これが革命ではないか。

世の中のブルジョアの価値観が破壊されたら困るので、ブルジョアの方からああだこうだと宣伝し、革命党を非難するけれどね、悪宣伝されるのはある程度やむを得ないんじゃないか。ま、そこでもいい子になってもしようがないということですよ。革命という歴史的激動を、絵に画いたようなキレイごとと考えている諸君は、大衆がバカバカやり始めるとビクビクするんだ。

いいだ(共労党) いや、ブルジョアの方からああだこうだということに把われる必要は全然ないか。

いけれど、そういう革命運動が不可避的に随伴する逸脱みたいなものはいわば付き物だが、それを美化する必要は全くない。それを逸脱として自覚して置くことが、私は革命的倫理の観点からいって必要であると思う。革命運動は無論ブルジョア道徳を超えるが、無道徳主義じゃないです。プロレタリア革命はそれ自身の比類ない道徳を持っている。革命の直接的な過程でも、例えば酒樽なら酒樽をぶん捕っちゃってそれを飲んじゃうという現象が起きた場合、革命的な獲得物を飲んじゃって何が悪いかと云えば、それこそ抽象的レベルで云えば悪くも何ともないんだけど、それは革命的規律から云ったら悪いんですよ。

それはやっぱり酒樽をぶち抜いちゃって、ウィスキーを全部流しちゃうという革命指導が正しいんでね。(鈴木 賛成) そういう、革命党にとって当然な平凡なことを、やっぱり私たちはちゃんと云わなきゃいかんですよ。

一般論レベルで云えばね、そんなことは悪くないんだよ。だけどその一般論で云ったってしょうがないわけよ。

鈴木(M.L) だからそういうことは云っているじゃないですか。具体的に云えばね……

いいだ(共労党) いや、反論してるんじゃないよ、誰かに。(鈴木「アハッ、そうですか」) 反論してるんじゃないよ、事柄をはっきりさせるために云ってるわけだよ。ブルジョア宣伝はそこんところを狙ってるわけだからね。

鈴木(M.L) もうちょっと云えばね、歴史的にも例えば打ち壊し運動——わが日本の歴史の中にもさまざま打ち壊しがある。例えば米がなくて米よこせ運動で打ち壊すという場合も、彼らは

米を食わなかったんです。焼き打つちゃう。

あれが僕らの破壊の原型ですよ。

本多(中核派) しかし、その場合にも壊す対象をよく選んでいるよね、打ち壊しているのは。さらぎ(共産同) いいだ革命論は観念論ですよ。毛沢東も云つとるじゃないですか。必ず農民は荒れ狂って行く、時々土豪劣紳の家に押しかけて酒も米も奪うし、山高帽もかぶせる。さらに家族に対してもその何というか——ちょっと云い難いような場面も毛沢東はリアルに書いて肯定してるよね。しかしそれはそれなりに大衆は考えている。すごく悪い奴には悪いようにする、えげつないことをする、多少愛敬のよかった奴には手加減してる、大衆はよく知ってるんだと。

なかなか毛沢東は、革命というものの凄じさと真理を突いていると思うんだけどね。革命は命がけの戦争なんだ。構造改革や議会主義で、相手はハイワカリマシタと、全権力や全生産手段を渡しはしないよ。

小長井 オデンの件は、一一・二四のあれだけの統一行動の成果があっても、オデンで全く泥をかけられてしまうという結果になったんで、政治的利害の問題としては皆認識は一致しているし、それから階級の規律の問題としても全くまずいという点は一致してると思うんですよ。

ただ、今出ている問題の一つの無賃乗車ですね。これは例えば駅を降りたところで向うから襲撃して来た、ワッと逃げた、それが結果的に無賃乗車になったと。あるいは電車の中に入る時にですね、例えば一月一日、エン・プラ闘争に突発する時の飯田橋駅前みたいな、機動隊が予防検束のため、一斉大量検挙に入るような状態になったので、駅構内に飛び込んだ、というような

場合は、たまたま切符なしで行っちゃったということもあり得ると思うんだけど、初めから組織的に無賃乗車で行くんだというようなことが、政治的利害という次元だけの問題として考えられていいのか、それともやはり階級の規律の問題としてあるのかということですね。

その辺をもっと積極的に階級の規律の問題としても肯定するということであるならば、問題があるんじゃないか。

ともかく国鉄の機関は無賃で利用していいんだというように、積極的に肯定しているのかどうかということなんですよ。

本多(中核派) まあ僕なんかの考えだったら一番最後の問題としては構わない。

小長井・さらぎ(共産同) 一番最後のね。

さらぎ(共産同) 革命状況の進展に応じて考えるよ。

本多(中核派) ただそれに行く過程では、別に無賃乗車するほどの必要もない時には買って行くということですよ。

さらぎ(共産同) 基本的には社学同は買わせていますよね。機動隊のいない中にパッと買う。しかし今は駅員も通報してきますからね。学生らしいのが干枚というように権力に目的地を通報するからね。でも、基本的には買わずようになっています。

でもそれはブルジョア道徳に捕われて買っているんじゃないということです。(笑い)

### 三 各派の懐ろ具合

清水 オデンを食うにも電車に乗るにも金が要る(笑い) わけで、運動を続けるには膨大な資金が必要だろうと思うんですが、各派ともその台所は大変でしょうね。皆さんの基礎的な資金源はどこなところですか？

鈴木(M.L) この本の印税です。(笑い)

清水 六〇年安保の時、私大学院でお金集めて廻りましたけれどね、その時私が頼んで歩くのは千円単位なんですよ。

今全共闘系が資金カンパに来るのは、万単位ないしは一〇万単位です。出します、勿論。

いいだ(共労党) 私らの資金源は、党費と機関紙『統一』の読者紙代と支持者の資金カンパ、それだけです。決りきった話ですがね。

鈴木(M.L派) われわれもそうです。ただ大衆カンパがありますね。

いいだ(共労党) だから結果的に云えばピーピーだ。(笑い)それでピーピーであるということはある意味では大衆の支持がまだまだ薄いということでもあるから、私たちとしてはそう快しとしていないんで、(笑い)ピーピーでない状態に早くなりたいと思ってる。それは政治的に云えば大衆との結合というありふれた一語に尽きると思いますね。

本多(中核派) 僕らは運動規模と資金規模とは同じである、それ以外の運動というのはあり得ないというように考えています。

さらぎ(共産同) やっぱ大きな闘争を組めば大きなカンパが入るということですね。

本多(中核派) そうですよ。

さらぎ(共産同) ただ、それは闘争資金の問題です。個人についてはだいたいアルバイトですね、皆ね。

いいだ(共労党) まあ簡単に云えば身銭切ったの運動だったことですよ。

さらぎ(共産同) 身銭切ったの運動ですね。だから活動家諸君は全部——電車賃から何から全部自分で出しています。

やればやるほど損する闘争をやっているということですね。

鈴木(M.L) 例えばさらぎさんや本多さんは専従費を貰っていると思うんですが、(本多「貰っていますよ」)そういうことは各党ともあると思うんですが、それはしかしわれわれの生活をする銭にもならないんですね。僕らはだから生活がないように配慮しているわけですよ。女房も活動家でなきゃならんし、不幸にも子供も作れないしね。

一方ではしかし、われわれの運動が大衆の共感とともに突出した時に、その大衆的な支持が一つにはカンパという形ではね返って来ている。そういった意味では、僕らの組織というのは基本的には党費が中心なんだけれども、かなり大衆カンパ——新宿駅頭でやっているようなです——に助けられているというか、そういう中で人民によって僕ら育てられているということですよ。

本多(中核派) 二つの問題がありますよ。

一つはね、相当金がかかるだろうというふうに皆は見ているけれど、意外にかからないということですよ。その点をかなり決定的に見落していますよ。

ブルジョア的事業なら、ちょっとしたことをやるにも相当なゼニがかかるでしょうが、僕らは手弁当が基本だから、ほとんど金がかからない。これはちょっと一しよに暮して見なければ解らないだろうと思う。

例えば、二百万枚なら二百万枚のピラを撒くというようにわれわれが設定した時に、純粋に印刷費と紙代しかわれわれは算定しないということになる。ブルジョアの計算からいったらこういうことはあり得ないですよ。膨大な資金がかかりますよ。だけれどわれわれはその時、非常に常識的に印刷費と紙代しか考えないですよ。その後派生的に起って来る出費は部分的に解決しちゃうということ——まず大して金がかからないということが一つですね。

それからもう一つの問題は、やはり自分の力程度にしか金は集められない、その程度しか闘争は出来ないということと、闘争をやった程度にしか金は集まって来ないということですよ。(さうぞ「本当ですよ」)

僕は随分前のことなんだけれど、こういう運動をやるかどうか最後に肚を決める過程で大分参考になったんだけど、『チトーは語る』という本の中でチトーがこういうことを云ったと書かれているわけですね。

それは、三〇年代にユーゴ共産党の幹部がほとんどウィーンかモスクワに亡命して、コミンテルンの金で何不自由なく生活している。そして時々声明を發している。こういう状態に対してチ

トーが、全中央委員を非法下のユーゴに召喚し、次に国際連絡上の費用を除いて、一切のスターリンの資金援助を拒否する、断る。つまり、ユーゴに於けるパルチザン闘争の資金の規模は運動の規模によって規定されなければいけない、ということをや彼が積極的にとったという話です。それを知って——チトーについては別の面でいろいろな批判はありますけれどね——僕はやれるという非常な確信をもって運動を始めましたね。僕らがほんのガリ版で新聞を出している時代にそれを続いで、よしこれで俺も行こうと思つたし、いまだにその考えは変わらないですね。

いいだ(共労党) そのチトーの言葉は私も続んだけれどもね、本多さんの今の發言に賛成だ。

それで、権力とマスコミと特に共産党は、私たちの資金がどこか帝国主義者の側から出ておると云っておるんで、改めてもう一度云うと、私らの党派は幸いにしてモスクワ派でも北京派でもないから、どこか外国の共産党から金が来ることもないし……

鈴木(M.L) モスクワ派と北京派は外国から金が来るんですか？(笑い)

いいだ(共労党) いやそいつは知らない。(笑い)私らのことだけ云っているわけ。モスクワ派でも北京派でもないから。

鈴木(M.L) 他のことを云ってるみたいです。(笑い)

いいだ(共労党) そしてさらに幸いにして、(笑い)資本とも一切結び付きがないからそこから、も何の金も来ない。だからある意味では、本多さんも云ったような党員労働者の自己犠牲的な活動によって支えられている、ということが根本にある。

それから紙上を借りて云えば、是非皆さんが、たくさんの大衆的なカンパを、われわれに寄越

して頂きたいと要請したいと思いますよ。

そうすれば活動がもつと拡がり、帝国主義者に打撃を与えられるという面もある。

鈴木(MI) 本多さんといいださんの発言に全く賛成ですけど、現在ここに小長井さんと水戸さんがいらっしやる。で、それぞれ私たちの弁護と救援活動に、もの凄いやつな活動をなさって下さっている。この方たちの少なくとも僕らと同質同量ぐらいの自己犠牲の上に、そういう弁護活動と救援活動が成りたっているんです。そういう不義理を僕らはしているということです。一方で、その不義理は僕らやむを得ずしているわけです。そういう意味で本多さんほど僕らは、運動やればやっただけの金が集まるんだという自信は持っていないんです。

今度の東大の一八、一九、あるいは去年の一〇・二一以来の弁護料、救援費の総額は、これはもうもの凄いやつが溜っている。東大闘争で俗に二億円と云われている中の、一パーセントが今集まったそうです。一パーセントですよ、二ケタ違うんですわ。

そういうことでこれから僕らは、このゼニ的な傷口(笑い)を埋めて行くという活動をしななければならぬ。この活動の基本的な部分、量的に大きな部分というのはやはり大衆カンパに頼らなければならぬ。

このことは是非いいださんと同様、よろしくお願いしたいと思います。

いいだ(共労党) 「この紙上を借りて」というところだけは私は「われわれ」と云ったんですからね。(爆笑) 鈴木「なるほどそうですか」私の方にだけ来いということではないんですから。(笑い)

## 第二章 学園闘争

### 一 学園闘争の目標

——帝大解体とは？——

鈴木(MI) 最近の諸情勢ですよ。最も具体的に云えば、東大闘争の(一月)一八、一九日が切り拓いた問題、質というのがありますね。これは東大に日本の全学生戦線の力を総結集して、加藤当局を乗り越えて前面に出て来た国家権力との総対決という形で東大構内で闘われた。これはもう、先が見えていたように、われわれの一つの軍事的敗北として結果したと思うんですよ。この軍事的敗北が、その後日大、中大、上智、そして一昨日の電通大に至る各大学のバリケード破壊という形で、ずーっと尾を引いているわけです。

ところが一方、あの一八、一九両日の闘いが佐藤内閣、日帝の支配基軸を揺るがせた政治的勝利というものは少しも損われていない。

小長井 どの点が政治的勝利なんですか？

鈴木(MI) つまり、われわれは日大・東大を一つの頂点とする学園闘争を、日本の階級闘争に於ける政治的な環として設定したわけです。佐藤第三次内閣は発足するに当って、安保、沖繩、大学という——未曾有のお粗末な総路線だと思うんだけど——そういう十字架を負う羽目に

なったわけです。

その中で切り拓いた問題というのは、一つには、大学というものは、日本のブルジョアジーが人民を支配する秩序にとって重要な地位を——とりわけ東京大学は——持っていたんだけれども、その姿を非常に露骨な形で人民の前に示して行った。医学部に端を発した東大内闘争が一年間の闘いによって、全人民的な規模と期待と参加の中で、帝大解体というスローガンに示されているように、ブルジョア秩序の重要な構成物としての東京帝国主義大学を解体して行く闘いとして実現し得たわけです。

このことの中で、今まで人民がいれば明治百年間ブルジョアジーに抱いておった恨みが、東京帝国主義大学の役割に対する恨みとしてもっとも具体的に表現された。「あれをぶっこわせ」という形だね。このことはその意味から云えば、六〇年安保にも比すべき大きな問題提起であったと思うんです。

で、あの闘いが人民に与えたショックの中には、むしろいい意味でのショックが非常に多かったと思うんです。「よくやった」とか「頑張れ」という種類の声が非常に強いということを僕ら卒直に感じてるんですね。

これは——六七年一〇・八から佐世保闘争にかけて、僕らの闘いに対してカンパがもの凄く集まった。それから一年半というものはパタッと止ってしまって、新宿一〇・二一闘争を闘った後のカンパというのも非常に少なかったわけですね。これが突如として一八、一九の後増えた。これはやっぱり、あそこに現われた権力の弾圧の醜さ、これをテレビで見たわけですね。今まで新聞

で、警官負傷二〇〇名、学生五名なんてういのが、いかに嘘かとういことが露骨に見られたということもあるでしょうけれど、もっと本質的には、帝国主義支配秩序に対する不平・批判・不満というのが、支持として表現されたんではないかと思うんです。

そういったことは大きな成果だったと思うんだけど、一方では軍事的にやはりつぶされて来たわけですよ。一八、一九のみならずその後ずーっとつぶされて来た。このような限界を突破する問題を今問われているんだと思う。

清水 帝大解体という言葉が出ましたね。帝大解体というのは具体的にはどうすることですか抹殺することですか？ 大学を抹殺してしまおう……

鈴木(M.L) 帝国主義の支配秩序の道具として、重要な構成部分としてあるような大学の機能を破壊するんです、一言で答えますと。

水戸 永遠に破壊する、闘争をいつまでもやっていてこのまま麻痺させるということですか？ それとも本当に廃止させちゃう？ ブルジョアジーの側が「これはもうやめました、他の大学にします」というふうになるのかも知れない(笑い)……

鈴木(M.L) 僕らは、もし「東京大学を閉鎖する」というふうにはブルジョアジーが云ったらひとまず歓迎するけれども、そういう形でおこなって来るだろう新たな攻撃には必ず反撃する。大学の東京大学を作るなんてことは許しませんよ。

つまり東大入試を向うの側から中止するという新たな攻撃がかかっているわけで、これはやはり、大学をもっと細分化し、目的大学化したりあるいは大学院大学を作ったりという狙いがある

のですが、ひとまず東大入試中止によって、まあ非常に平たく云えば、例えば京大に期待をつなぐというようなことであるとすれば、そういう浅ましい夢も今日明日の闘いでつぶして行く——可能かどうかは別としても。

教育というのは、国家権力とは別のところにあるような、自治とかあるいは教育の自立とか、あるいは公教育とかいうようなイメージをずーっと持っている。それは明治百年以来あった。実際にあったものはしかし、明治百年以来ブルジョアジーの私教育に過ぎないんです。その最も中心の軸になっていたのが東大だと思わなければならないんですけれども、ああいった形での大学の存在というのは永久に破壊することなんです。

勿論そのことは、大学闘争として完結する問題では全然なくて、総体としての社会革命との関連の中での問題です。

大学だけぶつつぶせばいいってことではないから……

清水 それじゃ私からお伺い致します。

こういう意見があるわけです。

いわゆる学問の中立性と云い、真理探究の場と云い、これ自身没価値的なものであるだろう、社会主義社会になったって大学はあるんだ、ぶっ壊してしまつてどうするんだ、と。こういう批判に対して、まず本多さんのお話しを聞きたいんですが。

本多(中核派) まあ大学問題に関する意見を云えば非常に問題は簡単なんです、今日の大学の中で生じている非学問的な状態、あるいは権力の事実上の掌握下におかれているような大学の現状、

あるいは独占資本の利益のまにまになっていくという大学、それからその大学の内部に出ているさまざまな諸矛盾という、これらの問題に対する学生の闘争は、それ自体に対して永続的に闘い抜かれると同時に、これをいわば社会の変革、日本帝国主義の打倒の方向に当面集約していくものとして闘い抜かなければならないということです。

で、当面する階級闘争、特に七〇年を巡る日本階級闘争との関係で問題を具体的に立てれば、当面この大学闘争を發展させて、大学を全体として安保粉砕・日帝打倒の皆にしていこうということを、戦術として位置づけなければいけないというのが僕らの考えですね。

その上で、実は六六年の春に早大闘争が闘われた際に僕が書いた論文の中で、『真理の大学の回復のために』という文章があって、この文章を巡ってかなりいろいろな意見も聞かれているんです、この際それについて若干補足的な説明をさせて貰いたいということですが……

僕は慶応闘争さらに早稲田大学に於ける学費・学館闘争の爆発という事態を見て、学生の烈しい決起、変化、そういうものに非常に感激して、暇があれば早稲田に通うというような生活を當時していたわけですけども、その中で、こういうようにストライキが続ぎ、学内バリケード構築という状態が続いていくと、学問は滅びてしまうんじゃないかというような学生の批判と云うか、当時の逡巡・疑問があったわけで、僕はそういう疑問に対する一つの回答として、今日の大学が非大学化しているというのをいわば実践的な契機にしながら、それに対する反逆の闘いに立ち上って行くこと、大学にバリケードが構築されていること——このことの中にむしろ将来の大学のバネ、あるいは新しい学問を生み出していくバネがあると考えるべきだという意味のこと



を云ったわけです。そういう意味では、主観的にはバリケード大学論みたいなものを意図したもののなんです。それからさらにもっと大きな問題としては、プロレタリアートが将来自分自身を人間的、自然的に解放していく過程の中の諸論理を構築していかなければならない、究極的には人間解放の理論ということですから、そういうものの端緒に担い手を、同時にこの闘いの中で創っていくという意味では、もう一つの大学がここに存在しているんだというふうにも見るべきではないかということで、まあそういうような思いもこめてあの文章を書いたんです。

ところがその後いろいろ討論の過程なんかを聞いてみると、こういうような疑問が出て来たわけですね。

一つは、真理の大学の回復というふうに云うと、元に一遍「真理の大学」の時代があった、そしてそれが最近なくなったというんで、元に戻れと君は要求しているのかと。それからもう一つは、資本主義社会の中で何らかの改革を加えていけば、真理の大学が実現するというようなことを君は云おうとしていたのかと。大別すればその二つの疑問が出て来たわけで、僕のそれに対する答えは、回復という概念はマルクス主義独特の概念であって、過去にそういうものがあつたということを通じて意味するわけじゃないということです。大学という一つの期待感をもって学校へ入ってくる。ところが実際上そこで与えられる現実には、全くそういう期待とは裏腹なものになつている。このところをバネにして進んで行くことを問題にしたんであつて、究極的には、帝国主義の打倒、ブルジョア独裁の打倒、したがってプロレタリア独裁の樹立の方向の中に大学の問題があり、そこでとりあえず、ブルジョア社会的な規制を受けたブルジョア大学の矛盾を解決す

る基礎を獲得する、というように規定しなければいけないんじゃないかと答えて来たわけですね。

最近の大学闘争の発展の中で、その点について再度問題にされる諸君がいるわけで、僕自身の表現もしっかり鞭を掛けないという弱点を自己批判的に確認した上で、そういう理解は少くも僕の真意とは違っているものだというほかはないのです。むしろこの間の大学闘争の発展の中で、ブルジョア大学を否定し、それを破壊していく、したがってブルジョア大学に生きる教授、職員——職員というまた別の問題が出て来ますけれどね——研究者、学生、そういった者が革命に就いて自分自身を否定して、革命的实践に参加していく、過程として大学闘争を位置づけることにもっと積極的な意義を与えるべきだ、という批判なら全く賛成です。当面大学闘争は安保粉砕、日帝打倒の方向に向つての政治闘争として集約されていくことを追求しながら、同時にそれを担う一人一人の人間にとっては、自己否定、したがって人間解放の学と実践を、積極的に究明し創り出していく革命的担い手として自分を創り変えていく過程として、理解すべきだと考えているわけです。

鈴木(M.L.) それは意味があると思えますけどね。中核派の本多さんの意図がそうであつたとして、やはり中核派の諸君が真理の大学と云つてる場合には、かなりその点が不明解なことがありますからね。

本多(中核派) しかしね、これははっきりさせておく必要があるけれど、多少の誤解・混乱が仮りに存在したとしても、主としてその責任は僕が負うべきものです。だけど、この間の大学闘

争の発展の中で、その点は非常に積極的に中核派の学生諸君が乗り越えて進んでいるというところだけは僕は断じて云えると思う。だからその点では、僕に関連した問題、あるいは僕に代表される中核派の問題として、その表現の曖昧さを批判してかまわないし、それからそういうふうな受け取られることの中には幾分お前の責任もあるんだと云われりゃ、僕は甘受しますよ、その批判を。

ただ問題は、中核派にとって今日大学闘争を指導していく基本的な理念は、この間の『前進』（中核派機関紙）をみて貰えばはっきりしますけれどね。先程云ったような思想によって貫かれているというこの事実やはり確認した上で、批判なり何なりを受けていきたい……。

清水 あと、いっださんにお訊ね致します。

いっだ(共労党) お訊ねの主旨は、要するに過渡期国家に於いても大学ってものはあるじゃないかということですね。

で、三点なんですけれど、第一点は、おっしゃる通り過渡期国家に於いても大学というものはあるわけなんです、ただそれが資本主義国家に於ける大学との質的違いともいうべきものは、志向性として、ブルジョア大学とは違って全部の人々が大学教育を受けるようになる方向に発展的に進んでいくことが、過渡期国家が自分を止揚していく全体のプロセスの、一つの中味になるということがあると思うんですね。全体としてはそれは、いわゆる生産力の高度な成長発展ということにからみながら、精神労働と肉体労働の分業の止揚という、共産主義的生産関係の大目標に向う過程に於いて、大学が万人のものになって、万人が大学教育を受けるといふ諸条件がその過程

自体を通して進行するということですね。

第二点は、にもかかわらず現実のソ連とか中国とかいう、いわば現実にある労働者国家の大学問題というのが、それ程現実的な形でうまくいっているかということ。それはいわゆる官僚制的歪曲の問題とからんで、うまくいってない。つまり過渡期国家が歪曲され疎外されて来た過程に於いて、国家官僚、エリート、テクノクラートを生み出すようなものとしての大学制度というのがあって、その点現象的にブルジョア大学と似た面が出ている。それがさざさんが随分前にも云われたと思うんだけど、いわゆる労働の質による分配というような現在の過渡期国家の経済的な制度の問題と絡んで、やはりまだ部分的にしか大学に行けない現状の中で、大学を出た者が賃金的に格差を有利につけられて、そのこと自体が官僚制というものの一つの物質的培養基になる、そういう問題があると思うんですね。だから現にキューバのハバナ大学は最近解体されたわけで、それは別に資本主義国に於ける東大解体だけではなくて、いわゆる社会主義国に於いてもハバナ大学解体ということが起きるし、北京大学も、あれは解体はしてないのかな、解体はしてないけれども事実上閉鎖状況ということは、つまり社会主義諸国のエリート大学が非常にやっばり問題をかかえているということ、それは官僚制的歪曲をどう克服するかということ、非常に密接な関係がある問題であると思えますね。人間の全面的発達という、共産主義的人間像形成のための大学教育を回復する問題です。

それから第三点は、そこから見返してみても資本制社会に於ける大学の問題ですが、私らとしては、出発点に於いて労働者と学生の区別そのものを拒否するような闘いのイメージで今の大学

の変革闘争をやるわけですから、根底的な志向性に於いては、資本主義社会に於いても皆が入れ、入学試験がなくて、卒業免状が問題じゃなくて、その大学卒業資格が賃金と就職の格付けに關係しないと、そういうことを目指しているわけだけれども、それと同時にそれは資本主義社会の枠内では解決出来ないということをマルクス主義者として見通しているわけですね。その意味では根底的志向性をもってその闘いを進めながら、そのこと自体が資本主義社会の中では解決し得ないからこそ、体制全体を問うて行くことになる。むしろ現在の現代資本主義社会に於ける大学というものが、現代の客観的要請に応じた管理支配エリートといわば中級・高級の労働力商品の出来るだけ断片化し部分化したサラリアートの養成・製造機関になっている。その意味での社会的権力になっている。ということ自体をそこから逆に把え返して行って、それを破壊していくということが、社会変革全体をトータルに提起するような大学革命になっていく、それを時間帯で云えば、現在の学園闘争と七〇年闘争とが時間的に連絡していく、そういうプロセスとして考えられるということです。

このようなブルジョア大学の根底的変革の闘いを現在進めることが、先に述べた問題点、つまり、プロレタリア権力樹立後の私たちの未来の大学問題を、真の共産主義的理想に向って解決して行く力と条件を準備して行くことになる。だから、過渡期国家の大学制度の歪みを是正する一つの力は、実は、私たち資本主義下の大学を変革する闘いの中にあるわけです。

水戸 鈴木さんね、今のと関連してですがこれは簡単にお願したんですが、中国での文化大革命の中の学制改革とか教育変革の問題は、もう「誰もが入れる大学」以上のものを目指しているんじゃないですか？

鈴木(M.L.) 全面的な紹介は出来かねるんですが、これは記憶の問題がありますんで、ただ基本的に一つ新しい問題は、いわゆるブルジョア社会にある頭脳労働と肉体労働の分業という概念を打破しているということですね。

具体的に云えば学生あるいは学者が、頭脳労働者としてのみ何らかの意味での再生産に關与するというのではなくて、工場あるいは農村に一年のうち三カ月ぐらい働きに行くわけです。

そこに行つて得られるものは、単に具体的につるっばしふるったり鎌を持つことによつて、何か肉体労働の辛さを知ることではなしに、若年の場合にはそういうことが一つ意味を持つということもあるかもしれないけれど、本質的には資本主義的な労働の質による分業、というよりは質による階級化というか、上下の格差付けのようなものを取っ払い、且つ人間社会に於ける本質的な労働生産ということの意味を学ぶ。彼等は実践を通じて知るといふふう云っているけれど言葉は非常にやさしいけれど……何といふかな……

水戸 しかし、それだけじゃないでしょう？ いわゆる工場へ行くなんてことだけじゃないでしょう？ 中国の変革の目指しているものは、もっと根本的に、解放された社会に於ける学園、学校の理念の先取りという面があるんじゃないかと思えます。

## 二 学園闘争をどう発展させるか

小長井 さっき、鈴木さんから軍事的限界という問題が出されたんですが――

一・一八とか一・一九の後で確かに全国にワットと学闘争というのは拡がりましたよ。しかし今度また京都大学で入試阻止の問題が起ります。鈴木さんは単に軍事的限界の問題と云われたけれども、東京でもって実機機隊によってあらゆる紛争が鎮圧されてしまう、それがまた京都に行つてまた駄目になってしまうというように、あらゆるところが軍事的敗北の過程という形でもって、学闘争というものは終焉するんじゃないかと……

(数人一斉に発言。騒然となる)

そういう形になるかならないか。

鈴木(M.L.) 最近の中核派の方針から云って、そういう懸念を本多さんは持っているんじゃないかと思ふんだけど。

本多(中核派) 軍事的に敗北して行くだろうって？

全然そう思っていないよ。学闘争の局面についてはね、僕は非常に楽天的で肯定的な評価を持っているということですね。

昨年暮から今年の春にかけて坂田・加藤がやった策動の中心は、東大の入試中止、東大閉校ということに恫喝の手段にして、東大闘争のブルジョアの收拾を計るところにあったんです。われわれはそれを文字通り、(二月)九日から二一日にかけての闘いの中で吹っ飛ばしてしまつたというところに、この間の東大闘争の持っている積極的な意義があると考えています。

このような学闘争の永続的、非和解的な発展、これは全国闘争としても進みつつあるし、東大闘争としても質的な前進を遂げながら進行しているのですが、こういう学生の闘争に対して今

日では国家権力が直接的に弾圧を加える、つまり、学生が大学の中に入ると捕まるといふ弾圧にまで敵の弾圧をエスカレートすることなしには、大学のブルジョアの秩序を維持出来ない。ここまで敵を引き出したというようにわれわれは評価することが出来るんじゃないかと思ふ。

そういう状況の中で、次は文字通りこの八、〇〇〇人の機動隊をどうやって粉砕するかという問題を、権力との関係で云えば真正面に据えて、そこに向つてどういう態勢を築き上げて行くかという問題に学闘争は一つ進展していると思ふ。だから東京大学の中で云えば、永遠に解決されざる非和解的永続的闘争を展開する。

僕らはそもそも現在の段階では、学闘争の基本的スローガンは、「大学を安保粉砕、日帝打倒の砦にせよ」で表現しているわけですね。学闘争を、沖繩奪還・安保粉砕の方向に積極的に合流させて行くと同時に、東大闘争、日大闘争として勝ち取つた質を全国化するという形で現在の闘争の局面を進めているということです。

しかし個別大学の現状から云うと、八、〇〇〇人の機動隊に代表される権力の軍事的な攻撃を、現在の段階で直接的に撃ち返す力というのは、例えば日大闘争を軸にとつて見ても決してあるとは云えないわけですね。正直いって現在の日大の力は、(1)数百人のアクティヴ。それから(2)数千のその周囲にいる積極的な分子。それから(3)数万の好意的な学生ですが、学生の大半が好意的に闘争に引きつけられたり離れたりしながら、まだ闘争の過程の中に充分引き込み得ていない今日の状態で——かなり長いバリケード闘争なんかやると必然的に起つて来るような問題も含んでいると思ふんですがね——しかも東大闘争が一定の勝利を勝ち取つた次元の中で、直ちに全面的決戦

に入るよりも、大学闘争の全国的な意味での拡大と、大学奪還闘争の永続的な展開を拡げて、一方では古田体制の動揺を引き出し、他方では四月沖繩奪還闘争の政治的昂揚との合流を計りながら、敵を逆包囲するような状態を創り出して行くこと、いわば昨年九月に於いて、日大が何度権力が入って来てもそれを撃ち破って奪還してしまうというようにした情勢を、東京都の各大学の状況の中で創り出して行かなければならない。そういう新たな激突に向っての一定の準備的な過程をもその内側に含んだ過程である、と僕らは現状を見ているということですよ。

鈴木(M.L.) その結果、現在日大闘争は、あるいは東大闘争は、あるいは中大闘争は、これは新たな激突に向って今組織的な準備をしているということですかね？ その結果、具体的に出て来る方針として……

本多(中核派) うん、それはそうですね。

鈴木(M.L.) それがですね、さっき小長井さんがちょっと……

本多(中核派) つまりまずいって云うわけ？

鈴木(M.L.) そうです！ 今から云います。

それはもう全然まずいということですよ。小長井さんがちょっと云われたように、例えば東大で駄目になって今度は京都へ行くじゃないか、京都でまた駄目になっちゃうじゃないか、という質問にも、これは答えておらんだろうと思うわけです。

本多(中核派) しかしその点に関して云えばね、僕らは七〇年を射程に置いて、七〇年に向って大学闘争をどう永続し、どう発展させて行くかということに、さし当って戦術上の環を置く

からね。

鈴木(M.L.) 七〇年をと云えば何でも許されるということではないと思うんだね。今どうするかということについて少し云いたいと思うんだ。

本多さんも指摘しておられるように、八、〇〇〇人の機動隊を前にして、日大には支えて行く力はないじゃないか？ ない。東大でまさに示されたように、全国から結集してあれだけの武器

——日本共産党時代に十数倍する火焰瓶も用いて、あそこまで闘い切ったけれども最終的には敗北する。軍事的限界と云ったのはそういう問題なんです。

これをしかし突破する鍵を、東大闘争、日大闘争は今までずっと提起して来たと思う。どういうことかと云うと一つは、全国学園闘争の連帯という形での提起、あるいは一八、一九以後は東大闘争の全国的波及という形での提起です。このことをもって具体的に考えてみる必要があるんじゃないか。

日大について云いますと、「不滅」であったバリケードを個別に奪取されていっているわけです。つまり周辺学部を落され、経済を落され、法を落され、芸術を落され、最後に文理が落されという具合に。それに対して各学部規模で闘いを挑むか、撤退するか、あるいは最低日大規模で何とか闘うかどうかというように方針が討論される。これでは力量的に闘えない。ひとまず撤退しようというように今まではなっていたのです。

そういう考え方というのはいわば日大内の思考方法だと思ふんですが、そうではなくて、日大や東大のバリケードに対して権力が真正面から——一八、一九で具体的に云えば八、五〇〇の機

動隊が東大に向っているという時に、例えば中大、例えば日大、例えば何大というように、都内の何箇所かの大学が同時に闘いを挑む。バリケードをすでに破壊されたところでは学園奪還という形で、そうでないところはバリケード構築という形で闘争をするならば、東大に引きつけられた機動隊は二つに一つを取るわけですよ。そういった全都的なバリケード構築や学園奪還を許して東大をあのよう粉砕してしまうのか、あるいは東大には例えば四、〇〇〇を派遣して残り四、〇〇〇をそういう各所の闘いに派遣するのか、というように二者択一を迫られる。どちらも権力にとっては困る問題なんです。人数を半減したり武器を半減したりすれば東大はもつと持ちこたえるし、東大に一点集中すれば、都内の各大学では政府にとっては無政府的な無秩序的な暴力的な闘いがどんどん進展してしまふ。権力は対応出来ないではないか。どちらでも困る。

水戸 でもね、現実にはあの時は日大はちゃんと全部バリケード封鎖をしていたんでしょ。実際どこの大学の闘争だって激化したし、鈴木さんのおっしゃるような共同闘争はやろうと思えば出来た。

さらにそれだけではなくて、お茶の水をカルチエ・ラタンにして進撃までしたわけね。そういう意味では正に東大闘争ではそれをやったわけ。

だけど機動隊は攻撃したい時にすればいいんだから、何もこっちが——学生がいくら封鎖したって攻めて来ないんだね。

鈴木(M.L) いやそうじゃないんだよ。

本多(中核派) 判断が甘いね。具体的に問題を考えたらいいけれど、日大の問題だと思っただよ。

實際上バリケードを崩しに入ったのは、鈴木君が今云っているような時間的過程じゃないでしょう？ 君は一応一八、一九というのを例に挙げて、今戦術的な構想を一つの仮定の理論として打ち出したわけだけれど、それを今頃幾ら云ってもしようがないよ。

そうじゃなくて、東大闘争があそこまで闘い抜いた局面の上で、その後の闘いをどう押し進めて行くかというに関して問題が出されているわけでしょう。

鈴木(M.L) だからその問題を解り易く云うのに一八、一九を例にとったんだよ。

水戸 あのね、こういうことだよ。

日大が封鎖解除に抵抗して闘う時に、今度は東大を他の部隊でもう一回再封鎖すべきである、例えばこういうことでしょうか？

鈴木(M.L) 具体的にこうするべきであるという今後のことを云えばはっきりすると思うんだけど。

例えば明日(三月三日)ですね、こうなっているわけですよ。

国立一期の入学試験があるということで京大に集まっている。東京でも闘いが組まれるわけですよ。日大の経済や文理や芸術をもって奪還闘争が組まれるんですね。東大に於いても予定としては、法研封鎖その他何らかの奪還闘争が組まれる。こういう形が一つの原型でね。東大に全国的に結集して軍事的に敗れて、今度は京大に結集して京大の時計台というんじゃないかって、一〇・二

一に僕らが新宿、防衛庁、国会等々で機動隊を見事に寸断し勝利的に闘ったあのスタイルをという事です。

例えば現在都内には一五全共闘あるけれども、これの統一的な機能というのはなくて、闘いは各大学独自のリズムをもっておこなわれているわけです。東大で言えば、一八、一九の後授業再開阻止とか、教授が授業を始めればこれを弾劾に切り換えるとかいう具合に、東大のリズムがあるんですね。

一方では日大のリズムがあるわけです。文理の授業再開が三日になっている、では三日に行つて粉碎しよう、奪還しよう、経済なら別の日というようにそれぞれのリズムがあって、闘いが日時的にずれているわけです。これには国家権力が毎日対応出来るんですね。

もしこれが、現在都内で闘っている一五全共闘が、統一的な指導のもとに同時的に(さざぎ笑う)蜂起するという事になったらということなんです。現在どの全共闘にとっても奪還闘争の問題があって、これをやらなければ闘いが発展しないものとして問題が立てられているわけです、日時の問題は別として。

さざぎ(共産同) 議長!

鈴木(ML) もう一言云わせて下さい、もう一言!(本多「一言ね」)

だからそういう方法を具体的に展開することが出来れば、もはや八、五〇〇の機動隊に現時点では勝てないという問題提起がまちがいであることが、はっきりするということなんです。

さざぎ(共産同) さつきから同時反撃という話が出たんですけれどもね、東大闘争を闘う中で、

ブンドが「全国学園共闘会議」というのを提案しているわけです。僕らの派内の言葉では「全共闘全国評議会」にしたいと思っているわけです。全共闘全国評議会」というのは、学生評議会とか学生ソヴエトとかいうようなものを目指し内包した運動なんですけれどもね、遠大な計画としては。

具体的に云えば、一昨年の一〇・八から一〇・二一までに各党派別に全学連が出来て、それぞれの政治党派の戦略を賭けて国家の総路線と闘った——その中でもの凄い党派闘争をお互いにやっていたわけですけれど——死にもの狂いで闘って来たのですが、現在の階級関係の中でこれをもう一べん学園闘争に返すという事で、各派もそれぞれの拠点に一〇・八から一〇・二一までの闘いの質をもう一度持ち帰ったのです。

しかしやはり個別の闘争には個別の闘争の、鈴木君の言葉で云えばリズムというか、論理がありまして、それによってスケジュールが決められるわけです。それらが東大闘争ということによって一点にまとまる事が出来たのです。

これはどういうことかと云うと、東大闘争が学園闘争に共通するものの集約点であったということです。学園そのものは労働力の再生産の場としてあるわけですが、そういう国家教育行政支配の中核であり、全社会的生産を支配して行くところの幹部労働力再生産の支配中核であり、その上に国家イデオロギーを生産するという意味で、東大はイデオロギー労働力の中心環、統合機能だったと思うんですね。東大闘争はこの統合軸に対する統合的な闘いであったという意味で、全国結集で闘われたと思うんです。

安田の塔に象徴されるのは国家権力そのものであって、佐藤首相を始め国家権力を握る官僚は全部東大出身という格好ですから、国家官僚の象徴がそこにあるわけです。

あそこで僕らがたとえ軍事的に負けても、権力があそこにボンボンボン催涙弾を打ち込み、上からしょんべんのようにじゃあじゃあじゃあ催涙液をかけるといふことは、彼らは僕らを軍事的に粉砕しながら、自分たちの国家の幻想というか、その国家の幻想を支えたイデオロギ―を作っている場所に対する幻想を物質的に破壊してゆく、彼らの攻撃によって破壊してゆくというので、僕ら肉を切らせて骨を切るという形で闘ったと思うんですね。しかも物理的にも軍事的にも相当の闘いをおこなった。

しかしそれは東大が焦点であったからそういう闘いも闘えたと言えりけれど、これが例えば電通大——党派のことを言えば僕ら赤ヘルメットとしてやった闘争で一二九名バクられていますけれど——だからといって電通大闘争に全国結集せよと云っても、それはやはり国家、学園の全体の統合軸としての位置が違いますからね、東大とは。それはやはり無理なわけでしょう？

ではそういう全国学園闘争を全体として闘って、政治関係を変えて行くにはどうするか？

僕らは中大の拠点を抱えているのですけれど、日大にも実体はありますし、中核さん、MLさん、皆日大のいろんな学部を持っているですね。日大を個別闘争として、個別闘争の戦術として、東大闘争が終わった段階で現在どうやって勝つかということを考えても、問題は解決しないと思う。それを全体的な全国学園共闘会議という形で大きな網を打ちましてね、ここで全国学園占拠闘争の統一司令部を作ることによって政治関係を変えて行くという中で、初めて鈴木さんが云われる

ような戦術も全体として有効なものになって行くんじゃないか。

というんで、今現実には闘争の必要性からも、統一戦線というか、統一行動がとられているんじゃないかと思うんですね。

学園共闘会議の積み木的な寄せ集めではなくて、各共闘会議の指導部、全共闘全国評議会として全国学園共闘で闘っている連中が全部中心部に集まって、そこで統合的な機能を果たして行く。またそれをやろうと思ったら、今の全学連、分かれている全学連が一つの機能を果たさなければいけないし、それをまたもう一つ進めようと思ったら、現在ここに集まっている各党派の幹部が、分裂している党派全学連なり党派の関係を大きく変える統一戦線を押進めて、そして運動実態としてはソヴェト運動を展開する中から、一つ一つの戦術を出して行くべきではないかと思えます。

そういう意味で僕らは飽くまでも、東大それから京大という形で一点突破一点突破で移して行ったら何とか政治関係が突破出来る、というようには考えていないということですね。全国的な運動の統一体を創ることによって全国闘争として闘って行くということです。

それから学園闘争が今下火になるんじゃないか、各個撃破で負けて行ったら粉砕されるんじゃないかという心配ですけれどね。今の澎湃として起っている学生諸君の感覚から云ったら、それはもう一発二発粉砕されても絶対消耗しないという構造ですね、決して。

中大なんかでもバーンとやられても、封鎖されてもね……封鎖されるといふのは学生も来られない、学校も再開出来ないわけですね。学校が授業再開しようと思ったら、機動隊を除けて学生を



入れんならんでしよう。学生入れたら赤ヘルメットだけ入れないというわけに行かんもんね。  
(笑い) これは入るわけですよ。

だから中共の解放区というのは空間的に離れたところにありましたけれど、日本のような近代帝国主義国では、立体的な政治関係の中に革命的な陣地が出来て、そこでコミューンの団結が形成されて、永続化された革命運動に発展して行くことなんで、この革命的陣地に於ける団結を軸として中央権力闘争を党が指導し、権力との政治関係が有利に展開する、その中で初めて物理的な軍事戦の問題も考えて行くべきでしょう。

しかし軍事戦は軍事戦としての独自領域があるから、これは全国的な全共闘全国評議会を手始めとして態勢を整えなければならんんじゃないかと考えるんです。

清水 学生評議会というのは、従来のセクトの上に乗った全学連運動への反省の意味が含まれているわけですか？

さらぎ(共産同) 反省というよりも、現在の党派関係をそのままにして一党派に結集する活動家をもつてしては、現在の学園闘争に決起する自然発生的大衆的な闘いを指導出来る態勢にならないためですね。

水戸 だからまた各学園別に全共闘があるわけですね。

さらぎ(共産同) そうです。だから学園別に全共闘が自然発生的に生れているわけだ。そしてその中心には、たいていノンセクト・ラジカルが——今までの党派とは関係のない利害のない人が、媒介項として坐るという形態が生れるわけですけど。従来のように党派の戦略で困り込む

のではなく、運動全体の質を戦略的中央政治権力闘争へ高めて行くに当って、党派の指導性を發揮するということですね。

清水 その場合に何といっても大きい要素というのはノンセクト・ラジカルという学生層の決起だと思っただけですね。学生評議会に於けるノンセクト・ラジカルと、それから各セクトとの関係が大変難しくなって来るでしょうね。

学生評議会の全国共闘をつなぐ案に対しては、本多さん辺りはどんな意見ですか？

本多(中核派) 僕はね、現在の大学闘争、学園闘争を發展させて行く上で、各大学の共闘会議がそれぞれ全体として連絡を取り、一つの意志決定、共同の方針決定を持ちながら闘いを進めて行くという点は元より重要だと考えています。

しかし七〇年に向っての全体の戦線配置という面から行くと、単純に現在の学生運動に於ける統一の形態を、各個別大学の共闘会議の連合体というように規定することだけで、解決するとは考えられないと思っただけです。

やはり七〇年闘争が日本帝国主義打倒、安保粉砕というような、あるいは沖繩奪還というような、日本の基本的針路に係わる重大闘争になるとすると、その裏側には、当然日本の革命的な変革という問題すら持った過程として進んで行くことになるから、当然そこでは革命の内容が問題になる、したがってまたどういう思想に生き、どういう思想に死ぬのかということが、一人一人の人間に切実に問われて来る過程になるだろうと思う。当然その中では、革命党あるいはその革

命党を中心にして展開される大衆的な運動の高まりもますます強くなって行かなければならないし、強くなって行くだろうと思う。こういう状況について、僕は予め否定的な見解をとることは出来ない。

むしろ革命的党派の選択が大衆の末端まで拡大し、革命と反革命の分裂が大衆的に問われるような状況に運動がどんどん進展して行くことと、しかし同時に帝国主義の攻撃に対して、そういういろいろな諸潮流のもとに結集している大衆が、一致結束して闘って行く統一戦線戦術の問題という、両者をいわば統一的に把えて行くような運動視点、あるいは組織論の視点というようなものももっと明確化されて行く必要があります。学生戦線の統一の問題についても、実践的な側面として共同闘争を進めて行きながら、同時に、党派の選択の徹底的な大衆化の意義を、積極的に位置づけて行くというような視点が重要なんじゃないかというように思っているんですよ。

だからその点ではね、階級闘争の発展は当然政治闘争の発展を生み出すし、政治闘争の発展は必然的に一定の政治的方向を持った党派の存在を不可避的に押し出して来るわけです。もしこの問題を回避したところで政治闘争の発展があるという考えは、非常に抽象的なものと云わざるを得ない。

率直に云ってジャコバン党やジロンド党の存在、バブーフやサン・キュロットの存在を抜きにしてフランス革命を考えることは出来ないし、あるいは一九世紀中葉の闘いにしても、王党派とか、ボナパルチストだとか、レブリカンだとか、ブルードン主義者だとか、ブランキ主義者だとか、あるいは、マルクス主義者の一定の存在を抜きにして考えられないし、いわんやロシア革

日 記  
討論七〇年

大 山

命で見れば、当然ポリシェヴィキやメンシェヴィキや社会革命党の左右が、文字通り革命を目指してもの凄い葛藤をおこなう中で、ロシアのプロレタリアートや農民が自分の進路を決定して行くということになるわけですからね。

むしろその点では僕は、代々木とわれわれの間に起っている今日の闘争というのは、ある人たちが善意であれ悪意であれ考えているように、別に陰惨な党派闘争だとは考えていないんですね。もっとも階級闘争が進めば、代々木との党派闘争はさらに激烈なものになって行かざるを得ない。

それと同じように、今日戦闘的左翼、革命的左翼の内部に存在している党派的对立は、僕は単なるセクト主義の結果というものとしては理解出来ないし、したくないと思っっています。本当だつたら一しょになれるはずのものが、お互い何か邪悪な意図を持っていてなかなか一しょにならないんだ(笑い)というふうには云えないんで、それぞれが僕が最初に云ったように思想的綱領的な存在理由を持っていると思う。だからその点は党派の立場を曖昧模糊なものにするんではなしに、むしろそういうものをもっとそれぞれが磨きあげて行くという闘いをやりながら、同時に、僕らの規定で云えば帝国主義に対する関係、それからスターリン主義者の反動的襲撃に対する関係というものを現実の軸にして、つまり個別でいたら自分たちの存立の条件も吹っ飛ばされてしまうという、帝国主義とスターリン主義の襲撃に対して自らを守って行くという共同の利害をバネとして、それぞれの戦闘的革命的党派が協力する。しかしそれは同時に、ただ単に敵の攻撃が鋭くて自分たちが吹っ飛ばされてしまうという消極的なモメントからだけではなくて、さし当

ではそれを統一環としながら、同時にその敵の攻撃をすつ飛ばしてしまえば、その後にわれわれはもつとより大きく活動し得る、前進し得る政治的局面をこの闘いを通して切り拓くことになるわけですからね。その中でプロレタリアート、学生、人民大衆の共同の戦線を強めて行くというように、統一戦線の問題は二重的に把えて行く必要があるんじゃないか。後者の側面を非常に肯定的に表現しているのが、トロツキーの「統一戦線の最高形態としてのソヴェト」という規定ではないかと僕は思うんですね。

ですから、自分が見出させられちゃうから入れるという形で入って来る革マル式の統一戦線戦術、すなわち、統一行動の過程を通して、主として他党派を批判するための契機を掴むということに主眼を置く統一戦線の立て方は、全くこれはまちがっていると思う。

当然七〇年に向っては、統一戦線を今日ここに来られているような人たちと一しょに強めて行くということになるわけだけど、そこでの党派間の対立は、それぞれの党派が持っているイデオロギー的立脚点あるいは綱領的な立脚点が、激しいイデオロギー闘争を通して止揚されて行くという形でしか解決出来ないんであってね。むしろ、沖繩奪還、安保粉砕、日帝打倒に向って統一戦線を強めて行きながら、同時に党派間のイデオロギー闘争については、それぞれが革命家として持っている誠実さ、あるいは人間としての誠実さに賭けて、それぞれの下に全体が結集して来るといふ状況を、絶えず統一的に進行させながらやって行くと……

水戸 さらぎさんの評議会路線というのは、まさにそういうものとして提起されているのだと僕はとるわけです。

鈴木(ML) いや、そうじゃなくてですね。さらぎさんが云った学生評議会路線というのは、例えば僕がさっき云ったようなやつを具体的に実現する道として、まず学園共闘の共闘共闘みたいなね、共闘会議の統一的な機能創造という問題なんですね。

さらぎ(共産同) あれかこれかではなくて、運動の昂揚に見合った組織形態の段階があると思うんですね。(鈴木「そうだね」)

個別学園を個別学園として闘ったんではまずいんで、個別学園を全体として統一するということになりですね、初めは。

しかし個別学園でも、各諸党派の位置づけや、その個別学園に於けるいろいろな派の人がどのぐらい闘えるかというのは違いますね。そこでやはりもう一ぺん質が問われるわけですね。党派と大衆活動家とともに質を問われる。

全共闘に集まっているノンセクト・ラジカルといっても、山本君(義隆)東大全共闘代表、最首君(悟)東大助手共闘会議)のような、六〇年世代から大管法世代の人たちがもう一ぺん自己総括を通し、自己否定の論理をもって蘇って来る場合と、日韓以降沈没して下から出て来る人、それから全然新しくグーツと出て来る秋田君(明大)日大全共闘議長)のような層ね、いろいろな質を持つ個人と層が、現在の自然発生的昂揚を形成していると思うんですよ。そういう人たちを混然一体として包む運動が起っているわけですね。これを統一的な運動に高めて行くには、全学園共闘が必要だと思うんですよ、

しかし、一つ一つの東大の局面、局面をとって見ても——まあ他党派のことを云いたくないん

だけれども、欠席裁判で——青（社青同解放派）がやり切れなくなつて引く。本当に最後まで闘ったのはブンド、中核、MLで、こう三人並んでいるこれらの派は断固やるという形になる。まあ、今日来ないというのも、やらないから来にくいという一面も（笑い）あると思う……

本多（中核派）　そういう事実の問題はあるね。

さらぎ（共産同）　革命運動は命がかかっているから、口ではいろいろ云えるが、事実厳しい問題があると思うんです。革マルの逃亡も勿論そうです。（本多「一番あるね」）一番だと思っすね。

欠席裁判をしてもしようがないんだけど。だからね、全国共闘を創っても、闘いが進んで行った場合には、どうしても七〇年安保に行くわけですね。七〇年安保を闘えない、個別学園を政治党派の草刈り場と考えたり、ただ勇敢にやろうというサンジカリスト的部分は耐え切れなくなつて落ちますよ。厳しさは口じゃ云えないね、これはね。落ちるし（水戸「それでいいんだ」）落ちてもいいし、それをなお担って行こうという党派は、澎湃として起ったいろいろな種類の大衆の質を包括する論理を出して行かなければならない。それをどこの党派が出せるのか、中核が出せるのかブンドが出せるのか、MLが包括する論理を出せるのかということで、熾烈な内部での党派闘争があると思うんですね。

しかしその党派闘争は、全共闘に大衆を集めて置いて、何かそこで見世物をやってワアワアワアワアやると云うんではなくて、具体的にどう闘うかという中で、そういう極めて厳しい階級闘争にどこが戦術を出せるか、どこが全面的な展望を出せるか、真に組織的にどこが担えるかとい

うことで、前衛として先頭に立っている位置自身が問われ、統一戦線が鍛え直されて行くということですね。その点では中核さんとたぶん対立するんじゃないの？　昂揚する大衆と別個のところ、立脚点主義の党形成は出来んと思うんです。

### 三 戦略的地平の拡大

——階級形成の問題——

水戸　ブント、中核、MLと云われたんですけど、いいださんのところの闘い方は？

いいだ（共労党）　ええ、今さらぎさんが云われた結論の部分は賛成ですよ。

話の糸口は、鈴木さんから提起された、日大闘争のことだけではないだろうけれど、今の国家権力との全面衝突になった学園闘争の局面を、東大・日大闘争がああいう形で新しい地平を開いた中で今後どう闘いつづけるか、ということから来ていると思うんですけども——

そこで、例えば全都に於ける一五共闘の共闘を創ってその統一的機能を果させるといふことも、私たち自身も提起して来たことであるし、それから七〇年への準備ということをいわば口実にして、今の局面で実際上は待避と撤退だけの戦術に後退することではまずいということも、私は賛成だな。それからさらぎさんから提起された、全国的な学園共闘の共闘とも云うべきものを今やはり創るべきではないか、それはある意味では振り落しなども含みながらも、七〇年への学生戦線統一の一ステップになるだろう、ということも賛成なんですけれどね。そこを前提として踏まえて云うと、こういう問題を私は感ずるんですね。

例えね……犠牲の数を自ら云うてみてそれを何か連帯の証しにするというのも、全く下らない云い方になるんだけど、都内のある大学で云えばつい最近の手入れで私たちの部隊も一〇名以上バクられたわけですね。京大闘争も、私自身が行って京都の労働者党政治集会を開いた一月一六日に、決断して占拠に入ってしまったわけですよ。その時点の内部だけの力関係は、リアルに分析して、ほとんど二日と民青の包囲の中で持ちこたえが利かんと云うことが、最初から解っているわけですね。しかしとも角にも東大闘争に連帯しなければいかんと云うんで、占拠に入っていく中から、全国的同質性を持った闘いを西の方で突き出して行く。そういうようなことは幾らか意識的にはやっているわけですよ。そういう実践的立場から云って、今鈴木さんが云われた提起の前提になっている考え方に、私はやはり問題があると思うの。それは、私たちが現在の学園共闘の大衆的創意を、単なる党派連合ではなくて、大衆自身の統一的戦闘体として扱っていることと関連するんだが。

鈴木さんの問題提起の中には、「軍事的には敗北した、政治的には勝利をした」ということがあって、しかし同時に……

鈴木(MI) そういうように云われておると。

いいだ共労党 うん、云われておるとして、鈴木さんの当面の関心は、その軍事的敗北から来る軍事的限界をどう突破するのかという問題に集中してしまっている。その限界を乗り越えるために、一五共闘の統一的機能で同時闘争をやらばどうか、というふうに云われるんだけど、闘争と共闘を強化することは賛成なんだけど、そういう鈴木さんの立て方ではやはり突破出

来ない問題が現在あると思うわけ。つまり大学闘争というのは、政治闘争でもあれば社会闘争でもある、文化闘争でもある。まさに現代的支配の弱い部分から噴出した大学闘争の連続的な質を最大限に發揮させて、全戦線に渉る反撃を組織して、七〇年への進撃路を確保・打開しなければならんと思うんですよ。今一部隊でやっているから駄目なので、五部隊が同時軍事闘争をすればいいんだ、ということにその全面的政治指導の問題は限定され得ない。連続革命の一種のモジリとしての「連続闘争」という使い方もありますね、同時革命のモジリとしての「同時闘争」という立て方もあり得るんで、そういう立て方をする根底には、この現局面に於いてすでにいわずに軍事優先であり、しかも軍事的勝利があり得るといふ前提があるんじゃないか——根本的に云ってですよ。私はその前提に反対なんだ。私らとしてみれば、当然のことながらいかにしたら政治的に勝利をするかという政治戦術がまずあってですね、その中の個別の問題を戦闘技術としてもどうしようかということだと思っただけです。

それでさらぎさんの方は——私は「戦旗」(共産同機関紙)をよく読んでいないんでね、今日の話を伺っていて、今まで随分誤解もあったということがよく解るんだけど——現代国家の立体的構造的な在り方というように云われて、そこに於ける政治関係の中で、物理的な防衛あるいは物理的な闘争戦術を行使するんだというように云われたんですね。大分私の問題意識にも近くなったんですけども。(笑い) こういうことがあると思うんですね。話は飛ぶようなんだけど、鈴木さんの云われた中に例えば、私らもスローガンとしている「帝大解体」ということ的位置づけの中で、これは結局「ブルジョアの私教育」なんだということをそこで赤裸々に突き出し

て行くんだ、という云い方があった。しかし私はどうも「立体的構造的に」(笑い)現代帝国主義というものを考えてみると、これは現代帝国主義ではなくとも資本主義というものは凡そそうだと思うんだけど、まさに公教育そのものの中で、そういうブルジョアの私的利害が貫徹されるというのが、ブルジョア民主主義体制の在り方だと思っんですよ。

今私たちが直面しているのは、そういう現代民主主義体制全体、国家独占資本主義的管理機構全体を、どうやってトータルに変革するのかというところに問題が来ておるから、個別大学の「秩序」の問題としても、大学治安立法を含めた新しい管理秩序自体をどう変革するのかという問題になって来ざるを得なくなっておって……

さらぎ(共産同) いや、違うですね、質が。

いいだ(共労党) あ、そうですか？ まあいいです。

例えば「学生参加」に象徴されるような近代化論的な收拾というものを超えるということが、真の連続的な大学変革のイメージであり、社会変革に切れ目なしに接続して行く大学変革闘争のイメージだというように、私らは考えるわけなんで、そこはつまり、公教育ではなくてブルジョア私教育だったんだ、そのことがはっきりしたんだという考え方は違うわけ。

現在の大学闘争が、欺瞞的な「教授会自治」を柱とした、「大学の自治」「研究の自由」「真理の探究」「対話的民主主義」等々を見事に踏み超えて、結局佐藤内閣を、恥も外聞もなく機動隊による武力弾圧に訴えざるを得なくなるところまで引き出したのは無論大勝利だけれど、そのことと、「公教育なんてものはないんだ」という俗論的階級論をダブらせてしまうこととは別問題

ですよ。そこに現代資本主義、あるいは現代帝国主義の民主主義体制というものの、人民を体制化し得るメカニズム——例えば教育や情報を通じて体制内統合を計る——についての一種の過小評価があるんじゃないか、というように思うわけですね。

そこから話をもっとつなげて行きますと、さらぎさんも先程現代ではソヴェトの自然発生的な形成はないんだと云われたんですが……

さらぎ(共産同) いや、ないというより、それを全面的に期待することは出来ない、むしろ今日から意識的に創らなければならぬ……

いいだ(共労党) だから私はそれに賛成なのよ。賛成するために引き合いに出しているんだけどさ。(笑い)

さらぎさんがレーニン主義に復帰すると云ってもそれは原則が大事なんであって、それを現代的に発展させるんだということなんだろうから、そこも私は大いに賛成なんですけどね……

さらぎ(共産同) レーニン主義時代に起つたことが全部レーニン主義じゃないんですね。構改革の人はすぐ社会現象の変化を云々するけど、暴力革命の原則に対してどうなのか、まず自分の路線を語って貰いたいですね。

いいだ(共労党) (笑いながら) ハイ、ハイ、ハイハイハイ(さらぎ笑う)

それでね、ソヴェトの自然発生的形成というのが現代ではなぜあり得ないかということをもっと考えて見なければならぬ。その一番根幹にはやはりプロレタリアートを体制内化し得るような——今まあ通俗的な言葉で大衆社会とか操作民主主義とか管理社会とか、そういう言葉で呼

ばれている現代帝国主義の、さらぎさんの言葉を借りて云えば立体的構造的な関係があると思ふんですよ。

鈴木(M.L派) (笑いながら)それを称してさらぎさんは立体的構造的と云ったのではないんです。(さらぎ「違ふんですよ」)

いいだ(共労党) ハイ、ハイ。まあいいです。私流にモジったのに残念だなあ。(笑い)

さらぎ(共産同)あなたのように、政治権力と生産権力を分離して立体と理解しているんじゃない。国家権力の政治支配が全社会的に全面的に貫徹していることを云っているわけです。

(いいだ「ハイ」) 大衆社会とかそういうことを云っているんじゃないんです。

鈴木(M.L) 大衆社会とかそういうふうには欺瞞的に……一種の催眠剤……

いいだ(共労党) ちょっと待って下さい。現代資本主義社会では、政治支配がまさに全面的に貫徹しているわけだ。市民社会の全域に至るまでね。そこで古典的市民社会が「大衆社会」になるわけなんだよ。その貫徹はヘゲモニー支配であって、暴力支配だけに一面化出来ない。

つまり私らのグラムシ流の考え方から云えば、政治社会と市民社会が歴史のプロック化される中で、市民社会の一番最底辺にまでブルジョア・ヘゲモニーによる全面的支配が貫徹されるということになる。それが現代では、例えばプロレタリアートがなぜ体制内化するかということの中には、意識剝奪の問題があるから——大学教育がいい例だけれども——意識すらも全面的に剝奪されるから、そこから自然発生的な階級形成があり得ないというふうに出て来るわけですね、私らの論立てでは。そのところを、現代資本主義に即して現代革命の主体形成の問題として把え

ないと、もはやソヴェトは目的意識的形成でしかあり得ないところから、プロレタリアートの階級的再形成を軸とする大衆的統一戦線としてのソヴェトという核心をすっ飛ばして、党派ソヴェトしかないんだ、というところへずり込むと思う。

そこで、今の大学というものにしても、例えば生産過程に非常に近くなって——現代の独占の客観的な要請によって、生産過程に非常に接近したところで、その教育過程というものを労働力商品の再生産過程の一環として営まざるを得ない。そういうところから全体的に、現在の大学変革闘争の問題というのは出て来ていると思うんですね。

ソヴェトが今日では自然発生的な形成が出来ないと云うのは、変革対象として云えば現代帝国主義というのから出て来るんであって、変革主体の問題として云えば、現代プロレタリア革命の問題だと思ふんですね。依然として「プロレタリア革命」「人民革命」なのであって、プロレタリア大衆自身の自己解放の事業なんです。だからそこから出て来る問題というのは、単にそこを、いわば大学が「人民解放区」になり得るとか「コミュニティ」になり得るとかいうような——漫画的に云うとまたいけないでしょうけれどもね(笑い)——現代帝国主義ではあり得ない、まさに私には漫画としか思えないことを個別的な幻想として立てて、そこから現局面で物理的闘争をやって行って軍事的に勝利をし得るんだという問題の立て方をするとね、今軍事的な敗北が続いておいて軍事的な限界がある、これをどうするんだという立て方にならなくなってしまつて、じゃそこで部隊を少し寄せてみようかと、そういう発想だけになるんだらうと思うんですね。

あるいはそこから、個別では駄目だから中央権力闘争だという形になると、市民社会にまでプ

ルジョア支配が全面的に貫徹をしておって意識が全部剝奪されているプロレタリアートを、いかに体制内化から解放して政治権力闘争に革命的に登場させるかという問題が抜きになって、中央権力闘争という、いわば最頂点のここんところをガタガタさせれば全体がうまく行くんだということになる。だから私は、それを反帝政治闘争の一種の先駆的な闘争として位置づけることには賛成なんだけれども……

さらぎ(共産同) 漫画化しているな。暴力革命を自分がやる気があるのかなのか、一切避けて……

鈴木(ML) 漫画ですね。

いいだ(共労党) ……やはり一種先駆的な闘争としてですね、政治的な戦術から来る政治的デモンストレーション効果、プロレタリアートを体制内化している装置にいわば異物を外から与えることによって、プロレタリアートの政治的登場を引き出して来るという、そういう戦術配置を考えていないんじゃないかと思う。

だから、今世界革命全体の問題としても、第三世界というのは、高圧経済に閉じ込められている先進帝国主義国にとっては外側の異物であるわけですね。異物であるものを包摂し切れない世界構造が戦後あるから、その異物のところから——先進国の内部ではブラックのようなそういう異物から、あるいは学生というのもある意味ではやっぱり異物だと思っただけですね——その異物から体制問題が突きつけられることによって、そういうふうな体制内化しておる先進国の構造の全体に亀裂が起り、全世界的に、戦後型歴史ブロックの総体が揺らぎ始まってるのであって、そ

れは必ずしも、先進国に於いて今軍事的な勝利が可能であるような状況がどうか、中央権力闘争に集約すればそこが突破出来るというような問題ではないんだと考えるわけです。

鈴木(ML) それは——ちょっと噛み合わないように、一つは意識的に歪められていると思うだけだけれども……

いいだ(共労党) それは僕の理解能力の低さだ。意識的には歪めていない。(笑い)

あ、それからもう一つ、最後にちょっと付け加えさせて貰うと——

安保が一等最初に出たんですが、七〇年安保の評価については、私はだいたい鈴木さんと本多さんの方向づけに——方向づけにですよ——ほぼ賛成です。スローガン化して云えば、安保粉碎・沖繩基地撤去・日帝打倒、そして世界革命です。

鈴木(ML) 云われた問題はね、結局僕なりさらぎさんの展開の中に階級形成論がないという指摘が一つあったと思うんですよ。それがあから一つは噛み合わなかったんですけどね。それは二番目に展開したいと思うわけだけれども。

第一点として、「帝大解体」というスローガン、つまりブルジョアジーの支配秩序の一つの環たる大学機能を、徹底的に破壊して行くということ自身に対する反対というのはなかったと思うんです、いいださんからも。

いいだ(共労党) そう、そうなんだよ。

鈴木(ML) ですからこれを前提にしまして——ただ、少しニュアンスが違うなあと思ったのは、いいださんは大学改革であると。



いいた(共労党) いや、大学変革！(笑い)

軍事的敗北をどうするんだという形で、今の大学変革闘争の新しい局面での政治戦術を全体的に展望出来るか、というのが私のあなたに対する疑問ですから。

鈴木(M.L) あ、解りました。

僕が軍事的敗北云々と云ったのは、そういうような軍事的敗北という理解があつて、現在の段階では大学闘争は発展し得ない、したがって少し準備期間が要するという見解が先程本多さんから出されたんですが、そういう見解がかなり広汎に拡まっているということに對して、そうではないんだ、軍事的問題を含めた展望が現在のにもあるのである。そういう意味では現在大学闘争がある程度中断して準備期間を置き、もう一回盛り返すんだという方式ではなくて、このまま連続して行ける要素があるんだということを云ったわけですよ。それについてはあまり問題なからうと思う。

次に階級形成の問題だけれども。

「プロレタリアート」という意味ですが、例えば日本の賃銀労働者全体をプロレタリアートと呼ぶとすると、彼らが現実を持っている意識、果している政治的役割は一概には云えないけれども、マルクスが「鉄鎖以外に失うべき何物をも持たない」したがって革命者、破壊者としてある以外に生きようがない存在と云ったところのプロレタリアートとは、全然違った存在の仕方をしているわけですよ。

彼らは物質的に実際どれだけのものを持っているかということとはさておいて、意識としては現

在の体制の中に失うべき多くのものを持っており、現在の体制が持続することによって大きな安心感を持ち得る。僕もさらぎさんも、そういうプロレタリアートが例えば大学闘争や日本の階級闘争の中で果している一定の反動的役割りに無自覚なまま、中央権力闘争やバリケード強化を云々しているのではないんです。

むしろそういったプロレタリアート、あるいは被抑圧人民の多くが持っている反プロレタリア的な、少なくとも非プロレタリア的な意識、ブルジョア的な小ブル的な意識を突き崩す一つの明快な手段として、例えば帝国主義大学としての東京大学の機能停止、徹底破壊の問題を突きつける、あるいは例えば交通・通信機能の混乱を突きつけることによって、いったい現在あるところの秩序とは何なのか、ブルジョアジーの暴力的な独裁体制以外の何物でもないじゃないかということ暴露して行く。

大学闘争で云えば、あのような闘いの中から、医学部にあつては医局制の問題、あるいは大学全体としての講座制の問題で、どうして教授があのような全能の権能を大学内で振り廻して行けるのか、そのために学問的水準がどんなに被害を被っているのかということ暴露されたし、一方日本帝国主義の新しい海外膨脹欲求を支えるところの、日本全体の軍事的な強化をブルジョアジーが遂行する上で、東京大学を中心とする帝国主義大学がどんな役割を果していたのかという問題も明らかにしたし、それから、入試制度あるいは修士や博士の免状がどういう意味を持っているのかということも明らかにした。

こういう具合にですね、ブルジョアジーがそーっとして置いた秩序、その中でわれわれ人民が

知らないままに欺されていた、ブルジョアジーの独裁体制の赤裸々な姿というものを、東大闘争はかなり根底的に具体的に突き出して人民に提起したんです。しかもあの様な形——八、五〇〇対数百という形で闘いが展開される状況が、NHKによって一〇時間にわたって実況中継されるという事によって、民衆に共通な問いを投げかけることが出来たわけですよ——「ああ、どうも警官は酷いねえ」と云ってれば済むといった以上のものをね。こういう事態に対する驚きですよね、一番現象的には驚き。大学には自治があると云われ、学問にも自治があると云われ、権力とは相対的に自由なところどこに何かがあると云われていた、そういうブルジョアジーの支配秩序の正体というのを明らかにすることが出来た。

こういう問題の中から、学生自身が学生という非常に曖昧な、どの階級にも属さない存在であることをもはや許されなくなる。許されないとところで自分のブルジョア社会に於ける一切の地位を賭けてあのような闘いをする。それと同じ質の問題が、東大闘争に意識をもって参加する日本のプロレタリアートあるいは人民の間に提起されて、彼らはいわば新聞流に云えば「考えさせられる」問題に突き当たっていると。

いいだ(共労党) 今まで云われたこと全部賛成、私は。

水戸 ちょっと、それだけではないかにも樂觀的だと思っんですね。

いいだ(共労党) いや、基本的に全部賛成だな、私は。

水戸 余りにも樂觀的だ。それだけですか？(数人一斉に発言)

それだけでそんなに民衆が変わるかというわけよ。

実際学園闘争をやっている人たち、あの闘争を實際担ってやった人たち自身ですらね、これ以上どうやって闘いを続けて行ったらいいのかという形で、戸惑いしていることは確かですよ、各個的に見たら。そりゃ次々といういろいろな大学に移っているけれど。

その問題はやはり、ただ秩序意識を否定するとか、それに問いを突きつけるとか、社会秩序を一時的にでも破壊させてそれを突きつけるという形だけでは……行かないんじゃないか。

小長井 いいださんのおっしゃったこともそういう意味があるんじゃないですか？

いいだ(共労党) そりゃ勿論そう。その先を聞きたいわけなんだ。今まで鈴木さんがおっしゃったことは基本的に全部賛成よ。私にとっては自明なことなんでね。

さらぎ(共産同) 僕もさっきいいださんにちょっと異論があると云ったんですがね。

僕は現在の社会秩序を何かこう民主的に改良して行こうと現在考えるのは不毛だと思っんですね。なぜならば、現在の帝国主義の権力が僕らにかけている攻撃の性格というのは、むしろ現在の秩序をもう一步先攻的に帝国主義的秩序にしようよと、社会の軸のところから積極的に変えて来るといふ意図があると思うんですね。先攻性ファシズムだ……

いいだ(共労党) さらぎさん、途中だけれど、民主的に改良しようなんて云ってるんじゃないんだよ。現に今日だってそんなことは一度も発言しておらんよ。(笑い)

現在の体制が民主主義体制だから、それと全面的に対決し全面的に相手取ってする闘いなんだから、ということ云っているわけですよ。

さらぎ(共産同) 民主主義体制ってというのはどういうことですか？ 体制とは？

いいだ(共労党) 大学問題で云えば、鈴木さんが、公教育という美名に隠れておったけれどもブルジョアの私教育であったことがはっきりしたから、というからそんなもんじゃないと、(鈴木・さらぎ「もともとはっきりしていたんです」もともと公教育というものの中でブルジョア的な階級の利害が貫徹するというのが民主主義的教育なんだと……)

鈴木(M.L.・さらぎ(共産同) (口々に)いや公教育なんてそんなものはもともとなかったんだよ！ いいださんに幻想があっただよ！

水戸 さっきね、階級形成論がないといったんだよ！ それについてただ反秩序意識を振り撒いたというだけでは駄目だと思っただけ……

(この間騒然とした言い合いが続く。)

さらぎ(共産同) じゃそれに僕答えるけれど……

いいだ(共労党) だから民主的改良ってことを私は云ってるんじゃないですからね。それは抜きにして下さいよ。出ない化物を相手にしたってしょうがない。(笑い)

さらぎ(共産同) 現在の帝国主義の攻撃というのは、ぐっと一步、権力の侵略・反革命戦略から出て来ているわけであって、この出て来ている根源に対して現状秩序を維持して何か改革しようということになれば、これは代々木と同じになっちゃうわけですよ。(笑い) 僕らは悪いと思っっているいいか悪いかというのはこれは判断の基準の問題だけれど、(笑い) 僕らは悪いと思っっているしね。「近代秩序の東大法学部にして、裁判官や検事になりましょう。」(笑い)

これに対して、敵の秩序再編に対して積極的な攻撃をかけて行って全面的な対決をする。対決

をする時には、なぜ敵の攻撃が来るかという攻撃の質について把握しなければならぬと思っただけです。

この攻撃というのは極めて政治的な性質を持っているわけでしょう。これはやはり日本の勃興帝国主義がアジアに対して侵略を開始して反革命をやって行こうとする、そこから来ているんです。権力は自らの対外政策をもっと煽りたいし自衛隊も強くしたいし、社会をもうちょっとおとなしくさせたい——こんな学園の無政府状態を一気に押えたいと思っただけですよ。

しかしイデオロギー結集点がないわけでしょう？

第一次大戦以前だったら、古典的民族排外主義を基本にして、イギリスに対してドイツとアメリカが迫るといふ構造でしょう。これは格差の縮まる、迫る形の不均等発展でしょう。ここでは鉄を生産する独占体として同質化した帝国主義権力が、直接植民地を争奪するために民族排外主義を煽りながら、その排外主義にプロレタリアを包摂出来るかどうか権力にとっての中心問題だったんで、単なる一国的市民社会の秩序維持で云々というグラムシ的な国家ではなくて、世界市場戦を媒介とした帝国主義的な積極的な世界政策、排外主義イデオロギーで統一された国家だったわけでしょう。

第二次大戦に至る過程では、プロレタリアートの排外主義への包摂と戦争への動員がストレートに行かなかつた。二九年恐慌を契機とした世界資本主義内部の断絶を基底にブロック化を遂げ、排外主義で自国プロレタリアートを煽った。それでもうまくゆかんから、日本やドイツではファシズムで徹底的に前衛をつぶし、プロレタリアートを叩き込んで行くことでしょう。しか

しともかく資本主義間の断絶を基本にしながら、排外主義を煽って国内の再編をおこなっているわけですよ。

だから危機に於ける帝国主義は国外に出て行く——侵略であれ、反革命であれ出て行くということ、国内の反体制抑圧というものは必ず一体となって総路線として進むわけです。いいださんは国内階級闘争を、帝国主義対立と危機——侵略反革命からボンと切り離して、何か社会的に大衆社会だとか何だとか一般的なことを云ってもしようがないですね。

で、そういうものとして闘う場合に、にもかかわらず大衆というものの、個別大衆というものは、個別利害によって動くわけです。政治闘争というのはもともと全人民的意味を持っているんです。にもかかわらず、人々の日常の価値観にとつては国家権力は見えないわけよ。国家権力に対する政治闘争というのは、全人民的課題を持ちながらも、直接には真黒い服を着た機動隊とやり合わなければならないわけね。そういうしんどい戦術形態を取るから、日常の人民の価値観とずれるということになる。現在のにはベトナム反戦、エンプラ反対等の反・反革命闘争（安保反対）は自然発生的に起る。が、僕らのようにそれを自国帝国主義打倒へ高めるか、民主主義的にアメリカは手を引けで止めるかが問題で、政治闘争に於ける構改派の限界はここにあるんだなあ。

ところが個別闘争というのは全人民的課題ではない。矛盾は本人にとつての個別利害でしょう。大学の中の利害であり、三年生がどうであり四年生がどうである、中大でどうであるというような個別利害でしょう。それは抑圧の問題として全体性・普遍性につながってはいるんだけど、初めは個別課題から発展するわけです。だから、大衆はこの矛盾については個別改良の問題と

して要求する。大衆は改良を要求する闘いを自分たちではどうも闘い切れない。そこで政党を利用する、党派の登場を要求する。僕らは、まあ利用されると云っては悪いけれど、相互浸透の関係として結合して闘う。

しかしこの改良要求がある程度勝ち取られた段階——六項目要求とかが勝ち取られた段階で、その勝ち取られた改良の果実を超えてさらに突き進め、僕らが帝国主義の支配体系全般に対してまで闘うんだと云って突出しようとした場合に、大衆と僕らの分離が起る。その時には僕らは分離を覚悟する——ここが構改派と違うところ。（笑い）覚悟することによって大衆に権力の問題を投げかける。投げかけることによって大衆はもう一ぺん流動する——自己の価値観を、帝国主義権力との闘いに飛躍させようか、市民社会秩序の中に留めようか、とね。流動することによって大衆は必ず分解する。価値観、世界観が分解した左派を僕は戦術内容で獲得する。そのことによって票決で負けることもあろうし、大衆から袋叩きにされることもあるし、代々木からやられることもあるけれども、その過程を繰り返しながら進んで行く。

このようにして階級形成が展開されるんで、単なる学園闘争の連続で、改良闘争を積み重ねて政治闘争にエスカレートするというのではない。個別闘争と階級形成に関する構改派との違いが、ここにもあるわけです。個別学園闘争を政治闘争に飛躍させて行く質を持った部隊の階級形成は、闘争過程を通して——意識分解の過程を通して初めて目的意識的に獲得出来るんであって、何か社会連帯的な改良の積み重ねで——学校制度が改良されるとか何とかの積み重ねでは、革命を闘える部隊は絶対に部隊としては形成されない。ゲバ棒という軟質の角材を手にとってスックと立

つことは、その個人個人にとつても重いことなんでね。

このことが階級形成であるということですね。

こういう連続闘争の中で結成される部隊を「コンミュニクの団結」という言葉で表現しているのですが、その総体がつまり階級形成であり、これを学園や工場の中に築いて行くということですね。学園がそのような革命的陣地となるということを「立体的」と云ったので、立体的というのは毛沢東のように地理的・空間的でないという意味ですよ。政治支配構造の中の立体的な要素として、学園支配とそれとの闘いがあるということ、学園そのものが切り離されてあるということではないということですね。いいさんの好きな「民主主義」について云うと、嘗って自治会という民主主義のヴェールがあって、学園自治会には機動隊が入りません、その中でゲバ棒も用意出来たという時代はもう済んだわけでしょう？ 国家権力が直接末端にまで暴力支配に来る。敵と対決しながら、引く時には引く、押す時には押して、決定的な時には大衆から孤立しても戦って、大衆を分解させて行こう、僕らの党派的な言葉で云えば革命的敗北主義を通してながら大衆の分解を促進して、コンミュニクの団結と党派に結集する部隊を創って行こうというのが、僕らの学園に於ける革命陣地の形成ということなんです。

清水 いいださんにお訊ねしたいんですがね。特に関西の方で民学同系の方が自治会を握っているところもかなりあるわけでしょう？ 先程のいいださんのお話ですと、いわゆる公教育という形を取った私教育の貫徹という、そういう総体はどうやって対決して行くかということだったわけですが、具体的な問題として、例えば鈴木さんが「帝大解体」とパンと云ったのに対してど

のような方針を考えておられるんですか？

いいだ(共労党) いや私も帝大解体がスローガンですよ。私どもの機関紙『統一』をお読みになればお解りでしょうけれど。

ただ、私らの問題意識から云うとですね、大学問題だけに限って云えば、敵の側からも大学の帝国主義的再編をやるうとして行っているわけでしょう。その帝国主義的再編の管理・運営的な側面から云えば、新しい管理秩序という問題があって、新しい管理秩序というものは、最終的には学生の自治というものが完全な幻想となるような、いわゆる自主規制路線というものを含んでおるわけであるから、それはある意味のカッコ付きの「学生の参加」とかカッコ付きの「学生自治会」、それから民青流のいわゆる協議会方式、そういったものを積極的に新しい大学管理秩序の一環に取り入れるようなものだと思うんですね。この近代化路線が、大学治安立法を軸とする大学に対する強制的・権力的支配の側面になって来ているわけですよ。敵さんだって、いつまでも「機動隊大学」を続けるわけには行きませんからね。

だから、さらぎさんは排外主義的にイデオロギー的結集点がないというふうにおっしゃって、それは今の時点ではそうだけれども、さらぎさんのようにそう樂觀的には云えない。いわば「法と秩序」とか、「学生参加」とか、自治会をも組み込んだ形の新しい管理秩序というものは、まさにやはりそれ自体「法と秩序」意識に基づいたイデオロギー的結集点になっていると思うんですね。商業新聞の云う「一般学生」「良識学生」というのは、ブルジョア・イデオロギーによる意識的な形成物なんですからね。

だから、現代民主主義的な大学の「法と秩序」というものがやはりあるわけなんだから、単なる戦後進歩主義や近代主義ではない、それを全面的に乗り越える変革志向が必要なんで、それを単に中央権力闘争に集約するというようなことだけでいいのか。現在の大学変革が持つておる連続闘争という性質からして、社会変革にまで連続させるし、時間的には七〇年にまで連続させて行くというふうには把えるならば、その押え方(中央権力闘争への集約)だけで、国家独占資本主義社会の全体の立体構造・過程の中での全体集約になり得るのか、というのが私の批判的疑問の一つなんですね。

もう一つはね、プロレタリアートの体制内化が現代民主主義体制を通じてずーっと進行してあって、市民社会の底辺まで全部押えられているんだけれども——わが国では「平和と民主主義」への国民的統合ですね——その押え方というのは、ファシズムを通してプロレタリアートを体制内化しているということではないんで、つまり現代民主主義そのものを通して体制内化して、意識の剝奪がそこから生ずるから、自然発生的な階級形成があり得ないということになるわけです。だから、単にプロレタリアートが即自的存在としてはブルジョア意識を持っているということを超えて、現代ではブルジョア側の側が、支配に当ってもう自然発生的に依拠していない。市民社会の底辺、つまり大学みたいな教育過程の細部に至るまで、自分達の意識支配を目的意識的に貫徹しているわけでしょう。そこに今日のヘゲモニーの問題がある。プレ・ファシズム論では解けない。

それをどうするかという問題が出ている時にですね、単にその頂点である中央権力に物理的打

撃を与えればいいんだということでは、現在の全体闘争にはならないんだと……

さらぎ(共産同) いやいやいや、ちょっといいださん！ 漫画化しないで下さい！

(数人一斉に発言。騒然となる)

いいだ(共労党) ちょっと待って！ その意味でさらぎさんがさっき、社会革命を含んだ政治革命というふうに云われたでしょう。(さらぎ「いや、その場合の社会革命というのは……」) 私は大学変革闘争にもその問題をもっと深化して貰いたいし、深化したいわけだ。

大学闘争が起きて来ると、それは全部個別学園闘争である、それでは結局解決出来ないから中央権力闘争になる、とポンとそう飛ぶ。それではね、現在縦深的な連続的な闘争にはならんんじゃないかと心配するわけ。

本多(中核派) その点はね、ちょっと僕にも意見を云わせて欲しいと思うんですけど。

先程さらぎさんの方から出た中央権力闘争というものの位置づけについては、少し僕らは違う見解を持っているというところはご承知の方も多いいんじゃないかと思えます。

今、大学闘争の問題と、日本の社会全体の変革に労働者階級や人民大衆をどう決起させて行くのかという問題との関連が、同時的に出て来ていると思うんですね。ですからその問題についてはただ単に大学闘争の問題というところにわれわれは留まるわけには行かないから、したがって現在の労働者階級に対する帝国主義の支配の仕方、それからそれを打ち破って行くためにどういう闘争が必要なのかということが問題になる。その場合当然、闘争戦術あるいは闘争形態に関する問題と、同時にその内部に於けるイデオロギー闘争、組織闘争といったものを併せて検討しな

ければ、やはりある部分の欠落を意味するということになるんじゃないかと思うですね。

#### 四 学園闘争を七〇年闘争へ

本多(中核派) 僕らが一〇月八日羽田闘争以来の闘争の中で打ち抜いて来た一つの考え方は、七〇年に向っての過程の中で、日本の帝国主義が体制的危機を賭けた大きな選択を要請されているという判断と、それから日本の帝国主義がそれ自身の持っている矛盾を、いろいろなところで示し始めているということです。具体的に云えば、安保の諸実態、諸現実について、眼の前に起っているこれらの事柄について、民衆はまだ、その全体図を必ずしも直接把握していないかも知れないけれども、その個々の現われ方との間には、衝突が起って来ているという面があると思うんです。

したがって、現代の政治過程では、そういう点で、労働者階級や人民大衆に対する政治支配が、新しい矛盾を生み出して来るという点を逆に把えて、大衆的に打ち返して行くというような形をとって諸闘争を激発させながら、これを帝国主義を打倒して行く全体的な闘争局面の中に、どういふふうな位置づけて行くかという問題になって来ると思うんです。

僕らとしては、今日の段階で中央政治闘争が問題になるとすれば、当然、七〇年の安保問題——日本帝国主義の日米安保同盟政策、沖縄政策の根本的粉砕を目指す闘いとして、基本的には集約されて行くという性格のものであらうと思っているわけです。

そういう点から僕らとしては、一つ一つの闘争を具体的に安保に対する闘争として練り上げ

て行くと同時に、その一つ一つの闘争を通して、七〇年闘争とそれによって切り拓かれた七〇年代日本階級闘争の担い手を、大衆的にどうやって創り上げて行くかという問題を、同時にこの過程の中で解決して行かなければいけないと思う。

だから僕らに対しては「玉碎主義」だという批判もかねがあるわけだけれど——ま、ここにいる人からはそういうことは別にないと思うけれどね。

鈴木(M.L.) 玉碎主義なんて絶対違うよ、本多さんは。(笑い)

さらぎ(共産同) 温存主義だ。(嗤笑)

本多(中核派) むしろ僕らは、われわれの組織の全力を挙げて、一つ一つの闘争局面を一点的には打ち抜きながら、しかし同時に、七〇年闘争に於いて最後の勝負をつける——当面の問題としてはね。

鈴木(M.L.) 七〇年で最後の勝負ですか？

本多(中核派) とりあえずだよ。(爆笑) 僕らは七〇年は筋だと思っているからね。(鈴木)「一つの節ね」うん、つまり七一年に勝負するという形で七〇年を過ぎることは出来ない。という意味で七〇年に勝負をつけるという形で全体を集約して行かなければいけないと考えているから、したがってそこに行く過程の中では、いろいろな戦術上の配慮を含むというのはごく当り前のことだね。

例えば日大で云えば、全学共闘会議の下に結集している数百の活動家を核として、七〇年には日大が数万の規模で決起して来るような状態を再度創り上げて行くという方向で、今日的な闘い

をも打ち抜いて行くという視点に立たなければいけないと考えているわけです。また、そうなりますのでしょ。そういう点から、やはり安保あるいは安保をめぐる日本の帝国主義と人民大衆との対決という問題の持っている政治的な重要性を、僕らは大いに強調しなければいけない。

それからデモクラシーってことに關して云えばね、これはやはり帝国主義者が労働者や人民を支配する手段になっている点を、これからの闘いを進めて行く上ではっきりさせなければいけないんじゃないかと思う。(鈴木「それはその通りですね」)

日本では、マッカーサーによって与えられたデモクラシーというものが、多数で決ったことを守れというイデオロギー攻撃として實際上打ち出されて来ているわけで、われわれはこういうデモクラシー、民主主義と云われているものは、実際は帝国主義者による人民の支配の手段になっておるといふことをはっきり突き出してね、むしろ現実の中では、それぞれの持っている階級的な利害、あるいは個別的な利害を真向徹底に打ち出した闘争を、必要などころから打ち抜いて行く、というところから闘いは開始されなければいけない。帝国主義が七〇年に向けて打ち出して来る攻撃の系列に対して、われわれの闘争系列を作りあげる、行動系列を作りあげると云うことを積極的な課題にしていかなければいけない。

特に大学内の学生闘争、あるいは学園闘争と云う意味で云えば、やはり今日大学の内部で起っている諸矛盾、諸問題の解決を大学内的问题として解決していく方向ではなしに、むしろそれを七〇年に向けて大学を安保粉碎・日帝打倒の誓に高めていき、さらに、日本の労働者階級、人民大衆の安保粉碎・日帝打倒に向けての大衆的な決起を内側に集約していくものとして、大学闘

争というものを意識的、戦術的に指導しなければいけないのではないかと思う。終局的には帝国主義大学を粉碎していく、大学を破壊していくという根本的な思想に立ちながら、同時に現在の段階ではそういう闘争の拠点として打抜いていく。そういう闘いを進めながら同時に、労働者階級の内部に於ける行動の組織化の問題も、やはり大学闘争の、あるいは学生を中心とする街頭的政治闘争の激化という過程と結合させながら、それ自身を独自の過程として追求するという政治的、組織的な課題となるので、これについても、当然一定の政策、一定の方向をもって進まなければいけないんじゃないか。

その限りでは、単純に今日の全学連を中核とする街頭的政治闘争の激化あるいは学園闘争の激化が、直接に日本の労働者階級の行動化として、あるいは革命化として、直接に現われるというふうには行かないわけで、今日の段階ではむしろ、反戦青年委員会などを中心とする労働者階級の積極的行動の問題を考へて行く必要があります。ついでに申しますと、思想的な意味で、労働者の中に大学闘争が大きな影響を与えつつあるわけですね。まだ非常に幻想的な形をとっていますが、労働者の中に学園闘争の指導的思想が浸透し出しているんです。同じようなことが自分の工場に起ったならば、一体どうなるだらうかということに対する期待感、そんなところがへずぐに行きたいという願望として、労働者の中のかなりの部分を把えはじめて来ている。この点を僕は、今日の大学闘争が労働者に与えている意識の変化として、把えていかなければいけないと思う。

しかし實際上、現実の、特に民間の資本系列なんかの場合では、それがただちに行動化し



得ない。特に既成の労働組合運動の支配権との関係で云うと、ちょうど、先程デモクラシーが労働者支配の手段になっていることを云ったわけですが、組合という形態が資本の労働者に対する支配の形式に実際上はなっている、手段になっている。個別の職場や工場で反乱が起ると——それは一番最初に起ったという意味では必ず少数なわけですよ、全体からいうと——すると必ずそれは組合全体の機関にかけるという形をとるから、組合からの統制問題や何かという形をとって戦闘的部分が斬られていくということに実際上なってくるわけです。だからわれわれは、当面する労働組合運動の中でさまざまな組織戦術を併用して、労働組合の内部に於ける一定の地位、陣地の確保と獲得の方向を追求しながら、それを通して全体を獲得するというようには固定化しないですね、むしろさまざま行動の組織化を労働組合、職場の内部で独自の作りあげて行く、いわば工場の内部に於ける、職場の内部に於ける党の意識的組織活動の前進というものに媒介されて行かざるを得ないんじゃないか。労働者階級が全体として大きく決起してくるのは、七〇年から、七〇年によって切り拓かれた時代の中でないかと、僕は大きく云えば見ているわけですが、ここでは、資本の支配の道具と化した「組合」を左から突破する、多様な闘争が始まるだろうと思いますね。

ついでに云えば、實際上今日の資本の労働者支配、特に民間に於ける資本の労働者支配というのは、世間で云われる程そんな強力なものじゃないですよ、実際問題として。非常に形式的に押さえ込んでいくという状態で、特に資本と結託した民社党型の労働者支配というのは、僕は非常に脆弱なもんだと理解していますね。七〇年をめぐる政治闘争の激発の中で、政治闘争が工

場の中に流入してくるという形をとって、彼らは動き始めるようになるでしょうが、それをつないでいく労働者内部に於ける革命的組織の問題というのを抜きにしたら、六〇年闘争に於いてブンドが陥った一つの欠陥をここで再現すると考えているんですがね。

水戸 一つの欠陥という具体的な？

鈴木(M.L.) 全学連のデモの後にくつつけると……

本多(中核派) 直接くつつけるかどうかという戦術問題は今は別にして、そのあとから引出されてくるだろうという考え方ですよ。しかし、そう簡単じゃないですよ。

水戸 直接的にインパクトを与えれば、それについて出て来るだろうという考え方を、欠陥と認めているわけですね？

さらぎ(共産同) 労働者の右傾化を学生の戦闘性によってくい止めるという理論ですね。その場合学生を層とみているわけですね、前提としては。層としての学生の戦闘性に政治方針を投げかければ、日本の学生というのは必ず反応を示すという、先駆性論があるわけですね。そのことによって層の学生を政治闘争に決起させ、国家権力が投げかけてくるところの攻撃の中心環を攻撃すると、そのラジカルな戦闘性によって、労働者全体の右傾化を喰い止め、なほかつさらに突出することによって、労働組合の中に分解を起して真のプロレタリアの方へ獲得することが出来る、という「先駆性理論」があったわけですね。

水戸 それと今のやり方とどう違うのか？ 皆さんはその地点を踏まえてどう違えているのか。その環は反戦青年委員会だとおっしゃっているわけ？

本多(中核派) 僕はある意味じゃね、結論は単純であって、しかも実践的に解決するのは単純ではないというような問題だと思っただね。

水戸 で、具体的に労働組合をどうするわけですか？ 非常に即物的に聞きますと。

本多(中核派) 僕らが六〇年の総括の中で一番大きくぶつかった問題は、あれだけ大きな大衆的昂揚が切り開かれ、労働者階級の中にも全学連に対する非常なシンパシーが蔓延しているにもかかわらず、行動化しない。そんなところを實際上どう考えるかという問題に六〇年の時ぶつかったと思っただね。

そこから出て来た答えは非常に簡単であって、今日の社会民主主義、あるいはスターリン主義の立場を否定する革命的な党の問題として総括されなければいけないという、あまりにも簡単な答えが出て来たわけだけれど、しかしこのあまりに簡単な答えを現実の問題として解決するということになると、それ程簡単じゃない。つまり、革命をやらなけりゃあいけないという結論と、革命をやるということとの関係と同じような重さをもっているわけだから。そこで実際上は、今日の労働者階級の現状の中に、たとえば羽田以来の闘い、それから今日の大学闘争の激化をどういうふうに取り持つか、あるいは具体的なそこで引き出されて来た関心をどういうふうに取り組んでいくのかという問題がやはり出てくると思う。その問題を抜きにしてやるとやはりわれわれが大学闘争をやって全社会的に衝激を与えるとポカンといくんだけ、ということ、われわれがあたかも主張しているかのように受けとられて行くという面も出てくるんじゃないか。その点では、労働者の中に於ける意識の変化を、労働者の内部に於ける革命家の組織的な活動を

媒介にして独自の進めながら、この大学闘争の激化として発展しつつある今日の学生の闘いと、意識的に結合させていくことになるだろう。

ある意味では今日の学生運動は、日本の階級闘争の将来あるべき姿みたいなものを非常に先取り的に示していると思うんだけど、学生はああいうふうに闘っていいんだ、あるいは闘えるんだ、しかし労働者には違う闘いがあるんだというように考えるべきではない。むしろ日本の階級闘争の将来あるべき姿を、今日的な学生運動というものが、実体的な基礎として大きく打ち抜いているんだということを基本的に押えながら、しかし実際の今の労働者の置かれている状態の中では、直ちに同じことが出来るといふ具合にはいかない面があるというように考えるべきですね。

### 第三章 七〇年への戦略配備

#### 一 労働者戦線への切り込み ——「反戦青年委」等——

水戸 皆さんに聞きたいんですが、今みたいに羽田以後の闘争ね、まあ角材、ゲバルト、それを持つに至った思想というものがあると思うんだけど、それがしかも大衆的にここまで成長し得たという、恐らく六〇年の前ではこういうことはなかったと思うんですが、その基本的要因をどう把握しているか。

それと同じようなことが労働者階級の中に作用しているのかどうか。たとえば民社の組合支配のなかでもこういうことがある——これは一般的に云えるかどうかは知らないけども、非常に高度に進んだ生産行程の中で労働がますます単純作業化していく。しかもそれが極めて重労働である。しかも、労働力不足の今のような状況の中では、また再就職出来る。だから企業の中の定着率が非常に悪くなっている。これは統計的に証明されるのかどうか僕にはよくわからないけれど。企業に対するロイヤリティーもないし、また組合なんかにも定着しない。そういう人たちが非常に大量的に出ているのではないか。そんな中で羽田闘争以後、学生運動がああいった形で大衆化出来た、それと同じようなことが今の労働者階級の中にあるのかどうか、といったことを皆

さんに伺いたいわけです。

鈴木(M.L.) これはあのう、一つには反戦青年委員会の運動なんですね。この反戦青年委員会の運動が、実際には一〇・八以来、全学連に続け、もしくは全学連とともに、という形で展開されて来て、ゲバ棒をふるって闘う全学連とともに闘うという意識が青年労働者の間に蔓延して、あの場に自ら出て来たという状況は一点あると思うんですよ。但し、その質っていうのはどのくらいのものであったのかと云えば、若干誤解を恐れないで云えば全学連と百メートル離れて連帯したわけです。それでも官権弾圧は厳しくて、怪我をしたり、おでこにこんなの作って帰るわけですね。その反戦の労働者が会社へ行つて、「おい、おでこどうしたんだい？」と云われた場合には、たとえば、「いやあ実は階段から落っこちてね」という具合な断絶があったと思うんです。つまり、街頭行動に於ける全学連との連帯というものが、自分の職場、あるいは生産点というところに於ける運動へと発展して行かない。そこに於ける組織活動、シンドイ組織活動がある程度放棄して、一方には街頭に於いては全学連と連帯することがあったと思うんですね。このことは重要な克服課題であったけれども、そういうような条件をあの反戦の労働者にすら押しつけてしまったものは何かと云えば、日本の労働組合機構が、官僚統制体制として全的に機能しておいて、自然発生的な闘争性をもとより、われわれのような極少分派的な諸方針というのは暴力的に圧殺されていく始末で、うっかりすれば統制違反で首になっちゃう。例えば東交(東京交通労組)の二重処分とか。そういう組合が帝国主義体制を内的に支えているわけですが、そういう組合を支えているところの、いわゆるユニオン・ショップ条項と組合費のチェック・オフ方式ですね。

あれが組合と会社側との一体化したうす汚い関係を作り出して、その壁が非常に大き過ぎて、反戦の労働者がさっき云ったような反応を示したわけですが、しかし六七、八年は闘って来たと思っんです。

大きな芽がありながらそこに限界があったという状況を、最近僕は一つのある事件、事態で知ったんですけれど。大田反戦に属しているところなんです、僕は社会党などとは違った意味で「職場に反戦を」というスローガンを提出しています。それはさっき云ったような状況を克服するためにですね。街頭に於ける全学連との連帯、その質を職場に持ち込んでその中で組織しなければだめだという意味からです。街頭に飛び出して行った青年労働者、いわば組合の締め付けたな機能に組合内の反抗することが出来なくなつて、一まず個別に街頭に出て行って連帯するという諸君を、「職場に反戦を」というスローガンでもって官僚統制体制の中に引き戻すという、そういう社会党的意図から出たものではないに、「職場に反戦を」を出してやっ来て来たわけですが。具体的に云うと太田反戦の中でそういった闘いをずっとやって来て、これは小企業なんです、一七〇〜八〇名規模の自動車部品工場なんです。

ここは勿論、未組織ないし非組織でして組合を持たない。労働条件は特に悪いんですけれど、先程水戸さんがおっしゃったように定着性がない。労働条件としても組合組織の見地からいっても非常に悪いところなんです。そこで部分的に反戦が出来て、その諸君が非常に直線的に全学連方式を持ち込んだんです。これはもの凄いいことになりましたね。ヘルメットをかぶって、職制を含めて一七〇〜八〇名のところで、四〇人ぐらいで突如組合結成。そしてすぐに団交をやる。

その団交もいわゆる大衆団交ですね。大衆団交というのは非常にいいものだと思うんですけれども、もうこれは直接的に全学連から学んだ大衆団交で、実際にはつるし上げちゃうわけですね。一晩かかって朝になった時には、もう会社側の執行部は驚きあわてふためいて全部認めちゃう。さまざまの要求を皆認めてへトへトになって帰っちゃう。勿論数日を経ずして、同盟の援助を受けて第二組合が作られ、物凄いテルミドールが始まったわけだけれども、そこで今なお果敢に闘っているわけですね。

そこで提出された問題、つまり直線的に持ち込んで来た結果、今非常に苦しいところに追い込まれているわけだけれども、彼らが持っていた意識、つまり、あの闘いを俺らの職場へ持ち込まなければ駄目じゃないかと云ってそして本場に始めちゃったという、少くともその問題意識と芽、これは僕は着目すべきだし、大事にしたいわけなんです。彼らをそこまで追い込んでしまったのは、僕らを含むわれわれ諸党派の政治的な指導がそういうところに及んでいない、具体的にそこまで指導しきれないからなんです、それで彼らはそういうやり方で突出してくると思うんですよ。

結果的には会社と同盟によって非常に苦しいところへ追い込まれて来ているわけだけれども、ああいう形で突出して来たその闘いが、隣りの隣りの工場に若干縮小して波及したわけです。あの南部地区一帯、あの辺に与えた影響はもの凄いいわけですね、そういう形で……

本多(中核派) それは多いね、今。

鈴木(MI) ええ、つまり、反戦が六八年の段階でぶち当たってしまった全学連との問題を、本

当に職場の中に自分で生かし始めているということですね。いいださんのおっしゃった第二の問題への一つの希望みたいなものを、僕はここに見たいということですね。

水戸 いいださん、何か？

いいだ 共労党 ええ。水戸さんの質問に完全に噛み合うかどうかわかりませんが、つまり羽田闘争以来の学生の街頭現地闘争の持っている質と、学園の中で今ああいう学園闘争として噴出している質、それは根底的に同じ体制変革的な新しい質を持っていると私は思っているんですが、それがどこにあって、それが労働者階級の全面的な階級の再形成と、どういう回路をもつてつながって行くのかということが、私が一番重要だと考える問題です。いわゆるゲバ棒ですね、あれは私は依然としてやはり半ば政治的シンボルだと思っんですよ。半ばシンボルという意味はつまり、機動隊の暴圧に対する自衛と抵抗の武器ではあるが、それでもって中央武装権力を打倒出来るような物理力ではないということを含めてですね。そのことをはっきりした上でいけば「ゲバ棒の思想」の持っている質的な意味ですね。二点あると思っんです。

一つはですね。帝国主義民族の一員であることの自己否定といますか、よく私たちが使う言葉でいうと、抑圧されているということを含めて今自己確認することだけではプロレタリアートの階級形成のためには足りないわけで、抑圧されてゆく合理化装置そのものによって、自らが他を抑圧することに加担させられている。ベ平連式に云えば加害者意識、反戦流に云えば抑圧者意識ですね。昭和元祿のマイ・ホームの平和そのものの中で戦争加担させられている、それも労働と生産過程を通じて加担させられている。そのところを自己否定しなければならぬという階級的自

覚が生じているということが一つであって、そこから「法と秩序」を踏み越え喰い破る、そういう変革意識の象徴としてゲバ棒はあると思っんですね。

それから第二点は、現代帝国主義では、直接の暴力的抑圧のみならず、現代民主主義Ⅱ「平和と民主主義」そのものを通して、われわれの階級意識ないし社会的な意識が全面的に剝奪され、プロレタリアートが、階級的に解体され、福祉国民として体制内統合されてゆく。ブルジョア側側文化とか教育とかマス・コミとかそういうものを通ずるいわゆる文化情報管理そのものを通じて、秩序化されてしまう。いわゆる即自存在としてのプロレタリアートが、自然発生的にはブルジョア意識しか持っていないということの上だぶってですね。危機に於けるブルジョア側の側面という目的意識的な努力によって、階級的解体が進行させられている。

そういう剝奪された階級意識を、現在「ゲバ棒」によって取り戻し始めているという意味で象徴だろと思うんですね。いわゆる政治的示威としての挑発によって、民主主義的秩序なるものが醜劣な国家暴力によって裏打ちされていることが、明らかに突き出されて来るわけですね。

そう云った二点で押えてですね、それが労働者階級の闘いと階級形成に、どういう回路をもつて同じ質のものが現われ始めているかということを考えてみると、鈴木さんがおっしゃった「職場に反戦を」ということを私も早くから全面的に唱えておいて、その把え方も、鈴木さんが社会党の「職場に反戦を」ということは、こうこうで違っんだと云われた把え方に全く賛成なんです、そのことを踏まえてですね、私たち「ベトナム反戦派」として自己形成して来た者が、現在「職場反戦派」なり「労働者反戦派」なりという形で自らを突き出して来てる中で、どこに

同質性があるかという点、一つは反戦青年委員会や沖繩のプロレタリア闘争そのものの中に、学生闘争が突き出した先程述べた二点の意味での自己否定的体制変革的な質が、やはり労働者として出ているということが第一点。

それから具体的な戦術としても、工場占拠と労働の自主管理というものに至る闘争の意欲と闘争の模索というものが、芽としてやはりある。全般的に、フランスの五月闘争の直接的な影響が労働戦線にかなり胎動していると思うけど、フランスの五月が何故日本の青年労働者のある種の熱情をかきたてているのかという問い返しをして見ると、それはやはりこの間切り拓いて来た学生運動の新しい質の問題に通じておるだろうと思うんですね。

それから労働者の場合で第二点を云うと、政治権力を奪取するということがわがプロレタリア革命であるけれども、その政治革命は、経済権力とか企業権力とか呼ばれている、その生産原点到に於ける資本の支配構造に直接切り込み、これを打倒して、いわゆる労働者の自己権力なり労働者民主主義なりをいかにうち立てるかということと不可分の問題である。国家独占資本主義は、政治革命、社会革命、文化革命を同時化する、そういう立体構造を持っている。つまり社会変革というものを内包しておる。その集約的な切り口としてのプロレタリア政治革命という把え方の中で、工場占拠とか労働の自主管理というものを含めて、いかにしたら労働者が自己権力を生産原点到に形成し得るか、そういう問題意識がやはり出ておる。つまり、ソヴェトの現代的追求ですね。それが第二点。これは学園闘争の構造とも似てますね。

それから第三点は、ちょうど、大学の新しい近代主義的な管理秩序の中では、学生自治会すら

も民青その他を媒介にしながら管理の一環に組み込まれている。それとある意味ではもっと深刻に類似した問題として、労働組合の右傾化と右派労働組合運動が完成に近づいている新資本主義下に於いては、労働組合自体が、プロレタリアートの体制内化装置の非常に精妙なメカニズムの一環になってくるということがある。それがどの程度粗漏であるか脆弱であるかという論議はここではしませんが、職場に於ける技術革新とそれに根ざす新しい近代主義的な労務管理を確立して来た中で、労働組合自体をも企業秩序の一環にするような、そういうメカニズムが働いていることは、インフレーション政策による賃銀闘争の吸収メカニズムとともに、軽視することは出来ない。そこでは、新しい学生闘争が自治会民主主義の意識では闘争は出来ないのと同じ意味で、闘争が出来なくなっている。民同型労働運動の危機だ。

例えば、私どもの「民主主義学生同盟」の「プロレタリア学生同盟」への左転換が、最近の大学変革闘争に触発されてなぜ起きたかという点、民主主義学生同盟というのは反独占民主主義という自己規定だったんですね。これは現代資本主義下に於ける、層としての学生運動の形成のある一面は確かに把えてはいた。しかし、ご承知のように、単に自治会民主主義にリンクするような反独占民主主義的な学生同盟ではもう駄目なわけですね。そういう学生闘争が突き出してくる問題とやや似た問題が、労働運動の転換にも出ている。資本と組合の二重処分を受けたり、組合の中央統制の中であらゆる闘争が集約され制約されたりする、そういう枠組をどうやって打ち破るかということで、労働組合の、一種の受益者民主主義的な意識、あるいはプレッシャー・グループ的な闘争形態を一步こう突き破った闘いでなければ、今やっぱり闘えないんだという方向

性の模索が、反戦青年委員会と沖繩のプロレタリア闘争にあると考えるわけですね。

この三点は私たちの云う意味での、現代プロレタリア革命を担う階級形成に向う端緒であるという把え方で、私たちは労働者反戦派を七〇年闘争の政治舞台に登場させることに全力を挙げていくわけだ。だから、飽くまでも階級形成を追求して行く中で、それと結合して党形成を進めて行く。階級形成を党派の系列化に安易にすり換えないわけだ。

最後に、労働者反戦派の位置づけなんですが。私らは七〇年安保粉砕、日帝打倒は賛成なんだけれども、同時にどの党派も、七〇年を即自的に日帝打倒、つまりプロレタリア革命に直結するというふうな単純化しているところはないと思うんです。

私らのもう少し積極的な展開では、反戦闘争イコール革命闘争というのは、せいぜいのところアナロジーに過ぎないと考えるわけですね。「帝国主義戦争を内乱へ」というテーゼを歴史的に類推させて、ベトナム戦争というものの性格を何らか単なる帝国主義の経済的矛盾の爆発としての対外侵略であるとか、あるいは植民地獲得戦争であるとか、永久泥沼戦争であるとか、そういうふうな把えて歴史的に類推すれば別ですが、厳密な世界革命的視点に立った場合は、反戦闘争とそこから引き出される安保闘争というのは、非常に巨大な日本帝国主義打倒の革命的な展望というものを孕むけれども、即自的には七〇年闘争は革命決戦ではないと、そう考えるわけなんです。つまり反戦という回路からだけでは、労働者階級の全面的な階級の再形成には短絡はしない。今米タンを運んでいる国鉄労働者と基地労働者をやっている沖繩労働者は、直接的にその場面にいるから、そこそこで自己否定の質をかなり直接的に持ち得ることによって先進的な起動力にな

っているわけだが、例えばまあ、俗に云えばラーメンを作っている労働者に七〇年安保でストライキぶとうと呼び掛けた場合にはですね、俺んところは米タン運んでいるわけではないし、基地やっつてんでもなくラーメン作ってたんだ、それなのに、どうして反安保ストライキなんだということになるだろう。そこで企業の側からも、俺の方は会社として平和に生産しているんであって戦争とは関係ないんだから、七〇年安保には自分としても異論はあるけれどもストライキだけは、つてな定り文句が出て来て、企業主義的な包摂が可能になるような条件というのが実在しているわけでしょう。そのような労働者を私たちが七〇年安保・沖繩闘争に全面的に立たさなければ……

本多(中核派) 例えば反戦で革命をやると云ってるのはどこ？  
 いいだ(共労党) さしあたりは私たちがそういう把え方をしていないという意味で云ってるんだだけだね。

安保粉砕・日帝打倒を即自的に把えれば、それが直ちにプロレタリア革命であるということになるわけね、精密に云えば。通俗的なスローガンとしてはなくて、理論的に戦略的に確定されたスローガンとして考えればですよ。だから私らは通俗な七〇年闘争スローガンは安保粉砕・日帝打倒ということに賛成なんですけど、今云った点が第一点ね。

第二点はね、たとえばNATO粉砕・安保粉砕というでしょう。その場合にはそれは現在の世界帝国主義の動揺の開始の中で、私たちが撃つべき打撃の焦点だと思っただけですけど、同時に例えばNATO解体によって、フランス帝国主義が直接的な政治危機に巻き込まれるかどうかってことを考えてみると、それは云うまでもなくあり得ないわけですね。とするとやっぱり安

保粉砕によって日帝打倒への展望が開けることは、ベトナムで帝国主義者が敗北しつつある、そして人民中国が近いところであって、東アジアというのが連続的に革命的な激動を起す、その中で朝鮮が革命的な発火を孕んでおいて、その中で私たちは沖繩を媒介しながら七〇年安保をやるからなんだということになるわけですね。戦後帝国主義の世界的構造の中で、日本帝国主義は、アメリカ帝国主義との同盟のもとに、七〇年安保・沖繩をテコとして、東アジアに於ける円ブロック圏の形成と軍事圏の形成つてもを自論まざるを得ないわけだ。その意味でこそ先程さらぎさんが云われた、そこへ日帝が行こうとするならば反革命的な侵略としてしか出て行けないから、ということにもなると思うんですね。ただ単純に日帝がどんどん自立をいってアメリカから離反をいって七〇年に行くことではないわけなんです。安保粉砕が何故フランスとは違って日本の場合は日帝打倒への構造的展望を孕むかというのは、戦後に於ける東アジアの帝国主義的な支配体制の歴史的特徴、そこに於けるベトナム革命の決定的衝撃と絡みついている。

だから私たちは、戦後型歴史ブロックがベトナム・ドル危機を旋回軸として、全面的な崩壊過程に入る中で、日本帝国主義が七〇年安保・沖繩を軸心として、国際的危機の一点になって行き、七〇年代に於ける体制的危機を孕みながら、世界革命の最前線にせり出させられて行く、と把えているわけだ。

ストレートに、七〇年がプロレタリア革命になるとは考えていない。

本多(中核派) いや、そういうことじゃなくてね、今日の帝国主義にとって世界編成の問題が

非常に大きな意味をもっている。特にそれが崩れつつある。その世界的な危機の集約点がアジアという形をとって進行しているという点に僕らは着目している。しかもこの危機に日本帝国主義がどう対応するか、はっきり云えば、アメリカと強盗的な同盟を強めて、アジアと日本の人民が対立していく、という日帝の基本構想をわれわれは打ち破るのだという形で問題が出されてくるということになるわけだよ。そうなると当然、そんなことを云うけど安保がなかったら日本はやっていられないじゃないか、日本の安全と平和の問題はどうなるんだ、と云うことが出されてくるわけだよ。

鈴木(ML) 当然じゃないけどね、そんな問題。

本多(中核派) 当然というのは向う側からね。それに対してわれわれは、こういう人民に対する抑圧の上にか帝国主義の存続が不可能だとすれば、そういう帝国主義は倒れなければならぬ、という問題を一方の解答にしながら、もう一方では明白な共産主義者の立場から日本帝国主義をぶっ倒してゆくという見地から、安保を粉砕していく闘いをどうやって位置づけて行くかということになるし、もっとはっきり云えば、この意識がないと、つまり日本帝国主義を倒すんだという意識がないと、やっぱり安保と徹底的に対決出来ないということを意味しているんじゃないかと思う……

さらぎ(共産同) 異議なしだね、その点は……

本多(中核派) むしろ七〇年闘争の積極性ってのはね、その点を露骨に打ち出しながら進んで行くというところに勝利の鍵があるんじゃないか。なぜ現在学生たちが角材を持てるのかという



問題も、実はそこにと関係してると思うんですよ。僕は角材そのものだったね、単なるシンボルではないと思ってる。それは、一九〇五年の段階に於いて、油に浸した綿でもいいから持って民衆は街頭に出ろということをしてレーニンに云ってるけど、それはその時の帝国主義者とわれわれとの具体的な軍事的な関係に於いて、それぞれの持っている武器、あるいは武器に当るものの位置づけが決ってくるわけであって、だからある種の段階の中で実際上角材を持ったという事はシンボルではない。しかし同時にそこには、スローガンの意味でのシンボライズされた側面を持っている。それは何かというと、要するに今日の帝国主義的な秩序を壊していいんだ、倒していいんだ、ないしは帝国主義をぶっ倒さなくてはいけないだという意識をもって、そういう方向性をもって決起しなければいけないだということがあって、初めて角材を持てたと思うんですよ。勿論安保以後七年間にわたってメッチャクチャにやつつけられて来たということね、これはまあそもそも前提ですよ。デモがこんなんじゃ、うだつが上んねえから頭へ来たからね。帝国主義打倒ってことではここにいる人なんかだったら前から反対はしないよ、誰もね。(笑い)皆、賛成だと思ってる。だけどその問題を、もう少し具体的な射程のうちに考えなければいけないという状態に、七〇年に向けてわれわれは入りつつあるわけだし、その問題をはっきりさせないと、現実の運動が進んで行かないような状態があって、つまりさっき云ったように安保以後のもの凄く押えつけられて来たということを直接のバネにしながらも、同時にそういう思想的なものを背後の論理として持った時に、初めて角材ふり上げることが可能になったと思うんですよ。

その上で職場の問題について云えば、やっぱり僕は今日に於ける職場の運動、特に七〇年として当面打ち抜かれる闘いに勝利していくような運動の量と質を確保するというためには、当然労働者は帝国主義が死ななきゃ本当に生きられないんだ、俺は要するに遺産相続者だ、という点をもっと積極的にはっきりさせるといふ姿勢があった時に初めて、いわゆるゲバ棒の論理を工場の中に積極的に持ち込むことが可能になってくるのじゃないかと思う。その点でやはりそこを巡る意識の闘いが、一つ一つの全学連のデモのケツに連がるとか何とかっていう、一見すりゃ随分みっともない労働者の参加の仕方が問題になって来ると思う。非常に彼ら自身がその点では屈辱感持ってるよね、屈辱感とか何というか、恥の意識というか。しかもやられる時にはやられてしまうのさ。ポッカ、ポッカにぶん撲られる。全学連よりもっとみっともなくやつつけられる。全学連の方が実際上は傷が小さいというぐらいいいものではないか。そう云う点では、無防備だということによって敵がどんなに狂暴化するかということ、そういう経験を通して彼らは一つ一つ知って行ってるわけね。しかも解っていなからそれに直接応えられぬという、この屈辱感を持ちながらね。だから街頭闘争に於いても、いわゆる労働者の反戦デモが武装するという問題を、当然われわれは検討しなけりゃあいけないということを、この経験の中から持たなければならぬし、同時にその街頭デモをやれば、職場の中にその闘争の質を持ち込んでいく場合にも、帝国主義を打倒していくってそういうその視点で、明白に運動の戦略的な視点として打ち抜かれることがないとかやはり出来ないんじゃないかと思うということですね。

さらぎ(共産同) ゲバ棒のことなんですけどね。そのう、社会評論的に云うとシンボルという

ことになるんですけど、実際僕らが組織者の立場になるとね、まあ責任者だからそういうことになるわけですけど……いい皆さんのように傍観者のシンボルなんて云えないね。

本多(中核派) 持つのは大変だよな。

さらぎ(共産同) どういう形で持たせるかという場合ね。それはシンボルだから持てと云ったって学生諸君は持ちませんよ。何かスーパーマンのようにね、ひょいひょい持ってテレビドラマで演出されるようなもんじゃあないということですね。シンボルだから持って突っ込め(笑い)なんて云ったら、学生に逆に殴られますよ。(笑い)一人一人の心の中にずっしりとした重いものを持っているということですよ。で、これ中核さんの部隊がゲバ棒持ってる論理とここでは共通するものがあるんでしょうけれども、それを意義づける論理はやはり僕らは中核と違った論理があるわけですよ。僕ら一〇・八で持った時は、原則的な視点としてはいわゆるレーニンの暴力革命の復権を、国際主義が沈滞している中で、一〇・八から俺が突破していこうと、世界の階級闘争の中で俺らからやって行こうじゃないかということだったわけです。現在、大衆そのものは持てないですね。だから党派に結集した意識的な部分を一人一人やっぱりオルグって、棒を持つ意義を訴えて、ヘルメット、混棒でやっぱり闘い抜くんだと決意を固めさせるんですよ。それと組織された暴力部隊をもって闘わなければ革命は貫徹出来ないということも訴える。君一人が持つという決意をするだけじゃなくて、日本の労働者階級に示していくんだ、それと同時に世界的に暴力革命でやっていくんだ、日本から僕たちが実践で世界的に示していくんじゃないかと訴える。六〇年安保では、論理として原則として、暴力革命の復権を云ったけれど、具体的な実践と

してやらなければいかんというわけです。日韓闘争を僕らやりましたね、鈴木さんなんかと一しょだったけれど、初め五〇名くらいのデモで僕らや鈴木さんがまっ先に行って、メケメケに何時もやられてね、もう本当に大変だったですよ。六〇年の時は警官が帽子をかぶってましてね、非常に楽な形でしたけれどね。日韓闘争以来の敵の武装力つてのは、これは相当なものでした。これに対して僕ら、やっぱり大衆に新たな組織を、勝つ形態を与えて突破していかなければいかんと思ひまして、組織された暴力とプロレタリア国際主義という、この二点で悩み抜いた結果、ぐっと押したということですね。日韓闘争以来の敗北をここで一っきにふき去っていくんだという、もの凄い決意でやったわけであって、その僕らの決意を受け入れる先進的大衆というのを僕は組織したわけです。その組織を作ってみると、やっぱりそういう不満が社会的にうっ積していて、その不満が社会の中から吹き出し、学生がグワーツと一〇・八から一一・一二をやり、この二つの羽田を突破することによって、佐世保から成田へとグワーツと突出していったと思うんですよ。それから、一〇・八と一一・一二の間には一〇・二一がありますね。

一〇・二一は僕ら中大を軸に組織したわけです。一〇・八以降の「ブル・新」の総攻撃と非難と権力の反撃で、各派皆ブルっていた。大変だった。組織した時には、ゲバ棒を持たない、ヘルメットを持たない、しかし国際主義は活かしてくれということ、靴を持った学生がグワーツと集まったわけです。彼らの多くは、ゲバ棒を支持するけれど自分は持てないというんです。持つ部分と、支持するけど持てないという部分が隔離していたわけです。一〇・二一で大衆を結集して量で反撃し、それが一一・一二をもう一発やり抜いて、それから佐世保のあと王子とず

つと続ける中で、ゲバを持てなかつた大衆が、もう一ぺん未分化のものから分化したわけですね。初めは大衆的な日韓以来の敗北感がありましたでしょう、それと六〇年の敗北感。で、敗北したあとモヤモヤとしたものがあつた。麻雀やる学生、「止めなよ、やったつてしょうがないじゃないか」と云う者、一方大衆闘争はやるがゲバはいやという部分、それから自らが断絶することによって前衛になるんだという、断絶した悲壮感を持った者などがいた。前衛部隊が一〇・八で突出することによって、これらの層がもう一度分解したと云うことですね。やらんやつはやらんやつでダーと右へ行っちゃう。こんな中で分解して、支持はするんだけれどやれんという部分と、一しょにやるうとする部分、という具合に流動する社会的な要素が、やはり学生大衆の中にあつたんだと思うんですが。

それともう一つ、労働者の問題ですけどね。羽田の時に来た大労組は、国労と東交青年部でしたよね。全通も若干来ましたけど。それに、僕らの組織しました牛乳労組という零細の労組ですね。こういう労組に意識的に政治性を注入して、ヘルメットで武装するんだ、学生諸君にだけやらせておいていいのか、学生は小ブルだから跳ねるんじゃないんだ、学生諸君がやれることを労働者諸君がやれないことは、もう恥なんだ、ということになって、しかし首になると困るし、まあ鈴木さんの表現で云えば、百メートル離れて出て来たわけですよ。しかし、武装闘争を支持するという形で出たのは、羽田が初めてだったわけですね。

それから佐世保では、これは中核さんの方がよく知っていると思うんだけど、あそこら辺にある三菱造船長崎の連中とか、長崎に於ける民社系、同盟系に組織された、いいださんの云う民

主主義によって末端まで組織された労働者が、逆に市民として闘争に出て来ているわけですね。組合幹部があまり組織統制しているから、下部労働者は面白くない。体制内民主主義の中でやっている間は何とか飯は喰えるんだけど、とにかく、組合は何にもやらぬ。組合幹部が決めたこと以外のことを組合員が一たんやったら、それはもうもの凄い二重処分される。二重というのは会社と組合の両方からの処分ですよ。東交もそうだったんですね。社会党員の組合幹部から斬られた。そういう抑圧の中で——社民党の抑圧、それから権力との抑圧という中でうっ積されたものが、あまりにも体制内の民主主義に組織されているが故に、組合の民主主義統制からはみ出して市民として出てくる部分と、それから逆に、王子のように組織は全然なくて、どちらかというと政治的・民主的でないルン・プロ（ルンペン・プロレタリアート）で、非情なこの世で自分一人しか守るものはない、自分の力に頼る以外ないじゃないか、時には酒も呑もうし、めっちゃくちゃもやろうし、という部分がやっぱり社会的なうっ積をぶちまける。こういう二つが、佐世保と王子に出て来た傾向だと思っわけですね。

しかし、その傾向そのものを民主主義で何とか組織しようと思つても、これはやっぱり駄目であつてね。反戦の、政治闘争を闘える意識された部隊が、どのように労働組合の中に入って、労働組合から相対的に別個な労働運動を闘える組織自体を固めるか、ということにやはり帰らなければいけないと思っわけですね。その場合僕は、労働者の意識状況にも位相があると思っわけですね。現在の状況をこう考えているんですよ、三重層というんですけれど、重工業独占体の部分と公労協の部分と、中小および零細の部分というふうにみているわけですね。で、現在反戦闘争に

出て来ている部分は、主として公労協の部分とそれから中小零細の部分ですね。

本多(中核派) そこは僕は違うと思うね。

さらぎ(共産同) 僕らは反戦の二重性ということを云ってるんだけれど、反戦闘争やる人間が、職場からだ出てくるだけではなくて、職場にこの労働運動をどう持ち込むかということですね。そこで、一番やり易いところはどこかという点で、僕らは零細にまず目をつけているわけですね。零細と官公労と。零細では牛乳とか出版ね。MLさんもやってるね、東京書院。僕らは兼六館と新興出版で闘争やってるわけですが、そういう闘争は……

鈴木(ML) 位置づけではプリントと違うんです。

さらぎ(共産同) まあ位置づけは違うだろうけどね。

そういうところから戦闘的な労働運動を突出させていくということですね。学生が先駆性的闘いで労働者に訴えて行くだけじゃなくて、やっぱり労働者自体も自らやるんだ、新左翼の労働者は断固やるんだということを見せて行く。初めは負けましようし、それから、既成の労働技術とか何とかいうのは知らないが、まあとにかく戦闘的にやろうじゃないかと云ってやるわけですから、失敗もするでしょうけど、僕らが、ヘルメットかぶり、ゲバ棒を持った牛乳労組の闘いを始めた時、権力が叩いて来たし、まず社共が一番嫌った。反日共系の中でも日和見分子が駄目だと云った。それが突出する中で出版に火が移り、新聞に火が飛び、ハプニング的に拡がり出したでしょう。いずれ、公労協労働者に大きな影響を与えてくるんじゃないかということですよ。

牛乳闘争なんか、職場占拠までし、経営者を罐詰にして恐喝罪まで喰ったわけですからね。

そういう占拠闘争、労働者もゲバ棒持ってヘルメットかぶって、集団交渉も武装してやるというやり方を、労働運動の中から戦闘的に作ろうというわけでやっているんですね。で、それをやりますと、常時警官が来るということですね、何時もその職場に。警官のハリツケ・オルグが付くという構図になるわけです。ナチの時代が一足先にやって来たような。

警官の密集したオルグが来るから、牛乳の零細ばかりピイピイやってみようがないじゃないか、ということ、じゃ今度はディーラーはどうなのか。ディーラーの労働者をやる。次に本社のメーカーの労働者はどうなのか。俺たちはこういう考えをもっているんだけど民社・社・共に組織されている本社労組の君たちは、僕たち底辺労働者のカスリでいい賃銀とっているじゃないか。資本も社会体制も勿論悪いけれど、君らメーカーの労働者は、僕らの搾取の上にあぐらをかいていいカッコし、左派だなんて云ってるけど、僕らは後進国人民で君らが先進国のプロレタリアだしたらどうなのか、ということを直接突き付けて行って、どんどん逆オルグに行くということですね。そこでやっぱり……彼等は動揺し分解しますよ。

水戸 それで出来るのかということなんです、僕の聞きたいのは、果してそれだけでいいのかと……

さらぎ(共産同) もう一つだけ云わせて下さい。

それと、産別左派というのが今いるんですね。大企業内の左派ですよ。しかし、この産別内の左派は、中小・零細のように、パットと組合をまとめて、ヘゲモニーをとって個別的に動けないわけですよ、特に公労協の場合は。非常に大きな産別的組合の中にありますからね。だから、この

産別内に於ける反体制の左派をどのように統一戦線を組ませて、社共とも違う反体制労働運動をどのようにして構築していくのかが問題ですね。これを七〇年の昂揚の過程で、またそれ以前の七〇年に至る過程で、どこで浮揚させていけるかということですね。

ちょうど日大でも、自治会というものがまあ一応名目的にはあったわけでしょう。自治会っていうのかどうか知りませんが、その中に民青がおって何も出来なかった。同じように、民社的な職場でも何にも出来ない。その中から全共闘みたいなのがバーストと出て来るんじゃないか。しかし、そういう職場闘争委員会みたいなやつがバンと出てこれる時期っていうのは、そう早くはないと思いますけれどね。待っていたって出来ないんですよ。いっださん流に云うと、民主主義が末端まで貫徹してから自然発生的爆発が望めない。しかし、やってやるという空気は下部にはあるんです。これを主体的に指導してどこから爆発させるか——同盟や総評とは違った労働者評議会を作り上げること、これが問題なんですね。ブントはやるよ。

小長井 現実には企業の中では、労働者に対して企業秩序というものとそれから組合統制というもの、まさに二重に妥当しているわけですね。しかも企業の方は当然資本の論理を貫徹しようと思つてそして諸々の規制をしてくるわけですよ。それに加えて、組合統制が資本と組合との間の団体交渉とか、あるいは団結権の承認とか、争議行為とかそういう労働法上の論理の上でもって展開されているわけですね。

しかも、資本と対応している組合の幹部が、云つてみれば老朽化といえますか、すでに四〇代、さらには五〇代にさしかからんとしていて足がない。そういった戦後の労働運動を担った人たち

がずっと年代が高くなって来て、下の青年層との間に明らかに断層というか亀裂が起つて来ています。

さらぎ(共産同) それは大きいですね。

小長井 しかもそれに加えて、労働組合を担っている指導部分がですね、足がないので下にいる人間を自分たちの足に使おうと思うと、そこにいる最もいい部分は反戦の労働者であるということになってしまふ。だから、執行部指導部の方からすれば、取り組みたいんだけども取り組み切れないというところに、反戦青年委員会の問題が起つて来ておると思うんです。

今度は逆に、反戦の方からみれば、反戦派として純粹に自分を貫徹すれば当然、反戦派というのは飽くまで鬼っ子であるし、アウトサイダーであつて、異端分子であるわけですよ。ところが、大衆に対する影響を体制の中で一定程度持とうとすれば、いわゆる組合統制というものの中に入れて行かなければならない。このように、職場に於ける反戦派の労働者は、極めて矛盾し交錯する複雑な関係を、乗り切つて行かなくてはならない。それが今の実情だと思ふんですね。

ですから今、帝国主義打倒の労働運動とか、あるいは戦闘的労働運動という場合にね、現実には七〇年に向つていかなる労働運動が可能でどういう課題をもつて突き進むのかということまで出なければ、政治指導とは云えないんじゃないかとそう思ふんですがね。

水戸 そういうことですよ、それが全然出てないんですよ、さっきから……。

鈴木(ML) いや全然出てなくないと思ふんです。だからもうちょっと云いたいんですが、一つは、いっださんがおっしゃった、例えば平和産業の労働者に安保健ネストがやれるのかいと。

これはもう克服出来んじゃないかということが一発あった……。

いいだ(共労党) いや逆だね、私の出した意見は。克服しなきゃあならないということですよ。反戦イコール革命というようなチャチなことではそれが克服出来ないということですよ。

鈴木(M.L.) いや失礼しました。

それから今の小長井さんの問題提起があった。しかも僕が例として挙げた東京南部の労働者の話がある。これを結合させ得る問題は何かということ云ってみたいわけですからね。

そのう、根底的には安保・沖繩われわれ流に云えば安保粉砕、沖繩解放というわけだけれど、その安保・沖繩闘争を、自分の出所進退を決める、あるいは自分の将来を決める問題として労働者一人一人がとらえるということの、普遍化の問題だと思っんですよ。反戦青年委員会に結集している諸君というのは、そういう点について先進的である。職場の如何を問わず安保ストライキを提起出来る諸君、それから、職場の中にゲバ棒と「ゲバ棒の思想」という暴力的な闘いを持ち込める諸君である。

このことは絶対に全学連に続けるところだけからは出て来ないわけですよ。安保・沖繩でもって、例えば自分の子供たちに対する責任をどうするのか、ということをも自分につきつめるところから、そういうなりふりかまわぬ暴力的な闘いというものが出てくると思っんですよ。それが政治意識というものであって、それが第一に獲得されなければならず、そのことの具体的な一歩二歩というのは、さっき云ったような形で反戦などを通して労働者階級の間にある。

それから何回も指摘されているように、労働組合、我々の武器たる労働組合が、実は資本主義

的官僚統制体制として専ら機能している。それは当り前で、そのように戦後つくられて来たわけですよ。二・一ストの敗北以来、嘗々としてブルジョアジーはそういうものとして作って来たし、総評をそういうふう育成して来た。決してポツダム自治会あるいはポツダム労働組合というものの限界が今現われたというふうな——そんな感じにいいださんの発言は聞えたわけだけれど——ものではなくて、むしろそのように育成、保護されて来たわけであって、そのように現在する組合を、ストレートに反戦の労働者が強化するんだという具合には問題は立たない。立てば、これはもはや体制内化する地獄の一丁目である。そうでなくて、むしろさっき僕が云ったような形で、中小でもって闘いを始めたあの諸君と同じ方法を、組合を持つてるところの労働者が応用するとすれば、彼はず、組合内二重権力——これを直接的に目指すべきである。つまり、小長井さんが希望しているような四〇代、五〇代と青年労働者と、これは年代の差では全然なく、いわば彼らの路線の問題だと思っけれど、この差を埋めて何か統一的に止揚するところはないか、ということない。

さらぎ(共産同) ないですね。

小長井 そういうことを云っているのではないですよ。

鈴木(M.L.) まあそうだと思います。要するに、組合内に於いて、労働者自身の団結と闘いの組織としての組合、本来あるべき姿の組合というものを作っていかなければならず、このことは現在ある統制体制として専ら機能している組合自身を中から破壊して、二重権力的に育成していくことになる。ところが、そういう闘いは絶対に二重処分を受けるわけですよ。二重に圧力を受

けるわけですから、それを通じて資本家階級と対決していくということであり、そのことが出来るということは、現在既成の組合が統制体制として機能出来る、一つの思想的な基盤を粉碎するということですよ。その基盤とはいわば排外主義ですね。職場セクトでありあるいは会社セクトであり、企業意識と総称されるわけですね。自分のところの職制がいくら憎くても、隣りの工場労働者と喧嘩すると、あいつはわが社の人間だという具合にストレートにとって来ちゃう。これはもう、実に最底二〇年間ブルジョアジーが作りを作って来たところの意識であるわけです。これにやっぱり毒されているわけです。この意識がまた労働組合、体制内につくられて来た労働組合を、基盤として支えている。

これを取っ払ったところが労働者の団結ですよ。隣りの労働者と連帯する問題であり、違った産業の労働者と連帯する問題である。それなのに現実には、今どの組合へ行ったらとんでもない議論がされてるわけです。どこかの労働者が闘いをやっている、そうすると金だっただけでなくなるに決まっているわけで、カンパに来る。すると、あいつら自分の金もありゃせんに闘いをやりやがってというふうに出てくる。これはもう、全然極端でも何でもなくて、日常的にあるわけです。どこかで労働者が闘っておっても、違った産業であればそのことでピタッと切れちゃう。職場セクトであり、産業セクトであり、まあ総じて企業意識であるこの排外主義というのは、家庭にも持ち込まれているし、本来労働者は、そういうのを取っ払って労働者に団結するところしか道がないにもかかわらず、そういうブルジョア的な排外主義的な……

水戸 だからそれをどうするかということなんです。

本多(中核派) これはもう、ものすごく簡単なことで簡単ではない問題だと思っんです。その辺は僕は非常に極端だけど……

さらぎ(共産同) 答えは簡単だけど、やることがむづかしいわけです。それが出来ないわけです。

鈴木(ML) だからね、だから労働組合内部に於けるところの二重権力を目指す。それから未組織に於いては、さっきいった形で直接的に暴力闘争を目指していく。そしてそのことが安保、沖繩という形に集約される。つまり政治ストライキを打てるところの意識を、全体化していく。その、全体化していくバネは、そういう排外主義を克服していく目的意識的な活動である。これ以外の奥儀なんてものはない。

本多(中核派) 僕はもう少し違う具合に考えているけれどね。

鈴木(ML) ……で、その上に党形成の問題があるわけだけれど、今云ったような階級闘争の過程を通じて、党なら党というものが、そういう闘いの前衛として建設されて来ると思う。それ以外に秘密はない。

本多(中核派) 僕は、ひねくれた意味じゃなくて云うんだが、ある意味で非常に問題は単純であってそして簡単じゃない。それはね、僕はやはり党の問題だと思っっているんですよ。工場内部に於ける共産主義者の組織的活動の多様性を通して現状にどう対応するか、という問題として現われて来ると思っんです。

労働者はね、現在幾つもの顔を持って生きて行かなきゃならないでしょ。例えば、学習会だと

か党の会議に出て来て、帝国主義を打倒しなけりゃいけない、とかいうことをイデオロギー的に検討して行くということも起きて来るし、それから、羽田以来の激突の一応の局面の中で打ち抜かれた闘争の水準がありますよね。これを全面的に肯定するという姿勢から、その闘争に多様な形をとって参加して来るという問題がある。具体的に云えば、全学連の学生とほとんど同じ行動をとる場合があるだろうし、それを側面援護射撃するような現われ方をすると同じ場合もあるだろうし、それからさらに、完全に市民に解体した形をとって、事実上ある種の組織的機能を果さなければいけないという場合も出て来る。

そういうのが二つ目のタイプだとすれば、三つ目は、既成の労働組合運動がやっているいろいろな改良的諸闘争の中に入って、これを積極的に進めて行かなければならないという問題も出て来る。

それから、党の関係で云えば、機関紙を配るとかカンパを組織するとか、そういういろいろな組織活動を多層的に持っているし、勿論その上に個人としての私的な生活も持っているということになって来るわけで、現在の段階では、そういう幾つかの顔を持って動かなければいけないというように必然づけられているから、単純にこれを一つの顔に運動体としてするということは困難だということですよ。そうすると、いろいろな現われ方をしながら、しかしその実それが連続した一つの過程になり得るためには、どうしてもやはり党というものを背後に持たないと、実際上はこの状況に対応し切れない。実際上対応が、一つのタイプの闘争に固定化して行っちゃうことになる。ですから、その問題はやはり党の問題という形をとってさし当って提起されて来る。

さらに、戦術上の問題について云えば、一つの問題は先程来云われているように、われわれの独自の思想の系列、独自の政治の系列、独自の動員の系列、独自の救済の系列という、既成の資本の系統でも組合の系統でもない独自の系統を、党あるいは反戦青年委員会その他の幾つかの組織を通して系列化してしまおうということです。

実際上これは、四三、四年の段階に於けるイタリアのファシスト労働組合の内部で、トリアッチなんかがとったやり方ですよ。全部勝手に組織し直しちゃう、という問題が一つ出て来るのじゃないかと思う。

その上に立って、七〇年という段階では、いわゆるゲバ棒を持ってデモをやるという状態が、学生という一定の階層に依拠した特殊の例外事象だという神話を、現実の問題として破っちゃうような行動の組織化を、まず考えなけりゃいけないと思う。これは僕は早晚実践的な問題になると思うね。

それは、例えば清水多吉さんなら多吉さんが大学で書記長をやっておられて、まあなかなか大変だということになるけれど、清水さんが飛び出して来て角材を持つことは可能なのですか？（清水「うん」）そこに固定化されることは誤謬だけれど、それはそれ自身の問題として追求しなければいけない。僕は、今の東京都の段階だったら、七〇年には一万、二万のそういう部隊の編成は不可能じゃないと思っっているんですよ。

その上にさらに——それだけでは済まないんだ、とさっき僕が呟いた意味はね、現在の労働組合運動に、どの程度利用し得る余地が残っているか、ということについての判断の問題が出て来



るんじゃないかということです。

一言だけ付け加えるけれど、さっき党と云ったのは、勿論達成されるべき党について、を背後の論理として問題にしているんだけど、さし当って云うと、共産主義者、自覚的労働者の工場外に於ける組織活動、前衛的組織活動というものを、とりあえず指しているのだと理解して頂きたいと思うんですけれどね。先程僕が云った党というのはね。

清水 それが現象的には二重権力として現われるか、脱落して行く部分がゲバの後にくっ付くかということになって来たわけでしょう？

本多(中核派) まあ僕は二重権力という言葉は……

鈴木(ML) 僕らは二重権力的という言葉に云っておりますけれどね。これは僕らは積極的に使っておりますけれど。

本多(中核派) 二重権力という言葉はもう少し積極的な状態、つまり、文字通り帝国主義の権力と労働者の権力が、死活を賭けて対決している階級情勢に対して、初めて僕らは使うべきだという判断を持っているからね。

水戸 でも、組合内部に勝手にいろんな委員会や何かを作ってしまう、という形でやって行くわけでしょう？

本多(中核派) うん、それは同じでしょう、指していることはね。ただやはり言葉は選びたいというだけですね。

## 二 労働組合「運用法」

本多(中核派) 基本的には、資本が労働者を支配して行く形式として、今日の労働組合が規定されているということは、まず大きく押えて置かなければいけないわけですが、一応「総評」という名によって総称されている社民的労働組合運動と帝国主義との関係が、今日どういう局面に立っているのかということについて、もう少し見て置かなければいけないんじゃないか。

確かに、産別を潰して占領軍の手で総評が作られた、という事情からも明らかのように、それは明白な第二組合として形成された、という点を本質的には押えて置かなければいけないわけだけれど、にもかかわらず、この総評が、労働者階級の資本に対する一定の改良主義的な闘争の激化に逆規定されて、帝国主義に対する改良主義的な対極——社民的な運動体として形成されて来た。ところが、帝国主義の今日の世界的あるいは国内的な危機の進行の中で、こういうタイプの労働組合運動すら、今日では残して置くわけには行かないということまで帝国主義の攻撃は強まっている、帝国主義の危機はそれだけ妥協のないものになって来ているという面が今日あると思うんですね。

そういう点では、社会党・総評を主軸にする労働者階級に対する支配のタイプから、民社・同盟を主軸にする資本と労働の関係に、全体としては大きく移行して行くという過程が起っていて、この問題をめぐって、社会党・総評の中では、自らを民社党化する、自らを同盟化するという形をとって生き延びるのか、あるいは一応社民としての存亡を賭けて、これに対して一定の抵抗を

示して行くのかという問題が進行している。

特に、国鉄労働組合という形をとっている総評型労働組合の頂点と、これを基盤ごとすっ飛ばしてしまおうとする帝国主義者の攻撃の間に、やはり一定の矛盾関係が発生して来るということになるわけで、われわれはこの条件を決定的に重視して、この内部に於ける、既成の労働組合運動の形式を通しての闘いをもどんどん強めながら、その形式の中で、先程云ったような独自の闘争系列を事実上強化して行くことに、具体的に着手しなければいけない、もっと正確に云えば、その闘争をもっと強めて行かなければいけないと考えているわけです。

實際上、今度の国鉄闘争の過程（三分割反対闘争）なんかでも、確かに、（三月）一日に三分割問題で裏切られてしまうということになるけど、われわれからすると逆に、別に物取り主義の立場ではあの闘争をやらないわけですよ。むしろ、民同的な形式であれ、三分割に反対するいろんな行動が起きて来た時に、その出て来る指令を勝手にわれわれが作り変えちゃって、動けるところはどんどん動いちゃって経験を作って行っちゃう。という具合に、われわれは指令が来たから闘うんじゃないけど、指令が来たという現実を利用してやる。これはちょうど、反戦青年委員会が、親組合から許しが出たような時に、その条件を使ってどんどん闘い抜いて行っちゃうやり方と、本質的に同じものということになるわけです。

今の攻撃を認めたら、その行く先には国労の崩壊しかないわけですよ、実際はね。それには国労幹部は本当の意味では対決出来ないんだけど、しかしその危機感はやはり民同なりに感ずるから、何かちょっと動かざるを得ない。下の方に来ればその圧力はもっと強いですからね。

田園 討論七〇年

宇尾

宇尾

だからそういうものを使って独自の運動を組織して行く。

さらに将来の問題としては、幾つか形式的な形でストライキが総評の手によって打たれるという可能性については、われわれ機械的に否定するわけには行かない。とするとわれわれは、この形式的に打たれた闘争を、拠点的な部分に於いて長期化する。それから拠点化する。その可能性を——実際闘争に入った場合は、入った瞬間にその枠をはみ出しちゃうけれどね——どういうふうにやって行くか、という問題が出て来る。

今の総評型の運動というのはだいたい時限ストでしょう、全部ね。しかも、二四時間なんていうんじゃない時限ストの場合、これをどうやって引き延ばすか、全体の中に幾つかの集約点、集中的拠点を作ってそこでどう延ばすか。

それからさらに、民間で云えば、幾つかのモデル・ケースの闘争が今年中に起きることになるでしょう。これはいわゆる中小企業型のタイプではなしに、もう一つ大きい形のところで、いわば闘争のモデルを作る。地区には地区労働傘下の組合がありますよね。その他、未組織や同盟系の職場にも反戦青年委員会がある。こうしたその地域の闘争を、全体として拠点に集約して行くというような闘争が、やはり今年中に幾つかのモデル的闘争として試られるでしょう。そういう、今日の総評的な運動の次元を超えるような運動を、しかもその地方に於ける、あるいはその産業に於ける全労働者が見えるような地点で——まあ今までにも小手調べ的には幾らかやっては来ていたわけけれども、それをもう少しはつきりした形で持つて行くというところに入っているわけだと思っっているわけです。

これがね、直ちに全体の労働者を直接的に吸引する、直接的に全体を集結するところまでは行かんだろうと思う。

僕らはむしろ、七〇年によって大きく切り拓かれた政治的条件の下で、もっと大きな崩壊が行するだろうという——これはまあ純粹に読みに属することですよね——そういう判断を持ってゐるんだけど、しかしそこまで待つということでは、永遠にいつまで経っても出て来ないわけだから、むしろ六九年から七〇年の初頭という過程の中で、そういった幾つかの拠点を人為的に創り出すことになります。

勿論、闘争に入っていく順序にはいろんな特目的理屈があると思うんだね。例えば医学部の闘争みたいだね。今われわれが露骨に云っているような思想で医学部の闘争が露骨に始まったわけじゃないでしょう。背後には持っていたかも知れないけれどね。だからいろんな条件でも、つれ込んで行くだろうと思うけれど、しかし、実際上の闘争の経験をまず持ってしまうということ、当然それをやるには、その指導部は、先程云ったような一定の思想的な確信というか、確認を持っていないと打てないということになるんじゃないか。

水戸 本多さんの構想の背景に、総評の一定の危機、総評・民同の危機というものがあったんだけれども、僕は今思い出したんだけど、六〇年の時の島氏(成郎)六〇年安保ブンド書記長)がね、ごく近い将来、共産主義者同盟(ブンド)と民社だけが主流的な党として残るであろうってことを云ってるんだけどね。

本多(中核派) 本質的な見通しとしては正しいんじゃないの？ (鈴木・さらぎ笑う)

それは、「ブンドが」というような云い方を、非常に短期的に見れば問題はあるかも知れないけれど、僕は社民の本流はやはり民社だと思うね、国際階級闘争の中では。

水戸 だけど、それがそうならないで来ているというか、この一〇年間。

本多(中核派) そこは引き延ばされてるってことです。

鈴木(ML) 単なる遅延じゃなくてねえ。島さんが民社に——当時民社は初登場ですよ——そこに見た危機、あるいはその本質というのが、実は僕らが今社民と呼んでいる社会党・総評の中にずーっと浸透して来たと。例えば太田・岩井のコンビが、実に巧妙に、一方が跳ねて他方が押え、これが跳ねると彼が押えるというような手口で労働者を引き廻し、愚弄し、それが行き詰ると今度は堀井が出て来るといふ形に変質して来た過程があって、したがって、島さんが残ると云った民社が今社会党・総評として残っているんだと思う。

さらぎ(共産同) 島さんが云ったのはむしろ、社会党の大部分が左派に流れて来て全学連の方に付くと……

本多(中核派) まあそういう主観的希望もあるよね。だけど僕が云ったのはそれだけではない……。

水戸 今問題にしたいのはね、そういった意味での総評・民同の危機があるということが本多さんの一応の前提になっているわけね。それが本当に起るんだらうか、単なる希望的観測ではないのかというようなことについて、むしろ他の方に……

さらぎ(共産同) むしろ、べったり体制内化するならそれはそれなりに押えて行ける。だけど

現在の社民のように、なまじ闘おうか闘うまいか、闘うポーズを示しながら、左派的なポーズを示しながら、闘わないで収約して行くというようなやり方では、もう現在の帝国主義の攻撃の中では持たなくなってくる。

小長井 と同時に、職場の労働者もそれでは承知しないということでしょう。

鈴木(M.L.) ただねえ、承知しないと云われて十数年ですよ。実際には官公労が支えているというように云われますよね。だけどそれだけじゃなくて……

さらぎ(共産同) いや、「承知しない」を承知させるように大分変ったということでしょう？ 全通も全電通もそういう支配に変ったということですよ。

国労だけでしょう、若干バネを持っているのは。もうその国労も駄目ですね、だいたい上は。

小長井 本多さんがさっき云った、今年中にそういう闘争を打つというのは、もうすでに具体的に着手していらっしゃるんですか？

本多(中核派) それはかなり主観的にやるということですよ。

しかし、その条件の中には当然、民同や今日の民同的労働運動の局面についてのわれわれの判断が含まれていますよ。

水戸 鈴木さんやさらぎさんは、もう今の既成の労働組合には手をつけない、ある意味では。

さらぎ(共産同)鈴木(M.L.) いやそうじゃない、違いますよ。

鈴木(M.L.) 組合内に二重権力を創って行こうと……

さらぎ(共産同) 僕らもそうですよ。

鈴木(M.L.) 本多さんが云っているような意味でのいわば幻想ってのは僕ら持っていない。

さらぎ(共産同) ご存知と思うんですけど、公労協のある部門で、僕らは中央の有数な第一党になった勢力を持っているわけですね。地方支部まで押えて。それは安保から一〇年かかったわけですから、ここまで育てるのに。中核さんの拠点だって、某公労協の地本青年部にあると思うんですがね。これをどの時点で決起させて、全体の流動の中で突出させるかというのは、党派としては相当大きな決断ですよ。

本多(中核派) 決断要るよね！

小長井 企業の中で、産業の中で、労働者運動がどういう形で把えられるかと云うとね。飽くまで経営当局との取り引きは認めないで、その時々々の労働者の課題をとことんまで追求して行く、階級決戦を徹底して闘って行くという指導の路線と、それに対して、建て前としてはとにかく闘う、しかし裏では、と云うと非常に言葉は汚くなりますけれども、要するに妥協を認める、取り引きをするという民同の路線というのが出て来たと思うんです。それに対して、さらに右翼的に、建て前も実際も企業や会社や職制とべったりで積極的な資本の手先だという同盟とか民社とかあるいはJ.C.とかの路線が登場する。こういう一つの図式が職場の労働者に見ればあると思うんですよ。

それが、従来の民同運動の中では、企業との妥協なり取り引きなりがあったのが、最近の状況では、合理化の進展の中で、あらゆる職場慣行なりあらゆる既得権なりを徹底的に剝奪して、従来の民同的な運動すらも全部破壊して行くという過程の中で、企業の独占の集中なり企業の支配

の徹底なりというものが進んで行くわけでしょう。そういう中で、実際の運動の在り方もしだいに亀裂を大きくして行くという形なので、やはり六〇年の時に前のブントの書記長（島成郎氏）が云った、そういう一つのテーゼというものが出来来ると思うんですけどね。

そういう発展過程の中で、今の運動がずっと流れて来ているとすればですね、今後やはり、その両極の間でおこなわれる階級内闘争と云いますか、そういう労働運動内部での主導権争いと云いますか、どちらの部分が全体を指導するのか、主導権を持つのかということをめぐるって、七〇年の中で必然的に、決戦的な状況を迎えざるを得ないのではないかと感じるわけですね。ですから、そういう時にいったい、革命的な前衛党と自己規定する部分は、どういう政治指導なり課題なりを追求するのかということじゃありませんか？

さらぎ（共産同） ブントの判断ですとね、中小・零細も全部というわけじゃないですけど、特に大企業、それから国鉄、全通、全電通というような公労協部門のような大きな部門の労働組合が、そのまま戦闘化して、上から横断的な指令を出して全国的なゼネストを打って、それがソヴェトのような役割を果して行く、という展望は甘いと見ているわけですね。

組合上部の権力支配は相当進行するという事です。それが基本的には民社的なものにならざるを得ない限りは、現在の戦闘的社民と云われるもののパネはしだいに抑圧されて行く。そのことに対して内部の左派、下部の左派が反撥して行く。それがどういう形で反乱を起すかということに注目すべきだと思うんですね。権力の関心も今そこでしょう。

中小の場合だったら、組合丸ごと尖鋭化する。政治闘争もやり尖鋭的な組合闘争もやる。企業

が潰れるか潰れんかということまでやるような戦闘的な労働組合の部隊が、今もうあちこちに出来ているんじゃないですか？ それは新左翼各派ともそれぞれ持っていると思いますよ。で、僕らはそれを今中心的にどうか、急いで進めていますかね。これだけでは労働運動の周辺革命論になるから、それと同時に大組合内にも拠点を作って来たんですね。その部分を状況に応じて反戦（反戦青年委）に出して鍛えて行くという方法です。もともと、権力が反戦メンバーの顔写真をとるから全部は出しませんよ。そんな正直じゃない。

闘い方としては、初めは、合理化に対して闘う、賃銀について闘うという形で、社民が出した方針を一番よく徹底して闘うという、いわゆる逆手論というんですか、社民の指令を逆手にとつてやるという形が可能な時期もありました。六〇年安保が済んでしばらくぐらいは非常に有効だった。その後、だいたい日韓の前後から、帝国主義的支配が強くなりましてね。民間組合幹部自体が、賃銀を貰う時に、合理化と引き換えにやるわけでしょう。そうして職場支配を一つ一つ許して行ったんですね。職場支配を一つ一つ許して、自分の存立基盤が逆に危なくなるから、組合運営をもの凄く官僚的に中央集権化するわけですね。中央の機関に対しても、反乱を起したら財源を取りあげるとか、財政の一元化、人事の一元化、それからILOの統一機能という形でやって来るわけです。その極が、組合社民と経営の一体化による二重首切りです。

しかし、中央の統制は非常に強化されますけれど、他方ではそれに対する反撥が出て来て、官僚統制は強化しているんですけど、信頼関係に於ける思想的支配が非常に崩れて、不信に充ちているわけですね。僕らは今そこを、民社の基盤でもそこを突いて行くということですね。そ

れで、地域労働運動というのを実験しているんです。

これはどういふものかと云うと――

中小企業でバカバカッと戦闘的かつ階級的労働組合運動をやりますね。すると、これに対して資本の攻撃がかかる。そこで共闘会議を組み上げるんですね。すると、組合丸ごととは来られないけれど、部分的に――民社党支配の組合の人たちでも非常に不満を持っているよね。佐世保ですと、一人の市民として、組合員がゲバ棒闘争を支持して石を投げてくれるという形で来るんですけれど、そういう形ではなくて――共闘を支持するというグループを作って参加して来る。つまり、地域労働運動にノン・ポリやノン・セクトが登場したわけです。それが組合で全共闘みたいな、職場工場委員会みたいなものを作って出て来る、というところまではまだ行きませんけれどね。部分的にはそういう部分も出て来ているんですが。

幹部支配が上に登れば登るほど、官僚統制は物理的には利きますけれど、その官僚統制の陰で、上に黙って僕らと一しょに動くという構造が下にあるわけです。そういう運動を中小企業闘争を中心にやる。これが地域階級労働運動。君らは中小企業ばかりゲバ棒を持たせてやるだけじゃないか、と云われるかも知れないけれど、大きなところで支配が上に行けば行くほど、下が緩んで来るというその弱さを、地域労働運動としてかささらって来るといふやり方なんです。敵も弱い環を突かれて全く参っている。だから、現在の僕らの中小争議に想像もつかない弾圧をかけて来るんです。

鈴木(M.L.) その辺全く賛成ですね、僕は。

本多(中核派) さっきの話じゃないけれど、本当に軟構造ですよ。

さらぎ(共産同) その場合に、そういう運動をやるということになると、単にブンド中央政治局が戦闘的政治方針を語るだけじゃなくて、現地、現地の党が指導力を持たなければいけないんで、地区の反戦も現地の党が指導するという事です。まだはっきりした前衛党にはなっておりませんけれど、一応党機能を果たすという意味で、全国主要都市の現地末端地区まで態勢を整えて、そういう運動を指導する。

一方反戦は労働者の政治闘争の部隊となる。その反戦と地域の戦闘的労働運動を指導して行く共闘の網の目を、たくさんあちこちに行って行く。その網の中心に公労協拠点が坐る。それを今度はバーンと突出させる時には、これを全体が囲んで外から攻め込む。これがマッセン・ストライキ。そういう形と交互しないと、学生さんとも切り離し、外の中小企業とも切り離して、大単産の中から労働運動そのものが戦闘化するんじゃないか、何かするんじゃないかって期待したり、何かさせようと思ってもそれは無理ですね、やはり。

例えば東交(東京交通労組) 争議がありましたですね。あの時も社青同解放派、協会派、それから中核、ブンド併せてほしい三分の一の勢力があったわけですね。中央委員会の票数がほしい一五〇票ぐらいなんです。その中で悪い時は四八票から、いい時には五三票ぐらいの票が出るわけで、三分の一の勢力があったんです。これでは「民主主義」を守っている限りでは必ず負けるわけです、三分の一だから。民主主義で戦闘的左派は首を切られてしまった。そこで、統制二重処分が出た時に、僕らはこの三分の一がゲバルトをやれ、バーンと突っ込んでゲバルト

を中で起しながら、ここで負けそうになったら、よそからも動員してやるぐらいのことやれと云ったんですが、一〇・八前の情勢に規制されて出来なかった。まあそれはいつも出来るわけじゃないかもしれませんね。やはり決定的な二重処分を受けるというような時には、決定的にここで突出して行って、そしてその結果として処分を受けても、第二組合を作るわけじゃないけれど、別の戦闘組織を作るぐらいの——鈴木さんの言葉で云えば二重権力、組合内二重権力と云いますかね——ことをしなくちゃ。

そういう、階級的労働運動なくしては労働組合運動そのものを、中央権力政治闘争をやる部隊には変えられない。戦闘的労働運動と政治運動を兼ねてやる部隊を作って置いて、そこでグーッと突出するぐらいの闘いをやらなければ、今の体制の中で、何か組合そのものが戦闘化して、闘う組合と闘わん組合に大きく割れるというようにはなっていけないんじゃないか。やはり分解突出ということですね。

しかしその分解を一人や二人でやったんではピンチだね。(笑い)すぐ駄目になって、代々木みたいに首切り反対・裁判闘争の「……守る会」「……守る会」になっちゃう。日本ロールで代々木さんやって……民主主義秩序維持の漫画になっちゃった。

鈴木(M.L.) もう行商運動だよ、あれは。

さらぎ(共産同) そう、そしてすぐ行商に出て行くという形ね。

東交の場合もゲバルトもやれなかったね。結局その場合、社民が斬るわけでしょう。そこで社会党に対して、協会派なり解放派なりの上の幹部に対して、訣別してまで自分たちはやるんだと

いう場合には、新左翼の陣営に入るのか入らんのかということの決断が要求されるわけですね。

それを、自分の党派的位置を考えたらやれないというんで、ウジウジウジウジしてね。で、中共の商品売って一九商会——一〇・一九に処分されたんで一九商会と云われて、まあ、いろいろな罐詰め売ったりなどするような、(笑い)そうなたらもう惨めですからね。

東交の場合、はスクラップの部門——電車のスクラップの部門に合理化が集中して来たから、日本の労働運動の中では、しわ寄せが縮図的に早く来たと思うんですけれどね。そういう現象が全体に訪れる時には、グッと先頭切って闘うというのが僕らの基本ですね。まだ僕らの官公労等々の拠点では、そこまで来ていないから突出させていないですけれどね。やる時は……もうすぐ……

小長井 ただ、六〇年の時にはですね。五九年から六〇年にかけて民社党が出来た、ところが、六〇年の安保闘争で相当期間吹っ飛んだですよ、民社党は。

これはやはり、六〇年の闘争の中でいわゆる民同が、中央指令でもってとにかくストライキを打ちましたよ。例えば昂揚場面では、六・四とか六・一五とかいうように、全国ストを打ったわけですね。

そういうった状況とは、今は全く本質的に違って来ているという把握ですか？

さらぎ(共産同) ええ、そうですね。平和と民主主義運動に依拠した六〇年のストライキとは違いますね。帝国主義の侵略反革命に対決し、帝国主義の国内再編に対決するストを打つ。

鈴木(M.L.) 本質的には違うけども、そういうことが、例えば六・四国労ストみたいなやつが

全くあり得ないとは勿論思いませぬね。それはしかし、本多さんが云ったような意味での……

小長井 一元的な追求課題ではもうなくなっている……？

鈴木(ML) うーん、そういうことですな。

本多(中核派) いや、当時でも別にあれ自身が追求課題じゃなかった。ああいうふうにして打たれるものが、むしろ非常に欺瞞的なものを持っていたんで、実際上平和的ストライキとしてやられてね——安保の時に云えば六・四ストとか六・一五とか——街頭に於ける国会に向っての当時の政治闘争を激化させて行くんじゃないに、これから総評が逃げて行く手段として打たれたという面もあるわけですね。

小長井 うーん、必ずしもそうかなあ？

本多(中核派) だから、あれをいかにして戦闘的なストライキに転化させるかということが、当時われわれにとっては実践的な問題だったわけです。

小長井 いやあ、六・四の時なんか、国鉄の労働者もやっぱり荒っぽいことやっているからなあ。

鈴木(ML) うん、それはそうなんだけれどね、例えば全学連が品川へ行ったでしょう。品川へ行った全学連は惨めだったですよ。

小長井 まあ、それはそうだねえ。

鈴木(ML) 全部掃き出されてね。一部の労働者は「よく来た」と何人か握手するわけだけれど、腕章を巻いた立派な人たちがワンワンとやって来て「お前ら何だ、何だ」、ごたごたやって

追い出されるという形で。

それは党派的な問題じゃなくてさ、全学連が安保闘争を推進する闘って行く部隊として登場したのに対して、彼がもともと持っているヨソ者意識からヨソ者を排除するというだけじゃなしに、もう少し意識的に、闘いに来てるやつを排除して、安定したストライキを打つという面はあったですよ、それは。

本多(中核派) まあ、あの時は——当時の問題としては学生の側だって弱かったですね。

上野なんか入れる時に入らなかったからね。



## 第四章 七〇年・七〇年代闘争のイメージ

### 一 「ゲバ棒の思想」とプロレタリア蜂起

いいだ(共労党) 七〇年闘争と七〇年代闘争との連続的な絡みの問題は、本多さんの云ったことに私はだいたい賛成なんですよ。

そういう現局面あるいは次の局面を含めて、いわゆる帝国主義的な支配の強化と、社民あるいは民同型労働運動の中に一定の矛盾が一層生じてきて、それをわれわれが革命的観点から運用出来るであろうという論も、私はそれなりに傾聴したわけなんですけれどね。

ただその上でズバリ聞くと——また漫画化するのかと云われるかも知れないけれど、逃げないで答えて貰いたいんだが——結局、それぞれの諸君の七〇年あるいは七〇年代の労働運動、つまり戦闘的革命的イメージというのは、要するに労働者が、ゲバ棒を持った労働運動をやるということですか、非常に端的に云っちゃって？

本多(中核派) ゲバ棒を持った労働運動というふうに云えば、ジャーナリズムにはいいと思っただけだね。

労働者が、自分のストライキだとか工場占拠とかいう闘争に現実に入った場合に、ちょうどピケット・ラインのないストライキがないように、当然、この闘争に対する、権力の攻撃と会社側

の攻撃があるでしょう？ それも処分なんていうタイプのものじゃないですよ。勿論それもあるけれど、文字通り、例えば第二組合を武装して襲撃をかせせるとか、さらに会社側の外人部隊を導入して——これは今でもやっていることですよ——攻めて来るというような問題になるわけです。

すると、われわれとしては当然、ストライキとか工場占拠とかの闘争に入るといことは、これに対する帝国主義者あるいは資本の側の暴力的な襲撃というのを、絶対的に起るべきこととして予想しなけりゃいけない。これとどう対決するかということになると思う。

實際上、六〇年頃の民間のストライキだって、鉄の逆茂木を作るぐらいのことはやっていたわけですよ。これはまあ云っちゃ何だけれど、社会党・共産党の闘争の次元でも、中小企業でストライキが起きればちょいちょいやっていることですね。

一例として、僕らの事務所のすぐ近くに信用金庫があるんだけど、そこでやったストライキ程度だって、鉄の逆茂木、熱湯ぶっかけるぐらいのことは、第二組合の攻撃に対してやっていきますよ。

われわれはそういう攻撃が加わって来ることに對して、当然自分たちの闘争を守るといふ点から、自衛の思想、自衛の組織、自衛の武器という問題を、その具体的な階級的諸關係に規定されながらも積極的に提起して行く、積極的に考えて行くことがなければ、實際上何の闘争も出来ないんじゃないかと思う。

さらぎ(共産同) 僕も全く賛成ですよ。

現在中小企業闘争をやりますとね、必らず「店主連合」なんていうのがあるんですね。例えば牛乳だとか兼六館のような。それで暴力闘争になるわけですよ。店主というのは一番常識のない、私の強い零細企業でしょう？ これはまあ、云って見ればファシズムの温床だということ、いやムチャクチャ凶暴化しますね。自分の私有財産を直接守るといふ危機感でね、もの凄く凶暴化して来る。ヤクザも雇えば警察にも頼む、もうあらゆることをして来る。これに対してはこちらもヘルメット、棍棒で固めて行かなければ、ピケ一つ守れないという状況になると思うんですね。では、それは中小企業だけの特徴かと云うと、中小企業争議はそこまで闘うからなるんですね。

現在の大企業の場合、民間や共産党がそこまでやらないからならないだけなんです。三井三池のように徹底して闘う場合にはなるわけで、大企業の拠点が階級闘争に入った場合は、もっと大掛りな反革命——直接国家権力との対決になりますよ。そりゃ機動隊は当然来るでしょうしね、機動隊の前には会社側独自のガードマンが来るでしょうしね。「全金」前中製作所闘争の時はガードマン反革命。機動隊は来なかったけれどガードマンとの対決になるわけですね。もっと小さなところだったら町のヤクザか暴力団、次はガードマン、次は国家暴力が直接出て来て直接対決になりますね。それを粉碎して進まなければ、職場のストなんて守れないんじゃないですか？

国労とか全電通で僕らが一発ストを構えて拠点でやるとなると、それは山猫でやるわけでしょう？ 組合の指令に反対してね。

本多（中核派） 国鉄の場合なんかもっと凄いことになるんじゃないかなあ。  
数人 凄いいことなるよ！

さらぎ（共産同） 国労でやったらもうメケメケの闘争になる。現在中大、日大、東大で起っているよりも、もっと凄い状況が出て来る。これを潰さないと、何と云っても国家の中枢神経ですよ？

本多（中核派） 中枢をどっちが取るかという問題になる。

さらぎ（共産同） 学園闘争でイデオロギーの再生産構造が破壊されるというよりも、もっと大きな、再生産構造全体をつなぐところの流通の中の交通中枢であるし、中枢神経ですからね、これは、国家の。

新宿でやったってあれだけになるわけでしょう？ 神田でやったって。それを、直接的生産点労働者そのものが、止めて管理して一時的に崩壊させるといふ、占拠、マッセンをやった場合には、もっとメケメケになると思うですね。

それだけの覚悟を持った部隊を作っていないと、そう簡単にはやれないということですよ。現に、国労ストで、拠点駅に三〇〇人、電車区で二、〇〇〇人、操車場で三、〇〇〇の機動隊が出ましたね。

本多（中核派） 一つの例を挙げるとね、今国鉄でピラ貼りをやってるでしょう、駅で。あれはもう自衛組織がないと、駄目ですよ。公安と赤帽が出て来て向うの方の人数が多くなったら必ず負けるわけだ。

それを「ゲバ棒の思想」というふう云うか、共産党的に労働組合法第何条に基づく正当な合法的行為と規定するか、どういう意識を持つかは関係ないですよ。事実それを守る組織がなかつ

たら、駅にポスター一つ貼れないですよ。ゲバ棒持つか持たないかという基礎はそこにあると思うんですね。やっぱり、突き飛ばして来る者は突き飛ばす以外にないわけなんだから。

その上の問題として、もう一つだけ指摘させて貰いますと、今度は群衆の問題が出て来ますね。国鉄なんかの場合だと、いわゆる乗客と云われているものが実際上どちらの側に組織されて行くかということですよ。この前新宿や品川で起った衝突なんかだと、われわれの側に来るといって構図を示していますね。しかし、それも単純に自然発生的に起きるわけじゃないから、われわれが一〇・二一に於いて新宿で経験したようなものをもっと部分的な反乱、部分的な衝突という形をとって全部そこに具体化して行くことになるわけでしょう。労働組合あるいは労働者の労働運動の中でも、それが幾らかでもまとめた闘争としての発展を辿れば、当然労働者にとって自衛の問題が出て来ると思う。このことについては、われわれとしてはむしろ積極的に思想化しなければいけないんじゃないかということですよ。まあ答えになるかどうか解りませんが、いいだ(共労党) あのね、私の聞き方が悪いらしいんで、どうもお互い問題意識の領域がうまく噛み合わないんで、もう一回云いますとね。

「西ヨーロッパ革命を始めるのは難しい」と云ったでしょう、レーニンがね。それを、日本やアメリカを含めて先進国革命というように置き換えてもいいと思うんだけど、先進国革命を始めるのが難しいということの一番中心は、やはり労働運動の困難性、特に革命の力としての労働運動の困難性の問題だと思うんですね。それは、特に国家独占資本主義体制下に、日常的には資本の中に包摂されている労働者を、いかにしたら革命化し得るか、ということの困難性でもあるし、労働

者の中にいろんな階層的差異があるものを、プロレタリア統一戦線として革命的に統一することの困難性もあると思うんですよ。つまり、現代資本主義下に於ける階級形成の問題に帰着する。学生運動に於いてこの間、羽田以来、あるいは学園闘争の中で、ゲバ棒を持った学生運動が登場した。それを「ゲバ棒の思想」ということで、革命思想の問題に還元してだけ、云えばそれはそれで成立するだろうけれども、それをもっと即目的に受け取ってですね、「ゲバ棒を持った労働運動」なんだという形でストレートに解けるかどうかということについて、私は大いに疑問がある。それから第二点はですね……

鈴木(M.L) どういう疑問ですか？ つまり、そういうものは出来ないんじゃないかという疑問ですか？

本多(中核派) 自衛なしのストライキは可能だという説ですか、そうすると？

いいだ(共労党) いや私はだから、学生運動の一つの行動形態から類推をして、それを労働者の中にただ移行させて当てはめているだけじゃないか、というふうに疑問を提出しているわけ。本多(中核派) だから、僕は全然逆な立場からお聞きするんだけど、近い将来に於ける闘いに於いてね、労働者が——まあゲバ棒というのはここでは一応象徴であるとして——その他いろいろありますよね。しかしそういうものを持たないで……

いいだ(共労党) 政治的象徴ならいいですよ、政治的効果をキチンと狙った……。だけど、さっきはゲバ棒はシンボルではないって云われたから。

(数人一齐に発言。騒然となる)

……六〇年にも三池闘争みたいなものはあったわけですね。

本多(中核派) ちょっと待って下さい。だから、あなたの云っているのもっと逆なんです。機関銃でも構わないんです、僕が云っている意味は。

とりあえず角材を例にとればと云っているわけで、いいださんの場合は逆に、棒を持つのはいいけれど象徴として持ってくれ、というような意味で使われているとすれば、ちょっと違うという事ですよね、シンボルという言葉の意味は。

それで、その上で聞きますけれどね。ゲバ棒を持たないでストライキをやる、ゲバ棒を持つような労働者の自衛的な組織の思想、あるいは労働者の準備というものを含まないようなストライキというのは、現実には可能か？……

いいだ(共労党) 具体的状況と具体的時点ですよ。いつの問題を問題にしているわけですか？ 鈴木(M.L.) 七〇年闘争ですよ。

いいだ(共労党) 七〇年闘争！ それで第二点ですけれどね。

革命戦略ということから云えばですね、その戦略的時点に於ける労働者の権力奪取の闘争形態の中には、プロレタリア統一戦線に大衆的基盤を置く、プロレタリア武装とプロレタリア民兵が出て来ることは、私は当然のことだと思ふんですね。

問題はそこから逆算を行って、今、例えば牛乳労組が闘うと暴力団が来るから、そこで衝突が暴力的に始まっている、それがすなわちプロレタリア武装でありプロレタリア民兵だ、という具合にストレートに短絡出来るのか、ということをお聞き願っています。

本多(中核派) (さらざ・鈴木もこの間同時に発言) ストレートに短絡出来ないって云えば云えないこともないけれど、それは萌芽でね、萌芽としては把え返さなきゃ……

さらざ(共産同) いつの日か、労働者がある日突然武器の思想を持つというんじゃないで、日常的な具体的な闘争の中で、一步一步かけられる攻撃に対して出来るだけの武装をして、それをエスカレートする中で、初めて暴力革命の思想と団結が現実形成出来るわけであって。それは向うが——ヤクザが七首を入れて来るから棒を持つのであって、相手が七首を持って来ないで素手で来た時には、こっちはヘルメットと素手で行くという形になるわけでしょう？ 相手がピケケツ・ラインに入ってそれを突破するという時には、棒を持って突破するという形で事態が進行するわけでしょう？ いいださん、実践経験を出さないよ！

いいだ(共労党) 例えばね、私も今、王子駅なんかで国鉄運賃値上げ粉碎のビラ貼りをやっている、いつだってイザコザがあるけれども、国鉄のビラ貼りに鉄道公安官が出勤して来て、そこで向うが多数いけばやられちゃう。そういう状況の中でビラ貼りをしなければならぬ現時点の状況だから、それはもうすでに労働者武装の萌芽なんだというようにとるわけですか？

本多(中核派) 鈴木(M.L.) そうでしょう？ そりゃそうですよ！

いいだ(共労党) ハハアー!?

本多(中核派) はっきり云うけど、僕らはそんなに珍しいことを云っているんじゃないんで、ある意味ではむしろ、社会党なんかで全金でやっている水準なんかより遅れている面があるんじゃないですか、あなたの云っていることは？

いいだ(共労党) そう思うのはあなたの自由だ。(笑い)しかし私はちゃんと聞いてるわけだからちゃんと答えて貰いたいんだなあ。現象、それも部分的な現象から革命的指導の全体を立脚させるわけにはゆかないよ。労働運動全体の指導としてもね。主人が暴力団を連れて来ない争議だっていくらでもあるし、パクられないビラ貼りだっていくらでもある。だからどうってわけには戦略的指導はゆかないわけだ。

つまり、それがね、七〇年代労働運動の、武装した労働運動というものの萌芽形態だと即目的に把えるのかということよ——

本多(中核派) あのう、国鉄のビラ貼り? (いいだ「そうそうそうそう」)

こういうものはどこでも起きるでしょう? 逆に云えば、それを当面はピケット・ラインで追っ払っちゃうという思想がなければ、駅のビラ貼り闘争も出来ないということと同時に意味するでしょう?

さらぎ(共産同) 正確な言葉で云えば実力闘争ということでしょう、まだ銃火器を持たないという意味で。その実力闘争の幅の中に、個々具体的な日常的な暴力に対する闘争がある。敵は暴力をかけて来るわけですからね、いろんな暴力をかけて来る。それに対して実力で排除して実力でハネ除ける、武装するというコミュニケーション的団結の質がなければ、現在の労働運動を革命的労働運動に前進させるということは空語である、ということ云いたいわけですよ。

いいだ(共労党) 実力闘争ですか、正確に云えば? 大衆の実力闘争ということであれば、いわば当り前のことで、私も賛成だけどもね。

さらぎ(共産同) 武装の思想を嫌い、武闘を恐れる人には、実力闘争でいいです。

その実力闘争の中に於ける武器が——まあ、棒が長いとか短かいとか、たまたま出刃包丁が出たとか、いろいろなことはその個々の形態にあるけれど、それを持ってもやるという攻撃的な思想で団結しなければやれない。

まして、国鉄なんかでやろうと思ったら、それはもうゲバ棒どころじゃない。機動隊とメケメケやるだけの準備をしなければ出来ないということですよ。

水戸 逆に云えばね——もう一步を云わないから解んないような気がするんだけど——そういう思想でやって行く運動が、恐らく非常に広汎な労働者を獲得するであろう、それを持ち込まなければ獲得出来ないだろうということを云っているわけね?

いいだ(共労党) だから私は、七〇年代労働運動の主流はそうなんですかと聞いていますよ。本多(中核派) 「代」の字入っているわけ?

いいだ(共労党) だから、私はさっき云ったように、本多さんが云った七〇年闘争と七〇年代闘争の連続的な絡みの押え方についてはだいたい賛成である、その前提の上に立ってですよ、七〇年代の革命的労働運動を考えると、今云われたようなものを萌芽形態として把える、それが主流になるというように判断しているのかって聞いているわけなの。

本多(中核派) そうですよ。

鈴木(ML) ただ、こういうことが云えるよ。

われわれとしてはそういうものが主流にならなければいけないと考えているし、そのように具

体的に目指している。で何回も云っているように……

いいだ(共労党) 決意じゃないんだよ! 政治なんだから決意を聞いているわけじゃないんだ。

(数人一斉に発言。騒然となる)

鈴木(ML) 何云ってるの! だから、その上で中核派の諸君、あるいはブントの諸君、そういう諸君と、その辺での一致をもって僕らは実践をしておるし、そういう可能性を現在発展させていると云うように判断している。

しかし一方で、そういうことは出来ないんだという前提から、やらない諸君がいることも知っている。そういうものが総体としてありながら、七〇年から七〇年代への階級闘争というのは、そういう武装闘争と実力闘争の時代である、別の云い方をすれば、労働組合運動として表現されている、例えば労協内部の闘いから突出したところの闘いが領導して行く労働運動、革命運動としての労働運動というものが主流になって行くだろう。

これはもう、同じことを何回も云ってもしようがないんだけど、例えば、街頭に今ビラがバーツと——各党派のビラが、あるいは集会のビラが貼ってある。あのビラは簡単に貼られているんじゃないんですね。あのビラを貼るためには何人かバクられてしまう。幸い今、あのビラ貼り程度では、勾引されても明日出て来たり、小長井さんにお世話になるようなこともあんまりないけれども、(笑い)しかしそういう犠牲を出して戦いながら、何十カ所か貼るといふようなね……いいだ(共労党) いや、私もそういうビラ貼りをやっているし、犠牲も出しているからよく知っている。だけど、そうならない場合だって、今は何千回、何万回もあるんだよ。

しかし、そのことをね、七〇年代労働運動の主流をなす戦術として自己拡大するというようなことは、私はしていないわけだ、簡単に云えば。

(数人一斉に発言)

本多(中核派) 僕はだから、いいださんに近いところから問題を立てればね、その問題を考えないで七〇年にどんなタイプの闘争が打ち抜けるといいださんは積極的に考えているんだろうか? いいだ(共労党) いや、その問題を考えないでというよりもね、今までの論争の中で、戦闘的な労働運動にしろ革命的な労働運動にしろ、例えば反戦闘争とか賃銀闘争とか合反闘争とか、そういうものについてまるきり語られないで、今までのところはゲバ棒の問題だけが皆さんによって語られているから、それに即して聞いているわけ。

鈴木(ML) いや、しかしそりゃあ、かなり為にする云い方じゃないですか?

いいだ(共労党) いや、為じゃない!……

(数人一斉に発言。騒然となる)

さらぎ(共産同) ……牛乳闘争なども、なぜ実力闘争をやれるかと云ったら、ゲバ棒振るうために闘争が始まったんじゃないかと、異常な、もう労働組合常識以下の抑圧があるわけでしょう? 店主が「あいつは大飯食うから気に入らん」とかね、そういう……

## 二 大企業労働者の位相——

いいだ(共労党) だからさ、もう一回聞き直すよ。

いわゆる大工業プロレタリアートをそういうことの延長線上で獲得出来る——七〇年なら七〇年に……

本多(中核派) いや、延長線上じゃなくて大企業でやるということですよ。

いいだ(共労党) 今牛乳労組の例を引かれているから、大工業プロレタリアートについてはもうダメだという見切りの上でやっているのか、それとも、その「あいつは大飯食うからけしからん」式の延長線上で獲得出来るというように考えているのか、そこを聞いてるわけよ。

さらぎ(共産同) だからさっき云ったでしょう。

中小企業闘争というものは、労働組合を丸ごと、革命的労働運動に持って行くことが出来る。ところが、大企業労働運動については、これを横断的に産別そのものを組合が革命化して、ゼネストを打って、スイスイと、何か賃銀革命論とか合理化革命論とかに発展して行くような左翼バネは、だいたいなくなるといふことです。それについては、産業別内の左派の拠点工場細胞を中心とした、拠点のストライキ委員会が軸になった運動を作らなくちゃいけない。それを内部で作りながら、一方地域の中小労働運動を打ち、両者を地域労働運動として共闘会議を作ることによってそういう運動を巻き込んで行く。もうすぐ現実には、零細以上のスケールのところで闘って見せることが出来ると思います。僕ら、七〇年では一発やろうと思ってるんですけどね。その場合何も民間から指令が来たわけじゃなくてね、明確に政治ストライキとしてやろうということですよ、明確に。そりゃ労働組合で賃銀闘争やって、それが安保と合致しましたと云ってもしょうがないわけですからね。結局、労働者が労働者として本当に労働運動をやるということは、国

家権力と闘うということでしょう？ 国家権力と闘うからには、国家の中枢神経を麻痺させて、こ

こを守りながらどれだけ中央の権力奪取のための部隊が出せるか、そのためにどれだけ民衆・群衆、周りに集まる群衆をそこに引きつけることが出来るかということが問題になる。

そこで、その周りを取り囲む地区反戦や地区の中小企業の労働運動を、その国家権力の戦略拠点であるところ——国家権力の戦略拠点と云ってもあちこちにあるわけですからねえ、千葉にあったり神奈川にあったりね——そういうところで、反戦だとか中小企業の労働運動をやっている部隊が全部集まる。品川にも新宿にも集まるという形で、そこを一挙に内部の左派と結合して占拠するような形でやる、そこでやっぱりメケメケの闘争になる。

そういう闘争を僕らはマッセン・ストライキだと云っているんです。

清水 そこで、大企業の労働者ですなえ、すっかり飼い馴らされちゃっている——さっきいいださんは管理社会とか大衆社会という言葉を使われたけれど、別にいいださん自身が管理社会論とか大衆社会論に特にのめり込んでしまっているわけじゃないと思うんですよ。ただそういうような状況を一方から突きつけられて来ている時に、特にそういう状況の集約的な被害者であり、ある意味では受益者である大工業労働者を、そういう方法で引っ張って行けるだろうか？

本多(中核派) いや逆ですよ。

今の労働者はね、大企業ほど爆発的な形態を取らなきゃ出て来ないですよ、はつきり云って。

清水 いや、その出方がね、大企業の場合には百メートル後からついて来るといふ、その形になるんじゃないか、七〇年ですよ。七〇年代はどうなるか解らないけれど。

本多(中核派) うん、まあそこところはちよつとむずかしい問題ですけどね。

水戸 まあそれでやってみる、と。

鈴木(ML) やってみると云うのはどうかなあ。

本多(中核派) いや、バクチとはまた違うんだね。

現在の階級情勢の分析を踏まえて、そういう闘争に入らなけりゃ爆発せんというむしろ積極的な判断と姿勢ですよ。

だから、さらぎさんの云ったように、向うは出刃を持って来る、こっちは棒でも持たなけりゃ危くてしょうがないということから、まず棒を持つわけだけれど、しかし同時に、本当は持っているんだ、持った方がいいんだという思想を、ひそかに持っていないかという怖いわけだ。やむを得ないから持っているんじゃない。ただ大衆はね、向うが出刃持って来るんだから怖いから棒を持つんだという具合に、最も平和的な思想の持主だってそうなりますよ、自分の身が可愛いから。

しかし、そのことは単に共産党が云っているような、正当防衛権なんていう生っちょろいもんじゃなくてね、プロレタリアートの階級闘争の発展は、必然的に自衛の問題を引き出して来る。むしろこれをプロレタリアートの独裁を目指す暴力的な保証、つまりプロレタリアート全体の武装に向っての今日的な出発点として——まあ、いいださんがさっきからこだわっている言葉で云えば、萌芽として積極的に評価して行く、そういう展望をもってやって行こうとしているということです。

今日の民間の大企業の労働者のことを考える場合はね、日大であれだけ大きな爆発が起ったのはなぜかという問題を考えてほしいと思うんだけど。例えば秋田明大君なんかこう云っていますね、「自分は三里塚に行き、王子の闘争に参加して初めて、日大もこれで動くという確信を持った」と。そういった点が、やはり僕は、大企業の反乱という問題でも、一つの予見をさせる内容を持っている、そのまま機械的には行かんけれど、予見させる内容を持っているということの評価したいし、それから逆に云うと、日大闘争だってノン・ポリばかりで始めたわけじゃない。秋田君が、激動の七カ月の過程を通して日大の反乱の可能性を自覚したことに表現されているように、学内にピラを持って入れば右翼に追っかけ廻されるということ、何年も経験して準備されたものと、大衆的爆発とが結合するという形をとって、日大闘争は起っているわけですからね。

ですから僕は、当然大企業の中でも意識的な活動分子の起爆力がなければね——起爆力という非常にまた誤解を受けるかも知れないけれど、まあ敢えて云えばその起爆力的なものがないければ、そう簡単には闘争は起きないだろうと思う。勿論ないと起きないとは云わないですよ。しかしそういうものがない状態でも起るというのではなしに、なって起すんだという立場から組織活動を進めて行くことですね。

それが非常に一挙的な爆発の形をとって現われるという点については——まあ、確信があると云うか、丸山真男流に云うとそう「なり」ますよ。(哄笑)

清水 ここで若干教科書的なふり返りをして見ますとね。



現在、暴力論で、私もいろんなところで書こうと思っただけですがね、だいたい今までの左翼は、例えば最近ペンヤミンや何かも出てますがね。正当防衛論——左翼の暴力はね——ないしは自衛のための暴力は許されるという発想ですね。その発想自身が、今七〇年で、もしかすると思想的にも崩壊するかも知らんという感じではあるんですよ。例えば大学闘争か何かでも、全共闘支持をぶち上げる教師たちがいるわけですが、だいたいそれもその発想です。

典型的には、九大の滝沢克己さんかな、を読んだんですがね、代表例ですよ。要するに、国家暴力という強大な暴力に対して、ゲバ棒というのはこれは暴力とも云えないものである、自衛のためのものだ、したがって棒で叩いたのと、平和憲法下でジェット機を持っているというのとでは暴力の意味が違う。片っ方のゲバ棒はゲバ棒と云えないもの、自らを守る自衛の思想なんだという発想なんです。

だいたいこれが、今までの全共闘がバートンと先に行ったのに対して、アレヨアレヨと云ってその後について行く「ゲバ棒賛成論」の一つのパターンだったんですね。

本多(中核派) 鶴見さんもそうですね。

清水 ああ、そうですね。

本多(中核派) うん、まあそういうのも引きつけながらやって行くよ。(笑い)

さらざ(共産同) 長い日本の支配の中で、大衆意識の中にそういうものがあると思うんですね。だから大衆意識を初めに引き上げる時には、僕らはそういう論理を使いましたね、牛乳でもね。自衛の論理から武装するんだということね。

しかし、一旦武器を持った段階では、本来の労働者の攻撃性と云うのを引き出せるわけですね。目的意識的にね。ここが解るか解らないかで革命的左翼か構改派かに分かれる。(笑い)後はだから、労働者の潜在的な攻撃性を引き上げて行くということを、目的意識的にやるということですね。その突出を、現在の段階で、中小零細企業から僕らはもう始めていますけれどね。これをやっぱり、大企業の労働組合運動内にも七〇年代の過程で、七〇年代を待たずにやるということですね。

本多(中核派) もう一つの考え方を云うとね、こういう問題を考えて貰うといいと思うんですね。

例えば全通みたいな労働組合の場合なんか、賃闘やるでしょう、春闘なんか。それで賃銀が上がっても、だいたい末端の青年労働者の賃銀というのはほとんど上らないんですよ。

ところがこの連中は嬉々として闘争をやるんだよ。それはね、頭に来るから、要するに日頃の憤懣を爆発させる過程としてブツグメ(郵便物滞貨)や何かをやるんだね。別に、これで何か取ってやろうなどという、そういうさもし根性は——ないとは云えないけれど、もっとも、それはさもしくもないんだけど、(笑い)だけどある意味ではそれだけじゃないんだよ。

彼らがやっちゃうのはね、日頃「あの職制の野郎!」と思っただけじゃないだろうか? その職制がブツが溜って来ると慌て出す。この瞬間を見たいばっかりに俺はやったとかね、これを機会に一発ブッ殴ってやったとかね、そういうふうにして現われて来る。今、国鉄なんかでも駅やクラや電車にあんなに気狂いじみてポスター貼ってるといのは、あれは全共闘の思想ですよ、全学連の。

だいたい、ああいうようになりだしたのは去年からでしょう、

そういう点ではね、日頃抑圧されて来た不満の爆発、あるいは一つのもっと大きな——勿論賃銀が幾ら上がるということも含むけれど、それよりもっと大きな未来に向っての希望ね、ここで何か俺たちの時代が来るんじゃないかという、こういう過去の憤懣、未来への期待というものが、闘争を引き出して行く非常に大きなバネとしてこれから出て来るだろう。それだけの力を、僕は労働者というのは持っているんだと思う。

そこまで労働者を信頼し切るか、し切らないかということに、問題は最後は絞られて来るんじゃないかと思う。

水戸 それがまさにプロレタリアートの本質でしようけれどね。

本多(中核派) だいたいデモに行くんだってそうじゃないか。反戦の場合、電車賃だって何だって全部損するんだから。

水戸 そこで、いいださんの場合、七〇年・七〇年代の闘争形態のイメージというのは違うんだろうと思うんですが、それを聞かせて頂けませんか？

いいだ(共労党) うーん、これまでの労働運動論議の範囲では、どうも問題意識がまだあまり噛み合わないんですけれどね。

七〇年と七〇年代闘争の連続的な展開ということから云うとですね——

第一にはこんなことは自明のことですけど、安保・沖繩の危機が連年連続して拡大する一方の連続闘争になるということがありますよね。敵が安保の自動延長路線の中で、沖繩の「施政権返

還」的な処理をやる以外にないところに、羽田以来の先制攻撃の中で追い込まれていますからね。それから第二として、その中で、労働者闘争がどれだけ全体的に根底からの闘争契機を与えられるかということは、単に反戦意識だけではない契機の問題もあるし、全体やはり、ドル危機の加速的な進行がその中でどうなるかという経済条件にも客観的に規定される。七〇年代に於ける政治危機と経済危機の連続的な相互転化関係の中で、労働運動全体が革命的な方向に向う、最初の大衆的チャンスが与えられるということがあるだろうと思うんですね。

それから第三点としては、現在やはり市民社会全体を包括するような危機としてのいわば社会的危機とも云うべきものが、大学変革闘争の中なんかでも現われておいて、そこでの闘争というのは、政治闘争であるとともに社会闘争であるという面を持っておいて、到るところ滞溜して来た諸矛盾を顕在化させつつある。そのところに着目する闘争形態の探究というのは、単にアナール・サンジカリズムとは云えない、まさに現代資本主義に於ける階級闘争の特徴である、と私は考えるわけですね。

第四点は、先程から出ているように、全体としてプロレタリアートが体制内化される場合にです。現在別に戦時支配でやられているわけではないのは当り前のことで、軍事動員されているわけでもないし、経済も戦時経済でもないわけだ。それから専制支配でもない。ファシズム支配でもない。プレ・ファシズムでさえないですよ。そういう中で、独特な現代帝国主義の支配を受けていると思うんですね。

だから小長井さんが最初に問題提起された時に、今総評・民同の危機ということに絡んで、民

主義的な既得権に対する剝奪が起きている、それに対する反撃なのかということ云われたけれど、私から云わせれば、単に民主主義的な既得権の剝奪であればまた民主主義を守るということになっちゃってますね、これはもう全く、六〇年闘争、あるいは五〇年代闘争と同じことで、ほとんど攻勢的な転移がないと思うんですね。

今問題なのは、民主主義を守るということでは労働運動でももう駄目なんだ、ということは、一つには現代民主主義的な支配の下で官僚化した労働組合というメカニズムを通して、プロレタリアートが一面では体制内化されているということと、民主主義の剝奪をする場合にも、剝奪されているということ自体も意識に昇らせないような全体のメカニズムが、現代のヘゲモニー支配の中で働いているということがある、と思うんですね。

そこでどうしても闘争は、「ゲバ棒はシンボルだ」というふうな云い方を私がしてさっきから論議になっているんだけど、やはり意識の再生がどこから起きるかという、文化革命とか意識変革ですね。これがある程度目的意識的にずっと組織されないとですね、先進国に於いては、労働運動が革命的な闘争へのモメントすら与えられない、という問題があるんだろうと思うんですね。つまり、始めることが難しいというのは、先進国ではプロレタリアートを体制内に包摂する、そういう意識面も含めた操作がですね、民主主義体制を通して市民社会と生産社会の底辺にまで行き渉るということなんで、その全体を相手取って、われわれがそれをどう超えるかということこそが、革命的な労働運動であろう、とそう思うんですね。大学変革闘争は、すでにその問題を先取りして爆発しつつあるわけだ。

だから、それを革命的労働運動としてトータルに打ち出すことが、七〇年と七〇年代に向って、現在の右派支配の完成から、労働運動全体を革命的に転換させることなんじゃないかと——大筋だけ云えばそう思うわけですね。

だから、牛乳労組がどうあるかということは一つの貴重な経験なんだけれど、そこをずーっと、何と云うかなあ、延長って云うとまた延長じゃないとおっしゃるだろうけれど、いわば拡大解釈をしてこうだというふうには行けない。それから、革命的蜂起の時のプロレタリア武装、プロレタリア民兵というところから今度は逆演算していつて、こうだというふうにも云えないんじゃないか、という気がするわけねえ。

本多(中核派) だけど、それだけではまだ何も云っていないでしょう？

いいだ(共労党) ある意味じゃね。

ただ問題領域としては、私はそういうことをこれまでの論議を通じて感じている。だから本多さんに逆に念を押すとですねえ、本多さんの場合は、大企業労働者も七〇年あるいは七〇年代に全体として立ち上がらせることが出来るといふ確信を云われて、立ち上がらせるのは、逆に云うと、一挙爆発的な「ゲバ棒」的形態でなければ立ち上がらせることは出来ないんだと、そういうふう云われたわけですね？

本多(中核派) まあ、恐らく支配的にはそういうタイプになるでしょうということですよ。

いいだ(共労党) だから、私はそれに対して、それだけでは、私が今云った問題領域全体の実践的関心から云うと、ある一つの側面のことを云われているに過ぎない……

本多(中核派) だから、それを準備して行くためにね……

いいだ(共労党) つまりね、何度も同じこと云うけど、ビラ貼りをしてる時にパクられるというのは私らの仲間にもいっぱいいるわけだけれど、そのことから、何か一つの七〇年代体系や労働運動体系というのを、即自的に出して行くことは出来ないってことだな。

本多(中核派) それはね、プロレタリアート運動にとって当然含まれるべき自衛の問題だということでは先程は例を挙げたわけです。むしろこの問題を積極的に検討しなければ、つまり、自衛という形をとって労働者の武装組織の問題を検討する方向に向わなければ、闘争が出来ないような状態になって行くだろうという点では、階級情勢の一定の見通しも含んで云っているということですよ。

それから、もう一つの問題としては、一挙的に爆発するということは、当然、それを準備して行く過程で、さまざまな「仕掛け」の問題が出て来ると思う。これの中にはね、例えば……例を挙げることにそれ自身かなりむずかしい問題になるんだけど、まあいろんな形があると思うんですよ、ダイナマイトを敷設するという仕事は。

いいだ(共労党) それは別に云わんでもいいよ。それぞれの苦心はわかっているからね。

本多(中核派) 面従腹背は、だから、これからは労働貴族とか国家権力とか敵に対しては、積極的に奨励されなければいけない。闘うべきところは闘うけれど、闘うまでは面従腹背を含めてすべての手段は許される。今日の民間の労働組合なんかに於ける労働者支配のあの残忍さからすれば、どんな手段だって許されますよね、どういう形で彼らをだまかしたって。だから、そう

いう点ではいろんな敷設過程がありますよ。そのプロセスを捨象して云っているわけじゃないけれど、しかし起る時は、工場内的な要因によるか工場外的な要因によるかということにかかわらず、かなり爆発的な形態をとって発生するということがいい得るんじゃないですか？

いいだ(共労党) 一挙爆発的な形態？

本多(中核派) ええ。それからもう一つは、それは必ずしもあらかじめ多数決的承認を前提しない。僕らの言葉で云えば追認的行動として起るだろう。つまり、まず行動として開始されて、然る後に全体の承認を受けていく。

いいだ(共労党) 多数決的では必ずしもないであろうというところは、私は賛成だな。

小長井 それは、指令自体に刑事事件になるなんてことがあるんですから、はつきりと。

さらぎ(共産同) 官公労ストだってそうですからね。今は非合法ストなんですよ。

本多(中核派) それからさらに自衛の問題について云えば、例えば民間ストライキやって、僕らが指導権握っているということが解いたら、まず第一指導部を持って行くでしょう。それから殴り込みをかけて来るだろうし、そうなれば反撃もあるわけだから、向うは持っていく法律的理由にはこと欠かないしね。だから当然、第二、第三指導部の問題まで腹を決めなければ闘争に入れない、少なくとも、それを作っていくような方向で、闘争を激化させていくことになると思うんですね。

さらぎ(共産同) 社民が何だかんだ云ったってやらないのは、やっぱりそれが怖いからでしょう、権力との対決が。ストを打ったら権力との対決になるというのは、今の状況の中で彼らは一

番知っているわけでしょう。だからやらないで、今は民主主義なんだと云っているんだけれどさ。一旦やったら対決になるわけだよ、社民がやろうが民社がやろうが公明がやろうが新左翼がやろうが、やった方が……。それをどこが突破し抜くということがないと駄目だよ。何だか七〇年で力を溜めて七〇年代にいくと云っても、やっぱり七〇年の戦闘で向うは反動攻勢をかけて来ますからね。七〇年でメケメケ突出するところまで闘い抜かないとね、やっぱり。六九年後半から七〇年前半にかけて突出し抜いておかないと、いわばナチ流のファシズムで下から出てくるというんじゃないあなく、上から密集した国家暴力反革命が出てくると思いますね。今の機動隊ってのは、昔は、学生が交通を邪魔しているから、ジグザグはしようがないからこれを規制する、という論理で出動していたわけでしょう。今はもう、あいつらは革命をやるうとしてしているんだ、これに対して突込めという形で、国家反革命突撃隊として機動隊は出動しているわけでしょう。火焰ビンや石の雨霰の降る中を、突撃させようという思想を機動隊に植え付けようと思ったら、国家なりの暴力の思想を、彼らに植え付けないとやれないわけですよ。

そういう問題として襲いかかって来ている段階で、僕らはそれに対して、ある程度の攻撃性をもって対抗していかないと。そこで、政治的な流動と対峙関係を作って七〇年代に流れ込まなければ、一般的な、七〇年闘争なしの七〇年代はないということですね。そういう意味で僕らは七〇年に、一つ大きな、権力の性格を変え、階級関係を変える闘いをやるということですね。

本多(中核派) 構造改革的なプラン、発想法、これをまず一擲しちゃうということが、近代西欧社会的な社会でプロレタリアを決起させていく条件なんじゃないかな、大変逆説的ですが……。

だから何か、ロシア革命に対して西欧社会なるものを勝手に想定して、その上に構造改革をつぎ木するというあのでたらめな論理ね。つまり、プロレタリアートは何も出来ないということ合理化する為の、あのプランをすっ飛ばしちゃうということじゃないですか。

やっぱりいいださんに望みたい点は、構改革としての残滓はそこだと。

いいだ(共労党) 僕はちっともそう考えないけどね、あなたがそう思うのはそれはそれで、まあしょうがないわな。(笑い)私の方こそ、あなたにプロレタリアートの階級形成やプロレタリア統一戦線に対する絶望感があるんじゃないか、とかんぐらざるを得ないんだが。

小長井 いいださんは問題提起はされたけれど、いいださんはどうやるんだ、ということを持ってないんでねえ、そこをちょっと伺いたいですよ。

さらぎ(共産同) いいださんの個人決意を聞いてもしようがない。政治ですからね。(笑い)自己の主体的な組織をかけてどこまでやるか。

小長井 政治家としてのいいださんの発言を伺いたいですかねえ。

いいだ(共労党) ある程度私なりに出しているつもりですけどね、それは。仕掛の問題なんかは云えないですからね、今は。

資本の七〇年事前攻勢は冗談ごとじゃなく厳しいんだから、一般論として語るだけになりますね、どうしても。

### 三 武器の論理

——ゲバ棒と自衛隊——

清水 しかしゲバ棒というのは、シンボルだ、シンボルじゃないという話もありましたけれどね、正直云って最も不細工な武器じゃないかと思うんですがね。

僕は、野球のノック・バットなんかの方がもっと効果的じゃないかと思うんだが、あれを使うというのは——安いからですか？

鈴木(M.L) いやこれはね、清水さん非常に煽動家的なことを云われたけれども、(笑い)今日(三月二日)京大では握りの細い棒を使っていますよ。

清水 そういう具合に武器もそれぞれ進化して来ているわけですね？

鈴木(M.L) 勿論！

清水 七〇年にはそれぞれの腹案もあるんでしょう？

本多(中核派) その点はともかく、武器の問題は、究極的には持つ人との関係ですよ。

鈴木(M.L) 実際やって見ると解るけれども、ゲバ棒が一番駄目なんですよ。

いいのは鉄パイプね、それから釘を打ちつけたやつね——いやだけれども——あるいは丸太ね。それから出来れば火焰ビン。それはもう、武器はどんどん敵に対応しながら変化しているですよ。

清水 まあ、ゲバ棒が武器として有効なものじゃないということは、初めから解っていたんで

しようけれど……

さらぎ(共産同) いや、ゲバ棒はね、一〇・八と一一・一二に於いては絶対有利でした。

初めはジグザグ・デモと突っ込みに対しては、敵は並進規制と警棒を振り上げることでやって来たわけですよ。これに対して僕らはゲバ棒を持ったわけです。これはやっぱり長い方が勝ちですよ。長い方が決定的に勝ちです。

鈴木(M.L) それまでのご存知のように、スクラムを組んで頭から突っ込んだわけですね。そこへ突如ゲバ棒が現われたんで、あのゲバ棒の意味というのは大きかったですよ、武器としても。さらぎ(共産同) 大きかったですよ、決定的だったです。

敵の警棒に対してゲバ棒——そしてゲバ棒の勝利が大衆的なシンボルになったということですね。大衆的武装の思想のシンボルになったということです。

しかしその先端を切った一〇・八と一一・一二については、あれは明確な武器だったということですよ、敵の警棒に対して。

本多(中核派) 何しろ弁天橋の場合なんか、一キロくらい警官隊を追っかけ廻して、橋の向うまで追っ払っちゃったわけだから。で、その後三時間ぐらいに涉って、拠点の弁天橋を攻撃的形態をとって守っていたわけだ。だからそういう点じゃ意味を持っていますね。

ただね、重要な点は軟質の材木だということ、持つ人間が持てるという利点があるんですね。水戸 鉄パイプじゃちょっと怖いところがある。

本多(中核派) そのところはね、やっぱり、どちらかといえば持つ側の問題ですね。(一同

肯く)

水戸 その持つ側の問題ということですが、僕も、僕は安田講堂の救済関係の記録を読んだら、あの鉄パイプで全部やられてるんですよ。機動隊に、その鉄パイプでやられてるんですよ。

鈴木(M.L.) やられるというのは、鉄パイプで殴られてるということですか？

水戸 そうです。もう軒並みやられてるんですよ、逮捕された側が。

鈴木(M.L.) 彼らの持ち棒じゃなくて、われわれの用意した鉄パイプですか？

水戸 そうです。

で逆に、恐らく学生の側は鉄パイプをほとんど振ってないんじゃないかと思うんだ、機動隊に対して。あれは仕方ないわけ？

一同 ……………

清水 闘争の中で皆が武器を選んで行く、発展させて行くということでしょうね。それが最終的には、機関銃になるか大砲になるかわからない……

本多(中核派) わからないじゃなくてそうなるでしょう。

鈴木(M.L.) なります！

さらぎ(共産同) 武器の論理から云うと、ゲバ棒に対して敵は楯を使って来たわけですね。楯に対して僕は石を投げたんですね。僕らが石を投げると、彼らの、蹴散らすための催涙弾が、今度は石に対する弾丸になったわけですね。

初めは警察の予算ではだいたい七〇発ぐらいが年間予算だったわけでしょう？

鈴木(M.L.) 三〇分ぐらいで撃っちゃうですよ。

さらぎ(共産同) それが日大の農獣医陥落で七〇発全部使った。そのうちに七〇〇発になって、東大では七、〇〇〇発近く使ったんじゃないですか？

七、〇〇〇発の催涙弾というのは弾丸ですよ。もう催涙という意味ではなくて、直接相手に直撃を加える銃弾なんですね。

鈴木(M.L.) 革マルの放棄した法文二号館から解放戦線が守った工学部列品館に、二〇メートル以下の距離で水平撃ちして来て、ご承知のように失明したのもいるし、脳をやられて馬鹿になるかも知れないというのものもあるし……あれはピストルなんかよりよっぽど強いんです。

さらぎ(共産同) 今の催涙弾というのは銃弾なんですよ、ガス銃というのは。

清水 それに対抗する武器の開発も考えておられるんでしょうけれど……

鈴木(M.L.) それはもう、凶器準備結集罪にならない程度のことしか云えないけれども。(笑い)

さらぎ(共産同) それに対抗して「火」が出たということでしょうね。火焰ビンね。それと楯を突破するというところで丸太を使ったんですね、防衛庁では。

清水 それで最終的に、七〇年の闘争の段階などで、自衛隊が出て来るかどうか、出て来たらどうするかということですが。

まあ、これは皆さん自衛隊を引っ張り出したいくらいなんですしょうけれど。(含み笑い)

本多(中核派) 当面する権力の弾圧は、僕はやっぱり警察型のものだと思う。

七〇年の反動の基本的なタイプでは、行政権力、司法権力の巨大化が当面の問題になるだろうと僕は考えておるんですが。勿論、それに對する補足的なものとして、民間のファシスト型暴力という問題も当然絡んで来るけれどね、主軸はそこということですよ。

で、これを打ち破った時に、自衛隊ということが取り沙汰されているのでしようが、われわれは、軍隊によっては民衆の運動は根本的には鎮圧出来ないという、基本的な見通しを持っているということですね。

鈴木(M.L) それはある意味では歴史的事実でもある。

清水 その点は皆さん共通しているんですか？

いいだ(共労党) 軍隊が引き出される時というのは、その時の階級情勢によって引き出されて来るわけだから、その時には必ずこっちが勝つというようには先験的には云い切れんけれども、軍隊によって必ず鎮圧されちゃうということもないよね。

鈴木(M.L) うん、ない。しかもそういう時にはそれに応じた質をわれわれの側が持つことが出来る。敵階級はすでに、具体的に自衛隊をいつでも使えるように、治安部隊としての訓練もやっておるし、そういう部隊配置をしておるし、準備はあるわけだけれども……

いいだ(共労党) 人民の闘争の発展とか質とかいうものと無関係に、自衛隊が出て来るというようなことはないはずだね。(一同交々賛成)

さらぎ(共産同) 僕は自衛隊が出て来る可能性は充分あると思いますね。

というのは、昔の軍隊というのは、国民皆兵を一つの基本にし、国民の合意として、一応国防について外征軍として戦う。それから治安は警察で当るといふ合意があったわけです。

今の軍隊というのは違いますよね。国内反革命とそれから植民地、従属国に對する、植民地解放闘争に對する反革命と、それを援護して来るところの労働者国家に對する反革命という三つの反革命の要素を常時持っているわけですね。これがNATO・安保の、今までの軍隊とは違う性格なんです。そういう性格を持っているけれども、まだこれは完全な国民的合意を取り付けていないわけです。

そういうことで、基本的な性格としてそういう階級的な性格を持っているから、出て来る可能性は充分あるけれども、しかし現在の段階では、まだまだ警察力の強化と、機動隊の——世界最強と云われとる機動隊(笑い)の軍隊化ということを軸にしなから、密集した反革命として僕らに對抗して来るだろうと思えますね。

いいだ(共労党) その自衛隊の引き出され方と絡み方というのは、これは予見であるから当らないかも知れないけれど、やっぱり朝鮮闘争との絡みの中で、本土と沖繩の闘争がそういう形態にまで発展するんじゃないですかね。日韓条約、松前・バーンズ協定、三矢作戦計画、プエブロ事件に於ける沖繩の臨戦体制、近く行われるという沖繩を基地とする米韓大空輪演習——これが六〇年以降の政治軍事過程の一筋の赤い糸だからね。

本多(中核派) ともかく自衛隊が出て来たら大変だね。

鈴木(M.L) 僕らにとっては政治的には絶対勝利です。清水さんはいみじくも引き出したん



じゃないかとおっしゃったんだけど。

清水 その時の用意としては？

さらぎ(共産同) 自衛隊が出るということは、もう最後の切り札ですからね、国家権力としてはね。

いいだ(共労党) 私の方には「何の用意もない」ということを、ここで証拠として申し上げて置きますよ。ちゃんとね。活字になるように。(爆笑)

鈴木(ML) 自衛隊と銃火器戦をやって勝つというイメージじゃなくてね。

水戸 勿論そういうことじゃないでしょう。例えば鈴木さんのところですよ、全面的なゲリラ戦の展開は考えていらっしやるんじゃないかな？

鈴木(ML) うーん！……

清水 軍隊を中から把握して行くという方法はどうですか？

鈴木(ML) 現在は考えていません、自衛隊ということでしたら。

さらぎ(共産同) 中から工作するというよりもね、反革命部隊の中の精神的なものが崩れるとということですね、軍隊の場合は。

主に外征の反革命に対して教育された部隊が——今は治安弾圧の教育も受けていますけれども、しかしこれは一応国民の代表ということになっていきますからね——これが出て来た場合には、革命の情勢ですからね。婦女子まで全部出て来るわけですね、ロシア革命の場合でも。そしてどうなんだ、どうなんだ、殺すなら殺せ、ということでも婦女子が取り囲んで、ワアワアワア云う

という格好になりますね。ちょうど、ソ連の戦車を囲んでチェコ人がワアッといって発砲出来ないというような、渦巻いた状況が出て来る。軍隊というのは、人間の特殊部隊ではありませんけれども、これはやはり市民社会が変形した組織ですからね。上からの垂直的な権力の意志が働くと同時に、彼らは市民の特殊な代表ですからね、国民を外敵から守るといふ。それが内敵を攻めるといふ時には、権力と人民全体との関係で、彼らの内部がどれだけ崩壊するかということですよ。それは、僕らが全プロレタリア階級の共感を得ているかどうかで決まるといふことになるんですね。

鈴木(ML) あるブルジョア軍事学者がこう云っているんですよ。

毛沢東の人民戦線理論というのは、戦争学の見地から云えば誠にもって特殊であると。どういふ点で特殊かという点、戦争するのはもともと戦士がやる、兵隊がやるもんで、なるべく婦女子は遠ざける。相当緊迫していても、やるからお前らだけ、ということになるのが昔から今までのやり方だった。そういう戦争を、人民戦争というのは婦女、子供まで動員して、文字通り人民戦争にしちゃう。あんな残酷な理論はない。

と云ってるわけだけれど、われわれの展開しようとしているのはまさに人民戦争で、敵の権力の意図をストリートに表現する軍隊が仮りにあり得たとして、それに対する全人民的な反抗を起して行く。彼ら自身が、一方では被抑圧人民としてあって、その母斑を持って、ある時期軍隊に就職しているわけですね。そういうところから必ず自壊作用を起す。ということで、ある状況のもとでは、恐らく自衛隊と大砲で撃ち合いをしなくとも、われわれは勝利出来ると思うんです。

いいだ(共労党) それからね、思想的には、ブルジョアの正当防衛とかブルジョアの自衛ということは私は取らんけれども、何かこちら側の闘争が軍事的に激化してエスカレートしたために、向う側の方が逆に自衛隊を出動させて来た、というような論に、私は活字上したくないと思うんだな。

本多(中核派) 活字上ですか？

いいだ(共労党) ええ、活字上ね。(笑い)

本多(中核派) どうしようもないな！(笑い)

いいだ(共労党) やはり、敵さんの方ではすでに三矢研究をやってるんだしね。松前・バーンズ協定の秘密改定なんかもやっていると、先程さらぎさんの方で、侵略と国内治安とは一応違うんだってことを云われたけれど、一応違うということを認めた上でも、なおかつ彼らは三矢研究でそのところは緊密一体化して、一定の朝鮮危機の想定のもとに全部やってるわけですよ。だからその点で、向う側から三矢研究、松前バーンズ協定の秘密改定その他で治安軍事作戦が周到に準備されている。それに対して将来、われわれはやはり周到に対抗せんけりゃならないという事は、申し上げて置きたいと思えますよ。

で、私がさっき朝鮮情勢との絡みでもって、そのことが七〇年代に直接的な日程にのぼるんじゃないかと申し上げたのは、そういう含みがあったわけです。

鈴木(ML) それはあれでしょう、沖繩に於ける解放闘争の中からも恐らく起り得るだろうと。いいだ(共労党) 大いに起り得ますね。

## 既刊・発売中

---

### 画集 原爆の図

丸木位里・丸木俊 作

世界二十数ヶ国を巡回し、衝撃的な反響をまきおこした  
名画全八部を再現した豪華画集！

- \* 第一部「幽霊」より第八部「救出」までをすべて多色刷りで再現
- \* 第一部より第八部までの部分図を原爆被災者の詩とともに構成
- \* 「原爆の図」制作のためのデッサン八百点より24点を選んで収録

B4変型判／全106ページ ¥800

---

### レーニンの生涯 全訳

〔虚栄なき独裁者〕改訂版

ダヴィッド・シュープ著・現代政治思想研究全訳

凡百の「レーニン伝」を圧して、偉大な革命家の全人像をくっきりと描き出した息もつかせぬ全22章！

〔付録〕 ソノシート「ソヴィエト革命の声」=録音で聞くレーニン、ゴーリキー、スターリン等ソヴィエト革命指導者の肉声

四六判／上製／441頁 ¥980

討論参加者 (50音順)

い	い	だ	も	も	共	労	党	書	記	長				
さ	ら	ぎ	徳	二	共	産	同	(	ブ	ン	ド	)	議	長
鈴	木	迪	夫		M	L	同	盟	書	記	長			
本	多	延	嘉		革	共	同	中	核	派	書	記	長	

---

小長井 良浩 弁 護 士  
清 水 多 吉 立正大学講師  
水 戸 巖 原子核研究所助教授 (核共闘)

討論参加者 (50音順)

い	い	だ	も	も	共	労	党	書	記	長								
さ	ら	ぎ	徳	二	共	産	同	(	フ	ン	ド	)	議	長				
鈴	木	迪	夫		M	L	同	盟	書	記	長							
本	多	延	嘉		革	共	同	中	核	派	書	記	長					
<hr/>																		
小	長	井	良	浩	弁	護	士											
清	水	多	吉		立	正	大	学	講	師								
水	戸		巖		原	子	核	研	究	所	助	教	授	(	核	共	闘	)